

神 棲

第貳拾貳號

祖山學院同窓會

嶺 南

嶺南學刊

會同宗學山

棲

神

第貳拾貳號

目次

口繪寫眞 身延山八十三世 祖山學院々長 一乘院日謙猊下

祖 廟 中 心	遠藤是妙……………(一)
題 目 性 乘 辨	高田惠忍……………(一)
大曼荼羅儀相の研究	鹽田義遜……………(二五)
身延古抄雜々集に就ての考察	岡 教 遂……………(九)
東陽房忠尋の著書に就いて	田 中 惠 春……………(一〇)
正中山藏『正義抄』に就て	齋藤要輪……………(二三)
御遺文にあらわれたる下種思想	武田海正……………(二六)

人生觀斷想……………望月舜勝…(一八五)

身延御入山と南部實長……………三木淨達…(一九〇)

獨居不三昧……………中澤要實…(一九七)

日蓮聖人御系譜の研究……………鈴木智好…(二〇〇)

讚佛乘詩閒居餘艸(宗門詩藻)……………(二二五)

文藝欄▽學生欄

栖神居詠草……………(短歌)……………福島義孝…(二三八)

うみやまのほとり……………(短歌)……………岡村正雄…(二三三)

七面山行……………(短歌)……………熊谷利道…(二三三)

山麓居詠……………(短歌)	帶金一義……………(三五)
古き遠保榮我記……………(隨筆)	山田友篤……………(三八)
蟬……………(隨筆)	上田玄忠……………(三三)
必要にして且つ充分なるもの……………	田邊正知……………(三四)
三ツ子の魂に與ふべきは?……………	加藤智學……………(三一)
觀の究竟……………	田中泰勵……………(三三)
宗祖靈跡伊豆と船守彌三郎……………	田中靜光……………(三六)
鬭争……………	田村啓孝……………(三九)
想ひ出す函館……………	村田力男……………(四四)
正しく強き信仰をもつて……………	梅津榮希……………(四五)
校友會報……………(三四七)	同窓會報……………(三四九)
同窓會各部記事……………(三五〇)	修學旅行記……………(三六五)



下 貌 謙 日 院 乘 一 長々院學山祖世三十八山延身



不圖日集一 吳松山嶺三十八山影

祖廟中心

遠藤是妙

一、宗教上の祖廟中心

吾祖日蓮大聖人御在世の當時は、大聖人の生ける人格を中心として、門子檀越が次第に増加した、それは舊來の邪なる信仰を改めて、心から歸依を捧げた純正の信徒のみであつた。大聖人の出現は星の世界に現はれた太陽の様に海の一端に投じられた大石の様に、光輝は普く波動は限りなく擴大するであつた。實に本化上行としての自覺と、法華行者としての人格とはその太陽でありその大石であつた。故に御在世中の教團は、専ら人格中心で進まれた、其處に四海歸妙の實現も期せられたのである。

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが、二人三人百人と次第に唱へつたふるなり、未來も又しかるべし^至剩へ廣宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を的とするなるべし（實相鈔九六一）

全くこの通りに發展しつゝあるのは事實である。但し御在世中は其中心が始終動いて居つた、大聖人が鎌倉に居られた時は鎌倉中心、龍ノ口に居られた刹那は龍ノ口中心、佐島御流罪中は佐渡中心であつた、其れは元より人格中心なるが故である。然るに晩年波木井公の御招待によりて、身延山に御幽棲の地をトし、御庵室を建立遊ばしてからは、宗門の中心が自然と身延山に定まつた。況して大聖人は山中より外へは遠くお出かけにならないから、房總鎌倉佐渡は勿論廣く全國からの弟子檀那等は、大聖人を慕つて參詣し且つ滞在して御給仕旁々御教化を受けたものである。而

して弟子共の各地に於ける教田開拓も、檀徒の修行方法も、内外經營の方策も、皆大聖人日常御教訓のまゝであり、又御教令のまゝに行はれて居たのである。弟子共は各自寺を建て教會を設けて布教に従事し、檀信徒は心から感謝して財物を寄進し、大聖人を始め弟子方に對する供養を怠らなかつたから、住職問題や選舉違反の起らう筈もなく、又豫算決算の必要もなかつた。如何に單純なる基礎的の宗門とは云へ、法華如法の行者を中心として、異體同心に報恩感謝の生活をするのでなければ、本當に無事平穩には治まらない。乃ち大聖人は自ら九ヶ年間法華經修行の身延山を以て、彼の釋尊最後八ヶ年法華經說法の靈鷲山に擬し、幾度か身延山の最勝なることを讃歎せられた。例せば

此處は人倫を離れたる山中也。東西南北を去りて里もなし。かゝる心細き幽窟なれども、教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し。日蓮が肉團の胸中に秘して隠し持てり至かゝる不思議なる法華經の行者の佳處なれば。いかでか靈山淨土に劣るべき。法妙なるが故に人貴し。人尊きが故に所尊しと申は是也。(南條書二〇六九)

と仰せられた通り、大聖人中心は同時に身延山中心なることも、充分に領解せらるゝ道理である。

然るに弘安五年の秋、偶々微恙を感じられ常隨近侍の看護をうけて居られたが、御自身老病の期し難きを覺られ、池上宗仲の邸に赴かれ、遂に十月十三日安詳として大涅槃に入らせられたが、墓をば身延山に築かんとお思召により茶毘して御舍利をば寶瓶に收め、弟子等守護して身延山に御送り申上げたのである。當時池上に御着の翌日波木井殿への御狀を拜すれば

畏み申し候。みちのほどべちの事候はで池上までつきて候至所勞の身にて候へば不定なる事も候はんずらん。さりながら日本國にそこばくもであつかうて候みを九年まで御歸依候ぬる御志申すばかりなく候へば、いづくにて死に候とも墓をば身延の澤にせさせ候べく候(波木井殿御報二一〇四)

と、いと懇切なる御狀、而かも結末の一句こそ、身延山に御廟を創築して、永遠に生身法身の御舍利を留めさせ給ふ根源である。越へて六年正月寶龜を造營して御靈骨を安置し、上座の六老僧を主として他の直弟子を加へ、輪次守塔の制を設け、順次祖廟に奉仕することゝなつた、興師記録の身延墓番帳なるものがそれである。(池上本門寺所藏影山師の教團史一一載之)

是に於てか大聖人晩年の身延中心は、常在靈山の祖廟中心となつて、滅後の教團は恰かも生ける大聖人の在す思ひで奉仕を繼續することになつた。實に祖廟に奉仕し祖廟に誓つて廣宣流布の施設方法を講じたことが、宗政の根本であり出發點であつた。

かゝる輪番守塔の制は、大聖人の七回忌頃迄は續いたらしいが、當番の諸師も各自遠隔の地に在つて、門子檀越の教養、一般大衆の教化等の爲めに、遙々登山の奉仕も意の如くならず、思ひながらの懈怠に墮し易く、祖廟將來の爲め常住守塔の議が起り、終に輪番制が廢せられ、日向上人が波木井公の招待に應じて晋山せらるゝ様になつた。門下を代表しての責任守塔なれば、確に實績の擧がることゝ信するが、一面大聖人の御後を繼承する意味に於て、其選に入らざる不平の者を出したのは甚だ遺憾であつたが、又止むを得ないことだと思ふ。興師離山の如きは、他に複雑した事情ありて(近頃出版の早川氏身延離山の研究)のことだが、身延を離れて別に教團を立てたことは、大恩ある祖師に對し背いた形になつて面白くない。祖廟は元より鷲峰の月の如く、常に澄んでゐるけれども、周圍のうき雲が悪いのだ。門下同士の感情衝突から、身延をけがし祖廟に背き奉る様なことあらば、其罪甚だ重いことと思ふ。後追々教團が分裂して、其の中心亦八九に分れる様になつた。分張と云へば確に發展の様だが、統一を缺くならば漸く其の力の弱きを表はすに至るであらう。彼の明治二十一年頃に於ける一六兩條の如きは、直接祖廟に關係なきが如きも、

總本山の實質、精神の祖廟にあるを奈何せん、況んや法主は靈廟奉仕の主任なるをや。輿論の有無に拘はらず、祖廟中心は元より宗是たるを失はぬ。

畏くも先帝陛下より降し給へる大師號の宣下書
又今上陛下の御染筆にかゝる立正の勅額

何れも其筋より祖廟の在處に下し給へるこそ尊い極みである。吾等宗徒は日頃異體同心の祖訓を奉じながら、各自門戸を分ちて、唯一祖廟の中心を失ふが如きは門下の本分でないと思ふ。

是に於てか現管長貌下の提唱せらるゝ祖廟中心制度の實現と併せて各派統合問題の結成とは頗る意義深いもので、宗徒各自の自覺に俟たねばならない。是は嘗に吾等の希望のみではない、一般信徒側の熱望するところである。若しも之が出来ない位なら僧伽和合と云ふも、異體同心と云ふも、所謂有言無實となるであらう。

二、教學上の祖廟中心

祖廟が何故に教學の中心なるか、骨を納めたお墓に何うして學的の價值を認めるか、是は學者の特に注意すべきことと思ふ。元政上人が「なに故に碎きし骨の名残ぞと思へば袖に玉ぞ散りける」と詠まれた、彼の「なに故に」と云ふ言葉を深く熟思する時、則ち思半に過ぐるものがあらうと思ふ。

大聖人の御舍利と云ひ、其上に立てられた寶塔と云ひ、教學上から之を拜觀するときは、單なる御骨や石碑とのみ見るべきではない、大聖人生前に於て既に三法一体の妙旨を體得遊ばされたるが故に、遺骸となり舍利となりては猶更三身常住三法一體の結晶と仰がなければならぬ。灌頂鈔（一〇二九）に

釋尊と我等とは本地一體不二の身也、釋尊と法華經と我等との三者全體不思議の^ッ一法にして全く三の差別なき也、

乃^ニ至我等が肉身即ち三身即一の法身也^云

と仰せられ、又阿佛房御書（八二五）に

末法に入て法華經を持つ男女のすがたより外には寶塔なきなり、若然れば貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華經となうるものは我身寶塔にして我身又多寶如來也、妙法蓮華經より外に寶塔なきなり。

と、此等の意を以て祖廟を拜するときは、全體宛ら三秘の法體なれば、教學の中心も亦茲にありと觀るべきである。即ち生身の舍利が同時に法身の舍利となり、永遠普遍の尊いものになつたのである。而して佛陀が嘗て智的存在であつた様に、本化の菩薩も亦智惠の修習者であつたことは經文明白であり、且つ法華經全體が佛智の所證であり佛智の所産であつて、互に因果關係にあることは、云ふまでもないことで、本尊鈔（九四三）には釋尊が地涌の菩薩を召して、妙法五字を付囑し特に末法に弘めさせた由を述べ、御義口傳（下六〇）には、妙樂の子弘^ニ父^ノ法^ヲを釋して、子とは地涌の菩薩也父とは釋尊也、今又以て此の如し父とは日蓮也子とは日蓮が弟子檀那也

と仰せあるを見れば、自ら本化地涌の使命を覺知し、一面智藏の菩薩を以て自任せられたことは明白である。尙本尊鈔（九三四、九四〇、九四三、九四八）開目鈔（七八六、八〇三、八一六）其他の御書往々此旨を顯はされて居る。

隨て末法の要法題目五字、一閻浮提第一の本尊、本門の妙戒戒壇（一一二四、二〇五三）日蓮が法門（八五二、一六四八）等と宣へるもの、何れも皆前代未弘宗祖始顯の教義なれば、佛陀を離れて佛教なきが如く、宗門の教學は嘗て大聖人の生命を刻めるもの、而して永世救護の妙法として、不斷に輝く精神なるが故に、學者は須らく先づ大聖人の靈廟に拜跪し、祖廟中心の觀念に住して、正に宗學の研鑽に精進すべきである。是が又研究者の麗はしい態度である

と思ふ。此の項には是非前々號に記載せる「宗學の淵源」を御参照ありたい。

三、行法上の祖廟中心

次に行法の上より祖廟を考へて見たい、行法とは申すまでもなく、佛になる道を云ふので、吾宗の受持唱題が其れである。即ち大聖人が不惜身命畢生の事業として唱導遊ばされたる大事な實行方法で、大聖人自ら之に依つて法華經の行者となり、之に依つて自他の佛道を成ぜられたのである。この行法の上からも祖廟を中心として考へねばならぬことは、矢張大聖人の御跡を偲び、祖恩の萬一に報ゆる所以なるが故である。大聖人が師孝の溫情切なる、而してその報恩の一事を拜しても、門下たるもの必ず茲に思ひを致さねばならぬことは當然である。

日蓮法華經の行者となつて善惡につけて日蓮房日蓮房とうたはるゝ此御恩ながら故師匠道善房の故にあらずや、

日蓮は草木の如く師匠は大地の如し^{乃至}日蓮が法華經を弘むる功德は必ず道善房の身に歸すべし、あらたうとたうとよき弟子をもつときんば師弟佛果にいたり^云（御遺文一七二四）

道善房は臆病者にて生前中法華に歸するの勇氣なく終におかくれになられたが、師匠御意中の希望を全ふして、後生を善導申上ぐるを最上の師孝と思召し、報恩鈔二卷を作つて、身延から遙に其の墓前に供へ且つ之を讀ましめたことはその送狀（一五一二）に明かである。かくて法華妙法の行法を自らも始終修行し、其の功德を師匠にも回向するのが佛になる道と考へられた。故に身延山御書（一二九九）には

實に佛になる道は師に仕ふるに過ぎず

と仰せになられた、是は大聖人の過去に及ぼす大報恩行である。尙ほ父母を慕ひ其墓に參らんとせしこと一再ならず

(光日房御書一四一八、妙法尼書一七七九) 遂に鷲峰の頂に思親遙拜の跡を遺され、大孝の至誠を實現せられたのも尊い極みである。正に内典の徳教たる法華の色讀體驗に外ならぬ。是も大聖人が過去に及ぼす大慈悲行である。

大聖人の妙行は元より受持唱題の一行なれども、境智冥合せる實際の事觀事行でなければ、所謂事の一念三千觀とも、三秘の妙行とも稱することは出来ない、是こそ本佛直受壽量顯發の大事業である。故に三大秘法鈔(二〇五四)には

今日蓮が所行は靈鷲山の稟承に芥爾計りの相違なき色も替らぬ壽量品の事の三大事なり。

と、宣べられて法華經の神髓たる壽量本佛の妙因妙果を妙法五字の題目に收め、此を受得して本尊心境の人となることを明す、是を不惜身命一心見佛俱出靈山の境地とも云ふので、大聖人先づ此の境地に安住せられたのである、隨つて大聖人の御身は死生に拘らず本佛と同じ崇敬の對象として永久に仰がれねばならぬ筈である。

要するに大聖人の教學が、その行法を離れて存在せざるが如く、日蓮が弟子檀那の最要は、親しく身延山に参りて常在の祖廟に拜跪し奉り、心ゆくばかり永遠不滅の願行を偲び、恰かも生きた大聖人にお仕へする様な氣分で、所謂八役給仕を全うして勤經精進するにあるのである。近頃各宗共通の輿論として、各自宗の祖山に登りて加行の要を説くもの、又當然の歸結とせねばならぬと思ふ、この意味に於て疾く其の實現を期待するものである。

四、信仰上の祖廟中心

信仰は宗教の生命なるが如く、法華經の信仰は又大聖人の全體でなければならぬ。

とにかくに法華經に身をまかせ信ぜさせ給へ^至日蓮生れし時よりいまに一日片時も心安き事はなし此の法華經の題

目を弘めんと思ふばかりなり相構へて相構へて自他の生死は知らねども御臨終のきざみ生死の中間に日蓮必ずむかひにまいり候（上野殿御書一八四三）

大聖人は全く法華經の信仰に終始し、死後と雖も亦法華經の信仰に生きて居ると云ふべきである。即ち大聖人の教學も行法も皆法華經の信仰から發して居るから、行も學も結極信仰の上に進み信仰の上に輝いて、その實際的効果を顯はすに至つて居るのである。故に信は慧の因とも（一五三九）三世諸佛の智慧を買ふ價とも（御義）又信は道源功德の母とも、信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり（七四四）とも云ふ道理で、教學も行法もこの信仰を離れては、畢竟無用の空論無益の徒勞に終るのである。

行學は信心よりをこるべく候（諸法實相鈔九六四）

とある如く行學は信心によつて起り信心によりて終りを全ふされて居るのである、開目鈔（七七〇）に

今度強盛の菩提心ををこして退轉せじと願しぬ。

とあるが如きはその起りを示し、その信仰の強烈さは如說修行鈔（九七二）に明白で、而かもこの信仰は未來まで永世に持越されて居られる所が大層ありがたい。即ち南無妙法蓮華經と唱へ死にに死することは、信仰の現當二世に亘る持續であり、同時に佛天に對する經說履行の契機となるから、その確實なる來迎の信念に安住して、何ともかとも云ひ知れぬ法悦を感じ、このうれしさは一轉して、佛天と俱にやがて未來の信者を導く因縁となるのである。上野殿御書（前出）の

日蓮必ずむかひにまいり候。

と宣ひ、

日蓮さきに立ち候はゞ御迎ひにまいり候事もやあらんすら^至日蓮法華經の文の如くならば通塞の案内者なり、只一心に信心おはして靈山を期し給へ^至信心にあかなくて所願を成就し給へ。(彌源太書一〇三四)

又後生には靈山淨土にまいりあひまひらせん(千日尼御前御書一二五三)

と仰せあるもの、これ佛陀より日蓮、日蓮より弟子檀那への信仰の血脈でなくて何であらう。大聖人は骨になりても石になりても、この信仰に生きてあらん限り、生身の御姿は見へないまでも、御廟の當處常に慈愛の御手をのべて一門の信徒を拱いて居らるゝに相違ないと信ぜねばならない。

吾等が釋尊と法華經とに信仰をさゝけることは、大聖人の身を以て教へ給ふた様にありたいものである、それでこそ死骸になつても深重なる佛法の利生を持つ道理である。乙御前御消息(一二九四)に

抑も法華經をよくよく信じたらん男女をば肩になひ背に擔うべきよし經文に見へて候^至いよ／＼強盛の御志あるべし^至又云ふ事後にあへばこそ人も信ずれ、かうたどかきをきなばこそ未來の人は智ありとはしり候はんずれ、又身輕法重死身弘法とのべて候へば身は輕ければ人は打ちはり惡むとも法は重ければ必ず弘まるべし、法華經弘まるならば死かばね還て重くなるべし、かばね重くなるならば此のかばねは利生あるべし、利生なるならば今の八幡大菩薩といははるゝやうにいはいはうべし^云

とあるが如く死身弘法の大聖人が、法華經信仰の結晶として、吾々がこの祖廟を拜する時は、宛ら本門の三寶尊に歸依を捧げると同様の信念を持つことが出来る。即ち末法の大導師としての宗祖を通して、本門の佛法を拜し得るのである。この利生ある御舍利の在す處を中心として、宗脈一系の信仰を繼續するところに、宗門の特色と權威とがあるのである。偶々宗祖滅後の身延に對して謗法の毀をなすものは、弟子檀那の不心得に對する刺戟に過ぎない。祖廟は

各派教團の等しく宗仰すべき、唯一の根本中心でなければならない、若し是に異議あるものは眞の法華の教徒でもなく、眞の日蓮宗徒でもない、それは永世不滅の祖廟を信仰上の中心としないからである。

五、結 言

古往今來日蓮大聖人を祖師と仰ぐ者の、祖廟を中心とすることに於て聊か異議のあるべき筈がない、それは吾々國民が等しく伊勢の大廟を根本中心と仰ぎまつる様に、故に祖廟中心は信仰上の實際問題で、遙に論議を超越して居るのである。而かも尙ほ問題として叫ばれるのは、之を但だ宗徒の胸中のみに秘せないで、凡ての實際の施設の上に表現させたいからである。即ち一面には凡情の放埒を防ぎ、他面には積極的活動の上に實現せんが爲めである。但し發展せる宗門の現狀として、政治教育等凡ての機關を直にこの御廟下に置くことは、種々なる困難と不便とを感ずるのであり、又かくすることが必しも祖廟中心の實際化ではない。要はその機關を何處に置くも、祖廟中心を宗是として、政治を運用し子弟を教育するにある、即ち政治教育布教傳道等悉く祖廟の根幹から出た技葉の活動と觀念して各自に精進することである。この意味に於て祖廟奉仕會の企も、祖廟中心制度調査會の企も、勅額拜戴の廟前法要も、宗務役員の報告參拜も、宗門大學の卒業者の參拜參籠も、大層よい事だと思ふ。願くは一般參詣者も觀光遊參の程度に止めず、案内者も可成茲に導いて、先づ御草庵に在りしその昔を偲ばせ、而して祖廟常在の聖靈に拜跪させて、萬古變らない幽邃の境地に、死身弘法の眞面目を味得させたいものである。

題目性乘辨

(山川氏四十五字己心義餘評)

高田惠忍

一、緒言

今次吾祖山學院に宗學研究會發會の機熟し、その發會式に當り、予その舊縁の所以を以て第一回の研究發表を囑せらる。是れ予にとりて最も光榮且欣快措く能はざる所、乃ち本題下に卑懷を暢ふる所以である。賴さしやうに宗學會同志諸兄が御期待の萬一に副ふを得ば幸甚し、幸甚し矣。

二、宗義の特徴

キリスト教に於ける神、淨土教に於ける彌陀信仰の如き位地を吾宗義に求むる時何ぞや。開祖日蓮上人畢世の主張は法國の二大規模を確立して佛子と國士の二大使命を全うするにありといふべきである。即ち立正と安國とがその二大理想である。安國論や國家論以外の單に信條確立の祖書と雖も、本尊鈔、法華取要鈔、四信五品鈔等、何れも立正と共に安國の大義を掲げざることはない。既に我に於て立正安國を主張する間、彼を以て邪法危國を斷定し去るべきは當然であつて、茲に吾宗の絶對折伏主義が必須事となる。是の如きは同列各宗高僧中、吾祖日蓮上人の斬然として遙に頭角を抽ずる所でなければならぬ。

今はその法國の二大規模中、特に正法題目の眞體を検討せんと欲するにある。

凡そ題目とは釋尊出世の本懷、三說超過、究竟、最勝眞實の聖經妙法華經を一言の題目下、天台一部唯迹の法華觀に對して、一部唯本の法華觀を全一的に包籠して立教開宗せる唯一の聖教であつて、三秘の法體これに外ならず。五綱の教とは題目の事であり、機時國序共に題目弘敷の爲めの機時國序に外ならず。吾家の唯一の人格實在の教義壽量本佛も題目に包含せられ、事一念三千の妙觀も題目の受持信唱に於て盡きてをり、教觀不二の十界大曼荼羅も題目の展開に外ならず。檢し來れば宗義の大体は題目に攝盡し了ると謂てよいのである。

三、受持信唱の要諦

吾家の信の境地は恰も吾人が身延山に登詣してこの山色溪聲の事の寂光土に直面して唯何となしに南無妙法蓮華經の唱題の發する程度それが信の極致である。その山色は十界の曼荼羅に、その溪聲は唱題に擬すべしといふ様に主觀と客觀とを截然と別つて考へる様になつた時は觀念としては進みても、信の眞髓からは却て稀薄になつたのである。故に吾家の受持信唱の要諦は無論形式としては十界大曼荼羅に對して佛智の題目を受持信唱するにあるのであるが、も少し端的にいふ時、題目を受持信唱して、自ら題目の中に溶け入るといふ事にありといふべきである。丁度芭蕉翁が松嶋の絶景に對して「嗚呼松嶋や又松嶋や」といつた様に題目に對して唯絶讃を放つ境地を味ふに於て、受持信唱を握み得ると想ふ。四信五品に於ける一念信解、初隨喜の氣分こそ大切であつて、以後は却てその要ではないのである。

之を要するに宗義の要點は題目を受持信唱して自ら題目の中に完全に融合し去る事に於て盡きて居る。

今謂ゆる題目に於ける性法乘法の辨、事一念三千、十界大曼荼羅の展開の如きは、この受持信唱の無限絶對の生命の展開に外ならず。宗學のプラグマチズムは唯題目の受持信唱に依て完全に題目の中に溶解し去ることより外にはないのである。

四、性法乘法

題目につき綱要導師に「首題五字法華極理章」あり、「因行果德具足妙法章」あり、「正像末法題目異相章」あり、その第一、第三は吾人の謂ゆる性法に、その第二は吾人の謂ゆる乘法に當ると見るべき如くである。正議輝師は法華極理章の正義に、

「妙法蓮華經の名字雖_レ一ト、所召不_レ一ナラ、今且_ク判_ノ爲_レ四ト、一_ニ曰一部ノ題目、二_ニ曰經王所詮深理ノ名稱、三_ニ曰行者一心ノ召號、四_ニ曰森羅三千ノ銘額」

といつて居る。之を吾人の謂ゆる性乗を以て見る、必ずしも嚴密ではないが、和上の一、二、四は性法に、三は乘法に分對すべき様に想はる。

更に吾遠藤教頭は棲神第二十一號題目の考察の一文に於て、一、教法として見る、二、行法として見る、三、理法として見る、四、佛法として見るの四種に分類して居る。之を今の立場より見る時、一、三、四を性法に、二、四を乘法に配當し得る様に想ふ。

今謂ゆる性乗とは理論と實際、思索と体験、哲學と宗教といった程度の分類である。即ち題目性乗辨とは、換言すれば「題目の理論と實際」「題目の哲學と宗教」といつた意味と解して大差なきことゝ想ふ。

祖書の全般に渉る解釋は遠藤師に於て略々盡して居る様であるから、予は特に本尊鈔に於て題目の性乘二方面を考察して見たいと念ふのである。

五、本尊鈔四十五字段

本尊鈔四十五字段の和上の科文に依るに、(拙著事一念三千觀心義提要一九七頁參見)

第二篇、本尊

第一章 舉_ニ一代ノ依正_一本迹對辨_ス

第一節 總ノ舉_ニ迹ノ說相_一——大本十六紙

左初行夫 縮遺 939
始自寂下 末 5行

第二節 正_ニ示_ニ本ノ說相_一

第一項 出_ニ本門ノ說相_一(四十 五字)

同紙 左六行今 縮 939
本時下 末 2行

第二項 示_ニ迹門未顯_一

同紙 左末初行迹 縮 940
門十四品下 1行

乗法の妙境たる十界圓具本尊を明すに先だち、又前來乘法妙觀段の受持讓與に對する理論的根據として、茲に題目の性法を展開して、正しく本門の說相を示せるが四十五字法体段である。この四十五字が本門の說相たると共に題目の展開たる何よりの證作は、第二項 示_ニ迹門未顯_一科の下「迹門十四品_ニ未_レ說_レ之_一、於_ニ法華經_一内_ニ時機未熟_一故ナ_ル敷_ニと簡ひ去り、次に「此本門肝心南無妙法蓮華經ノ五字」を「召_ニ地涌千界_一付_ニ屬_一之_一」云云と簡取し來り、正しく塔中別付の妙法を明す點より見る、四十五字法体を叙し畢り、之を題目七字に結歸せるを見るべく、然ることは、とりもなほさず、逆に見る時、塔中別付の題目を展開して四十五字法体を展ぶるものに外ならずといふべきである。

既に稱して四十五字法体といふ、法体とは乘法に對する性法の謂であつて、後の乘法妙境たる教觀本尊段に、又前の乘法妙觀の受持信唱の受持讓與段に根據を與ふるものたるはいふまでもない。但し乘法妙境の教觀本尊段、乘法妙觀の受持讓與段の裏面に性法を、性法四十五字法体の内面に乘法の義を内含すべきは極めて當然の義であり、塔中直授妙法の性乗の結晶たること理在絶言である。

今四十五字法体を吟味せんに、文に云く、

第一章、第二節、第一項 「今本時ノ娑婆世界ハ離三災ヲ出ニテ四劫ニ常住ノ淨土ナリ。佛既ニ過去ニモ滅未來ニモ不生ゼ所化以テ同体ナリ。此レ即チ己心ノ三千具足三種ノ世間也。」

右の文に於て「今本時」より「常住ノ淨土ナリ」までは本佛及所化衆生俱住の淨土を述べたので、輝師は略要に「畢竟凡夫所住の娑婆即本時の淨土也」といつてをり、

「佛既過去不滅」等につき、輝師は「過去の入滅も永滅にあらず、未來の出現も新生にあらず。無始盡未來常住の佛体なり。一切の諸佛同体の一佛なれば常住無二也」といつてをる。

次の「所化以テ同体」の下につき、輝師は「九界も佛界と同じく常住也。同体は俗語にて同様の義也。一體なる事は次の句にあらはる」といひ、次の

「此即己心三千具足」の下につき輝師は「事常住の依正を取て、己心の全体とす。又本時の生佛を全して常住の心法とす。一体の三法心佛衆生無二無別なり。是正しく事一念三千を結成し、能觀の事行を成就せしむ」といひ、「觀心の正体は正しく今文也。己心を觀じて本時常住の十法界を見る是也」といひ、「故に知ぬ、今文境に即して觀、能觀の唱題と所觀の本尊と、俱に今文を以て正体と定むべし。今文は壽量の微旨、所囑の法体を明す也」といつてをり、

その「三種世間也」に於て輝師は又「本時の娑婆は國土世間なり。本時の生佛は衆生世間及び五陰世間なり。別すれば則ち三千具足、總すれば則三種の世間、一体無餘の義を顯すが故重ねて三種の世間と云ふ。唯心無外を示す也」といつてをる。

明に吾輝師が心、佛、衆生の一休三法を以て領解し、已心を行者已心と説き、外的十界事常住、佛界緣起本佛觀と內的已心の統一觀との同致を成立して、唯心無外に結歸してをる点に於て、山川氏の謂ゆる文に約して佛界已心、義に約して本佛果上の一念(佛界已心)本法受持の一念(行者已心)等の兩頭解釋の如き毫末の類似も之を見る能はず。和上解釋の行者已心に結歸の單元的解釋の明朗透徹、掌中の菴羅果を指す如きに比する、山川氏解釋の、何ぞ混雜、錯綜、朦朧、晦澁、牽強、附會、佞屈、贅牙の甚だしきや。況んや先師中かゝる解釋を敢てせし者絶無なるをや。第一、佛界已心などいふ熟語を、附佛教學佛法成の外道ならしめば措く、苟くも大乘佛教學上のオーソドックスとして果して之を許し得るや否や大に疑なき能はず。

予を以て觀る、四十五字法体は實に題目に於ける性法の展開であつて、後の本尊形式の根據として「今本時」より「所化以テ同休也」に於て外的教門十界事常住、佛界緣起本佛觀即內的觀門行者已心統一觀の同致を成立し、乘法題目受持信唱の一念信解、初隨喜品に於て、この教觀不二の實在の眞景に觸れ得べしとある。予が前に題目の受持信唱に依て、題目の中に溶け入るを要諦とすといへるは、四十五字の教觀不二の實在の中に溶融し得べきの謂である。つまり受持信唱に依りて内已心本尊の眞を捕へ得ることは又同時に外佛界緣起本佛本尊の眞を捕捉し得るの謂である。佛界緣起本佛本尊と已心本尊とは決して異なる別々の實在ではない。同一實在の二面觀の謂である。

已心の無限性と統一力（肉身の時空に制せらるゝにかゝらず、已心の何ぞ微妙不可思議なる）とは本佛の無限性

と統一力と相呼應し、彼此一如同体たる意味に於て之を心、佛、衆生是三無差別といふのである。山川氏が行者已心を牽強、附會以て佛界已心に改作せんとする仇し努力は畢竟内界外界の同致論に暗きが爲めのみ。主觀、客觀の舊時の差別觀に囚はれて居るからである。純粹經驗の信に依てこそ内外圓通自在無礙の天衣無縫の實在を捕捉し得ることを辨ぜざるに由る。仍て推す、恐らく山川氏は吾家の最深奥なる依正常住、身土不二の教義本門常住の微旨を正統に御理解がないのであらうと。

六、同八十九字段

次に八十九字段の科文（拙著一九八頁）を見るに、

第二章 示今ノ本尊ノ相

第一節 明地涌付囑

明地涌付囑

大本十七紙

右初行此本門肝心下

縮

940 2行

第二節 正示本尊ノ相

正示本尊ノ相（八十
九字）

同紙

右三行其本尊下

同

940 3行

第三節 結明顯現ノ時

結明顯現ノ時

同紙

右初行如是本尊下

同

940 6行

第三章 明本尊流行ノ時

第一節 略明

略明

同紙

左初行正像二千下

同

940 7行

四十五字を法体性法とし、これを根據として圖示されたる乘法妙境本尊たると共に、科文の第二章、第一節明地涌付囑の下に

（第二章、第一節）「此本門ノ肝心於テハ南無妙法蓮華經ノ五字ニ佛猶文殊藥王等ニ付屬シ其ノ之ヲ、何ニ況キ其已下ヲ乎。

但召_ニ地涌千界_ヲ說_ニ八品_ヲ付_ニ屬_シ之_ヲ」

とあるに見る、その次下の教觀本尊の全く塔中直授題目の展開たることを了すべきである。此塔中直授題目は、實に性乘二法の結晶であつて、壽量品のは好良藥（色は戒、香は本尊、味は題目）の一秘であり、神力品結要四句要法（以要言之、如來一切所有之法_名玄_義 如來一切自在神力_用玄_義 如來一切秘要之藏_體玄_義 如來一切甚深之事_宗玄_義 皆於此經教_玄 宣示顯說）の一秘題目であつて、四十五字はこの性乘二法結晶の題目の展開であり、この法体を根據として次の妙境としての乘法教觀の本尊は表示されたのである。

その第二章第二節、正_ニ示_ニ本尊_ノ相_ヲ及第三節、結_ニ明_ニ顯現_ノ時_ヲの文並に、第三章、明_ニ本尊_ノ流行_ノ時_ヲ、第一節、略明に至るの全文をついで出さんに次の如し。

（第二章、第二節）「其本尊_ヲ爲_ニ體_ト本時_ノ娑婆_ノ上_ニ寶塔_ノ居_シ空_ニ、塔中_ノ妙法蓮華經_ノ左右_ニ釋迦牟尼佛_、多寶佛_、釋尊_ノ脇士上行等_ノ四菩薩_、文殊彌勒等_ノ四菩薩_ハ眷屬_ト居_ニ末座_ニ、迹化他方_ノ大小_ノ諸菩薩_ハ萬民_ノ處_ニ大地_ニ如_シ見_ニ雲閣月卿_ノ十方_ノ諸佛_ハ處_ニ地_ノ上_ニ、表_ニ迹佛_ノ迹士_ノ故也。」

（第二章、第三節）「如_レ是_ノ本尊_ハ在世五十餘年_ニ無_レ之_{。八年之間但限_ニ八品_ニ。」}

（第三章、第一節）「正像二千年之間_ハ小乘_ノ釋尊_ハ迦葉阿難_ハ爲_ニ脇士_ト、權大乘並_ニ涅槃_、法華經_ノ迹門等_ノ釋尊_ハ以_ニ文殊_、普賢等_ヲ爲_ニ脇士_ト。此等_ノ佛_ハ造_ニ畫_ト正像_ニ、未_レ有_ニ壽量品_ノ佛_ト。來_ニ入_ニ末法_ニ始_ニ此佛像_ノ可_レ令_ニ出現_ト歟。」

右の文に對し、輝師は「其本尊爲_ニ體_ト」の下に辨じて、「其とは付囑の儀式也。即ち付囑の儀式に託して、宗祖弘通の本尊を示し、及び本尊皆所付なり」といふに見る、その教門本門八品付囑の儀式を圖示するを見るべく、その「塔中妙法蓮華經」の下の辨に、「寶塔は行者己身即境智冥一の寶塔なることを表するなり。中の字正中の義也」に見る、

教門本門八品の圖式そのまゝ觀門行者己心の展開本尊たるを見るべく、その「始此佛像」の下の辨に「曼荼羅即本佛繪像也」といふに見る、觀門己心本尊そのまゝ教門本佛本尊なることを示すものに外ならぬ。

之を要するに、性乘具備の塔中直授題目は四十五字の性法を展開し、之を根據として茲に十界圓具の教觀本尊を展開し、その本尊たる本門八品の儀相の模寫にして、而も中央の五字に於て、無作三身本佛の正体を顯す時、三千常住十界常住、佛界緣起本尊、中心に約して本佛本尊の表現であり、中央の題目を己心の本体と見る時、己心所具十界、己心統一としての己心本尊の表現であり、前者は教門、後者は觀門にして、共に宇宙實在の眞體たるは同一である。その四十五字が心佛衆生是三無差別の一体三法の表現である如く、この本尊形式に於ける教門佛界緣起、本佛本尊は即觀門己心本尊である。己心本尊が實在たると共に本佛本尊も又同一實在であつて、己心本尊に徹する時、同時に本佛本尊に徹し、乘法題目の受持信唱、一念信解の當初始めてこの乘法の妙境教觀不二本尊の實在の眞景に參し得て、我茲に本佛の慈懷に突入して、我と本佛と一如し得るのである。山川氏が己心本尊を厭ふは飽くまでも主觀、客觀、內界、外界の區別に囚はれて、己心本尊即本佛本尊の眞體を捉え得ず、從て信そのまゝ主客未分の純粹經驗を認識し得ざるの謬見に坐する。

七、同三十三字段

次に三十三字段を辨ぜんに、三十三字段は輝師科文に依るに、

第一篇 觀心

第一章 明^ハ觀心ノ出處^ヲ

第二章 辨ニ觀心ノ義相ヲ

の下の殆ど最末總ノ舉^レ具^ニ因果^ヲ——大本十四紙 左末初行 答曰無下 縮 938 9行

の文であつて、妙觀段の歸結に相當するの一段である。文に曰く、

「釋尊ノ因行果徳ノ二法ハ妙法蓮華經ノ五字ニ具足ス。我等受ニ持^{スレ}此五字ヲ自然ニ讓^リ與^テ彼ノ因果ノ功德ヲ」

この下の略要には吾家の最深奥教義依正常住、身土不二の幽義微旨が受持讓與と共に述べてある。文に曰く、
 「若直爾に事觀の妙旨をいはば、行者色心天地法界平等一体、これ法身の全体なり。五大六塵融通無礙、念々色心周徧法界、萬法体用日夜受領、これ自爾報身天然法樂の相なり。三業起用、淨佛國土、念々回施、幽顯利益、これ自然修得無盡應作の相なり。若し能く天然の体用を信解せば、無邊三身常恒無礙なり。然るに此等の相貌信解しかた^く、觀行不^レ易が故に、一向の初心までも信解し易からしめん爲、受持讓與に約して、性徳の妙用、自爾の佛体を、提起感招せしむる巧妙の事觀なり。一文不通の男女も、正直に信受念持せば、神佛の冥應、任運に成就すべし。成功修徳、偏に信力念力にあり云云。又妙名能^ク召^シ妙体^ヲ、妙因能^ク得^ニ妙果^ヲ、妙行能^ク發^ニ妙用^ヲ等の能事、此一行に在り云云」

と。是蓋し乘法題目の受持信唱、一念信解に依て、觀心に徹する時、吾人と天地と一体となり、特に我等直ちに本佛果海に入り、本佛の懷に突入し、本佛と一如すべしとの謂に外ならず。

今謂ゆる題目に釋尊の因行果徳とは、彼の性乗具備の題目が四十五字の性法を展開し、これを法体とし、根據として乘法の題目受持讓與段を發起し來る。已に乘法題目たる故、この題目には本佛釋尊の妙智を具し、本佛釋尊の因果功德聚たる故、吾人之を受持信唱する時、佛智立ち處に具し、釋尊の因行果徳を自然讓與せられて、觀心に徹すると

共に、己心本尊に徹し、我れ天地法界に一如し、本佛の慈懷に飛躍突入して本佛と合体し、本佛と融溶一如し得るのである。

以上に於て予は四十五字、八十九字、三十三字段の要旨を述べ終りしが、是が三關係を略叙すれば、

塔中直授の妙法（性乗具備）展開して、性法四十五字法体となり、これが妙境に一轉して、乘法教門本佛本尊、觀門己心本尊となり、これが妙觀妙智に一轉して乘法題目の受持護與、一念信解となるのである。但し性乗各互に内含することは前にいへる如し。

八、佛智題目の由來

上に述べし三十三字段の佛智の題目であり、因果功德聚の題目であつて、妙觀の乘法たること已に／＼明けし矣。然らば塔中直授の性乗二法の結晶たる題目の展開たる四十五字法体に於て、此佛智はその何れの邊に求むべきや。

勿論塔中直授の題目が已に性法よりは乘法としての佛智題目たる事の義分強いのであるが、四十五字では偏に「佛既過去不滅未來不生」の佛陀の邊に之を求むべきである。この佛陀を色心に別つ時、佛智はいふまでもなく佛心の所産であり、因果功德聚は本佛釋尊色心二面の積聚である。

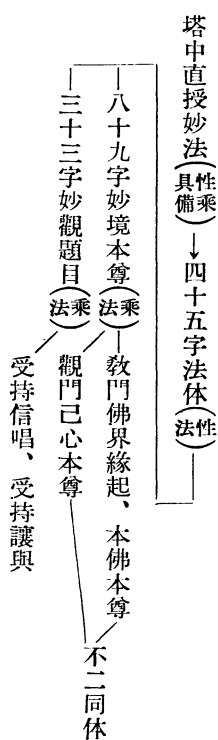
かくて四十五字は最後己心に歸納して、それが佛智の一念三千となるのである。然るに山川氏はこの佛智の題目を四十五字より如何に演繹すべきかにつき、「是即己心三千」の下に直ちに求めたから、この己心を佛界己心と行者己心の兩様に解釋せざるを得なかつたのである。且つ氏は主觀客觀の區別に囚はれし故、己心本尊を立する時、天台の觀心に濫ずとなし、是に於て何とかして觀心的方面を抹殺すべく、四十五字の一体三法中より心法を佛界に導入せん

とするの獨斷を敢てしたのであつた。

要するに氏の誤りは主觀主義を輕視して客觀主義に走り、佛智の由來する根元を誤りしが爲めにこそ、かく牽強しかく附會せざるを得なかつたのである。

九、結 言

以上論述の性乘辨、之を要するに題目の性法乘法を述ぶるにつき、本尊鈔四十五字、八十九字、三十三字段に交渉して説いたのであるが、圖示せんに次の如し。



(但し性法の裏に乘法を、乘法の裏に性法を具すべきこと前述の如し)

之を端的にいふ時、吾家の受持信唱の要諦は題目の受持信唱の一念信解の當初に於て、自ら題目の中に溶け入り、本佛と一如することに盡きてをる。

尙ほ題目と本佛と一念三千の三關係につきては、和上の正義の次の文最も要を得て居るので、結言の延長として之を記する。以て和上説と山川説と如何に軒輊あるかを知るべく、豈啻正統と異端の差異のみならんや。

觀心本尊一期終窮章「其三千法體、今本時第四十五字、乃至曰「世尊久證一念三千等」下、正義

「今謂文六、（一、文底祕沈、二、無始古佛、三、隨自本門、四、因果俱時、一法當體蓮華、五、無作三身本極法身本因本果、如來、六、世尊久證一念三千）義三、體一也。文六可知。義三、者、謂第一、第六、祇是事、一念三千、第二、第五、祇是無作三身、第三、第四、祇是妙法蓮華經也。體一、者、謂但是一體三法三千常住耳。約行者言、一念三千、即是本有僧寶、所謂一念三千者、歸一圓融爲意、豈非和合僧寶義乎。約佛言、無作三身、即是本有佛寶、所謂無作三身體用具足爲意、豈非自覺覺他佛寶義乎。約法言、曰妙法蓮華、即是本有法寶、所謂妙法蓮華依正常住爲意、豈非常恒法寶義乎。本、即、是心佛衆生三法、謂妙法蓮華是衆生法、十界常住名妙法故、一念三千是心法、會歸一心故、無作三身是佛法、名義全是故。又當知結爲一法、但是三千常住因果俱時、一法耳。宜哉終以三南無妙法蓮華經爲旨歸也。與記精微、正在于此。」（刪略三卷最末紙）。以上

身延山學會々則

- 第一條 本會ハ身延山學會ト稱ス
- 第二條 本會ハ祖山學院研究室內ニ置ク
- 第三條 本會ハ祖山教學ノ興隆ヲ計ラン爲ニ宗學ヲ中心トセ
ル諸學科ノ研究ヲ以テ目的トス
本會ハ其目的ヲ達成センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
- 第四條 一、研究發表會
二、派遣並ニ視察
三、特別講演會
四、學報並ニ著書刊行
- 第五條 本會ノ會員ヲ左ノ三種トス
一、名譽會員 本會ノ趣旨ニ賛同シ事業ヲ援助スル者及
ビ本學院關係ノ諸先輩ヲ推薦ス
二、正會員 祖山學院教職員
三、準會員 祖山學院學生並ニ教授ノ紹介推薦ニヨル者
本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 第六條 一、會長 一名 院長ヲ推戴ス
二、委員 三名 正會員中ニ於テ互選シ會務一切ノ處理
ニ當ラシム、任期ハ一ケ年 但シ再任ヲ不妨(内一
名會計)
- 第七條 本會ノ維持ハ本山ヨリノ下附金、補助金及ビ正會員
會費(年額一圓)其他寄附金ヲ以テ充ツ
- 第八條 本會ノ會議ヲ左ノ二種トス
一、總會 毎年一回四月ニ開キ前年度ノ會務ニ關スル報
告ヲナシ當年ノ事業ニ關スル事項ヲ協議ス
二、委員會 必要ニ應ジテ之ヲ開キ諸般ノ事務ニ關スル

- 協決定ヲ行フ
- 第九條 本會々則ヲ變更セントスル場合ハ總會ノ決議(出席
者ノ三分ノ二ノ賛成ヲ要ス)ヲ經ルコトヲ要ス
- 第十條 本會ノ細則並ニ內規ハ別ニ之ヲ定ム

研究發表ニ關スル細則

- 一、研究發表ハ原則トシテ例月一回開催ス
- 二、發表者ハ二名以内トシ豫メ研究主題ヲ委員ニ提示スルモ
ノトス
- 三、發表サレタル研究内容ハ學報誌上ニ掲載スルコトアルベ
シ
- 四、發表者ニ對シテハ薄謝ヲ呈スルコト
- 五、讀書會ヲ併開スルコトヲ得

派遣並ニ視察ニ關スル細則

- 一、正會員中ヨリ例月一回一名乃至二名互選ノ上派遣スルモ
ノトス
- 二、派遣視察ノ結果ハ必ず研究會ニ於テ報告スルコト
- 三、派遣ニ際シテハ實費ノ支給ヲ受ク

身延山學會現委員

鹽田義遜
望月春惠
田中

大曼荼羅儀相の研究

鹽田義遜

前篇 總論

- 一、曼荼羅の起源
- 二、法華三部と曼荼羅
- 三、遺文に見ゆる教觀本體
- 四、始顯曼荼羅の意義
- 五、三國未曾有の深義
- 六、儀相と五期の分類
- 七、遺文、曼荼羅に於ける諸尊と讚文
- 八、前後二期と綜合三期

後篇 各論

- 一、佛部の諸尊
- 二、中尊首題と兩尊との關係
- 三、境智冥合と佛界緣起
- 四、蓮華部の諸尊
- 五、金剛部の諸尊
- 六、四天王と二明王
- 七、通別の讚文
- 八、曼荼羅に於ける花押
- 九、圖顯曼荼羅の意義

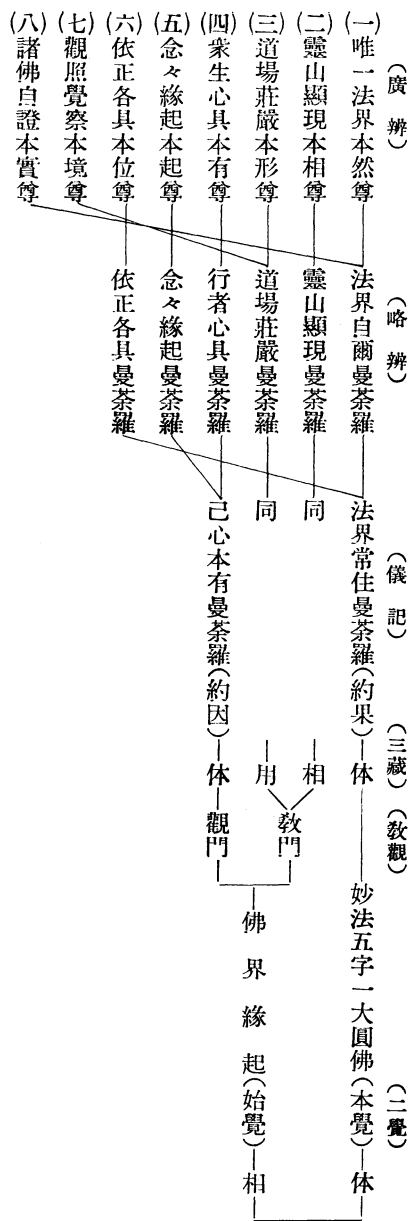
前篇 總論

一、曼荼羅の起源

曼荼羅は汎く之をいへば佛教の行門に於ける一對象であつて、諸經に於ても必ずや何等かの形式を以て之を説いて居るのである。併し正しく之を説示したのは眞言密教といはねばならぬ。輝師が略辨に「曼荼羅は密經より出で眞言家の法也」と説いたのはこれがためである。勿論法華經にも曼荼羅が説かれてあり、且つ宗祖が三秘の隨一の本門の

本尊として大曼荼羅を圖顯せられたことは、純正宗學の立場からは我が大曼荼羅は、正しく法華經の所明なることはいふ迄もないが、汎く佛教思想史の上から見る時は、保田妙本寺の大目相承譜や、金澤本の理性院血脈〔法華〕二三の四號拙稿参照）や、妙法尼御返事に於ける高野遊學の記事（一七七〇）等からして、鎌倉遊學已來二十余年の修學中には、眞言事相の相承のあつたことは否み難い所である。又略辨が「祖師彼を用て法華經の大曼荼羅を製作し給也」とは、思想史的一面を示したものであらう。

由來曼荼羅は眞言の性相たる六大・四曼・三密の体相用三義の中、自ら第二相大に當るのである。輝師は大曼荼羅に對して「廣辨」^{三五}には八名、「略辨」^{下三}には六名、「禮誦儀記」^{廿一}には四名等種々の名稱を附して居るが、これ等は廣略の相違で左の如く曼荼羅の体相用に約する義立に外ならぬのである。その中廣辨は本尊の名に依り、略辨と儀記とは曼荼羅の名に依つて之を示して居るが、今これを圖表にすれば左の如くである。



右の如く廣辨の八名も畢竟儀記の四名に外ならぬのであるが。その四名の体に當る中の法界常住と己心本有とは、孰れも体ではあるが前者は本覺果位に於ける一大圓佛を表し、後者は始覺因位觀門本尊の体たる行者己心に約したる佛界緣起の曼荼羅である。これと相用の二教門曼荼羅の三は、共に始覺の重に於ける佛界緣起の曼荼羅で、これ前の法界常住の一大圓佛の体に對すれば共に相であり、また起信論の二覺と同意である。而して今の相に於ける教觀二門と体相用三義との配當も、これ一往の配當であつて再往は二門に体相用のあることはいふ迄もない。但三義の中体の己心本有は觀門に親しく、相の靈山顯現と用の道場莊嚴との二は教門に親しいのである。而してその根本の体は妙法五字を以て顯はされたる、一大圓佛たる法界常住尊に外ならぬのである。かくて今述べんとするのはその体の一大圓佛の法体論たる教觀の問題でなく、又用の修行論でもなく正しくその相たる佛界緣起の諸尊に就ての形相論である。而し乍ら体相具足し始めて眞の形相であり、修行の正境たることは、輔行一に

縱便發心不眞實者、緣於正境功德猶多、乃至故知若非正境、縱無妄僞亦不成種。(一ノ四三)
とある如くである。

斯の如き我が大曼荼羅は純正宗學より見る時は、始顯の讃文に明かなる如く、『御滅後二千二百二十余年未曾有日蓮始圖之』と遊ばされたる如く、これ法華本門の開顯に依る本化別頭、神力別付の大法である。而し乍ら若し佛教史上より見る時は、佛教學中眞言密教の最も特長とする所であつて、法華曼荼羅の最初も法華註家中天台の六祖荊溪(七二)と、粗ぼ同時代に出でたる眞言の不空(七四)の觀智儀軌を推さねばならぬ。即ち法華曼荼羅もその眞言の法華法の曼荼羅を出發点として、宗祖の所謂「傳教大師の師子身中の三虫」たる慈覺、智證、安然に依て次第に法華宗化され、講演法華儀より蓮華三昧經に見ゆる如く本門的傾向に向ひ、更に中古天台の本覺法門の搖籃期を経て、終に法

華深義に立脚したる宗祖の三秘の開顯となり、その隨一の本門本尊として大曼荼羅が圖顯せられたのである。輝師が三千論二に、

若至_ニ叡山傳教_一者、初正弘_ニ實教_一後却兼_ニ藥師仁王眞言等_一、蓋開權意耳、權實雜亂基本在此_レ。(二一〇)

と指摘せる如く、大師開權の意に徹せざりし故に雜亂となつたのである。然るに我等より見れば後世の本門開顯が密教にまで亘り、密教をも藥籠中に攝取して始めて三秘開顯となつたのである。されば傳教以後の所謂顯密雜亂は當時の天台其ものから見れば勿論雜亂であつたが、本門開顯の見地より見れば雜亂でなく攝取と解すべきである。斯くして曼荼羅思想は完全に法華の思想となり、此に本門の本尊として大曼荼羅が開顯せられたのである。これは開顯であつて模倣ではない、蓋し開顯とは思想史的意味を純正宗學的に解釋した語である。本尊得意鈔に妙樂の所謂「皮膚毛綵出_ニ在衆典_一」に依る『大綱成佛、網目不成佛』(三一)の判は、正しく純正宗學の根本原則でなつて、讚文の三國未曾有の意も此の原則に依つた純正宗學的立脚である。

因に一言することは大曼荼羅と傳教大師との關係である、これに就ては現に輝師が「後却兼_ニ藥師仁王眞言等_一」蓋開權意耳」と述べし如く、大師が我が立つ杣の一乘止觀院、即ち後世の根本中堂の本尊に藥師如來を勸請したことは本尊鈔に、

傳教大師粗顯_ニ示法花經實義_一、雖_レ然時未_レ來之故建_ニ立東方鵝王_一、不_レ顯_ニ本門四菩薩_一、所詮爲_ニ地涌千界_一讓_ニ與此_一故也。(八九四)

とある如く、鵝王とは三十二相の中手足縵網相に約する佛の異名で、藥師の東方の佛なる故に今は藥師のことで、これ壽量品の大良醫の大藥師に對する東方小藥師に當るのであるが、此の藥師一尊ではなくして、日光月光並にその十

二願の表象十二神力の顯現たる十二神將、梵天、帝釋、四大天王を以てその脇士とし、又釋迦堂には大師一刀三體の作三尊如來の一なる釋迦如來とその脇士文殊普賢、梵天帝釋、四大天王を現に安置して居るが、これ傳敎大師以來の形相とすれば、全く本尊鈔の

權大乘並涅槃、法華經迹門等釋迦、以_二文殊普賢爲_二脇士_一、此等佛造_二畫正像_一未_レ有_二壽量品佛_一。(〇九四)

の文に見ゆる如くである。故にこれに依れば大師の曼荼羅式が大体迹門に依り、釋尊(藥師)を本尊とし、文殊普賢、梵天帝釋、日月四大天王を脇士として勸請せられたことが知られるし、又建治二年春頃の曼荼羅の第二段の左側に、十二神王を配したのも、小藥師の脇士を大藥師に配したと見れば、叡山に於ける大師の迹門中心の本尊様式が重大なる暗示となつて居ることを見逸してはならぬのである。此の点は法華曼荼羅史上重大なる意味を有するものであり、宗祖が大師を外相承の師と仰ぐ一要素である。故に是に就ての根本的史的研究は後日を期するものである。又法華神道との交渉も一重要課題として考へねばならぬ。

二、法華三部と曼荼羅

今法華に就てその曼荼羅形相を見るに、宗祖の法華經は註法華經が法華三部を註し、本尊鈔の一代三段が法華三部十卷を正宗(〇九四)としたのに依て明らかなる如く、天台以後傳敎智證等何れも三部一具として見たのに準ずるに、今の曼荼羅も法華三部十卷を所依とすべきである。又法華の註家は道生、光宅、天台等孰れも密敎傳來前に屬する故に、曼荼羅の解釋は思想史上當然密敎傳來後に屬すべきであるが、法華三部の經文上には自ら曼荼羅の形相が存するのである。

先づ開經たる無量義經に就て之を見るに、説法品第二に無量義の意を説いて

無量義者從_二一法_一生、其_一法者即無相、名爲_二實相_一、乃至善男子以_二是義_一故、能以_二一身_一示_二百千萬億那由陀無量無數恒河沙身_一、乃至是則諸佛不可思議甚深境界、非_二乘所_一知、安非_二十地菩薩所_一及、唯佛與_二佛_一乃能究了。

と述べ、この時空中より天華が降り、四方四維上下も亦然なりとあるが、一法身より無量身を顯現するは、これ一種の佛界緣起の曼茶羅の相である。

次に法華八卷に就ては、不空の儀軌を始めとして、法華系統の藝術は、悉く寶塔品の二佛並座の儀相依つて居るとは、鑑眞の南都戒壇（佛全、一〇一、^{四三}）天武朝に於ける大和長谷寺の千佛銅版中の法華變相、その他雲崗の石窟の彫刻を始め、和漢各地の多寶塔等に見て明かである。故に古來法華曼茶羅といへば、一に寶塔品の儀相の如くに思はるゝに至つたのである。併し乍ら法華經中に曼茶羅の儀相を求むれば、序品最初に見ゆる靈山の儀相は、舍利弗等萬二千の聲聞、八萬の菩薩、二界八番の雜衆歡喜合掌一心觀佛と説き、又眉間白毫相の光は下阿鼻獄より、上阿迦尼吒天に至ると説けるは、これ一種の十界の曼茶羅である。

次に化城品には四方四維の阿閼より、釋迦に至る十六佛が、無量萬億の菩薩聲聞を眷屬とせりと説くは、これ一種の佛界緣起の四聖曼茶羅であり、更に寶塔品に至つて三變土田して、八方に於て各二百萬億那由陀の國を悉く清淨ならしめ、且つ

無_レ有_二地獄餓鬼及阿修羅_一、又移_二諸天人_一置_二於他土_一、乃至通爲_二一佛國土_一、實地平正、再時大衆見_二一如來_一と説くに依れば、四惡趣なく且つ天人被移せられた淨土で、これ亦四聖歸命の曼茶羅である。以上は述門の三曼茶羅である。

若し本門に至つては壽量品に

我實成佛已來無量無邊、百千萬億那由陀劫、乃至於是中間「我說燃燈佛等、乃至名字不同、年紀大小、六惑示現の說に依れば、開目鈔に「法華經前後の諸大乘經に、一字一句もなく、應身報身の顯本はとかれず」(六七)とある如く、靈山の教主は無作三身如來と開顯せられ、又燃燈佛等とあるは、取意鈔に

「大日如來、阿彌陀如來、藥師如來等盡十方諸佛、我等本師教主釋尊所從也。」(三〇)

と釋されし如く、釋迦一佛の顯本に依て開顯せられたる通一佛土の諸佛聚たる佛界緣起の儀相である。又神力品に於ける結要付屬の儀相、累品總付の儀相は何れも法華曼荼羅の一儀相である。

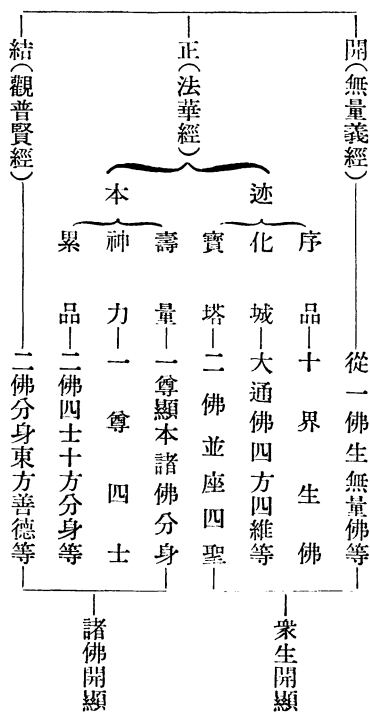
若し觀普賢經に於ては十方禮佛に依る懺悔の法を説き

南無釋迦牟尼佛、南無多寶佛塔、南無十方釋迦牟尼佛分身諸佛、作是語「已遍禮十方佛」、南無東方善德佛及分身諸佛。

等と説いて居るが、それ又一種の懺悔法の曼荼羅である。若し最初の釋迦を壽量顯本の佛とすれば、多寶塔内に二佛を認めねばならぬが、既に累品に

多寶佛塔、還可如故、説是語時、十方無量分身諸佛、及多寶佛並上行等乃至一切世間天人阿修羅等、聞佛所説皆大歡喜。

とあるに依れば、累品の教主と同じく應即法身本佛なることは、「釋迦牟尼佛名毘盧遮那遍一切處」の文に依ても明かである。今如上の三部所顯の曼荼羅相を示さば左の如くである。



右の如く開經並に迹門は十界衆生の開顯を大綱とし、本門並に結經は十方諸佛の開顯を大綱とするのである。

然らば我が大曼荼羅孰れに相當するといへば、新尼御返事に

今此の御本尊は教主釋尊五百塵点却より心中にをさめさせ給ひて、世に出現せさせ給ひて四十余年、其後又法華經の中にも迹門ははせずして、寶塔品に事をこり、壽量品に説き顯し、神力屬累に事極まりしが(九〇)

とある如く、寶塔品の分身來集に起り、壽量品に開顯せられ、神力付屬に竟る本尊鈔に所謂「如是本尊在世五十余年無_レ之、八年之間但限_三八品_二と説かれしものである。若し曼荼羅の諸尊に就て見れば、南無妙法蓮華經を寶號と

する壽量所顯の本佛を中尊とし、兩側には寶塔品の二佛、涌出品の四大士、並に弘安已前には普賢經の東方善德佛、寶塔累品にも見ゆる十分身諸佛を第一段とし、第二段は法華に出づる文殊普賢等の迹化諸菩薩を始め九界諸尊を列ね第三段の鬼母、刹女並に兩側の四大天王は序品陀羅尼品に出づる所であるが、その他龍樹等三國の四依、天照八幡、

並に不動愛染の二明王等は、全く本門開顯の意に基いて曼荼羅の諸尊に列したのである。されば日女鈔には、

爰に日連いかなる不思議にてや候らん、龍樹天親、天台傳教等だにも顯はし給はざる大曼荼羅を、末法二百余年の頃、はじめて法華弘通のはたじるとして顯はし奉るなり。是全く日蓮が自作にはあらず、多寶塔中の大牟尼世尊分身の諸佛よりかたきたる本尊なり（三六）

と三國未有なると共に、本有の尊形なる所以を明かにし、更にその内容を詳説して

されば首題の五字は中央にかゝり、四大天王は寶塔の四方に坐し、釋迦多寶本化の四菩薩肩を竝べ、普賢文殊等、舍利弗日連等坐を屈し、日月光天、第六天の魔王、龍王、阿修羅其外不動愛染は南北の二方に陣を取り、惡逆の達多、愚痴の龍女一座をはり、三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神、十羅刹女等、總じては大小の神祇等体の神つらなる。其余の用の神豈にもるべきや。寶塔品に云く「接諸大衆、皆在虛空」云々。此等の佛菩薩大聖等、總じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人ももれず、此本尊の中に住し給ひ、妙法五字の光明にてらされて、本有の尊形となる、是を本尊とは申す也。

と序品列座を始めとして、顯密の諸尊、三國四依、天照八幡等十界悉く本佛の光明に照されて本有の尊形と開顯した壽量開顯の曼荼羅である。今の文に寶塔品の「接諸大衆、皆在虛空」と以て、本尊の依文とする如く曼荼羅は虛空會八品の儀相でもあるが若し御義口傳には壽量品の「時我及衆僧、俱出靈鷲山」の文を以て

靈山一會儼然未散の文なり、本門事の一念三千の明文なり、御本尊は此の文を顯し出し玉ふなり。（下左四）
といふに依れば靈山顯現の儀相でもある。故に古來の相承には（本尊論資料）

（一）虛空會の儀式 朗門流「日像記」（二六）

(二) 二處三會の儀式 (同上)

(三) 靈山一會の儀式 興門流「奥師口傳」(二二三)

(四) 法華會の儀式 大綱深秘鈔(二二三六)

等といふが、壽量品には「我常在此、娑婆世界」と説き、妙樂は之を釋して『豈離^三伽耶^二別求^三常寂^一、非^三寂光外別有^三娑婆^一』(文句記、二六三)と説き、又『直觀^三此土^一、四土具足、故此佛身即^三三身也^一』(二九四)と説ける如く、壽量の顯本を経れば虚空といひ靈山といふは、これ未顯の重に於ける所變化の無常土の方處であつて此土を離れて三災四却を出でたる常住の淨土はないことは本尊鈔に明かである。故に法華の曼荼羅としては前掲の諸名中、相に約した靈山顯現の曼荼羅といふのが應はじい様である。

三、遺文に見ゆる教觀本尊

圖顯曼荼羅の研究に先だちて、先づ遺文に見ゆる曼荼羅の所明に就て研究する必要がある。遺文中本尊又は曼荼羅の所明は、隨所に見出さるゝのであるが、その中判然たるものを抽出すれば、佐前に二十余、佐後には百余を數ふことが出来る。それ等の中正しく曼荼羅の形相に就て述べたと見らるゝものは、佐前に七、佐後に二十六を數へられるが先づ是等の諸文を通觀するに、文應元年の唱題鈔は台當の分岐点と見らることは、文中自ら兩宗の本尊が併舉されて居るからである。即ち

本尊は法華經八卷、一卷、一品(以上天台)或は題目を書て本尊と定むべし。法師品並に神力品に見えたり。又たへたらんは釋迦如來、多寶佛を書ても造ても法華經の左右に可^レ奉^レ立^レ之。又たへたらんは十方の諸佛普賢菩薩等

をもつくりかきたてまつるべし。(〇三四)

とあるに依て明かであるが、經卷本尊はこれ法師品の「經卷所住之處、起七寶塔、不須復安舍利」の文と、神力品の「經卷所住之處、皆應起塔供養」の文に依るのである。これ天台の法華懺法に見ゆる本尊である。これに對して壽量文底の題目を以て本尊とし中尊としたのは我が大曼荼羅である。次に「又たへたらんは」の第一は題目に二佛を添へた略本尊であり、第二は更に十方諸佛並に普賢等を加へた稍や廣義の略本尊である。而して此にいふ法華經といふのは、天台や經文に見ゆる如き經卷でないことは明かである。即ち前の八卷一卷等の法華經は法身舍利を意味し、後の法華經は題目を寶號とする本佛を意味したものである。故に今の抄は法(台)佛(當)各々廣略要三様の本尊を示したものであり、「書ても造りても」といへば、御本尊は一遍首題或は一佛の要と、二佛を加へた略と、十方諸佛普賢をも添へた廣いの三様、曼荼羅或は木繪に亘つて示されたのである。

若しその他の文に依る曼荼羅の儀相の所明に就ては、概ね第一段の佛部を出し、その他に就ては第二段の蓮華部を詳説し、或は第三段の金剛部を詳説する等一樣ではない。是等諸部の所明に先だちて、先づ中尊の所明に就て見るならば、佐前と佐後の弘安以後とは共に法華經を以て中尊を表して居るが、佐前後の法華經は共に天台のそれとは異なるのみならず、佐前後に於ても自らその内容の意味は別である。即ち佐前に於ては唱題抄を始めとして、船守鈔(三四)善神擁護鈔(五四)、月水鈔(一四八)、四條鈔(六八)等は諸佛等を以て行者擁護とする、已心本佛、已心本尊の意と解すべきで、文永二年の聖愚問答鈔(八五七)が最も明らかにこの意を示して居る。即ち中尊を首題を以て表し、且つこれを佛性の意と解し

夫妙法蓮華經者一切衆生佛性也、佛性者法性也、法性者菩提也、所謂釋迦多寶十方諸佛上行、無邊行等、普賢文殊

舍利弗目連等、大梵天王、釋提桓因、日月明星北斗七星二十八宿、無量諸星天衆地類、龍神八部人天大會、閻魔法王上悲想雲上、下那落炎底、所有一切衆生所備佛性を妙法蓮華經とは名くる也。(八七七)

と述べて居るが、此の行者佛性所表の中尊の首題以外の諸尊は、悉く行者擁護の諸尊であつて、佐後曼荼羅を以て行者の守護(三八五)とせると同一筆法である。斯の如く佐前の己身本佛の義は、佛性を以て本有の尊形とする、綱要師の逆縁本尊(刪略七三)と同工異曲である。本尊抄の末文に「不識一念三千、四大菩薩守護此人」(九四)と同義で悉く己心本尊に約して居る。又佐後に入つても文永九年の「生死一大事血脈鈔」(七四)、「阿佛房御書」(五八)、「最蓮房御返事」(六四)、「日妙聖人御書」(五八六)、十年の「妙法曼荼羅供養」にも

此曼荼羅は文字は五字七字に候へども、三世諸佛の御師、一切の女人の成佛の印文也。(五二)

と述べて、佐後と雖も本尊鈔以前は矢張大体佐前と同じく中尊を己心本佛觀心本尊に約して述べて居るが、同年の本尊鈔以後は、その所表一様ではなく、大体左の五種に分たれる。

- | | | | | | |
|----------|-------|-------|-------|-------|------|
| (一) 五字七字 | 九四〇、 | 九七五、 | 一〇三三、 | 一〇九一、 | 一六二五 |
| (二) 題目首題 | 九八五、 | 一六二五、 | 一七九四、 | 一八七三 | |
| (三) 壽量佛 | 九四六、 | 九六〇、 | 九六四 | | |
| (四) 教主釋尊 | 一〇三八、 | 一五〇九、 | 一八三〇 | | |
| (五) 法華經 | 一七一八、 | 一八一六、 | 一九四八、 | 二〇八五 | |

併し乍ら佐渡に於ては、中尊を壽量本佛とした教門本尊の義に約して居るのである。随つて佐後逸年に法華經といふのは、所詮能顯の經典の意でなく所詮能顯の本佛の義と解すべきである。此の本尊に於ける教觀兩様の解釋は、聖人

の生涯を通觀して、自ら一秘時代と三秘時代との相違と相平行して居ると見べきである。故に遺文に於ては十年四月當身の大事たる本尊鈔が、己心本尊より教門本尊へと轉回した説明書であり。次で同年七月八日一谷に於ける本尊始顯への史實と契合するものである。されば比企谷に傳へられたる身延相承の重抄に「觀心本尊鈔者先今大曼荼羅儀軌可得心也。」(資料二^八)といへるは、全く今の意を裏書するものである。

四、始顯曼荼羅の意義

古來本尊鈔は本宗に於ける觀心修行とその對象たる本尊とを併せ明したものと稱せられて居るが、宗祖三秘の所明に就ては、文永九年五月四條金吾に對して「本門壽量品の三大事」(三^八)と始めてその名を示し、次で富木殿に對して「本門の三學」(三^九)とその義を明し、翌年四月本尊鈔に於て「事行の南無妙法蓮華經の五字、並に本門の本尊」(七^九)と三秘の二法を開顯し、翌月義淨房に對して始めて三大秘法の名字を確立し、七月八日本尊の始顯となつたのである。而して此の本尊の始顯は宗祖の一期を通じて何なる意義があるかといふに、勿論佐前並に始顯以前に於て曼荼羅の圖顯もあつたのであるが、前述の如く遺文に於ける曼荼羅の所明は、本尊鈔を分岐点として、前後に於て、本尊の上に教觀の別が分ち得るとすれば、佐渡始顯を以て宗祖の三秘具顯と見なければならぬ。即ち本尊鈔を以て大曼荼羅の儀軌として、之に依て始めて三秘隨一の教門本尊即ち本門本尊が確立したのである。隨つて本尊に於ける佐後始顯は、三秘の本門本尊の始顯であつて、末法の行門は此に圓具したことになるのである。此に所謂本門本尊とは己心本尊、觀心本尊でなく、全く報恩鈔にいふ如く教主釋尊を本尊とし、十界の諸尊を以て始めて協士となす、佛界緣起の義を成するのである。これ日朝の「本尊行者用心口決」に

本尊所列諸尊、天部日月星辰等、釋迦一佛一身一念遍於法界形也。(資料、一七^四)

といふ所以である。これに對して己心本尊、觀心本尊といふのは本尊鈔の觀心段に受持讓與に約して

我等己心釋尊五百塵点乃至所顯三身無始古佛也。乃至地涌千界菩薩己心釋尊眷屬也、乃至一身一念遍於法界、乃至

己心三千具足三種世間也(九九^三)

なるもので、平賀の日意御談に

所詮本尊勸請十界^一、心外十界非己心所具十界也、去間我等題目一返奉唱己心十界衆生同時唱即身成佛也。(資料二^{一〇})

といへるものであつて、輝師が唱題觀に『中央南無妙法蓮華經是顯己心本佛体其体周遍含容十方諸佛、法界有情、無量刹土森羅萬物』といふのも全く同意であるが、併し乍ら此の己心本尊、觀心本尊にも信謗に依り、綱要師の所謂順逆の別を分つべきである。即ち前述の佐前乃至始顯以前の佛性中尊の己心本尊と、受持即成に依るそれとは全く別異である。此の順逆の別を除かんがために起つたのが、本門の大教であり三秘の妙行である。故に始顯以前は在纏の己心本尊であり、妙行に依り受持即成のは出纏の己心本尊である。換言すれば己心本尊に信前信後の相違があるのである。即ち始顯以前は信前であり、始顯以後に至つて漸く信後の己心本尊が顯はるべきである。本尊鈔に「己心釋尊」といひ、當体義に「當体蓮華佛」等とあるは信後の意であり、十界が行者守護の意に當る所明は信前の意と解すべきである。此の信前信後の分岐点なる所に、佐後始顯の本尊の重大意義が存するのである。田邊師「本尊論」一〇一參照。

されば所謂信前は中尊は自ら本覺一秘の題目であり、下種の法体であり、隨つて傍尊の二佛四菩薩等は本尊鈔の末文の如く行者擁護の諸佛菩薩諸天善神である。故に本尊を以て行者の守護と見、御守として見なければならぬ、綱要

の所謂逆縁本尊は此の義であらう。されば佐前本懷未顯、三秘未開の己心本尊は、本覺に約した行者佛性因果未分の己心本尊である。これに對して佐後信後に於ては、本懷開顯、三秘顯揚の上に於ける因門始覺、三秘隨一の行門の教門本尊と、果門の始即本の所化同體、自然護與の觀心本尊との兩様がある。而して本尊鈔の受持護與、當體義の正直捨權信法華經唱題等は、正しく前者の教門本尊に對する三秘の妙行を示したものである。又妙一女鈔に

本門の即身成佛は當位即妙、本有不改と斷するなれば、肉身を其まゝ本有無作の三身如來と云へる是也。八一九

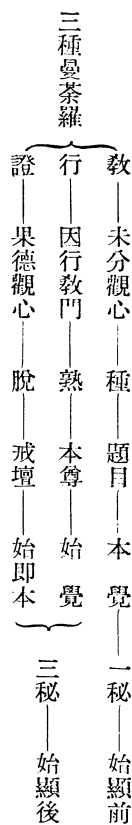
と述べ、御義口傳に「服するより無作三身」と談ぜるは、正しく後者の始覺即本覺に依る觀心本尊の意であつて、日朝の「本尊行者用心口決」に

所詮十界衆生己心妙○經處事顯事、然即十界凡聖其當位々々不改證己心妙法成佛云也。仍十界皆成佛極理此御本

尊顯玉習也。(資料一三三)

と説けるは全くその意である。

此に於てか我等は曼荼羅(本尊)に三種の別を認めねばならぬ。三種とは始顯以前の行者守護の觀心(己心)本尊と、三秘隨一たる教門本尊と、受持護與に依る觀心本尊とである。然るに此の三種は法体に就ては俱に本地難思の境の妙法たる本覺法身であるが、生佛の感應に依る行門上に相違があるのである。而して此の行門始覺門に於ける相違はこれ自ら教行證の相違と見られるのである。始顯以前即ち信前の己心本尊は、これ因果未分本覺教の重の曼荼羅。始顯以後行門の對象たる教門本尊は因門行の重の曼荼羅。果門始即本の信成就の觀心本尊は證の重の曼荼羅である。而して此の教行證三重の曼荼羅は、自ら種熟脫の三益、並に題目、本尊、戒壇の三秘に相當するものである。



此の場合行門の本尊は三秘妙行の對照の意であり、戒壇は寂光土を表して三秘の果德を意味するのである。常門の三秘口決の日實記に「戒壇又本尊儀式上可_レ習_レ之也」(資料二_{六三})とも、亦「妙法受持人住處悉實戒壇也」(同上二_六)等と釋するは、自ら今の意に當るのである。

要するに當身の大事と宣へる本尊鈔を以て本宗曼荼羅の儀軌となし、以前の曼荼羅は因果未分、本覺、佛性の法体に約する行者守護の己心本尊、以後は因門始覺に約する三秘妙行の對象たる教門本尊なることは、遺文の所明に依て判然としか解すべきである。此に於てか佐後始顯の曼荼羅に教學上重大意義が存するのである。即ち始顯前後の曼荼羅は自ら教行の相違と見ねばならぬが、若し受持讓與所化同体の果門證の重に至つては、行の修すべきなく本尊の論すべきはないのである。始顯前後の曼荼羅に就ては、右様の解釋上に相違があるのであるが、併し乍ら若し圖顯曼荼羅に就ては、悉く三秘隨一の本門本尊と解すべきであらう。

五、三國未曾有の深義

既に述べたる如く曼荼羅は、佛教史上よりこれを見れば、眞言の法に依る故に先師が曼荼羅の各部を呼ぶ名稱の如きも概ね彼に附順して居るのである。併し乍ら彼と異なる点は自ら宗義の根本相違があるからであつて、これを正像未弘三國未有大曼荼羅と稱するのである。若しその形相の彼より出づる点は、法華曼荼羅の最初たる不空の觀智傳軌

は、彼の胎藏曼荼羅に法り法華寶塔品の二佛並座を中尊とし、八葉蓮華に迹化の諸尊を配してこれを中心とする、これ法華迹門の開顯に依る三重曼荼羅である。然るに我が大曼荼羅が形式上此に源を發し、台密の搖籃期を経て全く本門開顯の意に依て大成せられた故に、二時三國未育と讚歎する所以である。併し乍ら此の歴史的進展の事情は、本尊論資料中に見ゆる諸先聖の相承中にも散見する所であつて、就中常門相承の八葉九尊圖(二二五)、朝師の「本門三種知識」に於ける智證の講演法華儀に依る八葉九尊圖(一七〇)等は儀軌との關係を物語り、朝師の法華曼荼羅八葉九尊圖(一九六)は中尊を儀軌の無量壽決定如來となし、左右に釋迦多寶の二佛を配して、これを兩部の大日となし、(取要抄記)本化の四菩薩、迹化の四菩薩を八葉に配したのは、亦彼の曼荼羅との交渉を意味するものである。

故に法華曼荼羅なる点に於ては儀軌乃至台密のそれと同一系統に屬するのであるが、その形相に就てこれを見るに先づ諸尊の表象に於て彼は畫像であり、此は文字である。又その配列に就ても彼は平面的であり、此は立体的である。隨つて彼は中心より四圍に及ぶのであるが、此は上より下に及ぶのである。又彼の儀軌の法華曼荼羅は佛部、蓮華部金剛部の三部三段よりなつて居り、又我が大曼荼羅も同じく三部よりなることは、即門相承の大覺記(資料二二三)並に日經記(同三)乃至朝傳兩師の口傳(資料一八五、一八九)等に示す所であるが、我が曼荼羅の中には四重或は五重のものもないではない。然らば如何様に三重と見るかといへば、小林董師は大曼荼羅私考に、中尊並に二佛(善德、分身)四大士を第一重佛部となし、迹化の四菩薩と聲聞衆即ち四聖までを第二重蓮華部、以下六道を悉く金剛部として居る(宗乘講義錄三)これは建治年代に確定した四聖歸命に依つたのかも知れないが、曼荼羅の第二段に梵釋日月は勿論、輪王、阿修羅、龍王等迄を列ぬるもの多く、又輪王以下は第二段と第三段の間に勸請せられることは弘安後の大半がそれである。又鬼子母神、十羅刹の如きは建治以後常に第三段の筆頭に列せられて居るが、これとて建治元年十一月

(身延本尊鑑第八圖)頃には、第二段左側の龍王の上に列せられたものさへある。随つて此の第二段は必ずしも、儀軌の蓮華部に準ずるのでなく、既に本化を以て佛地邊の菩薩として佛部に接した故に、第二段後は廣く迹化の菩薩以下の九界の衆生を接したものと見ねばならぬ。然るに鬼子母神と十羅刹女とは、陀羅尼品に於て法華の行者守護を宣言し、且つ宗祖傳導時代には常に影の形に添ふ如く、身邊を守護せられし故に、末法日本に於ける守護の筆頭として第三段の始めに列したのであるが、これは第二段に九界の諸尊を攝し兼ねし故に、輪王等と同じく第三段に流出し末法行者守護の意を以て第三段に勸請されたので、實は第二段の九界の流出と見べきであらう。

斯くて第三段は正しく三國の四依と日本國の守護神たる天照八幡となるのである。而して此の第三段の勸請諸尊に二時未弘三國未有の本門の本尊たる意義の一部が存するのである。興門の日傳は深秘抄に曼荼羅を以て

法華會座儀式、十界成佛旨被遊者也(資料二六)

と述べて居るが、若し單に十界成佛の旨といへば、迹門に於ける二乗作佛に依る十界成佛の旨がそれである。随つて單に此の十界成佛の意を表したものとすれば、觀智儀軌の法華曼荼羅も亦此の意に外ならぬのである。而して此の十界成佛の原理に依れば、横に空間的には妥當であるが、これのみでは豎の時間的の妥當性が殘されるのである。換言すれば迹門開顯に依れば横に十界の統一は出来るが、豎に佛界の統一が不可能である。即ち本門の開顯に俟たなければ、豎に時間的妥當性を缺き随つて佛界不統一に歸するのである。故に開目鈔には、

迹門方便品は一念三千二乗作佛を説て、爾前二種の失の一を脱れたり、しかれどもいまだ發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず、二乗作佛も定まらず、乃至かうてかへり見れば華嚴經の台上十方、阿含經の小釋迦、方等般若の金光明經の阿彌陀經の大日經等の權佛等は、此壽量品の佛の天月しばらく、影を大小の器にして浮べ給ふ

を、諸宗學者等近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の壽量品をしらず、乃至十門十四品も涌出壽量の二品を除ては皆始成を存せり、法華經前後の諸大經に一字一句なく、法身の無始無終はとけども應身報身の顯本はとかれず、乃至此過去常顯るゝ時諸佛皆釋尊の分身なり。(五七)

と説破せる如く、諸經に見ゆる無量の諸佛を悉く釋迦一佛の分身散体なりと開顯せられたのが本門の開顯である。故に本尊鈔には

爾前述門圓教尙非佛因、何況大日經等諸小乘經、何況花嚴真言等七宗等論師人師宗(二九)

と貶し、取要鈔には大日彌陀藥師等の諸佛を釋尊の所從なる分身なりと開顯し、本尊鈔に所謂「十界久遠之上國土世間既顯(一四)」、「十方諸佛處大地上表迹佛迹土、但限八品」の儀式と開顯せるが本門の本尊たる大曼荼羅である、之を圖顯したのが佐後始顯の曼荼羅である。

併し乍ら經文の説相に依れば、釋迦佛の塵點實成であり、我說然燈佛等と説ける如く釋尊の本生譚の開顯に外ならないのである。故に宗祖は佛説の根本精神に突入して灌頂鈔には「且立塵點」と斷じ、開目鈔には「文底秘法(一五)」と説破せられた所以である。故に我が大曼荼羅は經文の本旨たる二門開顯に立脚し、その微意を洞察して經文に顯說せざる兩界の大日を「寶塔品多寶如來左右脇士(一六)」として掲げ(建治元年十一月身延本尊鑑第十一圖)眞言の法曼荼羅の悉曇種子を以て不動變染の二明王を出し、その他本門開顯の意に依て龍樹、天親、南岳、天台、妙樂、傳教等の三國四依の諸聖を列ね、天照八幡等の日本國內大日神祇を列ねたのであるが、これ全く壽量文底の深義に依るものである。此の本門開顯の意を依る故に、本門の本尊を以て佛界緣起の大曼荼羅と稱する所以である。

斯の如く兩部の大日並に二明王等は、正しく密教を會したものであり、又三國四依、日本國大小の神祇の代表たる

天照八幡を攝して、顯密超過の大曼荼羅を創造した故に二時未弘、三國未有と稱するのである。而して第二重の九界諸尊と、兩側の四天王二明王の中間に、第三重として三國四依と天照八幡を加へたのは、これ又本門開顯の意に依るものであるが、兩側の四天王二明王は第三重よりも、第二重に攝すべきであらうが、之は若し眞言曼荼羅に對すれば、外金剛部として三重以外に見べきである。今は兩側ではあるが四方四維より諸尊を擁護する意であらう。何れにもせよ本門開顯の經意に立脚して創造したのが我が大曼荼羅である。故に朗門の口傳日經記には

此大曼荼羅十界ソロヘテ勸請問、大字ヲソロヘト讀大字置也。其故彼宗依經大日經二云不共一切聲聞亦非世尊、普爲一切衆生^一、彼眞言^二小曼荼羅定^三十界皆定義缺故也。サテ今此實大乘妙〇經曼荼羅ヲ、大曼荼羅ト定ムルハ十界皆成義、ソロウ處ノ即身成佛大曼荼羅故也。(二五)

と述べ、常門の本尊相傳日實記には

大者眞言小曼荼羅相對義也、雖^レ然再往不^レ可有^二相對^一也。大曼荼羅、無差別大也(二七)
と釋し、綱要一には

破^二彼三密^一立^二此三秘^一、廢^二彼兩部小曼荼羅^一、顯^二此十界大曼荼羅^一、壞^二彼本尊觀^一成^二今觀心本尊^一(一四)
といふも全く同一徹である。併し乍ら前述の如く十界勸請は横の大であつて、豎の大を缺く故に本門開顯に依て諸佛を統一して、豎の大を加へて始めて横豎無盡輪圓具足の大曼荼羅と稱し得るのである。曼荼羅の讚文に「佛滅後二千二百二十余年之間、一閻浮提之内未曾有之大曼荼羅也。」の意は全く顯密開顯、即ち本門開顯の實義に依らねばならぬ。

六、儀相と五期の分類

上來曼茶羅の由來、始顯の意義並に三國未有の所以、即ち法華曼茶羅の思想的研究と、純正宗學の意義に就て述べたから、以下正しく今の目的たる形相研究の對象を定め、これを綜合して始顯以來の形相上の變遷に就て統計的に研究を試みんとするものである。斯かる研究の對象としては、少なくとも現存する御眞蹟全部が根本對象あり、次には確實なる御形木、並に先師の寫傳等も重要たる研究資料である。而して右の中第一に相等するものは、大正元年稻田海素師が須原屋で發行した「御本尊寫眞鑑」卷之一、これには妙顯寺の宗祖の御肖像（狩野永納）並に玉澤の繪曼茶羅（土佐大藏筆）を加へて三十一枚、即ち曼茶羅三十葉、此の中文永八年より弘安五年までの御眞蹟十六葉（中一葉日等摸寫）を第一資料とし、此の外全國諸山に珍藏する御眞蹟二十二葉、これ稻田海素師、竹下眞孝君等好意に依て知り得たるもの、又は自ら諸山に就て拜寫したもの等である。次に自山藏弘安御形木三葉、身延文庫藏弘安御形木板木一枚の計御形木四葉、次には身延文庫藏、朝・乾・遠・奠・亨の靈寶目錄に傳ふる、遠沾亨師の身延所傳の御眞蹟摸寫二十八葉、明治三十九年玉澤の境雲遙師珍藏せるを「本尊鑑」として日宗新報社で發行し、正本は現に身延文庫に珍藏せられて居る。

若し身延の「本尊鑑」は摸寫するに當つて、寸法材料までが判然と記せられ、且つ朝・乾・遠・奠・亨の靈寶目錄と對照して、多少配列の相違はあるが、全く一致する所である。今内容の確實を證するために「本尊鑑」と對照圖表すれば

番號	授與年月日	授與者	材 料 樣 式	朝	乾	遠	奠	亨	寫
一	弘安 四 十一月		十二帛半、題目梵字御判御筆他四條氏？	〃	〃	〃	〃	〃	二三
二	建治 元 十一月		十一帛半、兩部大日	〃	〃	〃	〃	〃	八
三	文永一〇 七月八日	(始顯)	絹也(長五尺八寸二分巾二尺六寸一分)	〃	〃	〃	〃	〃	一
四	弘安 三 十月	俗日用	四帛余	〃	〃	〃	〃	〃	二一
五	弘安		文字闕損	〃	〃	七	六	八	一
六	文永？		泥筆青蓮華、四枚	〃	〃	八	七	七	二四
七	弘安 四 四月五日	日 傳		〃	〃	一二	八	九	二二
八	同 二 七月	日 春	三 帛	〃	〃	六	〇	〇	一八
九	建治 二 九月		以要言之等長三尺六寸、尺二尺	〃	〃	五	五	五	一五
一〇	弘安 三 五月十八日	日 命		〃	〃	一三	九	六	二〇
一一	建治 元 十一月		無四天王	〃	〃	一四	二	二	九
一二	文永一 一 十二月			〃	〃	九	〇	一	六
一三	建治 二 七月			〃	〃	一〇	一五	一四	一二
一四	弘安 三 二月	福童 滿男		〃	〃	一	一六	一五	一九
一五	文永一 一 十一月		同日三幅、有他筆授與書	〃	〃	〃	一七	二二	四

一六	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>
一七	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>
一八	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>
一九	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>
二〇	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>
二一	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>
二二	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>
二三	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>
二四	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>
二五	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>
二六	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>
二七	同	同	建治元 <small>十二月</small>	文永?	建治二 <small>八月十二日</small>	弘安二 <small>二月</small>	建治御形木	弘安御形木	弘安二 <small>四月</small>	同 <small>三九月八日</small>	鏡御影	建治二 <small>八月廿五日</small>

右の中御眞蹟も現存する保田(五)、中山(七)、村松(六)の三幅の外、阿佛房の三幅(二〇、二五、二七)を除いた二十二葉は、明治八年悉く烏有に歸したのである。併し乍ら亨師の摸寫に依て今日之を知ることが出来るのは、恰かも御眞蹟に於ける乾師の靈寶目錄と共に、今日に於ては御眞蹟に代るべき重要資料である。尙ほ注意すべきは(二〇)鏡御影であるがこれは遠師目錄以後之を載せぬし、今日も維然不明であるが、その寫眞の傳へらるに依れば、朝師の靈寶目錄の記録

(山史^六)があつて、本書がないと同様の不思議なことである。散逸したとしても何處に珍藏されて居るのかも知れぬ。要するに上掲の御眞蹟三十八葉、御形木四葉、摸寫十八葉(身延「本尊鑑」十七葉、「御本尊寫眞鑑」の一葉)計六十葉を對象として、一往今の研究を進めることにしたのである。以上六十葉の明細表は最も重要な根本資料である故に、附圖として別に掲げることとし、之に依て得たる勸請諸尊の位置並に名號等の時代的變遷大綱を圖示する。これに先つて注意すべきことは、諸尊中二佛と本化の四大士は悉く單名であるが、その他は九界の無量尊の代表なる意を明にすべく、善德佛等、文殊普賢等、舍利弗等天照八幡等と等字を附して、その意を明にして居るが、これも弘安の晩年には概ね單名となり、又弘安以後は往々迹化二乘並に四天王を省略して居る。又名號に就ては帝釋天は概ね釋提桓因を以て示し、希に帝釋の外千眼天、又は因陀羅天の異名を以て記し、第六天を摩醯修羅(建治元年七月)と記し、建治二年卯月には藥師の脇士十二神王を列ね、同元年十一月(身延第八)修禪(義眞)、寂光(圓修)の兩大師を配した如きは極めて希の例である。若し四天王に就ては上の兩大師を掲げたのには、具さに梵名を示して居るが、就中毘沙門は通して梵名、他の三天は梵漢兼用であるが、これには年代に依て一定の變化がある様である(後説)。今曼茶羅諸尊の時代的變遷を示すに當つて、大体三重(佛部、蓮華部、金剛部)と兩側(外金剛部)の四段に分ち、前述の第二重の流漏ともすべき、鬼母刹女は且く曼茶羅配列の位置に準じて、第三重の部に列するものとするのである。

上掲の六十葉は年代に依て之を大別すれば、次の如く五期に分けることが便利である。

(一) 文 永 時 代

四—文 永 期

(二) 建 治 元 年

五—建 治 初 期

(三) 同 二 年

七—同 後 期

三六九
同
後期

一二三
弘安初期

三六九
同
後期

一二三
弘安初期

諸部	樣式	讚文	花押	右(外)	側(剛金)
諸尊				廣目	不動
文永	總歸命	二十余年	鑲字	○	
建治	四聖歸命	同	同	○ ○ ○	
弘安	同	同	同	毘樓勒叉	○ 提頭賴吒
	同	三十余年	唵勃字嚕	○ ○	持國
	同	同	同	廣目	○ ○

<p>重 二 第</p> <p>(部 華 蓮)</p>	<p>重 三 第</p> <p>(部 剛 金)</p>
<p>文 彌 藥 舍 梵 第 大 輪 阿 提</p> <p>殊 勒 王 弗 天 六 日 王 修 婆</p>	<p>鬼 天 龍 天 天</p> <p>母 親 樹 台 照</p>
<p>○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>	
<p>○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p> <p>└</p>	<p>○ ○ ○ ○</p>
<p>○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>	<p>○ ○ ○ ○</p>
<p>○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</p>	<p>○ ○ ○ ○</p>

第 連)	重 一 第 (部 佛)	中 尊	重 一 第 (部 佛)
彌 藥 普 勒 王 賢	安 淨 金 十 釋 立 行 界 方 迦 行 行 大 分 迦 日 身	首 題	多 善 胎 上 無 寶 德 藏 行 邊 大 日 行 行
	○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○
○ ○	○ ○ ○ ○ └	○	○ ○ ○ ○ └
○ ○ └	○ ○ ○ ○ └	○	○ ○ ○ ○ └
○ ○	○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○
○ ○	○ ○ ○ ○	○	○ ○ ○ ○

側 左 (剛 金 外)	重 三 第 (部 剛 金)	重 二 (部 華)
增 愛 毘 長 染 沙 門	八 傳 妙 章 十 幡 教 樂 安 羅 刹	龍 阿 明 大 釋 迦 王 闍 星 月 提 葉
○ ○ ○		
○ ○ ○		○ ○ ○ ○
毘 樓 博 叉 ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
增 ○ ○ ○ 長	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

以上は五期に於ける諸尊の整備状態を曼荼羅の配列に順じて示したのであるが、若しこれを総合的に諸部に就て見るならば、大体左の如くなるのである。勿論様式、讃文、花押はその儘として

佛部	蓮華部	金剛部	兩側	諸部
成立	成立	成立	成立	文永
成立	成立	成立	成立	初期
成立	成立	成立	成立	後期
成立	成立	成立	成立	初期
成立	成立	成立	成立	後期

右の如く佛部に於ては文永建治には二佛四大士外に善徳分身を配したが、弘安以後は二尊四大士のみとなり、蓮華部に於ては建治時代は文殊彌勒（右）普賢藥王（左）とせるを、弘安以後には文殊藥王（右）普賢彌勒（左）と二尊を喚置されて居る。金剛部は鬼母刹女、天台傳教、天照八幡が建治の後期に成立して居る。兩側の四天王二明王は文永以來何等増減は無いが、名號に於ては弘安初期までは梵漢混淆し、弘安後期に於て東西南は漢、北方のみ梵名で名號が確定したのである。而して佛部蓮華部の弘安初期の完成と平行するは讃文と花押とである。これを古來再治未再治本意顯未顯、隨自隨化等の名を以て判じて居るのはそれがためである。更に注意すべきことは文永時代は總歸命であるが、建治以後は四聖歸命なることである。これ等に就ては項を改めて詳説する所である。

第七、遺文、曼荼羅に於ける諸尊と讃文

曼荼羅に於ける中尊は悉く首題であるが、遺文の所明に於ては或は法華經或は五字等と一定しないことは前述の如くである。其他の点に就て曼荼羅に於ける佛部は、前述の如く弘安以後には全く善徳並に十方分身を除いて居るが、若し遺文の所明に見れば弘安以後に至つても等しく、これ等を列して居るのである。勿論遺文に於ける東方善徳佛としては弘安二年の日眼女鈔(三八)に唯一ヶ所見ゆるのみである。然るに十方分身諸佛に至つては弘安以前(三四〇、四一三、六八一以上佐題、八六五、九二五、九五八始願以題、一〇七、一〇三八、一三六、九、一五〇、九、一六二六)に見ゆるは勿論であるが、弘安以後(一七二、九、一七九、四、一八六、一、一八三〇)に至るもこれを列して居るのである。

若し蓮華部の諸尊は概ね九界の諸尊攝取したのであるが、その筆頭たる迹化の菩薩は曼荼羅(弘安以後は往々略されて居るが)に於ては前述の如く

建 治 文殊、彌勒(右) 普賢、藥王(左)

弘 安 文殊、藥王(右) 普賢、彌勒(左)

と建治弘安に於て彌勒と藥王の位置を轉換するのみで一定して居るのであるが、遺文に於ては佐前後通じて、普賢 文殊(一五七八、九六六、一三六九、一六二六)、文殊 彌勒(九四〇、一三八〇)と兩様に表示して、曼荼羅の配列とは全く合致しないばかりでなく、且つ兩表示は雜然と用ゐられて居るのである。又聲聞衆に於ては曼荼羅には、通じて四大聲聞中舍利弗(右) 迦葉(左)の二人者を以て、之を代表させて居るのであるが、遺文に於ても矢張二人以上は列ねて居らぬが、舍利弗、目連(五七八、六二五)等と列して、迦葉に代ゆるに目連を以てして居るが、未だ目連を列した曼荼羅はこれを見ぬ様である。

若し諸天以下に至つては、建治弘安に亘つて次第に整頓せられ、梵、釋、第六天日月明星を連ね、人界以下は輪王阿闍世王、阿修羅王、龍王、提婆等を連ねて居るが、天部以下は遺文には相當詳略に述べて居るのである。就中聖愚問答鈔には

大梵天王、釋提桓因、日月明星、北斗七星、二十八宿、無量諸星、天衆地類、龍神八部、人天大會、閻魔法王、上非想雲上、下那落炎底、所有一切衆生。^{八五七}
と示し、諸法實相鈔には、

天神七代、地神五代の神々、鬼子母神、十羅刹女、四大天王、梵天帝釋、閻魔法王、水神、風神、山神、海神、大日如來、普賢、文殊、日月等の諸尊。^{一九六}

と明し、上野鈔には、「大梵天王、日月等の明王、諸天も八部王も、十羅刹女等も、日本國中の大小の諸神も。^{一九三}と列し、日女鈔には佛部、蓮華部、二明王、四天、鬼母、刹女等を挙げ終つて「加之日本國の守護神たる天照大神、八幡大菩薩、天神七代、地神五代の神々、總じて大小神祇等の体の神つらなる其余の用の神豈もるべきや。」^{一九六}等と記して居るに見れば、諸天以下は累品の誓約に法つて、悉く行者守護の意を以て列したのである。而して蓮華部は梵釋日月、金剛部は鬼母、刹女、天照八幡を以てその代表としたのである。諸天以下の遺文の所明は、曼荼羅以上諸尊を列ねて居るが、これ行者擁護の意に外ならないのである。斯の如く曼荼羅と遺文との所明は、一定して居らぬのであるが、曼荼羅は信仰の對象なる故に表現形式を一定すべきであるが、遺文はその内容的説明を中心とする故か、自ら所表に左右のあるのである。

次に注意すべきは佛滅年代を以て標示した曼荼羅の讚文である。此の讚文には佛滅後二千二百二十余年と三十余年

二百余年の三様あるが、二百余年とある如きは所在不明の建治二年十月曼荼羅に見ゆるのみで、大半は二十余年と三十余年の二種である。此の佛滅年代が遺文にも隨所に散見するのであるが、遺文に於けるものゝ大半は題目の讃文として用ゐられて居るのである。要するに宗祖の用ゐられた佛滅年代は、佛陀の出世を明かにするために佛滅年代を明示したのでなく、勿論間接にはその意味もあるが、宗祖が末法の導師として正像二千年後に出生した、如來使たる事實を判明せんがために用ゐたものであつて、隨つてその所弘の法たる三秘の讃文として之を用ゐるに至つたのである。而して曼荼羅に於ける讃文は大体文永建治年代は二十余年、弘安年代は三十余年であるが、前代に三十余年、(四)後代に二十余年(元、三、三、元、聖、聖、聖、四)をした例も少なくないのである。

若し遺文に於ける佛滅年代に就ては、往年崎報四八に詳説したのであるが、遺文中最も正鵠の數字を示したのは、

- (一) 一千二百一十二年 (文永十年) 波木井鈔 三九八
 - (二) 一千二百一十五年 (建治二年) 報恩鈔 一九五
 - (三) 一千二百一十七年 (弘安元年) 妙法尼鈔 七七
 - (四) 一千二百七十一 (同 五年) 波木井書 〇二七
- 右の四文である。その外大數を擧げて題目の讃辭としたものは、凡そ次の四類である。
- (一) 一千二百余年 (四七八、五一九、七〇二、八〇七、八九九)
 - (二) 一千二百一十余年 教持時國鈔 六四二
 - (三) 一千二百二十余年 (九二九、九五七、九七三、九七九、一七〇、一一七〇、一三一二、一三八九、一三八六)
 - (四) 一千二百三十余年 (一一二五、一六七七、一七五四、一七九一)

併し乍ら右の中三(聖人御難事^{三三}は三十に、(四)の撰時鈔^{三三}、初心成佛鈔^{三三}等は二十に作るべきである。これ等は曼荼羅に於けると同じく例外であるが、斯の如く二十三十は數字の相違はともあれ、末法所弘の題目又は本尊即ち三秘の法体の希有なることを表する、正像三國未弘未曾有の妙法たる讃辭に外ならぬのである。

されば古來曼荼羅の讃文に就て、身延相承の日朝の口傳には

一、佛滅後二千二百二十余年等トアソバシタルハ、建治文永等ノ御本尊爾カアソバシタル也。是ハ末再治ノ御本尊ナル故也。サテ二千二百三十余年等トアソバシタルハ、弘安御涅槃ノ時分ニ爾カアソバシタルナリ。故ニ身延今家ノカタギノ本尊ニハ二千二百三十余年等トアソバシタル也。是ハ再治定ノ御本尊ナル故也。仍テ弘安中ノ本尊ニハ善徳分身等ヲアソバサル也。(資料一^三)

と述べ、同師の口傳に

文永建治ノ年ニハ號ニ二十余年等^一云々、此等年號ノ比ハ未^レ如^ニ本意書顯ハシ玉ハザル歟。弘安年號ニ三十余年等云々、其比ハ如^ニ御本意整束シテ書顯玉フト見ヘタリ。サレバ三十余年ト云ヘル御本尊可^レ奉^レ寫^レ之者歟。(同一^{三三})と口傳し、又常門の日源の口傳には

此事ハ佐渡以前ハ隨他意邊有^レ之、三澤鈔云佐渡以前佛爾前經思スベシ等云々、次三大秘法ノ中題目始終無^レ別、就^ニ御本尊^一前後沙汰有^レ之、仍建治年中マデハ尙此隨他意邊有^レ之、東方善徳佛等十方分身等云々は也。弘安年中御本尊隨意習也、仍三十余年ト云ヘルハ隨意邊也。(同一^{三三})

と口傳し、又和語式は三十余年を以て自行性徳、本意正顯(二^{三三}、四^{三三})となし。啓蒙は自行所證、本意顯畢(二^{一七七})と判じ、鵜村日正師は二十三十を以て隨自他、在滅、廣布斷絶、弘通の始終(本尊論^三)と釋してあるが、要するに

本意顯未顯、隨自隨他、再治未再法の意を出でないのであるが、此の相違は佛部に於ける善德十方分身の有無を條件として、二十三十の相違と結び付けての判別である。併し乍ら若しその條件としては、更に花押の上に於ける弘安前後の鑲字と勃嚙庵字の相違のあることも、勿論遺文と平行して居るが矢張考慮すべき事實である。之に就て後に詳説するのであるが是等の善德十方、二十三十、花押の相違はこれ曼茶羅形相上に於ける重要な異点といはねばならぬ。

第八、前後二期と綜合三期

上述の弘安前後に於ける三つの異点は、古來先師の指摘せる如く、曼茶羅の上に於て再治未再治、本意顯未顯、隨自隨他の語を以て判するのが妥當であらうが、勿論聖人の化道の上に於ては、陰顯進退の變化のあつたことは認めねばならぬが、當身の大事たる本尊鈔を儀軌として、開顯せられた三秘隨一の曼茶羅に就ては、形相上諸尊の具略はあつたにしても、之を以て直ちに法躰上の判語たる、本意顯未顯の語を以て判することが出来やうか、これ三澤鈔の文意に照しても、此の語は勿論隨自隨他の語を以て判することは出来ないものである。併し乍ら形相の上には明かに、建治弘安の間に於て少なくとも、上掲の三点だけは認めぬ譯には行かない。併し乍ら形相上の變化を示す語としては、再治未再治は上掲三義の中では最も近い語かも知れぬが三秘の隨一の曼茶羅としては始顯以後絶對に價值の高下を以て評價すべきではない。

併し乍ら右の三義が善德十方分身の有無を以て相違の條件とした点に就て再哈味する必要がある。今翻つて儀軌の法華曼茶羅と今の大曼茶羅との中心をなす佛部諸尊に就てこれを見るに、儀軌の曼茶羅は寶塔品の二佛並座儀相を中

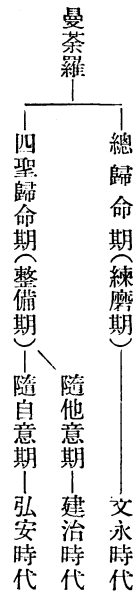
台に配し、彌勒、文殊、藥王、妙音、常精進、無盡意、觀音、普賢の迹化の八菩薩を八葉に配した、八葉十尊を佛部とする迹門の曼荼羅である。今此の八葉十尊の形相を且らく小林董師が大曼荼羅私考^三にいへる如く本門中心の我が大曼荼羅に求むれば、建治元年十一月（身延本尊鑑第八圖）二佛善德分身の外に兩部大日を攝し、更に本化の四大士を以て佛部としたものがそれである。即ち本門開顯の意に依て二佛四大士の外善德十分、兩部大日も攝した顯密開顯佛界統一の儀相が、首題の中尊に二佛の境智冥合を以て中台とし、善德以下を八葉に分對せしむれば、思想的に法華曼荼羅の傳統が判然するのである。然るにその他の文永建治は此の開顯を廣く顯密に亘らずして、法華三部の上に限り法華中心とした故に、兩部の大日を除き且つ二佛をも、壽量本佛より一段下して迹門の二佛として、本佛を中台に案じ、二佛、善德、十方、四大士を八葉に分對したものとすれば、矢張善德十方を加へた建治式には、思想的傳統の形式が認められるのである。故に佛部の諸尊を本尊鈔の但限八品に還元し、全く法華本門中心の儀相に要的すれば、二佛四大士のみを佛部とすべきである。此の傳統的八葉九尊式を純本門式に還元したのが、弘安以後の大曼荼羅とすれば前掲の本意顯未顯、隨自隨他、再治未再治の義も自ら當然の意と解することが出来る。故に右の語は始顯以後本門曼荼羅總意の上には不適當の語であるが、思想的傳統打破の意が若しありとすれば、再往吟味する必要があるのである。故に曼荼羅の諸尊具略に思想的傳統の意味を偶した時藝術的には優劣を判することは出来るが、宗教的には全く認めぬのである。これ常門の日源が

弘前已前取合二千二百二十余年也、但弘安已後三十余年御書也云々、別御義無^レ之（資料二^{九七}）と判ぜるは妥當の證言であらう。

如上の意味即ち傳統的形式を認める時、讃文の二十三十の相違並に花押の變化にも、自ら何等の意味を認めねばな

らぬ。若し是等の變化がこれを意味するとすれば、上述の曼荼羅形相に於ける五期は、更に之を大別するならば、先師の分てる如く弘安の前後を以て二分すべきである。善徳十方を除去し、彌勒樂王を轉置したのも同意と解すべきである。故に五期は前三期即ち文永建治と後二期即ち弘安を合して、種々の点から二分すべき意義が存するのである。右分類に依るも弘安二期の相違は四天王の名號の相違位で、諸尊の上には殆んど變化がないのであるが、前の三期に就てこれを見るならば、建治年間は大體蓮華部、金剛部の整備時代で、粗ぼ諸尊も一致してゐるのであるが、之に對すれば文永時代は諸尊は何れも未確定で、隨つて文永建治を比較するならば、再治未再治の語は最も應はしい觀がある。斯の如き諸尊の具不の外、更に様式上文永建治に於て著しい相違を認めねばならぬ。勿論文永は始顯時代である故に、その形相の雜然なることは當然である。又弘安後に比しその數に於ては少ない故に、強ち判定すべきではないかも知れぬが、文永時代の曼荼羅は藻原の曼荼羅（迹化に南無を略し、天部には無量世界を冠して、その他のものと大に異なる）を除いては、佐渡始顯は勿論、同年の保田妙本寺の萬年救護の本尊、身延の同日三幅、十二年の堺妙國寺、並に阿佛房の曼荼も諸尊に悉く南無を冠らした、所謂總歸命式なることである。古來總歸命といへば佐渡始顯に限り始顯の別稱の如く思はれたのであるが、これは同時の曼荼羅の少ないのと、往年は容易に他の同時代のものを見ることが出来なかつたからである。故に少なくとも今の文永時代の諸曼荼は、總歸命といはなければならぬ。これに對すれば建治以後のものは、三國の四依は南無を冠らして居るが、天部以下には之を略して居る。故に古來これを四聖歸命式と呼んで居るが、文永時代と建治以後とはその様式に於て總歸命と四聖歸命との相違を認めねばならぬ。隨つて此の相違は弘安後相違に比敵すべき重大の相違といふべきである。此に於てか曼荼羅形相の變化に就て、總歸命と四聖歸命とに依て先づ文永時代と建治弘安時代と二期に分たねばならぬ。而して文永時代は始顯後未だ日淺い故に練磨

時代に屬し、建治以後は之に對すれば正しく整備時代と稱すべきである。更に整備時代の四聖歸命式の中に、文永建治を一貫する善徳十分と法華三部立脚の隨他意期と、純本門立脚の弘安以後の隨自意期とを分つべきである。即ち



右の如く、曼荼羅の形相の上に先づ文永と以後との二期を大別し、更に形相整備の純雜に依て建治弘安の二期を分つが當然であつて、更に細分すれば五期となるのである。

斯く分類することが果して正統とすれば、此に一の問題がある即ち古來佐渡始顯を以て身延相傳の總歸命式となす説と、又某氏所藏（董師「大曼所羅私考」第一圖）の四聖歸命式となす説である。我等は從來の諸論に順すれば身延相傳の總歸命式を取るものであるが、古來の一説には他の四聖歸式をも認めて、兩式を表裏の本尊となし、化導記等の傳説は總歸命式であるが、教行の票式としての本尊が四聖歸命式で、建治弘安に具略はあるが、これは始顯の四聖歸命式の寫である。（「日蓮主義大觀」^{一・二・五}、「日蓮聖之研究」^{二・四}）といふが、若し吾等の結論が誤でないとすれば、これは多を以て少を律した皮相の論斷と見ねばならぬ。佐渡始顯の本尊が明治八年まで、身延に珍藏せられ又朝師以來これを認めたことは前掲の靈寶目錄に明かであり、就中亨師の摸寫には

五十二歳佐渡、此本尊宗祖發軔之大曼荼羅也。絹地巾二尺六寸一分、長五尺八寸二分、外口讚有之。裏書慶長十四巳酉仲夏日遠。

とあるに就ても明かである。然るに他の四聖歸命式のものに就ては、董師は

近來或者は佐渡始顯の本尊を以て正宗とし、神田某氏所藏のものを以て眞筆と稱し、是を以て本尊圖式の一定模範となさんとす云、然るに該本尊は其の眞傳は且らく措くも、諸尊の配坐佛部に於て、諸佛と四菩薩の位置余の本尊と異なる（右は三世諸佛、左は分身諸佛にて、本化兩大士の間に配せり）即佛部菩薩部交錯せり、是は台密胎藏界の八葉九尊の位置に準じ玉へる歟、又佐渡始顯の本尊なるものは、古來惣歸命の本尊と稱し、佐渡一の谷にありしを後身延山に納む、同山回祿の災にかゝり今は無し、其寫しと稱する遠沾亨師の筆、現今玉澤に在り、就て之を某氏所藏のものと對照するに甚だ相違の点あり。（宗乘講義錄）

等と詳説せるに徴しても明かである。田邊師の「日蓮聖人の本尊論」一三五參照。

更に上掲前後兩期の形相に照らして、研究すべき一曼荼羅がある。これは弘安四年五月十五日衛護大日本國とある本尊である。これに對しては某教團では絶對的眞蹟とし、當時學者間に相等論難往復があつたのであるが、該本尊はその勸請式を見れば、大体建治式であつて佛部に善德十方を配し、且つ本化の四菩薩を「大菩薩」に造つて居るが、大菩薩と書したのは他に一つもないのみが又蓮華部の菩薩部に勇勢、妙音（右）、觀音（左）を配し、諸天部に明星天子以下に七曜九曜二十八宿（右）、破軍七星等を配し、更に「閻羅十王等」「大摩利支天王」（右）「大去斯天神」「十二神王」（左）、又天照八幡の中央に「聖天子金輪聖王」を勸請して居るが、「十二神王」は建治年間（一〇、二）には見えるが、その他は殆んど他に見えない所である。就中建治式善德十方を安ずる形相に弘安四年とし、又蓮華部以下の他に見ぬ諸尊を配すること、更に所有經文の讚文を掲ぐる等、その形相に於て又内容に於て、丁度遺文中に於ける三大秘法鈔と比敵すべきものであらう。

以上を大曼荼羅の形相上の總論となし、以下各部の諸尊に就て研究を進めんとするものである。

後篇 各論

一、佛部の諸尊

前編に於て曼荼羅の形相の變遷を大觀した故に、以下後編の各論に於て各部の諸尊に就て詳説し、古來の口傳等の意味をも多少吟味して見たい。先づ佛部に就てこれを述ぶるならば、その典據は我曼荼羅の儀軌たる本尊鈔に置くべきはいふ迄もない。同鈔には

其本尊爲_レ法身、本師娑婆上寶塔居_レ空、塔中妙_〇經左右釋迦佛身寶佛、釋尊脇士上行等四菩薩(九四)

とあつて、佛部の諸尊は正しく弘安以後の所謂再治のものに一致するのである。然るに佛部に就て見れば、前述の如く他に更に二種の様式がある、即ち法華曼荼羅の中心をなす、寶塔品の二佛並座の儀相の兩側、本化の四菩薩の間に(一)東方善德佛、十方分身諸佛を安ずるもの(弘安以前)(二)更にその西側に兩部大日を安ずるものである。これに就ては法身と形相の兩様の説明が必要である。然し法身論に就ては既に述べたる如く、壽量顯本に依て「諸佛は釋尊の分身なり」の一言に盡きるのである。形相に就ては矢張壽量顯本に依り、法華三部に依り諸尊を出すならば(一)の東方善德佛は普賢經の十方佛の代表、十方分身諸佛は總體で寶塔・累品・普賢經に見ゆる所である。此の中には大日彌陀樂師等悉く攝せられて居るのである。(二)の兩部大日を更に加へたものは、これには少なくとも次の二様の意味がある。

一、密教々主開顯の意

二、兩部曼荼羅開顯の意

即ち壽量顯本に立脚し、且つ八葉九尊の配當に相當することは前述の如くであり、就中佐渡始顯と稱する四聖歸命式の

佛部は多寶、上行、善德、無邊行（右）、釋迦、淨行、分身、安立行と交互に佛菩薩を配したことは、佛部と八葉との史的關係を物語るものであるが、此の傳統を脱却した所に未曾有の義が存するのである。日朝の法華曼荼羅八葉九尊圖（一五六）が、中央に寶冠無量壽決定如來を安じ、右に多寶如來（金剛界大日）、左に釋迦如來（胎藏界大日）を配して、これを中台となし、八葉に本迹二門各四菩薩を配して、二門開顯の意を表したのも同意であるが、上述の（二）の場合は兩部大日の中台外に出して八葉に配し、（一）の場合は二佛をも中台外に出す時は八葉九尊なのであるが、斯の如き傳統を脱したのが我が大曼荼羅である。右の意は法華取要鈔に

教主釋尊既五百塵点劫已來妙覺果滿佛（中尊）（一）。大日如來、阿彌陀如來、藥師如來等、盡十方諸佛我等本師教主釋尊所從也（傍尊）（二）。華嚴經十方台上毗盧遮那、大日經金剛頂經、兩界大日如來、寶塔品多寶如來左右脇士也、此多寶佛壽量品教主釋尊所從也（傍尊）（三）
三六〇

とある（一）と（三）とが建治式兩様の佛部の意に當るものである。併し乍ら此の顯密を顯教に、顯教を法華三部に、更に三部を法華一部に、又これを本尊鈔の意に依て但限八品に還元すれば、全く弘安以後の本佛兩尊四士を以て佛部の尊とすることになるのである。若しこれを更に壽量開顯に還元すれば、境智冥合せしめて兩尊を本佛に攝すべきであるが、二尊は法華眞實の證明で、又法華曼荼羅の象徴である故に、本尊鈔に本佛兩尊四士を以て佛部の尊としたのである。

又古來の相傳に依れば佛部を以て「三身所表」（二六九）と判ずるは、自ら建治式の上の所談で善德分身に及ぶものであるが壽量顯本の意に依れば須らく三身一体の義と解すべきで、阿沙縛鈔に三身四士の義に就て「塔表法身、多寶報身、釋迦應身」と解して「文句意也」と圓明房の記に依て述べて居るが、若し宗義として多寶を報身、釋迦を應身と

解し、三身即一の法身を中尊と解するが本門の實義である。内證佛法血脈に「妙○經者久遠實成三身即一釋迦牟尼尊」^七とあるはこれである。併し乍ら且らく經文の説相に就ては寶塔品の二佛並座は必須條件である故に、經文能詮の二佛並座（迹門）と所詮の本佛（本門）と能所並舉、二門合成を以て法華曼荼羅の尊としたのである。故に造像の時は日眼女鈔、眞間釋迦佛、中山の二具十体等何れも一尊四士たる神力別付の形相に造るのであるが、中山祐師の善根記等には二尊四士の造像もあつたのである。

次に本化の四菩薩に就ては、これ涌出品に出づる本化六萬恆沙の上首なることはいふ迄もない。而して涌出品の説相に依る父少子老の善巧が、壽量顯本の導火線をなしたものである。若し四菩薩を脇士とせることは、本尊鈔に「釋尊脇士上行等四菩薩」^八といひ、報恩鈔に「釋迦多寶外の諸佛（善德、分身）並に上行等四菩薩脇士となるべし」^九とあるに依れば、前者は弘安式、後者は建治式となるのである。これに就て古來釋迦多寶をも脇士と見た説があるが善德分身は取要鈔等の意に依ても脇士の意はあるが、三身一体境智冥合の意に依れば、境智の外に本佛なく、本佛を離れて境智はない故に、建治式では善德以下、弘安式では四菩薩を以て脇士とすべきである。故に四菩薩造立鈔には「本門久成の教主釋尊、並久成の脇士地涌の上行等の四菩薩」^{一〇}と述べ、本尊鈔には「此時地涌千界出現、本門釋尊爲脇士、一閻浮提第一本尊可立此國」^{一一}と共に弘安式に就て述べた所以である。然るに藻原流の向門日海記には「天竺ノ法ニ賞翫ノ人ハ客人脇ニ居ル也。仍多寶ハ客佛ナレハ脇ニ地涌上首上行大士居給也（二四三）」

とあるが、これ寶塔品の主客を顛倒した誤であらう。併し多寶大日同一法身なることは、取要鈔に「兩界大日如來、寶塔品多寶如來左右脇士也」^{一二}と述べ、報恩鈔には「兩部の大日如來を明從等と定めたる多寶佛」^{一三}とある如く大日脇士の義はある故に、善德十方は脇士の義であるも、二佛脇士の義はないのである。これに就ては別項に詳説する所

である。

四菩薩を脇士とすることは明かであるが、然らば何故に菩薩を以て佛部に配したかといふに、四菩薩造立鈔には四大士を「久成の脇士」と述べて居るが、久近の別はあれ菩薩は菩薩である。されば古來これに就て或は「果地に約す」といひ。(資料一^{二八})、或は「釋尊の支分」。(同^{二九})、或は「佛界所具菩薩界」。(同^{三〇})、或は「佛界所攝」。(同^{三一})或は「從本垂迹」。(同^{三二})或は「佛地邊の菩薩」。(同^{三三})等と種々の説を存するのであるが、本尊鈔には地涌千界教主釋尊初發心弟子也。寂滅道場不來、双林最後不訪、不孝失有^レ之、迹門十四品不來、本門六品立座但八品之間來還^{ハタ}。

と經文の出所を明かにし、曾谷鈔^{〇四}又之に同じ。呵責謗法鈔には

四十余年並に迹門十四品の間は、一人も初發心の御弟子なし。此四菩薩こそ五百塵点劫より已來、教主の御弟子として、初發心より又他佛につかずして、二門をふまさる人々なりと見えて候。^{一六}

と迹化他方來等一切の菩薩に簡び、文既に他佛につかずといひ、本佛最初の弟子なること、經文既に「令初發道心、今皆住不退」と説くに依ても明かなる如く、菩薩なるも因位にあらずして果地の菩薩である。これ古來佛地邊の菩薩と稱する所以である。随つて又佛界の所攝であり、又釋尊の支分と稱せられて、これを佛部に列する所以である。且つ壽量顯本が本化の菩薩に依て成就せられた故に、久成の教主の所表には必ず本化を以てしねばならぬのである。これ本尊鈔に迦葉阿難を脇士とする小乗の釋尊、文殊普賢を脇士とする權大乘、涅槃經、迹門の釋尊と簡んだ^{〇九四}所以であり、又古來の富士派の口傳に四菩薩を以て、本尊所顯のあし^〇ばとする説の存する所以である。されば古來諸尊に就て三種又は四種の智識の説となす中、四菩薩を以て教授の智識(資料一^{七九}、一二六、四二)とも稱して居る。

又古來此の四菩薩の所表に就て、輔正記九には四徳の所表（資料二^{三九}、以下書名なきは資料と定む）となすを始めとして、或は四大、四方、四佛知見、四門、四諦、四教、四土（二^{六四}）等の所表となし、又中尊の首題と合して五尊五大、五色、五形、五性、五氣、五味、五音、五方、五行、五季、五藏、五轉、五戒、五常、五山、五龍、五神、五時等（同上）の所表となすのである。勿論見方に於ては種々の所表に見られるのであるが、斯くの如き類通法門は古天台以來の特殊の解釋法であつて、法門的に何等の意義のあるものではない。

二、首題と兩尊との義意

上來佛部の諸尊に就て述べたのであるが、法華曼荼羅はその中心を寶塔品の二佛並座に置き、本門の開顯に依て二佛は境智の二用を表して、二佛の境智冥合の外中尊なく、中尊の境智の外二佛はなく、迹門は境智の二佛、本門は冥合の一佛、即ち体用兼舉以ての意を示したのが我曼荼羅の中心である。而して此の体用一体の中尊に對して、四菩薩を脇士としたのが大曼荼羅である。故に若し二尊四士といへば迹門開顯を正意とするもの、一尊四士は本門開顯を正意とするものと解すべきである。開目鈔に

迹門方便品は一念三千二乗作佛を説て、爾前二種の失一つを脱れたり、いまだ發迹顯本せざれば、まことの一念三千あらはれず、二乗作佛も定らず、乃至爾前迹門の十界の因果を打やぶつて、本門の十界の因果をとき顯はす、此即ち本因本果の法門なり、九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備りて、眞の十界互具一念三千なるべし^{五七六}と述べし如く、九界所具の佛界の一念三千たる二乗作佛を證したのは迹門の二佛であり、佛界所具の九界の無始久遠の一念三千たる本因本果の成道を示したのが本門の壽量本佛である。而して此の壽量本佛を曼荼羅には常に七字を以

て表して居るが、遺文の所明は一樣でなく、又一佛と兩尊との所説が判然を缺くのである。これ本項を開いた所以である。

今先づ遺文に於ける中尊の所明に就てこれを見れば、凡そ五種の別がある。

- (一) 本尊鈔 塔中妙法蓮華經 九四〇、七四二
 - (二) 報恩鈔 本門の教主釋尊 一五〇九
 - (三) 富木鈔 壽量品佛 九七九
 - (四) 問答鈔 法華經の題目本尊 一七九四
 - (五) 妙一女鈔 法華經釋迦多寶等 一九四八
- 右五種の中(二)(三)は人即ち佛に約し、(一)(四)(五)は孰れも法に約して居るが、就中(五)法華經といふのは前述の如く、文永弘安には相當多い様である。而して法佛の所表の相違は曼荼羅中八幡を表するに八幡大菩薩といひ、八幡宮といへる如く人に約し處に約しても八幡様に變りはない様に、既に御義口傳に「無作三身の寶號を南無妙法蓮華經といふ」(下九)と釋せる如く、法華經といひ題目といふも共に壽量本佛に外ならぬのである。されば生死一大事血脈鈔には

夫生死一大事血脈者、所謂妙法蓮華經是也。其故は釋迦多寶の二佛寶塔の中にして禪ニ上行菩薩ニ給〇七四

と神力別付の法体たる一秘の題目に約して居るが、これは三秘に開すれば(一)本尊鈔と同意に解すべきである。若し顯佛未來記には「以ニ本門本尊、妙法蓮華經五字ニ令レ廣ニ宣流布於ニ闍浮提敷ニ」五七七と三秘の二法に約して、本門の題目を五字を以て表する時には本門の本尊と題目に簡んで居るが、由來今の文は法本尊論者は本門本尊即妙法五字と解して、唯一の典據とするのであるが、曼荼羅の中尊は常に首題である故に曼荼羅の説明とすれば何れと解するも敢て

支障は無いのである。然るに若し三秘の二法としても、同年七月の富木殿御返事の如く

佛滅後二千二百二十余年于^レ今壽量品佛與^ニ肝要五字^ニ不^ニ流布^一。

九九七

と與の一字を加ふる時は、本尊は佛、題目は法と判然するのであるが、先の文とて次下の文に「彼廿四字與^ニ此五字^一、其語雖^レ殊其意同^レ之」とあるに徴すれば報恩鈔の如く本門の本尊とは教主釋尊を意味し、矢張三秘の二法中題目に簡んだと解すべきで(三)富木鈔の「壽量品佛」と同意である。随つて單に本尊を明す時には法に約して五字を以てすることもあるが、若し三秘に約する時は「本門の本尊」「壽量品佛」「本門教主釋尊」等と佛に約するのが通例である。

更に進んで曼荼羅の中尊と傍尊の二佛に就ては、中央の首題は題目を實號とする本門開顯の壽量本佛であり、これに對すれば傍尊の迹門寶塔品の二佛は迹佛でなければならぬ。然るに遺文中此の所明甚だ明瞭を缺くのである。先づ遺文に於ける所明に就て見れば

(一) 本尊鈔 左右釋迦佛多寶佛 九四〇

(二) 報恩鈔 所謂寶塔の内の釋迦多寶 一五〇九

(三) 四條鈔 靈山の教主釋迦、寶淨世界の多寶如來 一九八六

右の如く且く三様の別があつて(一)は本佛の左右と位置を示し、(二)は迹門開顯に約し、(三)は正しく此土の教主に約して述べて居る。随つて中尊は寂光の本佛、傍尊は此土の教主と解すべきである。されば本尊問答鈔に迹門の二佛並座を中尊とせる、不空の觀智儀軌の本尊を評して

不空三藏の法華儀軌は寶塔品の文によれり、此は法華經の教主を本尊とす、法華經の正意にあらず。^{九一七}
と述べて(三)の靈山教主と同意を以て述べられて居るに依て明かである。若し實相鈔には

本門壽量品の古佛たる釋迦佛、迹門寶塔品の時涌出し給ふ多寶佛、涌出品の時出現し給ふ地涌の菩薩等を、先づ作り顯はし奉る事、予が分齊にはいみじき事也。^{七六}

と述べし如きは、靈山の教主たる應身を寂光の本佛に攝して、本門の釋迦迹門の多寶とを出して、二門開顯の意を表し、本化の四大士を脇士として擧げられたのである。又報恩鈔には

月氏には教主釋尊寶塔品にして、一切の佛をあつめさせ給ひて大地の上に居せしめ、大日如來計寶塔の中の南の下座にすへ奉りて、教主釋尊は北の上座につかせ給。此の大日如來は大日經の胎藏界の大日、金剛頂經の金剛界の大日の主君なり。兩部の大日如來を郎從等と定めたる多寶如來の上座に、教主釋尊居させ給。^{七八}

とあるが、此にいふ教主釋尊とは本門の教主釋尊の意で、正しく同鈔に「教主釋尊を本尊とすべし」とある中尊の意で、隨つて今の塔中の教主釋尊とは、これ境智冥合應即法身の中尊本佛の意と解すべきである。取要鈔に大日彌陀樂師等の本師を釋尊と述べ兩部大日等を多寶の脇士となし、又多寶佛を本師の所從とせるは全く同一釋相である。故に同じく釋迦佛といふも或は本門又は壽量と限定せられ、或は法華經、或は題目を以て表したるは孰れも壽量開顯の本佛であつて、迹門寶塔品に於ける二佛並座の靈山の教主とは自ら別である。故に呵責謗法鈔には

二千二百余年が間教主釋尊の繪像本像を賢王聖主は本尊とす。(二佛の一)然れども但小乘、大乘、華嚴、涅槃、觀經、法華經の迹門、普賢經等の佛、眞言大日經等の佛、寶塔品の釋迦多寶等をば書ども、いまだ壽量品の釋尊は山寺精舍にまします。^{二六〇}

と述べたのはそれである。故に此の本佛を内證佛法血脈には「久遠實成三身即一釋迦牟尼佛、常寂光土靈山淨土唯一教主」^{七八}と權迹の諸佛に簡んで明瞭に述べられて居る。されば眞言天台勝劣事には大日法身に簡んで

大日如來と云は法華經の自受用報身にも及ばず。況法華經の法身如來にはまして不可^レ及。法華經の自受用報身とは眞言には絶^レ分不^レ知也。^{三六}

と遊ばされたる如く、大日の如く單法身にあらず三身即一の法身如來であつて、靈山の教主にあらず、南無妙法蓮華經を寶號とする寂光の本佛である。

中尊と二佛との關係に就ては既に二門の教主、應法の二身、靈山寂光等の相違のあることを述べたが、更に中尊と二佛との關係に就ては、境智、生死等の二法に約して之を釋して居るが、四條金吾殿御返事には方便品の諸佛智慧乃至諸法實相を釋して

此經文に諸佛とは十方三世一切の諸佛、眞言宗の大日如來、淨土宗の阿彌陀、乃至諸宗諸經の佛菩薩、過去現在の總諸佛、現在の釋迦如來等を諸佛と説き舉て次に智慧といへり、此の智慧とはなにもものぞ諸法實相十如果成の法体也。其法体とは又なにもものぞ南無妙法蓮華經是なり。釋に云く實相深理本有妙法蓮華經といへり。其諸法實相と云も釋迦多寶の二佛とならうなり。諸法をば多寶に約し、實相をば釋迦に約す、是又境智の二法也。多寶は境なり釋迦は智なり、境智而二にしてしかも境智不二の内證なり。^{三五}

となる如く壽量文底の妙法五字は諸佛の智慧で、その智慧の体は諸法實相、本有の深理妙法五字である。その諸法の境と實相の智とが迹門には釋迦(智)、多寶(境)の應法二身と現したのである。故に而二は迹門の二佛であり、不二は本門の壽量本佛の妙法五字である。故に諸法實相鈔には「萬法の當体のすがたが妙法蓮華經の當体也といふ事を、諸法實相とは申すなり。」^{九五}と述べ、血脈鈔には「妙は死、法は生也、此生死の二法が十界の當体也。乃至釋迦多寶の二佛も生死の二法也。」^{七四}と釋し、曾谷鈔には「境智の二法(而二迹門)は何物ぞ但南無妙法蓮華經の五字也(不二本

門) 二五と述ぶるのである。更に實相鈔にはその關係を明かにして

法界のすがた妙法蓮華經の五字にかはる事なし。釋迦多寶の二佛と云ふも、妙法等の五字より用の利益を施し給ふ時、事相の二佛と顯はれて塔中にしてもうなづき合ひ給ふ。乃至寶塔の中の二佛並座の儀式を作り顯すべき人なし。是即壽量品の事の一念三千の法門なるが故也。されば釋迦多寶といふも用の佛也。妙法蓮華經こそ本佛にては御座候へ。 九五

と妙法は体の本佛、二佛は用の迹佛であつて、二佛内證の事の一念三千なる体の本佛は境智不二、生死一如の一佛である。而して此の壽量文底事の一念三千自受用身を顯はすには、二而の迹門の二佛に俟たねばならぬのである。即ち二佛の内證たる不二の本佛一如の本法は而二の迹佛に依て顯はるゝのである。

南無妙法蓮華經(不二本佛)

實相―妙―死―智―釋迦
諸法―法―生―境―多寶
(而二迹佛)

その所顯の姿を法衣書には「要當說眞實は教主釋尊の金言、皆是眞實は多寶の證明。」二六と、即ち而二の二佛が共に眞實を證誠したのが、事の一念三千の妙法五字である。且つ經文に於けるその所顯を新尼鈔には

今此の御本尊は教主釋尊の五百塵点劫より心中にをさめ給ひて、世に出現せさせ給ひし四十余年、其後又法華經の中に迹門はせすぎて、寶塔品より事をこり(而二)壽量品に説き顯し(不二)神力屬累に事極りて候。九〇と釋成し、更に日女鈔にその本尊の所顯事情を示して

爰に日蓮いかなる不思議にてや候らん、龍樹天親等、天台妙樂等だにも顯はし給はざる大曼荼羅を、末法二百余年の頃はじめて法華弘通のはたじるとして顯はし奉るなり。是全く日蓮が自作にあらず、多寶塔中の大牟尼世尊分

身の諸佛よりかたぎたる本尊也。^{二五六}

と遊ばされし如く、此に「すりかたぎ」とは全く二佛塔中に於て境智冥合、生死一如して證誠した意である。更に此の意味を具体的に説いたのが、阿佛房御書の「法華經の題目寶塔なり、寶塔又南無妙法蓮華經也。」^{五八二}の意である。

されば古來此の證誠の意を種々に口傳して、或は證明（一^{五三}、二^{二八}）或は寶塔の儀式（二^{二八}）、或は諸佛同道（一^{五三}、二^{二八}、三^{九七}、四^{一〇七}）、或は境智冥合（一^{五三}、二^{二八}）、或は不二一体（二^{二八}、三^{九七}、四^{一〇七}）、或は不變隨緣（一^{五三}、二^{二八}）等と釋して居るが、要するに中尊と二佛との關係を示すに外ならぬのである。又古來二佛脇士の説（一^{八六}、二^{二〇七}）があるがこれ既に述べたる如く報恩鈔等の意に反するものである。

三、境智冥合と佛界緣起

中尊と二佛との關係は詳説したが、更に二佛の位置即ち上下に就て見るに、既に報恩鈔に「釋迦は北の上座につかせ給」とある如く、又寶塔品に「從東方來」とあるに依て、寶塔は西向（一^{三六}、二^{九〇}、三^{九四}、四^{一七四}）靈山は東向であるから、或は天竺の法、或は和漢車内の座、或は賓主の禮、或は境下智上（一^二）等の説をなし、釋迦は賓にして上座、多寶は主なれば下座といふのである。由來釋迦多寶の二佛並座は寶塔品に出で、觀智儀軌に依て始めて曼荼羅化されたので儀軌に「窣塔婆塔中、畫^二釋迦牟尼如來、多寶如來^一同座而坐、塔門西開」とあるのが始めて、兩密の法華曼荼羅に釋迦多寶（阿沙縛鈔二^{三七〇}、覺禪鈔二^{五四}）を列して、釋迦は向つて右、多寶は左になつて居る。然るに承澄の阿沙縛鈔二には

釋迦多寶左右約異義不同也。一釋迦右多寶左是形也。多寶如^レ入^三禪定^一尊左也。釋迦說法主是智右也。定左惠右可^レ

居事也。一釋迦左多寶右、多寶自_レ本坐_三塔中_一、釋迦後入_レ塔坐、仍世間准_三客人_一令_レ坐_三左_一、世以_レ左爲_三上_一、是饗應意也（三二六）

とあるが、我曼荼羅の二佛の位置は後義に一致するのである。又啓運鈔（三一六）には或抄を引いて

天台法華曼荼羅釋迦北多寶南、本尊曼荼羅釋迦南多寶北。

その位置の相違を兩密の異となして居るが、若しこれに依れば我が曼荼羅の二佛は台密に一致するものである。世間節句の親王の位置、御眞影の聖上の位置に合するものである。報恩鈔に「教主釋尊は北の上座につかせ給ふ、多寶佛の上座に教主釋尊居させ給ふ。」_{七九}といふのがそれである。

若し二佛の境智冥合に就ては、法身の多寶が下座、應身の釋迦が上座なることが既に佛上座下、佛下座上の境智冥合である。これに就て啓運鈔三十一には左の如く三重の境智冥合を説いて居る。

三 重 { (境) 虚空 — 寶塔 — 多寶
(智) 寶塔 — 二佛 — 釋迦 } (冥 合)

然らばかゝる境智冥合とは何の所表かといへば、これ能所、迷悟、生佛の一体不二を表したもので、釋迦多寶の境智冥合は二佛一体の所表で、經文に之を求むれば五百由旬の寶塔である。宗祖は阿佛房御書に「法華經の題目寶塔なり、寶塔又南無妙法蓮華經也。」_{五八}と遊ばされし如く、寶塔即妙法五字の所表であり、これ二佛内證の本法たる南無妙法蓮華經である。されば朗門の本尊相傳には

釋迦多寶並書事妙法内證顯習也。謂妙法色心二法心會二法也。亦境智、又理智、定慧、生死、兩眼、兩足、眞俗一体不二成妙法云、爾多寶既入滅死也、全身有法也。境也、理也、色也。釋迦現世教主生也、說教主智也。首題左右

書^レ之、妙法境智一如、色心不二云事顯也。(二六九)

と説く所以であつて、かゝる二佛の冥合はこれ二佛の感應であり、その實義は生佛の感應、此の生佛感應一体不二の極意は、これ實に一大事因縁たる衆生成佛、即身成佛の所表に外ならぬのである。故に成佛用心鈔に

佛になる道は境智の二法にあらずや、乃至此の境智合すれば即身成佛する也。法華經以前の經は境智各別にして權教なるが故に成佛せず、今法華經にては境智一如する故に成佛する也。^{一四八}

とは正しくその意であつて、四條鈔の苦樂一如^{一四一}も此の意に外ならぬし、本尊鈔の自然護與も亦その結果を示したものに外ならぬのである。此の点に就ては風間前學長が「御本尊座配に就て」に詳説せる所である。

更に此に一の注意すべきことは、曼荼羅内に於ける二佛と四菩薩の位置である。若し釋尊を以て北の上座とすれば當然四菩薩も上位の上行無邊行は釋尊と同一側に列せられなければならぬ。然るに茶曼羅には逆に上法の菩薩が南の下座に多寶如來と列座して居る。故に若しこれに就て寶塔が西向で二佛も西向に並座し、これに對して上行等の四菩薩以下九界の賢聖が「一心合掌瞻仰尊顏」の敬虔の態度を以て東方に向つて居るとすれば、二佛の北上南下に對して四菩薩も亦北上南下となり、今の曼荼羅の位置でよいのである。併し乍ら若し四菩薩を本佛の脇士とすれば、上述の如く二佛と對立するのでは脇士の義をなさぬのである。然るに若し阿佛房御書に依れば

されば故阿佛房の聖靈は、今いづくにかをはすらんと人は疑ふとも、法華經の明鏡をもつて其影をうかべて候へば靈鷲山の山の中に多寶佛の寶塔の内に東むきにおはすと、日蓮見まゐらせて候。^{一四九}

とあるに依つて、上行等も乃至阿佛房も共に東向きと解すべきとすれば、本尊鈔の「釋尊脇士上行等四菩薩乃至四菩薩眷屬、雲閑月卿」^{一五〇}の意が解せられぬのである。斯く佛界九界對立とすれば曼荼羅に於ける佛界緣起の義が成ぜず、

佛界緣起の義が成ぜねば本門の本尊でないのである。曼荼羅法に於ては一往生佛の形相を認むるも、曼荼羅これは事の一念三千常寂光土の相貌なる故に、諸佛は一壽量本佛の体内の別相であつて、形相は九界を表するも本佛の隨縁の外相に外ならぬのである。即ち靈山に於ける八品所顯の感應成就の貌に外ならぬ。故に御義等に「俱出靈鷲山」の文を以て、本尊の依文とするのは且らく靈山往詣の因行に寄せたまで、あつて、實義に依れば「我土不毀天人充滿」の果徳を執るべきである。されば本尊鈔には

夫始自_ニ寂滅道場_一花藏世界_ニ終_ニ千沙羅林_一、五十余年之間、花藏密嚴_ニ變四見之三土四土_一、皆成劫之上無常土所_ニ變化_一、方便實報寂光安養淨瑠璃密嚴等也。能變教主入_ニ涅槃_一所變諸佛隨滅盡、土又以如是_{ハス}。_{八九三}
と正しく爾前を無常の土と貶して、これに簡んで本門開顯の淨土を「今本時娑婆世界、離_ニ三災_一出_ニ四劫_一常住淨土。」と述べて、所謂四十五字の法体は佛法妙の内容に外ならぬ。次で右常住の淨土を具體的に示したのが「其本尊爲_レ体」等の八十九字の本門の本尊である。且つ此の本尊を「如是本尊在世五十余年無_レ之八年之間但限_ニ八品_一」と本門八品顯現とせられたのである。法華取要鈔に

法華經本門來_ニ至略開近顯遠_一、自_ニ華嚴_一大菩薩_ニ乘大梵天_一、帝釋日月四天龍王等位隣_ニ妙覺_一又入_ニ妙覺_一也。若兩者今我等向_ニ天見_一之、生身妙覺佛居_ニ本位_一利_ニ益衆生_一是也。_{九〇}

とある如く、九界の諸尊も佛果々上の大士である、故に佛界緣起の大曼荼羅と稱するのである。

斯の如く佛界緣起の曼荼羅なる以上、九界の諸尊といふのも外相の意で、内證は佛果々上の大士なる故に、上行以下_ニの諸尊も曼荼羅即ち諸佛聚の尊なる以上_一、何れも二佛の如く西向でなければならぬ。故に弘安五年作と稱せらるゝ寶塔繪曼荼羅（御本尊寫眞鑑、一、第十七圖）の諸尊は宗祖に至るまで何れも前に向て居るのである。又土佐大藏筆と

稱する玉澤の十界繪曼荼茶(御眞蹟寫眞帳第十四卷)の諸尊は、宗祖のみ東向となつて居るが、これ宗祖が末法の導師として「日蓮魁したり私黨共二陣三陣」の意を示したもので、前の阿佛房御書の「阿佛房聖靈東向におはす」とは、矢張二陣三陣の意を表したものである。若し宗祖が曼荼羅中にて前面に向へるは、末法の導師として曼荼羅内(佛果)より末法の衆生を引導する意で、これ宗祖も本尊の一分ではあるが富士派の如く本佛の意ではないのである。

上述の如く曼荼羅は佛界緣起の相であるが、既に輪圓具足といふ如く諸尊は雖然たる諸佛聚ではない。佛部に於ては應身北上、法身南下に配して境智冥合し、又四菩薩も下位(淨行安立行)を上位(上行無邊行)に上位を下位に配せられたる境智冥合である。若し蓮華部の諸尊に就ては佛部の多寶(定)、釋迦(慧)に對して文殊(慧)、普賢(定)とする(一六九)はこれ左右と上下兩段に於ける境智冥合である。又その他の諸尊に就て風間前學長の研究に依れば、諸經に於ける右勝左劣、左勝右劣の所明に依る境智冥合が示されて居るが、蓮華部以下は大体右勝左劣即ち舍利弗は上根(右)迦葉は中根(左)、梵天は三界の主(右)、帝釋は忉利天の主(左)、又日天(右)、月天(左)、天台(右)、傳教(左)、天照(右)、八幡(左)等の如くであるが、蓮華部以下は左右對立に依て境智冥合を示したものと知るべきである。故に古來境智(二一五)、定慧(一七〇)、理智(一七三)、止觀(一七四)、因果(一七五)等に約して諸尊の境智冥合の相を示して居る。

首題

(不二)

定——梵天、日天、身子、多寶
慧——帝釋、月天、迦葉、釋迦

首題

(不二)

理——多寶、普賢、無邊、安立行
智——釋迦、文殊、上行、淨行

首題 (不二)

止—多寶、文殊
觀—釋迦、普賢

首題 (不二)

多寶(境)、文殊(智)、不動(境)
釋迦(智)、釋迦(境)、愛染(智)

首題 (不二)

多寶(境界)、文殊(智因)
釋迦(智果)、普賢(境因)

斯の如く對法に約して左右上下の境智冥合を以て、曼荼羅が雜然たる諸佛聚、功德聚にあらずして、整然たる境智冥合、諸佛感應に依り輪圓具足の相なる故に、本來尊重、根本尊崇、本有尊形の本尊と稱し得るのである。故に古來更に境智冥合を釋するに豎七重、横七重に約し、豎横相乗じて七七四十九院の相貌となし、彌勒の淨土たる梵率内院を表す(一、^{ハ〇}、^{二〇}、^八)の釋をなすに至つたのである。豎七重とは中央首題を第一重とし、二佛左右二重、四菩薩左右四重を合したるもの、横の七重とは中央首題を別とし二佛以下を

横七重

多寶、上行、無邊行、文殊、舍利弗、大梵、鬼母
釋迦、淨行、安立行、彌勒、迦葉、帝釋、刹女

右の如く左右七對をいふのであつて、これ又横豎相乗の境智冥合の意に外ならぬ。斯の如く曼荼羅の諸尊は佛界緣起の諸尊なると共に、境智冥合に依る諸佛聚、輪圓具足の相と解すべきである。

四、蓮華部の諸尊

蓮華部の諸尊は大体九界の代表的尊の聚集で、遺文所明との相異は前述の如くである。曼來羅に於ける此の部も他部と同じく、文永時代は未確定であつて、大体に於ては建治の初年に確立し、弘安の初に一部の轉置と添削とが行はれたのである。今一般的大勢に就てこれを見れば、先づ建治の初年に確定したと見做すべきは

		菩 薩		二 乘		諸 天		人 界		修 羅		畜 生		餓 鬼	
右	文殊、彌勒	舍利弗	梵天、日天	輪王	修羅	龍王	鬼母								
左	普賢、藥王	迦葉	釋桓、月天												

右の如く菩薩界には迹化の四菩薩、二乗界には舍利弗迦葉、天界には梵釋日月諸天であるが、就中釋提桓因天は、因陀羅、千眼、帝釋等の諸名を列ねたが結極釋提桓因となつたのである。若し弘安の初年に轉置されたのは彌勒藥王の二菩薩である。

文永、建治
 右、彌勒
 左、藥王
 弘安初年
 右、藥王
 左、彌勒

若し弘安初年の添加は天部では第六天と明星天、地獄の提婆と人界の阿闍世である。

左	右		
明星天	第六天	天界	
阿闍世		人界	
	提婆	地獄	

就中第六天は或は摩醯修羅、明星天は或は寶光天子の名を以てしたこともあり、前者建治の初年頃よりその晩年頃ま

で見へたが弘安初年頃に確定した様である。かくて建治年間に蓮華部で金剛部に流出した如き、鬼母刹女とを加へて凡そ八界が具足し、弘安初年に提婆が地獄界の代表として加へられて、此に蓮華部に九界の諸尊が具足し、これに佛部を合して十界具足したのである。

鬼母刹女の位置は文永時代は勿論、建治元年の末までは未定であり、就中建治元年十一月（身延鑑第九圖）の如きは、蓮華部に菩薩二乗の下に列せられ

右―梵天、日月、輪王、修羅

左―帝釋、鬼母、刹女、龍王

正しく蓮華部にあり、又弘安以後の曼荼羅に修羅、輪王、龍王、提婆等が概ね二段と三段との間に列せられる点から見ても、最初二段に勧請したのが諸尊の添加のため溢れて三段に列せられ、次第にそれが習慣となつて、終に後世見る如き金剛部の筆頭に位置するに至つたのであらう。故に鬼母刹女は常に天台傳教の稍上部に位し、天照八幡に對すれば正しく上部に配せられて居るのである。

若し蓮華部の諸尊に就ては、本尊鈔には「文殊彌勒等四菩薩（眷屬居^三末座）、乃至權大乘並涅槃法華經迹門等釋尊、以^ニ文殊普賢等^一爲^ニ脇士^一。」^{〇九四}とある如く、文殊普賢等は迹門等の釋尊即ち二佛の中の釋尊に就ての脇士であつて、此の事實は叡山の釋迦堂の本尊たる釋迦に文殊普賢、梵天帝釋四天王を脇士とするに徴して明かである。若し中尊に對すれば脇士たる本化大士の眷屬である。菩薩既に眷屬であるから余の諸尊の眷屬なることはいふ迄もない。その外曼荼羅の諸尊としての釋は、日女鈔にも「普賢文殊等舍利弗目連等坐を屈し^{二五六}とある如く、これまた眷屬の意なることは、上に「釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ」とあるに對して普賢等「坐を屈し」とはその意である。遺文中には

その他これといふ説明はないが、若し弘安後彌勒藥王の轉置に就ては、文殊は迹門の發起、彌勒は本門の發起である故に、二門の發起が一方に偏しては境智冥合の意を成しないからであらう。若し舍利弗迦葉は四大聲聞中授記の次第に依り、上根の初と中根の最初とを出したのであらう。若し梵天は欲界の主、帝釋は三十三天の主、第六天は三界の魔王、日月明星は閻浮提の三光天子、輪王は人界の主、阿閼世は、摩阿陀の主、阿修羅は修羅界、龍王は畜生界、提婆は五逆に依て墮獄の故に地獄界を表し、且つ逆即是順の經益無盡の意を表したのである。又鬼母、刹女は餓鬼の代表として之を列し、外九界の形を現するも内證各佛果々上の尊なることいふ迄もない。又弘安以後迹化の菩薩等は往々に略されて居るがこれ眷屬なる故に之を略するも不可ないのである。即ち蓮華部以下の九界に就ては廣略の異あるも、その意は同意と解すべきである。

若し蓮華部の諸尊に就ての古來の相傳を見るに、文殊等四菩薩に就ては文殊は經の始、普賢は經の終（一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇）と解し、上下相對して境智冥合すと云ふのである。（一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇）

右 多寶 文殊 多寶理境發 文殊智 形也
左 釋迦 普賢 釋迦事智契 普賢境 形也

又釋迦多寶の果の境智に對して因の境智（一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇）と解して居る。若し彌勒、藥王に就ては、慈悲の所表（一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇）境智の二尊となし

左 多寶（境） 文殊（智） 上行（智） 彌勒（境）（慈）
右 釋迦（智） 普賢（境） 淨行（境） 藥王（智）（悲）

右の如く上下左右相對して境智冥合となし、若し藥王は燒身の空悲（一七）の相傳によれば、弘安以後の轉置は境々智々の冥合である。配列に於ける境智冥合は、全く輪圓具足の意なること前述の如くである。

五、金剛部の諸尊

金剛部とは第三段で前述の如く、儀軌に於ける當部の諸尊は、今の第二蓮華部と兩側の外金剛部に接せられて居る故に、大曼荼羅に於ける此の部は全く壽量開顯の微旨に依る、三國四依並に國神等を列ねたる、二國未有と稱する部分である。若し鬼母や刹女を此の部の主尊とする如く配したことは、若し蓮華部に九界を接するとすれば、全く前述の如く蓮華部の流出とすべきである。

三國四依としては、龍樹、天親、天台、章安、妙樂、傳教等が擧げられて居るが、建治元年十一月には修禪（義眞）寂光（圓澄）の兩大師を配したのもある。併し乍ら必ず擧げてあるのは常に外相承の師と仰ぐ天台傳教であつて龍樹妙樂は略式のものには略されて居るが天照八幡を略したのではないのである。若しその配列に就ては

右 天台 龍樹 天照

左 傳教 妙樂 八幡

概ね右様に配してあるが、天親章安の位置は確定して居らぬ様である。その中八幡であるが大体は大菩薩であるが、建治の晩年より弘安の始めにかけては八幡宮と記されたものも見受ける。これ人に約したのと處に寄せて人を表したとの相違である。又古來の傳説には天照八幡を以て餓鬼界の攝（一八）と見るのがあるが、これは鬼母、刹女を以て此の段の首尊と見たからであつて、天照八幡は輪王等と同じく人界なることはいふ迄もない。

若し此の段に於ける三國四依の配列に於ける古來の相傳には、或は弘教の論師、或は滅後の人師、或は正像の導師（一四三）、或は同行の知識（一七九、二六）、或は八宗の高僧、或は師資相承、或は傳弘の導師（二二六、四三三）、或は靈山付屬（二六四、二一四四）等と稱して、要するに三國に於ける法華弘通の先聖と解して然るべきであらう。更に十界の所攝に就ては本尊鈔等に「像法中末觀音藥王等示現南岳天台等」出現（七四）と述べられて居るより、或は迹化の菩薩（二二七）或は僧形なるより聲聞界（二六八）、或は本地垂迹の説（二二六）をなすのであるが、これ人界の攝（二六八）であり、就中龍樹天親は内鑑冷然の師（一四一）天台傳教は外相承の師と解すべきである。

若し天照八幡に就てはこれ法華神道と重大關係があり、勿論この方面の特殊の研究を俟つものであるが、今は且らく古來の相傳に立脚してこれを述べるならば、或は單に神（二六七）といひ、天照太神は社稷の神、八幡大菩薩は宗廟の神と解し、且つ法華擁護の神なる故に日域の諸神を代表とし全神を之に攝し、就中我が國は神の國なる故に世上に準じて之を勸請すといひ、或は三十番神中の代表の二神（一九九）、或は天照は此國の主、八幡は百王鎮護の崇廟（二七三）或は天照は地神五代の始、八幡は法華擁護の人王（二七二）、或は天照は諸神の始、八幡は弓箭國家守護の神（二四）等と解し、又累品の列衆にして本佛の垂迹の説をなす等は、これ日眼女鈔に

天照太神、八幡大菩薩も其本地は敎主釋尊也、例せば釋尊は天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮ぶ影なり、釋尊を造立する人は、十方世界の諸佛を作り奉る人なり。（二七八）
の壽量顯本の實義に依り、又善無畏鈔に

天照太神、正八幡宮等は我國の本主也。迹化の後神と顯はれさせ給ふ。（二六四）
と釋し、開目鈔には

天照太神、正八幡山王等の守護の諸大善神も法味をなめざるか、國中を去り給ふかの故に、惡鬼便を得て國すでに破れなんとす。(四七五)

と釋し、曾谷鈔には

天照太神は魂を失つて氏子をまほらず、八幡大菩薩は威力よはくして國を守護せず、結句は他國のものとならんとす。(七七八)

等は安國論の主張に依る、謗法に依る守護神去國の釋である。若し神國王書には「其上神は又第一天照太神、第二八幡大菩薩、第三は山王等の三十餘社」。(三三五四)と述べて、國神中第一第二となしてその代表の意と解して居るが、古來の諸義は右の文意より出づるものであらう。若し十界の攝に就ては或は鬼畜攝(一八二、二六八)、或は天界の攝、或は人界(一六、一三)として居るが、此の段の諸尊は人界と解すべきであらう。前述の如く此の部は儀軌の第三金剛部に當るのであるが、今は此の部の諸尊を第二の蓮華部と兩側とに配して、此の部は全く壽量開顯の微旨に依て、三國四依と我が神祇を以て諸尊としたのである。

六、四天王と二明王

最後に外金剛ともいふべき兩側の四天王、二明王であるが、四天王は法華に出で且つ不動明王と共に儀軌の金剛部の尊である。若し愛染明王に就ては經王殿御返事に

さいはいは愛染の如く、福は毘沙門の如くなるべし。いかなる處にて遊びたはふるともつゝがあるべからず。遊行無畏如師子王なるべし。(六九八)

と左側の兩王を釋し、日女鈔には

四大天王は寶塔の四方に坐し、其外不動愛染は南北の二方に陣を取り。(二五六)

と述べ、善神擁護鈔には

持國天は水火の災を除き、廣目天は怨敵の難を退け、増長天は衆病を消除し、多門天は夜叉の害を除かしむ、皆是帝釋の使也。天諸童子以爲給持云々、可秘可秘(五四)

と述べ、その他最蓮房鈔〇八四、實相鈔一六、等にも見え。取要鈔には「梵帝日月四天等初成已前大聖也」(四一〇)と梵釋等と共に果位の大聖と判じて居るのである。

上述の如く四天王は法華に出づるが、不動愛染は正しく眞言に出づる所で、祈禱鈔に十五壇の秘法を述べその第三に不動明王法、第九に如法愛染王法、第十二に愛染王法、第十三に不動法(〇九九)等とあるに依て明かである。而してこれは前述の如く本門開顯の意に依て、我が大曼荼羅の諸尊となつたのである。

先づ四大天王に就て述ぶるならば、法華中序、方便、總持等の諸品に見え、諸經中最も明細に述べたのは、大集經第五十二月藏分に出づる所で、此のことは建治元年十一月の曼荼羅(身延鑑第八圖)に詳記せる如くである。

東 提頭賴吒天王品第十一(大正藏三三六) 樂勝提頭賴吒天

南 毘樓勒叉天王品第十二(同 上三三八) 大華毘樓勒叉天

西 毘樓博叉天王品第十三(同 上三三九) 梅檀華毘樓博叉天

北 毘沙門天王品第十四(同 上三三〇) 拘鞞羅毘沙門天

而して儀軌は北方を上方として四方に之を配し、我が曼荼羅は兩側にこれを配して居るが、その座配並に梵漢の名字

に就ても文永、建治、弘安に亘つて相等變遷の跡が見らるゝのである。試みに始顯以來の變遷を示さば左の如くである。

左		右		位置	
下	上	下	上	始顯	
增	毘沙	廣	持國	文永建治	
長		目			
不	不	不	不		
定	定	定	定		
博	毘沙	勒	持國	元弘	安
又		又		年	
增	同	廣	同	二五	
長		目			
博	同	勒	同	儀軌	
又		又			
南	北	西	東		

右の如く年代に依て名字と方位とに相違があり、就中文永建治の交に於ては名字も方位も常に混用せられて居たのである。若し名字に就ては毘沙門天のみは、常に梵名を出して多聞の譯名は見ないが、持國天の如きは建治二年に梵名を見る外悉く漢名であり、若し廣目増長の二天は梵漢兩様に混用せられて居る。若し方位に就ては右側を持國増長（勒又）左側を毘沙門廣目（博又）とせるは、これ儀軌に依つた東南（右）北西（左）の交互に安じたものであらうが、始顯並に弘安晩年のものは、東西（右）南北（左）と順次に安じたものである。而して此の相違に就ては特別の説明はないのであるが、前者は文永建治に於ける善德分身を佛部に配したのと同じく儀軌に影響せられたものであり、後者は弘安以後善德分身を除去したのと同意と見るべきであらう。若し勸請の意は善神擁護鈔の如く、持國天は水火、廣目天は怨敵、増長天は衆病、毘沙門天は夜叉の災害を除去する四方の守護と解すべきである。

最後に不動愛染の二明王に就ては、眞言に依れば底哩三昧耶經上並に大日經疏九等に出づる所で、不動即無動で眞

(二) 承重の咩 *huna* 字定慧理智冥合の義

(三) 希悅 *hag* 字歡喜の義

等の説をなすが、今の曼荼羅は第一義に依つたので瑜祇經第七品に『常於自心中、觀一咩字聲』と説けるもので壽量文底微旨の開顯と見る外ない。これ恐らく宗祖の事相相承に由來し、保田妙本寺御眞蹟古文書の日輪中に愛染明王を畫き、西側に

生身愛染明王拜見、正月一日日蝕之時、*ウシシツチシヤクシ* *ヒツツ* *ヒツツ* *ヒツツ* (右側)

自三六日如來一至三六日連三三代嫡相承、建長六年六月廿五日日蓮授新佛 (左側)

とあるに徴すれば、全く建長六年正月の日蝕に於ける見身に由來したとも思はれるのである。

又不動の種子に就ても異義があつて

(一) *huna* 此れ *han* *q* 鑲又は *ham* の合字で降伏の義

(二) *han* 字で能降の義

(三) *han* 字で能破の義

等であるが、今は第二義に依つたのである。斯く二明王を梵字を以て表したのは、眞言の法曼荼羅の所表と一致するものである。今の二明王を法曼の如く種子を以て表したに就ては、三國流布の故に三國の字を用ゐた (二三七、四、一七) といひ、日意は本尊莊嚴の意にて梵字に書く (一一六) 等といふのであるが、要するに

(一) 密教曼荼羅開會の義

(二) 本尊莊嚴の義 (一一六、一五八、七三)

の兩義に外ならぬのである。若し十界の攝に就ては或は不定（一、四、五、二、三、六、八、四）といふも、四天王と共に天部の攝である。孰れにするも儀軌の曼荼羅に由來し、且つ第三重の金剛部が三國四依、國神を以てした故に、自ら胎藏界曼荼羅の外金剛に當り、四天王と共に全く四方の守護と解すべきである。

七、讚文の通別

曼荼羅の本質ではないがその存在價值を明示したものが讚文である。而して此の讚文には自ら通別の二種がある。通とは佛滅後二千二百二十（三十）余年云々の文を指し、別とはその他の經疏の文を書き添へたものを指すのである。若し通に就ては佐渡始顯や、保田の萬年救護等は他と異つて、曼荼羅圖顯の事情を明記して

文永八年^{大才}辛未九月十二日蒙御勘氣遠流佐渡國、同十年^{大才}癸酉七月八日圖之。此法華經大曼荼羅佛滅後二千二百余年、一閻浮提之内未曾有之、日蓮始圖之。如來現在猶多怨嫉況滅度後、法華弘通之故有留難事佛語不虛也。

と（身延鑑、第一圖）書し、保田の曼荼羅には「文永十一年^{大才}甲戌十二月日、甲斐國波木井郷於山中圖之」と執筆の時處を明記し、下部に

大覺世尊御入滅後經歷二千二百二十年雖兩月漢日三箇國之内、未有此本尊、或知不弘之、或不知之、我慈父以佛智陰留之爲末代殘之、後五百歲之時、上行菩薩出現於世、始弘宣之。

と始顯のと稍異つて居るが、矢張圖顯の事情を詳説して居る。併し乍ら是等は始顯當時である故に、圖顯の事情を明にするために詳記したのであつて、その後は通途の

佛滅後二千二百二十年之間、一閻浮提之内、未曾有大曼荼羅也

と要約して認められたのと、具略の相違であつて、文相に具略の別はあつても文意は全同と解すべきである。尙ほ弘安以後三十余年に就ては前述の如くであるが、これは曼荼羅が全く正像の二時、印度漢土日本に未有の本門の本尊なる所以を示したものである。

次に別の讀文に就ては、始顯曼荼羅には佛部の上方に藥王品の

此經則爲闍浮提人病之良藥、若人有病得聞是經、病即消滅不老不死

の文を記し、建治二年卯月日照授與のものには左右兩側の上に斜に涅槃經の二文を引き

譬如一人而有_二七子_一、是七子中一子遇病、父母之心非_レ平等_二、然於_二病子_一心則偏重上。(梵行品、大正藏一二七四頁)

世有_二三人_一其病難_レ治、一謗大乘、二五逆罪、三一闍提、如是三病世中極重(現病品、大正藏一二六四頁)

左側の上より下に斜に書し、右側には始顯と同一の藥王品の文と、壽量品の

餘失心者見其父來、雖亦歡喜問訊、求索治病、然與_二其藥_一、而不_レ肯服、是好良藥、今留在此、汝可取服、勿_レ憂_レ不差。

の文を書して居られるが、是等の四文は文異義同である。而して此の意は高橋鈔に滅後四依の應病與藥を詳説して醫師の習病に隨つて藥をさづくる事なれば、我滅後五百年が間は迦葉阿難等以小乘經の藥をもて一切衆生にあたへよ。次の五百年が間は文殊師利菩薩、彌勒菩薩、龍樹菩薩、天親菩薩に、華嚴經、大日經、般若經等の藥を一切衆生にさづけよ。我滅後一千年すぎて像法の時には藥王菩薩、觀世音菩薩等法華經の題目を除いて、餘の法門の藥を一切衆生にさづけよ。末法に入りなば迦葉阿難等、文殊彌勒等、藥王觀音等のゆづられしところの小乘經、大乘經並に法華經は文字はありとも、衆生の病の藥とはなるべからず、所謂病は重し藥はあさし、其時上行菩薩出現して

妙法蓮華經の五字を、一闍浮提の一切衆生にさづくべし。(七九二)

と述べられ、本尊鈔に所謂「遣使還告は四依なり」と述べ、四種の四依を出し

四依有_二四類_一、小乘四依多分正法前五百年出現、大乘四依多分正法後五百年出現、三迹門四依多分像法一千年少分末法初也。四本門四依地涌千界末法始必可_二出現_一。今遣使還告地涌也。是好良藥壽量品肝要妙体宗用教南無妙法蓮華經是也。此良藥佛猶不_レ授_二與迹化_一何況他方乎。(四九四)

と述べた、壽量文底の最好良藥を色香味の三秘に開いた、本門本尊の意なることを示したものである。

此の外建治二年九月本尊には神力品の

以要言之如來一切所有之法、如來一切自在神力、如來一切秘要之藏、如來一切甚深之事、皆應此經宣示顯說の所謂四句要法の文を上_二に書し_一、左側には

妙法華經皆是眞實(寶塔品)、四十余年未顯眞實(無量義經)、世尊法久後、要當說眞實(方便品)。諸佛所師所謂法也。是故如來恭敬供養、以法常故、諸佛在常。(涅槃經如來性品、大正藏一一三三七)

と四文を引いて居るが、前の四句要法は是好良藥たる五字の出據を出し、寶塔品等の後の四文は法華眞實の依文を出して、本門本尊の眞實を證した讃文である。故に上來の諸文は法譬の異はあるも全く同意である。若し弘安元年日頃授與並に同三年日命授與のものには共に

左上 若惱亂者、頭破七分(陀羅尼品)

右上 有供養者、福過十號(文句記一〇_二一)

左下 讃者積_二福於安明_一

右下 謗者開「罪於無間」(依憑集二六〇四)

右の經疏の三文を記し又弘安二年日載授與のものには前掲中上部の經疏の二文のみを記して居るが是等の諸文は、本門の本尊信謗に依る罪福をしらしめたものである。

若し同年十月日德授與の御形本には佛部の上部に、上掲の陀羅尼品の文を右に、左には法師功德品の「安樂產福子、以聞香力故」の文を記して居るに依て、安產守護に授與した故か子安本尊と稱して居る。此の外建治元年經一丸に授與した、玄旨傳法本尊、同時代の本法寺本尊等は首題の兩側に今此三界の文を記した如きは、本佛の守護を明示したものであり、又文永元年小湊の聖母蘇生の本尊には藥王品の不老不死の文を記した等もあるが、別の讃文は大体に於て經疏に依て本尊の價值を示したものである。併し乍ら子安本尊以下のものと、前のものとは自ら文意に一般的と特殊との別を分つことが出来るが、場合に依て適當の文を記入したもので其の目的は同一である。讃文のなき多數の本尊とても、有無の別はあれ本尊の價值に別のある筈はないことはいふ迄もないのである。

更に一言すべきは奉獻本尊の讃文であるが、これには佛部の上に壽量偈の「我此土安穩、天人常充滿」を左右に書き、次に神力品の四句要法の文を左側に、涌出品の「諸佛自在神通之力、諸佛獅子奮迅之力、諸佛大勢威猛之力」の文並に壽量品の「如來秘密神通之力」の文を右側に、又第三重に藥王品の「諸餘怨敵皆悉摧滅」(左側)、陀羅尼品の「修行是經令得安穩」(右側)の文、第四重には安樂行品の「諸天晝夜常爲法故而衛護」(之)大日本國(左側)と右側には通の讃文として「如來滅後於闍浮提內、未曾有第一之大曼荼羅、本門壽量佛本尊也」と諸文を記して居るが、四句要法以外には、經王殿御返事に見ゆる守護本尊に涌出品の「獅子奮迅之力」(五九)の文がある様であるが、他の諸文は全く敵國降伏護衛日本を表徴した諸文であつて、通の「未曾有第一」壽量佛本尊」等も少しく異様である。此等の諸文

が此の本尊執筆の事情を物語つて居る様であるが、其の他に就ては前述の如くである。

八、曼荼羅に於ける花押

更に曼荼羅に於ける花押に就てあるが、これに就ては山川博士が既に「日蓮聖人の花押に就ての研究」(「日蓮聖人の研究」第二三三)に於て粗ぼ盡されて居る故に此に詳説しないが、今は古來よりの相傳の一斑と、上掲の曼荼羅に於ける花押に就て述べることにする。先づ古來の相傳としては玉澤流の御本尊相傳鈔の第十九の「御判形之事」の下に

是^ハ文字^ニ二習也、其者判ノ初^ハ愛染ノ梵字^ヲ示字也、一義云^ハ示字也。其^ハ一字金輪ノ梵字也。こ是^ハ星也、次^ニ厥手ノ事是^ハ字也、物ヲ養^フ義也。去^レ間日蓮遊^シサテ判ヲ遊^シ留^ム時^ハ遊^ス是^ハ日月等ヲ相並^ニ玉意也、御判形廻大マワシ給事^ハハ一閻浮提也。其上日月出デ玉フト云々。サテ愛染ノ示字ヲ書給事^ハハ一大三千界ニ被^ニ愛敬^ニ意也。廣宣流布ノ意也云々。一義云此判内ニ在^ニ三國^ニ習也。示字^ハハ是^ハハ星也^ハ是^ハハ唐敷。ハ字^ハ月也月ハ天竺也。日蓮ノ日字ハ日本國也。是^ハハ三國ト習也。次ニ判ヲスルニ有^ニ通同法^ニ可^レ習、一義ニハウン字無トノ義モ有^レ之一ノ傳也。(二一八)

これに依れば花押は愛染の種子卍字と、一字金輪の種子勃嚕唵字との二説を挙げ卍字にあらずとの説を出して居るが勃嚕唵字に就ては梵字は星、ハは月、日蓮は日でこれ三の三光となし、花押の大廻しは一閻浮提を表したものと相傳して居る。若し朗門の相傳には矢張「判形之事」の下に

御判体者^ハ示字也、是^ハ本^ニ体爲^ニ莊嚴^ニ、引廻總御判總代九山八海形取也。ボロン一字金輪際上九山八海等有、此上日月出光用施衆生利益也、去蓮師本地上行再誕一閻浮提、四洲九山八海上出生衆生利益事比類如^シ是表給也。本化功能經

説ニ如日月光明、能除諸幽冥、斯人行世間、能滅衆生闇、教無量菩薩、畢竟住一乘云々。去日蓮書一字金輪種子、九山八海書成給、判居事九山八海者、須彌廻八海、近海八功德永有、是蓮華有自天日輪所座、仍日天蓮花乘九山八海上出、衆生闇滅給如、我一闇浮提生衆生迷闇照導師云意顯給。(二四五)

と述べて、是は一字金輪の種子と一定し、一字金輪王が世界を統一する如く、日蓮末法の導師として一闇浮提を利益する意を象徵したのである。故に

又重示云ボロン字金輪際敵降伏德具、去兵法ヤスミノムチトテ大事秘スル、手内^{ボケン}字書敵自^{ボケン}クラマカス也。折伏心用^レ之也。乃至當家全用^ニ形法^一非^ニ信仰^一、借^レ名妙法流布所表迄ナリ。(二四六)

と述べて居るのである。此の外身延門流の日朝の「御判形事」には「口決云梵字也^ボ字是也」(一一三)とボロン本説と定め

或義云^ボ字也、愛染種子用玉フハ世間愛敬義也云々。私云此義不審也、其形^ボ字不見之、^ボボロン字相傳アリ、其時ウント呼様有之、其響用玉事誤言之歟。(一二五)

等と述べて兩義ある中一字金輪の種子を取り、又中山相承には「日蓮之蓮字御判^ボ字相傳口決」(一二六)と^ボ字を風火の義となし

口傳云日闇除是折伏義、何判風大塵拂、又是折伏義、南無妙法蓮華經智火出給、又是折伏門故也。(一二三七)と經文の如風於空中一切無障礙の折伏の意と表すとするも、中間に

日意云私云御判^ボ字云不審也、御判形爾不見也。梵字不知案内人推量義歟。無^ニ覺束^一相傳也。

と述べし如く、花押は一見^ボ字の如く見えるが、^ボでないといふて居るのである。大体相傳の説としては^ボと勃魯庵

と他の字との三意を出でぬ様である。

これに就て山川氏は御遺文の眞蹟三十種を出し、(一)より(三)までの内(四、一八、三)の三を除いては同一花押、又(四)より(三〇)までの中(四)以外を同一類とし(研究二^{二三五})次に曼荼羅に就て藻原、保田、玉澤二幅中前の三と後の一との相違を示し以上の中後の部を勃嚕唵字となし、他の分を^ぶ鑱字となし、鑱字は大日如來智法身の種子、勃嚕唵字は一字金輪佛頂王の種子と判じ、此二種を以て遺文曼荼羅に亘つて、一定時期を限つて使用せられたものとなし。その變更時期を『弘安元年四月より六月に至る間』(日蓮聖人の研究二^{二二五九})と限り、凡そ次の五由に依ての判である。

(一) 身延遠沾亭師の本尊鑑の花押

(二) 一般花押使用の習慣

(三) 弘安五年九月「波木井殿御報」(三)等に依る判形の意義

(四) 本尊形相上の變化との關係

(五) 御遺文系年と本尊花押との關係

くて最後に弘安以後の梵字變更に就ての宗學的考察に於て、先づ文永建治の鑱字に就て

(一) 不動明王の種子、上行菩薩の火大の徳より生ずる大智の光明に依り、無明煩惱を燒盡する意となし

(二) 法華諸本尊の種子、法華本門の智慧を以て爾前述門を成敗するの意を表す

(三) 一切佛頂眞言種子、法華の實相の境智である

(四) 水大法界化の象徴で佛の如實智を表す

等の諸義を出し。次に勃嚕唵字の意義に就ては、一字金輪の種子でこれ大日は釋迦と一体と台密の解をなし、更にこ

れを釋迦の所變身となし、一字金輪は釋迦佛頂の功德を人格化し、その轉法輪の功德が金輪聖王の威徳を以て四天下を照被統一する意味の象徴化と解して居る。且つこれを弘安以後の曼荼羅の上に見る時は、^{ホレン}忸字は本門戒壇の本誓の表象で、若し本門戒壇を造立するとすれば、十方三世の諸佛、善徳佛等といふ如き、多數の佛は造立し得られぬから是等の釋迦多寶の二佛に止め、事實に建立せらるべき本門戒壇を後世のため楮上に染められたのが弘安以後の曼荼羅である、故に弘安以後の御本尊の座配、並に御花押が弘安以後に顯釋せられたる、本門戒体鈔ならびに三大秘法鈔の内容とまさしく刎合するのである（研究二二六、九）といふのである。

今最後に上掲諸本尊の花押に就てこれを見れば、身延本尊鑑のものは模寫であるから、判然しない点がある故に、稻田師の寫眞鑑並に現存の御眞蹟に就て之を見るに、御眞蹟中建治三年二月十五日の靜岡本興寺本尊は鑊字であり、又弘安元年八月の清水海長寺の本尊は勃嚙字で確に別である。又寫眞鑑に就て見るに弘安元年四月廿一日の京都本法寺日專授與と、次の同年七月五日の京都頂妙寺の日門授與とは確に別であつて、前後は各一致するのである。故に本尊の上に於ては正しく弘安元年四月廿一日より、七月五日までの間に變更して居り、隨つて山川氏の四月より六月までの説と一致するものである。これを山川氏は弘安元年四月檀越某御返事の花押（中山眞蹟）と、同年六月の治病鈔の花押（同上）の間に於ける變更を見たのである。而してこれに就て山川氏は本門戒壇建立の準備と解して居るが、これに就ては未だ三澤鈔の如き判然と分別せる文もない故に、三秘鈔を眞蹟としての推論はしか見られやうが、果して如何なる深意が存したのか、今は但だ花押の變更は認めるが、その御聖意の如きは後日の研究に譲ることにする。又梵字は山川氏の如く鑊と勃嚙とするのが親しいやうであるが、その所表と共に後日の研究を期したい。

上來述べ來つた形相上の最も注意すべき異点は、大体弘安前後に於ける

- (一) 佛部に善德十方の有無
- (二) 讚文中二十三十の相違
- (三) 花押の相違
- (四) 四大天王の確立

等の点であるが、是等の相違点中就中 (一) (二) に依て古來本懷顯未顯、再治未再治、隨自隨他の説となしたのであるがこれに就ては既に詳説した如く勿論是の標語は適當の語でないが、併し是等の語に依て示される形相上の相違は事實である。若し本尊の法体の上に於ては、全く山川氏のいへる如く「甚だ不當」の語であらうが、又單なる八品所顯でなく、統一戒壇の模範として壽量佛に諸佛を統一されたる、本門本尊の内容の顯示で富士派の戒壇本尊の意 (二四七) といふが、形相上の相違以外に就ては今の所論ではない。

九、圖顯曼荼羅の意義

上來曼荼羅形相の總別に就て述べた故に、最後にその意義に就て考察を進めて見やう。曼荼羅の全体の相貌に就ては、古來の朗門相承に依れば

是三國一得意、擬梵漢字可然、假名字云二明王点い字書成也。又華字中和字の字用、但如是和字書分初心也。文字長引顯皆假字形取、佛滅度後云度云訓假名云々。又佛滅度後二千二百三十年之間一閻浮提之内、未曾有之大曼荼羅書如レ文、中字書遊是假名云々。(一二七)

と述べ、又日經記の日意の口傳にも矢張同一義(一二三)を以て、三國相應大曼荼羅と稱して居るが、此等は全く皮相

の論である。何れにしても曼茶羅は眞言のそれが起源であり、その四種の中佛菩薩を相貌を以て顯はしたる繪曼茶羅が中心であつて、この外種子を以て佛菩薩を顯した法曼茶羅があるが、我が梵字を以て顯はした二明王は全くこれである。又中尊の首題の字形の如きも多少此の意を加味し、且つ繪畫と文字との兩様を加味したものとも見られる。その他の佛菩薩等は繪像を漢字を以て顯はしたとすれば、一種の漢譯法曼茶羅である。若しその思想的展開の經路に就ては、不空の儀軌を出發点として台密を経て、法華本門中心に完成したのが我が曼茶羅である。而して此の曼茶羅が眞言と同じ經路を取つて發達したものは、威儀形色經の系統に屬すべきは我が繪曼茶羅であらう。

此處に問題となるのは我が曼茶羅は字曼茶羅と繪曼茶羅と木像と孰れを正意とすべきかのことである。若し山川氏の戒壇實現への規範といふ意が、繪像又は木像及造立を意味するとすれば、今の曼茶羅は一種の設計圖の様なものである。併し乍ら大曼茶羅は設計圖とは見られない。これに就て先づ古來の相傳を見るに、興門の尊師實錄には「久成釋尊造立有無之事」と題して

日興聖人仰云、末法濁亂也、三類強敵有之、然者木像等色相莊嚴佛崇拜有憚、香華燈明供養不可叶、廣宣流布時分テ大曼茶羅可レ奉安置ニ云々（資料二二三、宗全興門集四一九）

とあるに依れば、曼茶羅を以て設計圖とは述べて居ないが、若し廣布の時色相莊嚴の佛像を造立すべきものとすれば、究竟の曼茶羅ではないのである。

若し造像に就ては御在世には下總の眞間と越後の善淨比丘尼の造像があり、又身延の佛像に就ては聖人滅後種々の異議が唱へられ、永仁年代に下山の地頭左衛門四郎光長が新堂を建立し、一体の釋尊を安置し開眼に日向を乞ふたが時に法資日澄は一佛供養は宗義惑亂なりとの非議を唱へ、師弟の縁を絶つて富士興師の下に走り、後重須の學頭とな

つたとあるが、斯く御在世より造像の事實があり、且つ順師の心底鈔に

久成之定慧廣宣流布、本門戒壇其豈不立哉、安置佛像一如本尊圖。(宗全興門集^{三四六})

とあるに依れば全く文字曼荼羅は設計書の如く見られるのである。併し乍ら同師は推邪立正鈔には

法華者諸經中第一、富士者諸山中第一也。故日興聖人獨ト彼山居、對治爾前迹門謗法、欲建法華本門戒壇、奉安置本門之大曼荼羅當唱南無妙法蓮華經。(同上^{三五五})

とあるに依れば文字曼荼羅の意と見るべきである。これ輝師が唱題觀に「本尊者曼荼羅與木像唯是紙木異」といふ意と解すべきである。然るに日親の傳燈鈔には什門の心光坊日正との問答を出して

或時日親問て云、貴邊御門家に木像を不安置意趣何事ぞや。心光坊答云、大難の尅み本尊をば卷て頸にも可懸。木像等立並ではあつかひ不可輒間、不安置日什遺誠也、故不安置之。(宗學全書、史傳舊記^{五五})

と什門にては末法の澆季の世相に約して、木像より文字曼荼羅を正意と主張して居る、然るに之に對して親師は宗祖の隨身佛、並に中山の二具十体、眞間佛、四條氏の造像等を以て木像安置を主張し、若し法難の折は經典も亦安ずべからざる意を以てして居るのである。

斯の如く紙木の本尊には種々の義論があつたのであるが、聖滅當時の記錄としては常修院本尊聖教事には

一、釋迦立像並四菩薩^{入御厨人}(宗全上聖部^{一八三})

とあり、又祐師の本尊聖教錄にも右の外に

釋迦佛立像並四菩薩^{大聖入御供養厨子御入}(前の常修錄と合せて二具十体なり)

打物題目釋迦多寶二尊像(同上^{二〇七})

とあり、又同師の善根記には

一、建武二年、本妙寺釋迦多寶造立事。

二、應安元年六月晦日、法華寺釋迦佛四菩薩六浦奉_レ造_二立_一之。

三、二部、本妙寺釋迦多寶御身奉_レ納

四、身延山釋迦多寶御身_{妙法}造立_二兩品奉_二書寫_一納_レ之

五、法華經寺釋迦佛四菩薩御身同_レ之

六、上總國藻原堂釋迦多寶二尊供養

七、法華寺釋迦佛並四菩薩供養同四年乙酉九月二日

八、古河妙光寺法華堂並釋迦多寶二尊供養_{康永二年癸未二月十三日}(同上_{四五})

等とあるは聖滅約二十余年當時の兩毛地方の状態である。之に依ても全國に造像の相等あつたことは知られる。

若し繪曼荼羅に就ては、中山玉澤を始めとして、影山氏は「日蓮宗の繪曼荼羅に就て」(崎報八六)の題下に、大体鎌倉時代より室町末期に至る現存十二点に就て、左の如く述べて居る、

繪曼荼羅	
有塔	無塔
單層覆鉢形——(一)(三)(四)(七)第三——自鎌倉至室町中期頃	
重層のもの——(五)(六)(七)第一——吉野朝已降	
牌あるもの——(八)——室町中期已降	
牌なきもの——(九)(十)(十一)——室町末期已降	

尚ほ右は聖滅二百七八十年頃までのもので、是等の中玉澤(二)のは鬼母が中尊に向つて背面である外、概ね夫婦又は兩

三人の信者が、祖師に向つて聽聞してゐる圖である。次で立像の釋尊一体が造立せられ現に諸寺の位牌堂等にあるもの、更に徳川期に至つて現在の如き二尊四士が造立せられたのに見れば、紙木本尊の上に優劣を立つべきではないが廣布の時に造立すべき一設計圖と見る意味も解せられる。

併し乍ら末法濁世に在ては、大衆佛教としては勸請の難易が必須條件である。されば文字曼荼羅は末法時機相應の曼荼羅といはねばならぬ。若し好世に約したまた藝術的立脚よりすれば、勿論繪木の曼荼羅の勝れたるはいふ迄もない故に衆生の意樂に對すれば紙木孰れも不可はないが、末法通機の本門本尊は我が十界字曼荼羅を取るべきであらう。その形相に廣略要の別がある即ち佐後始顯は廣、弘安以後は略、一遍首題は要であり、且つ要の首題は一大圓佛の總体を表し、略廣は一大圓佛の内容たる佛界緣起の諸尊の輪圓具足の相貌と解すべきである。『昭和一一、一〇、三一』

身延古抄雜々集に就ての考察

岡 教 邃

棲神第二十一號卷頭所出たる新發見の聖資料「日進聖人仰之趣」てふ古抄を室住學士が之を精研して發表せられたことは洵に嬉しい。此外題「雜々集」は聖傳に關する逸史であつて宗祖大聖人の詳細な日常の御生活を窺ひ知り得て轉た親みを感じるものがある。

此等の古抄は猶他にも現存せるものと思はれるが、甲州鏡中條長遠寺に所藏する「大聖人毎日勤行事」とて日向上人或筆記云凡一期行儀之相貌難_レ構_レ記_レ言_レ其大概_二云云と筆を起せる文明十三年二月日朝聖人在判、文明十七年霜月日意書寫本、又は啓蒙所引の「古抄」など、類似せる好資料である。それに就て少しく管見を述べんと思ふ。

(第一) の集錄にある故老僧仰云は日向上人の仰せに云ふ意味で、集錄中諸所に老僧連といふ場合は六九中老僧連聖人仰せに云ふとは宗祖聖人を指せるやうだが、此一段の文意より察するに日蓮聖人の仰せになつた傳説と看做さるゝ邊がある、勿論此「雜々集」は日進上人の仰せられた趣を集錄した聞き書きではあるが、その進師が宗祖の仰せ給ふた事や向師が仰せになつた事や其他の事を傳説したものと觀たい。

(第二) 正月六日「作也」とあるは「仰也」の誤植であらふ、これも宗祖の直々仰せを進師が向師等より傳説せられたものと觀られる。この中に聖人仰云とあるは明に宗祖の直き仰せを指すものであらふ。この一段は建長五年四月二十八日開宗說法當時の事情だと窺はれる。

そは建治二年正月十日宗祖が安房國清澄寺大衆中へ遣されし御書（遺文一三七一）中に、

建長五年四月二十八日安房、國東條ノ郷清澄寺道善之房持佛堂の南面にして、淨圓房と申者竝に少少ノ大衆にこれを申しはじめて其後二十餘年が間退轉なく申々、或は所を追_レ出され或は流罪等（中略）就_レ中清澄山の大衆は日蓮を父母にも三寶にもをひをとさせ給はば、今生には貧窮ノ乞食者とならせ給ひ、後生には無間地獄に墮_テさせ給ふべし。又啓蒙所引の「古抄」に（本化大辭林上卷五九三）

圓智か實城かの二人の間にて一人、聖人の虚空藏堂の前にて御說法ありしに、御顔をつくぐと見て、誰かと思ひたれば、藥王丸にてありけるよと、蔑り奉りし事これありと、申し傳へたり。

といふ古傳説も開宗當時の事を談りしもので、この「古抄」も「雜々集」とほぼ同時代の集録かと思はれる。この二人間の一人は報恩抄に圓智と實城とが上と下とに居てをどせしを、とあるから年上の僧とみらるゝ圓智房が、年下の宗祖を童名を以て呼びあなづつたものであらふ。又圓智房の弟子なる觀智房から宗祖は宗要集（日本天台口傳法門）を借用せんと清澄大衆中御書に出てゐる點からみても圓智房を宗祖より年長者と看做す事ができる。

道義房は宗祖の師匠道善房の兄なる事が善無畏三藏抄（遺文六五〇）に出てゐる。但し法兄か俗兄か其程は不明である。此抄の中本師道善房の事を述べし後ち、

此人（道善）の兄道義房義尙此人に向て無間地獄に墮つべき人と申て有しが、臨終思_フ様にもましまさざりけるやらん、此人（道善）も又しかるべしと哀れに思し故に思ひ切て強々と申したりき。

又種々御振舞抄（遺文一四一一）には

他人はさてをきぬ安房ノ國の東西の人々は此事を信すべき事なり、眼前の現證あり、いのもりの圓頓房 清澄の西

堯房 道義房 かたうみの實智房等はたうとかりし僧ぞかし、此等の臨終はいかんがありけんと思へし。これらはさてをきぬ、圓智房は清澄の大堂にして三箇年が間、一字三禮の法華經を我とかきたてまつりて十卷をそらにをばへ、五十年が間一日一夜に二部づつよまれしぞかし、かれをば皆人は佛になるべし、と云云、日蓮こそ念佛者よりも道義房と圓智房とは、無間地底にをつべしと申したりしが、此人々の御臨終はよく候けるかいかに。

又四信五品抄（遺文一五四三）には、

明心と圓智とは現に白癩を得、道阿彌は無眼の者と成る。

とあるに徴しても彼此對照し、「雜々集」の眞價が知られる。

義一房と慈義房とは御書中に其名が見當らぬが、通途宗門史では淨顯と義淨との同宿が此時宗祖を清澄山から密にお落し申した事になつてゐるから、或は淨顯義淨二人の房名かとも推察する。道義房も實名は義尙となつてゐるからである。由來日本天台では一人の僧名に阿闍梨號、假名、房名、實名、童名といふぐわいに多くの名があるから是く臆測するが、しかし或は同宿僧の別人かも知れない。いづれとも未だ速斷はできぬ。

さうして此（第二）段の記事が文永元年十一月十一日宗祖小松原法難の直後文永元年十一月十四日西條華房の僧坊に於て師匠道善房に見參に入られし時（遺文六四九）の事で無いのは「義一房慈義房二人の同宿此よしを（日蓮）聖人に語り申す也其故に夜打をのがれ玉ふ也、其後東條左衛門に所を追はれ玉ふ也。」（この追はれは追放の刑であつて、御書に建長五年地頭に國を塞がれて生國に歸らずとあるに同じ）とあるに徴しても、小松原法難の直後華房での師弟面會の時では無く、建長五年開宗の當時の記事だと推定したい。

（第三）段の記事も文意より推して宗祖の直話態になつてゐる。「旁々懸ル敵有テ」は「旁々懸ル故有テ」の誤植か

又鎌倉□人^二の伏字は「家人」であらふと推測する。「八月彼岸に身延澤に御房を御つくりし也云云」とあるのは、この仰云にある通り宗祖は五月十二日鎌倉を御出立あつて六日目に波木井殿に見参だから、五月十七日身延御着の事となる。其後暫く甲州遊化し給ふ。

庵室修復書（遺文一六五七）に「去ぬる文永十一年六月十七日にこの山のなかに木をうちきりて、かりそめに庵室をつくりて候しが」とあり。又妙法尼抄（遺文一七七九）に云「六月十七日より此深山に居住して門一町を出でず、既に五ヶ年を経たり」とあるから六月十七日の建て前にて八月彼岸供養の間に合ふやうに落成したものと観るべきで建築に三ヶ月を要したのは當然である。

（第四）段の「法師品云佛^一一劫ノ（供養カ）タルヨリモ」の「ノ」は（供養）に非ずして（罵）と復文した方が可なりと思ふ、末段の「仰ノ分也」は以上宗祖聖人が仰せの分なりとの意味に解せらるゝ。

（第五）段は明に進師の仰せを記載せしもの、宗祖滅後に於ける摩訶一房日印上人の記事にして、此一段の「古老僧^{參テ}誓伏申^テ」の古老僧は向師を指すやうである。「如法行」とは天台法華の五種修行、四種三昧、四安樂行のことであつて、印師の比企谷と身延山とに後背せられたいきさつを談るものと観てよからふ。

（第六）段の集録に係る古老僧は文意より觀て宗祖を指すものである事は分明である。そは民部阿闍梨（日向）と白蓮阿闍梨（日興）との名を明記せる以外に古老僧とあるからである。この一段は興師身延離山の一條を身延側の進師より觀たる記事である。此集に波木井實長日圓入道の記せしとある師弟の契約書一通は本文散逸して今に傳らない。（第七）段の集録は宗祖聖人の老若の弟子僧をして水田を作らしめた記事である。六老僧畑の傳説は身延鏡等に傳ふ所であるが、水田ありし事はめづらしい。而して其水田は疊四五帖敷とあれば、當時のむしろ疊の面積は定めし現

今のものよりは廣かつたであらふが、倍と假定しても十坪ぐらいのもので、又講坊の跡とあるから講堂の存した事が窺はれる。秋事とは穀の收穫を芽出度くすました取れ秋の祝儀である。この年次は不明なるも講坊があつた跡とあるから少くとも弘安年中の事であらふ。宗祖稻作の記事は宗門史上未聞の逸史に屬するものであるが、實に興味深い事實である。次郎太郎入道は興師記録の「弟子分與申御筆御本尊目錄事」にも其名を見ないが、恐くは波木井一族の人であらふ。

(第八) 段の集録は宗祖直説を聖人仰云と記する、耐寒激勵の聖訓である。

(第九) 段の集録は世に傳ふる六老僧畑の記事であつて、□伏字は「畝」(うねのうへに)であらふ。

(第十) 段の集録中の山城二郎殿といふのは明かにはいへぬが、文永八年龍口法難當時鎌倉夜廻りの役人で宗祖聖人の信者であつたが、同年九月十三日夜鎌倉諸處に放火あり、これ日蓮聖人門徒の所爲なりとの嫌疑にて、日朗上人と共に聖人與黨の者として宿屋左衛門光則の土牢に籠められし信者四人の中に伊澤入道、坂部入道、得行寺入道、河野邊の山城入道といふ人があるが、その山城入道の事でなからふかとも思ふが、これはたゞ臆測に過ぎない。

(第十一) (第十二) (第十三) の三段は更に贅言を要しない。

(第十四) 段の集録は進師法主たりし時、正月の儀式を記したもの、此處に上様とあるは法主上人の事かとも推せらるゝが、二位殿、小貳殿、石見殿とはいかなる人か判然しない。大郎三郎殿とあるは原本を一覽せないから確といへぬが六郎三郎か太郎三郎かとも考へる、六郎三郎ならば波木井實長殿の御子六郎三郎實繼殿である。コンライ殿とは恐らく根來殿のあて字であらふと思ふがいかなる人か不明である。聖人の御骨の供奉の人々の中若殿原の牧田は不明だが、富田の名は宗祖御入滅の時、葬列に加はつた方々の中に見え、古記録葬送次第の下に文机 富田四郎太郎と

記せる方か、或は其子息であらふ。

雜々集の寫傳者たる舊聖、心甫なる僧は未だ明でない。

更に願ていふ、此の集録は珍重すべきもので、殊に（第十四）段の如き想像をたくましふするならば、彼の上様は高貴の人で、近衛公の出なる前將軍惟康親王様ではなからふかも臆測したい。身延では近衛公の定紋「だきぼたん」を古來拜用てゐるが、惟康親王の御母君幸子様は日昭上人の義理の御妹君に當る、それは昭師は近衛家の猶子となつてゐらるゝ關係からである。時恰も後醍醐天皇は元享元年記録所を宮中に置きたまひ、帝の親政が始つた頃（此雜々集の記録嘉暦三年より八年以前に相當）公卿には資朝 俊基 賴兼 國長の諸卿。僧侶にては眞言宗の文觀、天台宗の惠鎮等の僧都が味方し奉つた時である。元弘建武年間には日蓮聖人の御門徒は多く京都に走せ參じ、日像上人亦た京都に妙顯寺を創建し、後醍醐天皇の御勅願所となつた時代であつたから、惟康親王が正應二年執權北條貞時の爲に京都に逐れ給ひ、時人「將軍京に流さる」とさへ喧傳した。親王は正中二年十月洛西嵯峨に薨せられた享年六十二。日蓮宗全書の上聖部の朗師輪師等より像師への御消息並に藻原山の金綱集の裏書古文書の情報等より推察するに、當時朝廷と身延山との間に何等かの關係があつたにちがいない、それらを綜合してかゝる想像をしたわけである。併せて識者の御教示を仰ぎたい。

附

言

舊師岡先生から、思ひがけなく再び懇切な御教示に預つたことを感謝致します。御教示の事項については、私校讀に當りました責任上、末尾に一言させて頂きます。

（第一）の「故老僧仰云」は、大聖人ではなく、「亡くなられた六老僧」の義と見、こゝでは進師の故師日向上人を指

すと見るが穩當かと覺えます。

(第二)の「正月六日作也」の作は仰の讀み違ひでした。先生の仰の通りです

(第三)の「鎌倉□人」の缺字は蝕殘の点畫からして「家人」の家とは見えません。又「旁々懸ル旨有テ」の様です。

(第四)の「佛ヲ一劫ノノタル」は「ノ(罵)リタル」の誤です。下の「仰の分也」はやはり宗祖でなく、向師の仰と存じます。

(第五)の「古老僧」も向師をさすこと愈明かとなりませう。

(第六)の「古老僧」もそうです。之をよく讀んで考へますと事實にも合ふし、文詞もふきはしいと思ひます。なほ誤讀は、(十一行目)「契約無已」の「無已」は「無也」と訂正します。

この段は文意、甚だ判り難いやうですから、再び全文を掲げ、試みに意味を解釋して、大方の御叱正を乞ふことゝ致します。

一 上野白蓮阿御房、本、身延澤ノ爲シ

レ主古老僧ヲタノミ參テ學文ヲシテ

主ト學頭ト二人日圓ノ御時アリシ也

云云 白蓮阿御房、實ニ爲レシ主ト聖人

ヨリノ付屬也ト云 上人ノ付屬ニモ非又

日圓ノ付屬ニモ非、但我ニクレヨトアリシ

日圓ノ義ニ御定ヘ爾ナレトモ基、聖人ノ

御時^キ師^ニハ學匠^シマイラセウト申時^キ

民部阿闍梨蒙^レ仰也時^ニ叶間敷

ヨシ被^レ仰タリ 大^ニ御腹^ヲ立サラハ民

部阿闍梨御房^ハ上總^ハ御返^リ有テ

御弘通候^ヘ_{ト云} 實^ニ白蓮阿^ヲ日圓^モ師弟^ノ

契約^ハ無也記請文^ヲ以^テ古老僧^ト

師弟^ノ契約^ハ二通有^ルナリ師^ノ禮儀狀^モ有^之也_云

(今試みに意味を釋して見ると)

富士上野の白蓮阿闍梨御房(日興上人)は始め身延の大坊の主としてをられたが、古老僧(日向上人)を頼み招いて學頭職にすゑて學事を司らしめられた。乃ち日圓(波木井實長公)の御時は、山主(日興)と學頭(日向)とあつた譯である。所が興師は、身延の主となつたのは實は宗祖大聖人よりの付屬であるといはれるが、(以下×印まで進師の注意)大上人からの付屬でも、波木公よりの付屬でもない。それは興師が「但我にゆづられ度い」といはれたのに對して、波木井公は答へて、「御説はさうですが、もとより大聖人御在世の時、師には學匠に従ふべき教がありますから、それがしは民部阿闍梨(日向上人)の仰を蒙りませう。それ故貴師の願は叶ひませぬ」と斷はられた。興師は大いに立腹して向師に「あなたは上總茂原に販つて弘通して貰ひ度い。學頭職は免ずるから」といはれて物別れとなつたが、(以下は又進師のことわり書き)實は波木井公は興師に對して師弟の契約はないのであるが、向師には起請文二通もあるほどで、又師の禮儀狀もあることである。

私は大体こんな意味ではないかと思ひますが、「古老僧」を大聖人と解したのでは全然意味が分らならず、矛盾する点が多く出て來ます。

(第九)の缺字は、畝(うね)には讀めず、蝕殘の点畫からして、石の字によめます。然し石の上に豆粟麥などの苗を二三本、四五本宛うゑさせられたとは、非常識ではないか。と考へて、いろ／＼惑ひましたが、ともかく字畫は石に近いやうです。で且らく、そのまゝによんで、聖慮のほど恐察するも亦、或は何かの靈犀がありませうか。

(第十四)の「上様」については、先生のお説は余り逞し過ぎるやうです。又たしかに「大郎三郎」とあつて六ではありません。

それから、右の岡先生の外に、青森縣の江利山義顯師(前身延文庫主任)より、表紙の「日純」師についての考證を指示されました。

即ち身延教報(第二十一卷第九號)所載、江利山師稿の「身延文庫に於ける弘決外典鈔發見の顛末」の中に、「弘決外典鈔」粘葉本表紙に「日純」と署され、又外に「天台靈應圖本傳集卷二「經論略記下」の傳領者たる日純師は何れの人であるか全く不明であるが、比企谷九世に惠明院日純といふ方はあつて、天文十九年三月二十一日六十九才で遷化された。同時代に而も比企谷常住院學侶、三覺院日英師も相當珍本蒐集家たることが證される。比企谷の本が身延に流入してゐる事實から考へて、「外典抄」の表紙署名の「日純」は比企谷九世の日純かと擬せられてゐる。従て、この「雜々集」なるものも、或は比企谷の純師が所持されたものかも知れぬ。

然し「外典抄」や「靈應圖」等の「日純」の文字とこの「集」のとはさして似てゐると思へないし、花押は「集」のみにある。後考を期す。終に謹んで先生、先輩の御教導を感謝いたします。

(室住一妙)

東陽房忠尋の著書に就いて

田 中 恵 春

1

東陽房忠尋師の著書と云はれるものを先づ諸古書目録に就きて檢するに、その記事の異説紛々たるに驚かざるを得ない。少數の共通書目を除いては、出入甚だしく従つて何れを選擇すべきかについて信據するに足るものは殆んど稀であると言つてよい。一往それ等を摘記して吟味することにならう。

まづ弘化二年(1217)八月拾遺の『日本國天台宗章疏目録』によると、

○東陽房忠尋 西塔北

相承義集

三大部骨目 三帖

枕雙紙

玄義書合 四十ヶ條事書

止觀書合

別紙抄

文句書合

東陽房忠尋の著書に就いて

右の如く七部をあげてゐる。ともに卷數を記してゐないのは甚だ遺憾である。而して玄義、文句、止觀の各書令と云ふのは現存してゐない。或は所謂『漢光類聚』を指すものではないかとも思はれるが、「四十ヶ條事書」とあるから同書でなきことは明かである。『三大部骨目』もその名に於いては現存しない。これは『三大部七百科』ならずやと考へるが、未だ確證は得られない。次に『相承義集』であるが、これは『相傳義集』を指すものであらう。『別紙抄』は未詳であり、『枕雙紙』のみは現傳されて『覺心集』とも云はれてゐる。

次に『本朝台祖選求密部書目』の「中古明匠述作」のもとには、

法華五部九卷 東陽房座主忠尋

高漢德王鈔 同上

七百科 三大部 同上

枕雙紙

の四部をあげてゐる。これまた調卷を記してゐない。然し右四部は共に現存してゐる點に注目し價ひする。

次に『天台霞標』の諸祖選述目錄のもとに於ては、

○忠尋和尚

法華 五部九卷

高漢德王抄

三大部七百科

枕草紙

疏記鈔 十卷

四教顯鈔 三卷

大論義鈔

玄義鈔

雜々集

と九部の著作をあげてゐるのであるが、初の四部の書目は前掲の『本朝台祖撰述密部書目』に全く等しきものであり、後五部の書目はその上に附加されたことが看取されるが、いまだそれ等に就いては詳にすることを得ない。うち『雜々集三十卷』とあるが、心榮師に『雜々鈔三十卷』の現存をみるがいまだ忠尋師の撰名のもとにあるを聞かない。

次に北嶺僧釋龍堂編輯になる『山家諸德撰述篇目集卷下』には左の如く記載されてゐる。

東陽房闍梨忠尋撰
大論義鈔

法華五部九卷

高漢德王鈔

枕雙紙

三大部七百科

疏記鈔十卷

四教顯鈔三卷

東陽房忠尋の著書に就いて

已上七部天台霞標爲兵部仁快撰。五大院闡梨安然撰以七部、爲忠尋撰甚誤也。今即記之、天正錄仁快撰玉泉抄一部而已。今依之、後賢思之。

玄義抄十卷

雜々集三十卷

漢光類聚四卷

と。即ち龍堂の説によれば、大論義抄以下の七部を『天台霞標』は仁快師の撰となし、安然師の七部を以つて忠尋師の撰としてゐるのは誤であり、天正錄によれば仁快師の撰述は一部のみである。とて『霞標』の誤謬を指摘してゐるのであるが、現行『霞標』に於いてはその所論の如きところは全く見出し得ず、即ち『霞標』の諸祖撰述目録のもとに前掲の如く忠尋師の著作書目をあげ、仁快師のもとには『玉泉抄』一卷を記載してゐるのみである。尙ほその他に書目に關しては右に該當する記事を見出し得ない。されば龍堂の右の記事は全く腑に落ちぬものと言はねばならぬのである。

以上、四目録に就きて忠尋師の著作書目に關するの部分を檢したが、それ等に於ては全く參差出入甚しく、また假令忠尋撰として記載されてゐるものゝ中にもそれが果して眞撰なるや疑問を抱かざるを得なく、明かに假托僞書と判ぜられるものゝ含まれて居り、また重要著作の缺漏を見出すに於ては該古書目録等には何れも直ちに信賴するに足るべしとはされ得ない。斯の如く古書目録の上に於ける著作の考察には、甚だ確實性に乏しく危険を伴ふことを知るのである。茲に於て現存資料に方向を替へ、忠尋撰名になる古書を各所の經藏に探ねて、それ等の一々に直接觸れることに依り考察を進め檢討することの妥當安全なる道をとらざるを得ない。

いま忠尋師撰名になる現存書籍を涉獵してそれをあぐるならば左の如くである。

法華略義見聞三卷 正教藏 (佛全)

法華略義聞書一卷 同 同

法華文句要義聞書 殘闕四卷 同 同

漢光類聚四卷 同 同

法華五部九卷書一卷 正教源寺藏

無縫目一軸 正教源寺藏

天台宗秘決要集一卷 正教源寺藏

聖教隱形一卷 正教源寺藏

枕雙紙一卷 正教源寺藏

相傳義集二卷 正教源寺藏

天台法門名決集一卷 叡山文庫

三大部七百科三卷 叡山文庫

釋尊影響卷一卷 同

圓頓戒脈譜口決一卷 同

菩薩戒口決一卷 正教藏

金剛秘密山王傳授大事 調卷不同 叡山文庫

東陽房忠尋の著書に就いて

弘仁口決一卷

正教藏

右十七部が忠尋師撰名に於ける現存書籍であるが、なほこの他にも秘藏せられてゐるものがあるかも知れぬが、未だ遇目の機を得ない。また嘗つて存在し現存せぬものがあるかとも思はれるが、それに就きての考證は現在のところ不能といはざるを得ない。何となれば未だ忠尋師の著作に對する確實な文献は上述の如く存在せぬからである。前掲十七部中『大日本佛教全書』所收の四部以外は言ふまでもなく悉く古寫本であつて、從來秘庫の篋底に珍藏せられ所謂唯授一人の嚴誠にはあらざれど容易に披見を得ぬものであつたのである。一往それ等の書籍に就きて概略分類してみると、

A、諸多の口傳を雜然と記述したもの

聖教隱形

無縫目

B、口傳思想を体系的に記述したもの

枕雙紙

天台法門名決集

釋尊影響卷

法華五部九卷書

C、七簡法門に關するもの

天台宗秘決要集

弘仁口決

D、三大部中心のもの

法華略義見聞

法華略義聞書

法華文句要義聞書

漢光類聚

三大部七百科

E、論義に關するもの

相傳義集

F、圓戒に關するもの

菩薩戒口決

圓頓戒脈譜口決

G、山王神道に關するもの

金剛山王秘密傳授大事

右の如く大体七種に分類することが出来るが、勿論斯る分類は便宜上よりするものであつて、内相外相より嚴密にすればその攝屬にも亦移動を來し、單純に決定するわけにはゆかない。仍つて箇々の考察に於てその文學的形態の上より、將亦思想内容より分析批判されるべきであることは論を俟たない。

併して上掲十七部の書は全てその撰名を「忠尋」となすものばかりである。然らば右の書籍の全てを東陽房座主忠尋師の眞撰として取扱はるべきであらうか、亦その奥書等の記事によつて、全的にそれ等を信據すべきであらうか、茲に重要な研究を必要とされて來るのである。由來中古の書籍は假托僞撰の雲霧に深くとざされて一として明確に眞撰なりと斷定を許され得るものは頗る稀である。いま忠尋師の著書に於ても亦その傾向を多含されてゐるのであつて、それが先聖をして斯くも雑多の書目を羅列せしめたことにも想到すれば容易に首肯しうるであらう。さればその考證檢討には最も嚴密に行はねばならぬと考へるのである。

いま前掲書籍を逐次考察するにさきだち、まづ序文、奥書、刊記等の明かに存するものを摘出して年代順に配記するとまた左の如きである。

無縫目

奥云 保安元年（1780）五十六才

天台宗秘決要集

序云 保安二年（1781）五十七才

聖教隱形

奥云 大治元年（1786）六十二才

法華五部九卷書

序云 同

法華文句要義聞書

奥云 同

漢光類聚

奥云 大治三年（1788）六十四才

右の六部となるのであるが、此等の六部に就きてはさきに忠尋師の傳記的考察（大崎學報第八十七號、棲神第二十一號發表）のもとに於て多少言及するところがあつた、が更に筆をあらためて文献學的に委細に檢討し、資料としての價值如何を定め、思想教理の究明を行はねばならない。以下前掲十七部の一々に亘つてそれを進めることにしやう。

（但し紙數の都合上本號にはそれ等のうちまづ『無縫目』及び『天台法門名決集』の二書に就いて發表し、余他は號を遂ふて掲載することにする）

2

無 縫 目

いま所見の『無縫目』は正教藏本と大谷大學圖書館藏本との二本である。この『無縫目』の所藏は余の寡聞か右二本のほか存するをきかない。而して正教藏本は鳥子の卷子本であつて、寫本年時筆者等の明記がない。文字頗る精確立派なるものである。元來正教藏と云ふのは、元龜兵變已後叡山再興の氣運高まると共に教學の復興も隨つて企てられ、諸國に散在された書籍の書寫收拾につとめられた時、江州芦浦觀音寺舜興師の一大蒐集にかゝるものを、西塔北谷正教坊に所藏せられたに名づくるのである。現在は台麓西教寺の秘藏するところとなつてゐる。こんにち日本天台研究に關する資料の最も豊富に藏せられ、また箇々の藏書の權威ある点に於いて眞如藏（叡山東塔南谷實藏坊）と共に雙壁とされてゐるのであつて、舜興師はその努力辛苦により蒐集された書籍の一々には、必ず書寫せしめし年時及び所藏年月日と共に自署名するを通例としてゐる。然るに本書の如きは舜興師の奥書もなく勿論また何等の書寫年代の記載もなきはまつたく稀なところである。或は表裝等の破損せるよりみてその部分の脱落したものかとも思はれるが確證はない。然しその紙質書風等の古色より考察して相當歲次の閱せることを知るのである。

次に大谷大學圖書館所藏本に就きてみるに、これは墨付二十帙の寫本であつて他に『慈覺大師一心三觀』等の四部

と合本の普通袋綴大本である。その寫本年時に關する奥書を摘記すると、

萬治元曆歲晴月下旬初五辰四明西塔北溪天政蹂躪之。

古本眞書而卷本也、爲當用爲開本草書。裏書依處黑字朱字亂書、殊裏書當處前後亂書、後見徒者得事書可見云云々。
于時寛文十辛亥九月二十八日求之。

筆者蝙蝠沙門伊藤松惠坊。

とある。即ち寛文十年(1698)の寫本にかりその原本は萬治元年(1692)の書寫になるものであつた。この奥書の註記によれば元來は卷本の眞書であつたのを寛文の寫本に際し當用のため開本草書とされた事情が看取される。されば『無縫目』は古くは卷子本の形に於いて相傳され來つたことが推知されるのであつて、したがつていまの正教藏本に古色をうかがはれ資料としての價值をも認められるのである。なほ右二本を對校するに後者に誤字脱字等の多くの誤謬を存するを看出した。仍つて正教藏本を第一資料として研究をすゝめて行くこととする。

谷大本の表書には『忠尋口決』と大書されてゐるが、正教藏本は卷本でもありその部分の破損によつて覗ふことが出来ない。内題はともに『無縫目』である。内題下には正教藏本は「東陽忠尋」とあり、撰名を出してゐるが、谷大本に於ては「私云古本卷物也」とあつて撰名を記してゐない。これは恐らく脱漏と思はれる。序文は兩本共に存しない。内容についてみるならば、「無縫目第一」より「第九」にいたる九節よりなつてゐる。而してその各節々は何等組織的体系化の爲のもとに別けられたのではなく、但に一題目に對する口傳を記述するを以つて、一節となしてゐるにすぎない。また註疏的でもなければ數法的でもない。重要な口決を併列的に記述されたよりみざるを得ないのである。書中指圖三面あり、また諸所に裏書されてゐるのである。(谷大本にては裏書は註書されて本文の傍に挿入さる)

末尾に忠尋師の奥書がある。掲出すると、

沙門忠尋謹集代々口決以爲無縫目。山家相承四ヶ深義恐未學猶可滯。或仍重造九卷抄、以決其大旨。或散自心之朦昧兼思令法久住之利生。翼諸佛菩薩哀愍給。

于時保安元年庚子四月十五日始草之同六月十九日書點畢。

右が忠尋師自らの奥書といふものである。忠尋研究に於いて重要な一資料であると云はねはならない。即ちこの一篇の書は忠尋師が代々の口決を謹集してなれるものであり、これに題して『無縫目』と名付けたとの縁起が記され、なほまた山家相承四ヶ深義は末代の學者には甚深難解の法門であるから重ねて『九卷抄』を造りその大旨を徹底さしひいては自心の爲めに、令法久住のために擬せんと意をのべてゐるのである。こゝに於いて將してこの奥書のいふところに従がひこれを忠尋師の眞撰とし信據すべきであるか。更に吟味する必要がある。

まづこの書の著作された年次はこの奥書によれば保安元年（1190）であつて、四月十五日より起草にかゝり六月十九日には書寫を終へてゐるのである。よつてその間二ヶ月の日子を要してゐることが知られる。該書の著作としては相應のものといつてよい。而して保安元年は四月十日の改元であるから改元直後の執筆であり、二ヶ月後の完成であるからこの点に於いても何等の矛盾を見出し得ない。恰も忠尋師は五十六歳であつた。さきに忠尋師の全生涯に對する全面的考察のもとに於て論究した如く（大崎學報八十七號）師の五十三歳より六十二歳に至るその間は内面的思想組織時代とも云ふべきであつて、前期の過渡的緊張期に於ける同外的果敢な活動は、この期に入るに従つて向内的となり、靜觀的狀態のうちに思索し、思想の整理に努めた結果、そこにそれ等の記録がなされ、著作時代を現出するにいたるのである。斯る生命現象の過程に對する考察の結果よりするも、この五十六歳所産はまた何等訝しむに足りな

50

次にすこしく内容の方面より考察をすると、さきに記した如く本書は現存資料の刊記を有するものうち最初に属するものであることに注目して、書中の思想を検するに、特異の形態としてそこに歴然と破密思想の存することである。(三密破の思想に對する教理史的考察は後に取扱ふ)この思想の存することはとりもなほさず此書の著作されし時期の特性を遺憾なく物語るものであつて、即ち前期に於けるその積極的活動は對外的奮闘に向けられそこに鞍馬寺(元東密に屬す)に對する改宗問題にまで交渉を持するにいたらしめた。斯る事件の後に來れる内面的躍進期の思索時代に入つて、先づ執筆されたとみらるゝ本書に斯る思想的反影の齎らされるはまた必然の數と言はねばならぬであらう。さればこの破密の思想は忠尋師の思想教學の上に於ける一大特色であると共に、それが記述されたる『無縫目』の此期に於ける所産たるを首肯するに足る證左ともなるのである。更にまた該書中の語句の上に就いてみるに、人名に關して左の如きがある。

覺超遺告云

第二ノ下

勝範隨分大事也

同

勝範口傳云

同

蓮實房勝範

第三ノ下

長豪口傳云

第二ノ下

私云長豪最後口傳云

第三ノ下

先師或口傳云

同

先師長豪口傳曰

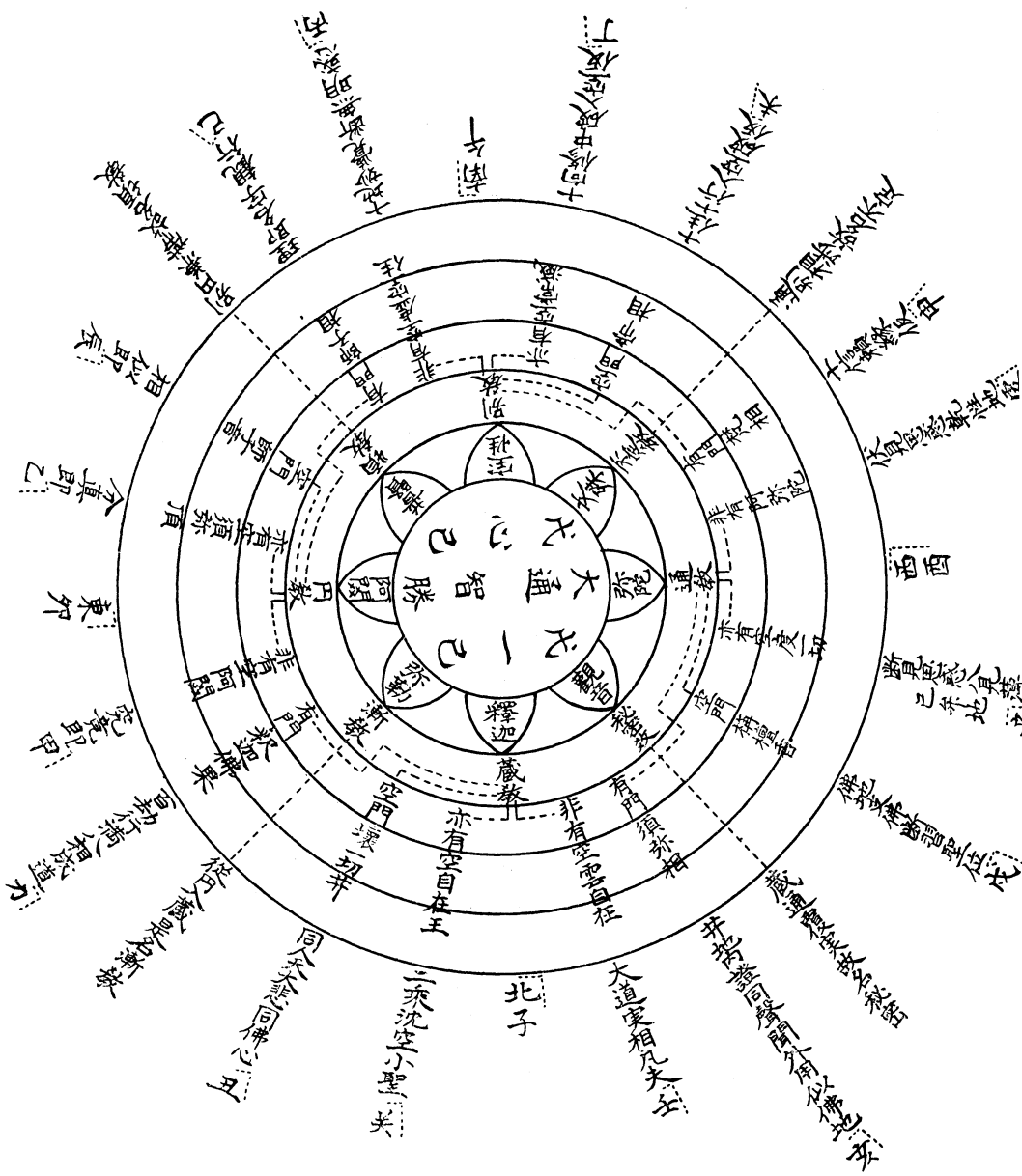
同

等であつて、此外に「傳教大師」があり稀に「慈覺大師」「惠亮」「慈惠大師」「惠心先德」「寛印」等があつて「空海」の名が二箇所に出てゐるのである。茲に於て最も注目しなければならぬのは「先師長豪口傳云」である。單に「先師」と言つたところもあるが長豪師を指して「先師」と呼びその口傳口決を記述してゐるところより見て「私云……」の主人公はとりもなほさず忠尋師となるのを知る。なほ「私云長豪最後口傳云」はその間に於ける歴史性を充分に含有するのとして、學師長豪と忠尋師との關係を明確に物語る貴重なる資料といはねばならない。茲にいたつて最早や『無縫目』の一書、忠尋師の著作として何等の疑偽もなく信據するに足るであらう。なほ長豪師に向つてすでに「先師」と呼び「最後口傳」とあるによつて此の『無縫目』の執筆された以前に既に長豪師は示寂されてゐたことをも看取されるのである。また、傳教・惠亮・慈覺・慈惠・惠心・覺超・寛印・勝範・長豪等の師名のあるのは自らその思想系統のよつて來るところを指すものとして注目されるべく、これがやがて所謂惠心流學派系統を組織してゐる点に於ても大いに着目しなければならない。「空海」は三密破に於ける所破の人としてあげられてゐるのである。なほ末尾の奧書に記されてゐる如く、重ねて『九卷抄』なるものゝ製作を告げられてゐるのであるが、その後大治元年に至つて『法華五部九卷書』が著述されてをり現存してゐるところよりみて、また何等の偽点もない。以上の諸理由よりして『無縫目』は忠尋師の眞撰なりと茲に斷定を下すものである。

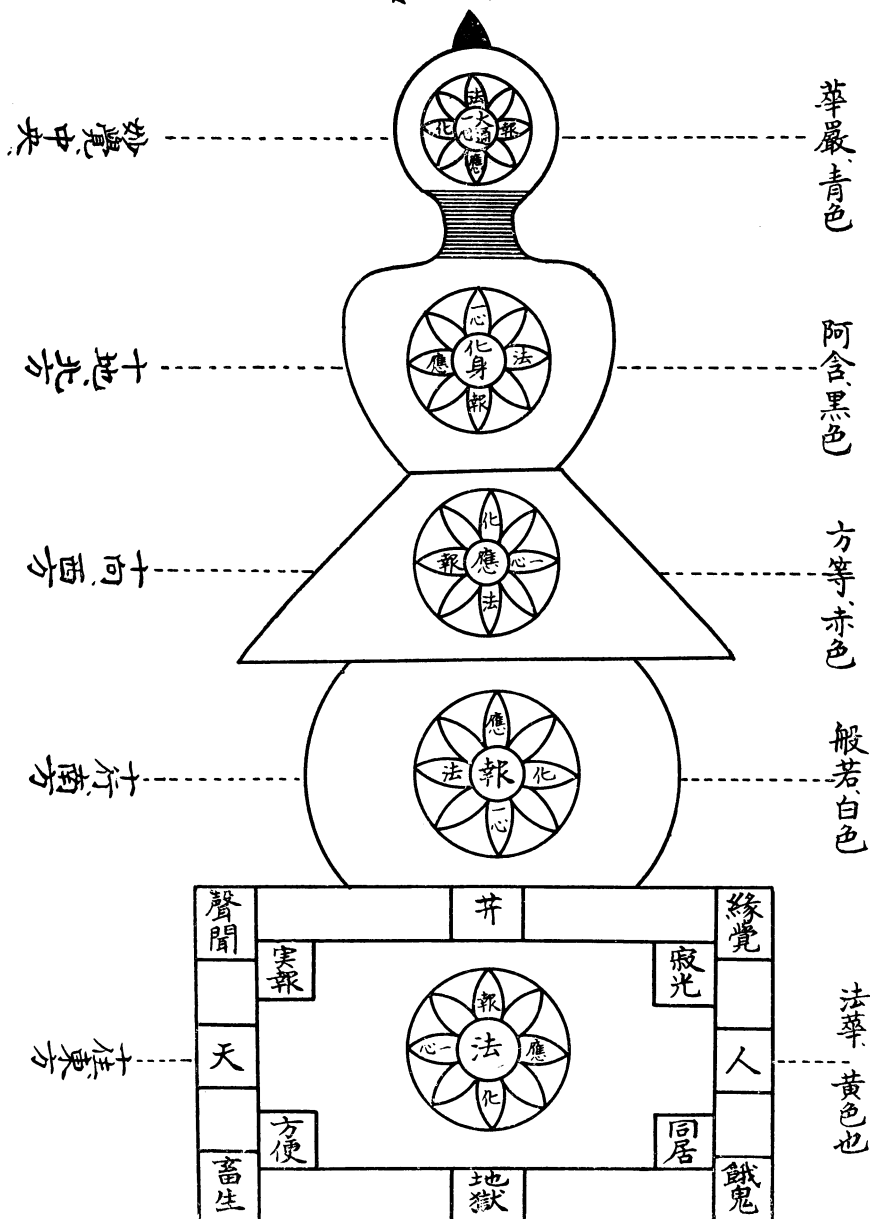
3

以上に於て『無縫目』が忠尋師の著作としてその確實性を把握することを得た。引き続き本書の内容に就きて思想教理の特異性或は重要性を有するとみられる二三の問題を提舉し論述することとする。

本書所論の中に於いて先づ以つて注目すべきは色心二實相論に關す思想である。心實相、色實相、及び色心未分實相は忠尋教學に於ける大綱をなすものであつて、本迹二門教理の捌きを種々なる角度に於て爲されてゐるが、この色心二實相が最も特色をなすものと言つてよい。いま「無縫目第六」同第七」にはそれが具体的、綜合的の圖現に充當されてゐるから、まづそれを紹介することにする。



婆塔寶多



右のうちA圖は心實相圖であり、B圖が色實相圖である。A圖は八葉九尊を中央に横に五輪・五大を表し、B圖は豎に五輪・五大を現し、ともに多寶の妙塔を顯現せるものである。A圖は行者の心性、胸中八葉の功德を示し、これは迹門理觀である。B圖は行者作の當相すなはち住行向地等妙覺であつて、本門事觀の意の現れであるとする。而して約機情、有色心得悟。約佛本意、本迹未分一實相理。約心實相、八葉功德、色實相邊、法界塔婆。

と言つてゐる如く、右の色心二實相は所謂機情の得悟に約したものであつて、それに對し佛意に約せば本迹未分の一實相理であると説くのである。また、

三身、四土、依正二法、但是行者一心異名。

と述べ「正形表、即有情形。有情形色亦國土相」なりとて己身塔婆、法界塔婆を示し、なほ「傳教相承鏡像口決」なるものを記述してゐる。すなはち、

心名天、色名地。色心躰一、是名心鏡。心名本覺、身名本理。此色心者、非佛造非人天作、法爾自然天真法、故心鏡明、故現像名鏡。心像本有、是名無作三月如來。毘盧遮那身土不二、名常寂光、故自然所成三身成道。三身相即、四教互具、故名一家八教法門。互具故不定、不定故秘密、漸頓二教、其意可知。乃被接名別義、只是無作三身本功德也。

とて色心天地躰一にして、本覺の心、本理の身、共に法爾天然天真獨即たり、五時八教の法門また無作三身の本功德なりとなす。斯くの如くにして本迹未分、佛意の境界を主張してゐるのである。なほ、

彼慈惠大師隨分大事也。傳教慈覺御在生時、唯有口傳、不書傳之。末代學者、可信輕之、勿輕慢矣。と述べてゐる。

以上の如くに色心二實相圖を顯すのであるが、本書に於ては更に詳細なる論證的記述をされてはゐない。元來『無縫目』一卷は、種々なる法相を簡單なる口傳的形式のもとに圖示されたばかりであつて、いまの實相圖も亦然りである。然るにこれと關聯をもつところの『法華五部九卷書』には『無縫目』の思想をしてより一層委細に詳述せるものがある。よつてこの實相圖の組織的並びに理論的方面に關する作者の意も、該書を考究することによつて自から明となるからいまはそれに譲つて略することとする。

されど茲に注目しなければならぬのは、本迹兩門の理致を機情に約して斯の如く堅横の塔婆に象徵し、教理の大綱を具體的に圖現したそれについてである。これは言ふまでもなく密教に於ける兩曼現圖の思想より成れるものであつてとりもなほさず圓宗教學の密教的表現と言はざるを得ない。否なむしろ、その教學史上に思想的考察を以つてすれば、密教の上に立たんとする圓宗教學の事觀成立への段階にあるとみななければならぬであらう。これにつきてはまた後に論ずることとする。なほ本圖に於いて更に注目さるべきことは、その八葉九尊の中尊に大通智勝佛を配せる点である。四佛四菩薩の八葉も通途の密教諸尊を羅列せず、殊に中尊大日如來たるべきを排して、大通佛をもつてせるところ、眞言密教より逸脱せる法華圓宗思想への顯揚炳たるものがある。これ忠尋師の教學をして日本天台史上に最も意義あらしめる重要素と言はざるを得ない。先きに一行禪師によりて法華經觀の密教化が計られてより、弘法大師に『法華開題』あり、また慈覺・智證・安然等の上古天台諸師等が、ひとしく密釋をもつて法華の經旨をうかがひ『講演法華儀』等の如きが製作されつゝ全く密教化するにいたつてゐたのであつた。然るにそれ等密教化されし言家の法華經觀に對して、いま本書は全く趣を異にし、法華の教主を餘佛にからず、偏へに一經の旨趣をもつて首尾一貫釋成せんとしてゐることが看取されるのである。されどその教主たる尙ほ未だ迹門三千塵點の大通佛にとどまり、本門壽量

開顯の久遠本佛如來も十六王子として覆講を餘義なくされてゐる。本書は斯くて顯本論史上にもまた好問の一資料を與へるものとして重要視さるべきであらうと考へるのである。

4

次に本書に於いて重要な思想として看取されるのは、その破密思想の鮮明に顯現されてゐると云ふことである。即ち前記色心二實相圖を表示したる後に於て斯の如くある。

右色心實相八葉五大、於諸經中都無顯說。唯在法寶塔品中明了說。三密教輩、取法花經多寶妙塔、已成宗義。空海堅執顯密不同、迷文滯義、慢高見深。門人亦復如是。未代學者勿信於斯、可咲可咲。(無縫目第六)

と。即ち前述の如き色心實相、八葉、五大の説は諸經の中に全く顯說されては居ず、唯だ法華經寶塔品に於いてのみ明さるゝ至上の法門である。然るに眞言三密宗の輩はそれを取つて己が宗義を成じてゐるのであるとなし、尙ほ續いて空海師を所破としてその顯密不同義を難じ、さては「漫高見深、可咲」と斷じてゐる。なほいま一文を掲出すれば答云、多寶佛塔都無密教、唯借法花寶塔中所說、建立三密宗義六大法門。

とて三密の宗義、六大法門の教義は法華寶塔中の所說を借り來つて建立するところのものであり、元來彼家に所藏されるに非ずと斷じてゐるのである。

斯くて法華經多寶の妙塔を以つて諸經不說最勝の教法たるを顯揚し、それによつて色心八葉五大の説を立て、以つて眞言秘教の六大三密の教法を破したのであつた。而らばその所破の密教とは台東兩家の何れにあるかといふに、さきに掲出したる文についてみれば、所破人として空海師があげられてをり、また六大法門を所破法とせられてゐると

ころより考察すれば、専ら東密をのみその對照としてゐる如くみられるのである。然るに二實相圖に於いても言及した如く、偏へに法華の教法を顯揚するに勤めて密教的釋義を用ひず、殊に中尊大日如來を排して大通佛とせる思想より考察すれば、總じて台東兩密をもその所破の對照としてゐるであらうことを推測するのである。本書一篇首尾一貫して法華思想の本門的釋解に終始し、殆んど密教の教理は影を斷ちて依用されてはゐない。茲を以つてしてもその所破の兩家の上に及べることを首肯し得ると思ふのである。されどこれを以つて直ちに忠尋師には全く密教的要素を排除し盡せるかと言ふに爾うではない。前にも一言した如く、既に斯る二實相圖の表示されたるは胎金兩曼現圖の密教思想にその基底を置くものとみなければならぬ。また忠尋師の他の著書の上に於いても密教上の用語を以つて表現し密釋を加へられてゐる場合も不尠看取されるのである。尙ほ前掲文にもある如く、顯密不同義を破せる半面にはまた顯密一致の理を肯定せるかにも推測され得る。されば全然密教を排除し盡すを以つて忠尋師の根本的態度とされたとはならないのである。されどその破密思想の嚴存するのは既に斯の如く歴然たるものであつて、茲にこそ忠尋師の日本天台史上に於ける特異性を見出すと共に、その重要な位置たることを示すと言ふべきである。日蓮上人は既に忠尋師の此點を道破して如斯言はれてゐる。

華嚴眞言等の人々の即身成佛と申し候は、依經に文は候へども其義はあいてなき事なり、僻事の起。此也。弘法慈覺智證等は此法門に迷惑せる人なりとみ候。何況其已下、古德先德等は言ふにたらず。但天台第四十六の座主東陽の忠尋と申へ人こそ此法門はすこしあやぶまれて候事は候へ。然れども天台座主慈覺の末をうる人なればいつわりをろかにてさてはてべき。(大田女房殿御返事 P.1971-2)

と。即ち上人は華嚴、眞言に於ける即成の法門は有文無義なるを指摘し、弘法・慈覺・智證等の諸師は此の法門に迷

惑し、終に理同事異、理同事勝より事理俱勝にまで進み、顯劣密勝思想を以つて法華を墜し、眞言密宗をして強盛ならしむるに至つた僻事の發祥をなすものと破して、それが法流を波む末師に對しては「言にたらず」とて極言をもつて破折を加へられてゐるのである。然るに唯だ忠尋師に對してのみは加擔人としての態度を以つて望んでゐられる。それは即ち「忠尋、申、人こそ此法門はすこしあやぶまれて候事は候へ」とて、斯る密教に對する疑惑不信より破密思想の抱懷されてゐた點を舉示されてゐるのであつて、とりもなほさず本書に於ける忠尋師の斯る思想を目されしと思考するのである。然るに尙ほ評されて、その慈覺末流なるが故に徹底的破折の鋒を眞言教の上に振はなかつた點をも、言葉巧みに表現されてゐる。これまた忠尋師の諸著作の上に遺憾なく看取されるところである。如斯上人の間眼は早くも忠尋師の思想を道破して餘すところがなく、その含蓄多き寸言裡に印象深きものが藏されてゐると推される。然るに古來右の上人の御文に對してその典據を探ねて出典を明示されたものは一つとしてない。啓蒙講師すでに何等の言及するところなく、諸典また未詳としてゐる。以つて本書の秘襲され來り容易に外見を得ざりし結果を物語る一證左とも言ふべきであらう。

斯の如く忠尋師に歴然として破密思想の存したことが看取されたが、茲に注目さるべきはその天台教學史上に於ける重要性である。由來密教は傳教大師入唐四宗相承して止觀遮那兩業を建て、もつて山修山學の規範とされ、また空海師入唐、東密を建立するに至り、眞言密教は吾國に燎原の大火の如き勢を以つて擴まり、その三密事相は時代人心を捕へて平安文化の基礎を築きつゝあつた。天台教學またそれが影響を蒙らざるを得なく、圓仁・圓珍・安然の各師輩出して一は東密への拮抗の爲め、一は圓宗擁護興隆の爲めに専ら密教思想組織へと密度を高めるに至つて、その結果は安然師の四一十門の廣汎なる台密教學を体系付くるに至つたことは更らに多言を要しない。日本上古天台史は斯

くて密教中心の時代と言ふべく、一行禪師に發したる顯密一致の思想は、茲に全く天台法華宗をして眞言密教三密事相の宗と成るに至らしめたと言ふも過言ではなかつた。然るに慈惠大師に及んで叡山佛教は一劃期をなしたのである。師の功業の数々はその政治的手腕と共に徳行を讃へられてゐるが、就中、廣學堅義の論議制度を確立するに至つて法華圓宗の教學が勃興され、密教中心時代より圓宗中心時代への限界をなしてゐると言ふべきである。大師の法資また顯密兩教に巨匠を輩出して、密教に於いては事相の大成を齎らし台密分派の形成を將來し、それに對して源信・覺運兩師を鼻祖とする惠檀の兩學派は顯教圓宗の復興を顯揚し來つて、所謂中古口傳法門の如きが釀成されたのであつた。斯の如くにして時代は當さに顯教圓宗中心へと移動されて行つたのであつたが遂に鎌倉新興佛教の結成を迎へるに至つて、密教は漸くその形骸を残して衰運をみるに至つたのである。されど天台教學史上にあつては未だ全く密教思想の喪失されたと言ふわけではなく、依然としてその底流をなしそれ等の教學の推移の裡に媒養素の役割を演じて存してゐたことを看過してはならぬのである。

然らばその段階に於いて、密教は如何なる取扱をされたであらうか。前述の如く良源師は圓宗教學の勃興に努力されたとは言へ、決して密教排除に勤められた如き形跡は認められない。或は後世よりそれを回顧して其處に密教を疎遠ならしめた結果を見出さんとするかも知れずしも不能ではないが、さればとて積極的破密の思想は良源師に到底認容され得べくもない。然るに法資惠心院源信師に至つては、その教學殆んど密教思想を蟬脱して偏へに顯教圓宗の極理を以つて淨土念佛思想の發揚に勤めたのである。されば師の『枕雙紙』には左の如く述べてゐる。

我祖師天台大師立六即佛。我等今纔聞三諦名字、知我即眞如、六即中攝之者、當名字即始。若以此解在心不忘、假使室手杜口、徒行住坐臥、朝起暮眠空雖送年月歲數、一乘觀慧念々増進、自然流入薩婆若海矣。

と。即ち文中「空手杜口、徒行住坐臥……」とあるのは所謂三密事相を空しくしてこれに據らずとも、只管寶號を唱することにより我即眞如、我即法界を知り、自然に薩婆若海に流入することを得るであらう、とて身口意三密業を修せざることを表明してゐるのである。茲に於て源信師の密教に對する態度は既に游離されてゐることを看取する。師にまた一部の密教關係の著作も殘されてゐないことはそれを物語るところの一證左でもあらう。然るに師に於いて尙ほ未だ顯露に破密の義を説かれてはゐなく、巧みに密教々義を圓宗の教學に應用し來り、本覺思想を組織し高潮せしめてゐるのであるが、其處には最早や三密事相の現實的具象的威力は全く喪失されて問題とされては居ない。さればとて密教への積極的破折的態度をもとられず、只管彌陀法にのみ出離の要道を求めたのである。斯くてその後、忠尋師に來るに及んで茲に始めて積極的破密の思想が顯然として説かれたのであつた。師は、その事歴の考察に於て論及した如く良祐、長豪兩師より密灌を受け、殊に行玄師と共に三昧流の雙璧とされてをり、また岡崎方・千妙寺法流の祖とされてゐる。然るにも不拘師には亦一部の密教關係の述作を見出すことが出來ず、剩さへ如上の破密の言辭を顯説するに於いて、寧ろ師の對密教思想の尋常ならざるを看取すること既述の如くであつた。然らば如何なる事情に起因して斯くも師をして三昧流巨匠たらしめたかを考へるに、それは後世事相分派上に熾烈を極めるに至つた結果取て末流の拮抗がもたらしたところと解されるのである。とまれ師の思想の全般的考察の上に於ては、三密事相の排除の跡が歴然として存し、積極的破密の言辭をさへ吐露されてゐるのを看過してはならぬのである。然るにまた斯の如く忠尋師には破密の思想存すとは言へ、さればとて全く密教思想を離脱せるものかといふに直ちに爾うは斷ぜられない。その口傳法門の組織の上に盛に密教教學の應用されてゐる點に、源信師に相似たるものがあるのである。これ上古以來總密一致を以つて台密の宗是とするところ、何人も依憑し遵奉して訝しまぬものであつて、忠尋師の對密教思想も

未だ完全に此の基礎を覆するものではなかつたのである。茲に日蓮上人の前述の如き觀察も下されるのであつて、含蓄多き批判の語に傾聴せざるを得ないものがある。斯くて日蓮上人に至り陀羅尼藏經の部攝も判ぜられ、統一の曼荼羅の一元化もはかられ純正法華思想の確立と共に初めて絶對的破密の思想が成立されたのであるが、それに趣く過程に於て、忠尋師の如き思想把持者の存することは、また大いに注目されねばならぬと考へる。師の法孫にまた俊範、靜明、心賀等の如き（二帖抄等）破密思想家の輩出するの理の趣くところなりと言ふべきであらう。

以上に於て『無縫目』に含有されたる問題を捉へてその重要性につき吟味し考察をした。なほ論究すべき問題もあるが割愛することにして、いま一書、忠尋師撰と言はれる『天台法門名決集』に就きて發表することにしやう。

5

天台法門名決集

本書には實に重要な問題が多含されてゐるのであつて、それ等に就いて未だ充分なる研究も果し得ず、従つて茲に考證の結果を記述し批判することは避けねばならぬのであるが、いまは一とまづ本書の概要を略記し紹介するに止めて、後日を期することとする。

所見は叡山文庫天海藏。調卷一冊。奥書皆無。寫本年時等不明であるが、天海師所藏本であるところからほぼ當時の寫傳のものと推測され得る。まづ内題撰名を摘記すると、

天台法門名決集 行滿相承 四箇大事 大文大章也。

沙門忠尋記

と記されてゐる。茲に於て第一に注目されねばならぬのは、題下に「行滿相承四箇大事」の割註され、なほその下に「大文大章也」と記載されてゐることである。しかも撰名は「沙門忠尋記」となつてゐる。而して卷中に眼をやれば三十二丁に「依經要門決」と記され、また四十八丁には『大乘止觀決』と掲載されてゐるのである。仍つてその内容方面より考察するに、初丁より三十二丁までは玄義に關する分、『依經要文決』のもと十七丁は文句に、『大乘止觀決』のもと三丁は止觀に關する分であることを看取するのである。斯の如くに本書は三大部それぞれに對する口傳口決よりする末疏たることを知り得る。而して卷頭初一帋は序分ともいふべきものであつて、口傳法門の組織並ひに本書の位置に關して記述されてゐるのである。いまそれを摘記すると、

高師最澄貞元廿三年渡漢唐、遇二師傳宗義、道遂師云一心三觀・心境義・止觀大旨・法華深義、留心此四要、衆義通攝。冒頭まづ右の如く記せられ、道遂師相承「四要」の名目をあげ、次に續いて、

行滿師云宗有四箇物傳、我師智者大師以四惣義通決諸義。其四義者、一傳大師所說三部書義、二傳義道、三傳觀心四授生死一大事一言。

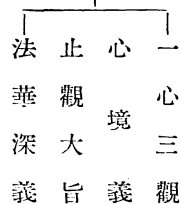
とて行滿師相承四箇物傳なるものゝ名目をあげ、そしてその連文に、

初本書傳者、此亦有種々別傳。一本書通決別義、七面相承是、如別註、二大文大章、三章段別意決、此本書惣別三種傳也。

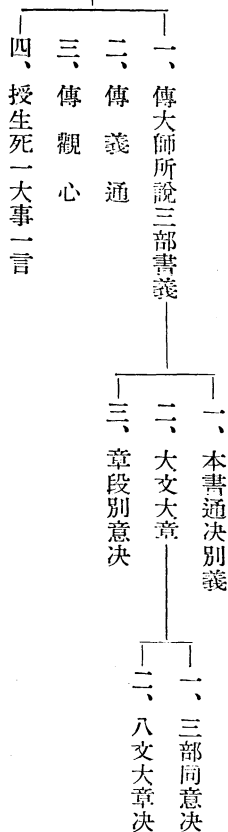
と記述されてゐる。即ち行滿師相承四箇惣傳の第一「大師所說三部書義」または略して「本書傳」と云ふに三傳あることを示し、その名目をあげて前四の物傳なるに對してこれは三箇の別傳であるとの意を記されてゐるのである。ついで「三部緣起」に就きてまた略記されてゐるのであるが、以上が第一帋に述べられてゐるところの大意である。因

みにそれを圖示すれば、

○道邃師四要



○行滿師四箇惣傳



斯の如くであつて、なほ「本書通決別義」の下に註して「七面相承是、如別註」とある。仍つてこの別傳三箇の中の初傳に關してはまた別に存することを知る。而して本書の『天台法門名決集』は實にこの第二傳に屬するものであるのである。その内題下に、「大文大章也」と特記されて居り、また第二丁の本文冒頭の句は「大文大章傳者……」に始まつてゐるに牒してもそれが明かに看取されるのである。而して四惣義の第二、三、四各傳に關しては本書中には何等取り扱はれては居なく、たゞ卷尾に於て簡單なる註書をされてゐるにすぎない。それを摘記すると、

次義通者、十七箇五十二重教相、爲本圖如別記

と「義通傳」に關する條目をあげ、次に「觀心傳」に就きて、

次觀心者、一家行分也、一心三觀、一念三千、乃至、事相別行等如別記

とあり、次に「生死一大事」に關しては、

次生死一大事者、一安心行者有三類（中略）、二五堪三達傳如別記、三誦經一時禮拜行、法花生死一大事妙行也。

右の如く記されてゐるのみである。「如別記」と註書されてゐるところよりみて、それ等は各々別本をなして存したものと知る。

斯の如く最澄師入唐して道邃師より「四要」を相傳し、行滿師よりは「四惣義」を相承した、而して「四惣義」の「本書傳」にはまた三箇の別傳があり、第二傳の「大文大章」こそいまの『天台法門名決集』である。との所説が卷頭卷尾の二箇所の抒述によつて明らかに看取されるのであつて、茲に於て先づ本書の口傳法門に於ける組織的位置が、また明らかにされてゐるのを知らねばならない。

されば如上の記事並びに本文等に就きて、次に重要な諸問題を提擧することとする。まづ第一に注目されねばならぬのは、最澄師入唐して遂滿二師に偶ひ、道邃師より「四要」を相傳したといふそのことは、日本天台口傳法門の通格であつて、諸書共通の學説でもあるのは今更贅言を要しない。それが原據はまた傳教大師著と傳へられてゐる『修禪寺決』等に發することも既に周知である。然るにいまその遂師相承「四要」に對して、行滿師の「四惣義」（亦名四箇惣傳・四義）なるものゝ相傳を立てゝゐることである。併かも「四惣義」のもとに三箇の別傳を開いて、惣別合して七箇の傳をなしてゐる。さればこの組織はとりもなほさず遂師相承の「廣傳四箇大事」のもとに「略傳三箇」を開き「七箇法門」を立つると相對的なるに注目されねばならない。即ち「遂師七箇法門」に對して「滿師七箇法門」が茲に存するのを知る。從來「惠心流七箇法門」なるものは『修禪寺決』『漢光類聚』『二帖抄』並びに『等海口傳』

等により、道邃師相承弘仁七箇の法門として、その學派的組織体系の存在は重大視されて來てゐたが、行滿師相傳に斯る組織的口傳法門の体系の存することは何等知られてゐなかつた。いまこの『天台法門名決集』に於て斯の如き整然たる組織形体を持つものゝ存したのを發見した次第であつて、茲に本書の重要性をまづ提擧せねばならぬのである。

次に問題となるべきは、別傳三箇のうち初傳たる「本書通決別義」のものに「七面相承是如別註」と記述されてゐる點にある。「七面相承」とは傳教大師撰として『三大章疏七面相承口訣』なるものが全集に收載されてゐるが、それが恐らくはいまの「別註」なるものと考へるのである。他に斯る抄物の存在するを未だ發見し得ず、また兩者の内容を検するに同一思想傾向にあり、緊密なるものが存するのを見出すからである。果して然りとすれば兩者は所謂姉妹篇であることを認めねばならない、この點に於てまた本書の重要性を看取するのである。

次に本文の内容に就きて一瞥するに、その文体、用語の上に於て直ちに感受されるところのものは『修禪寺決』と酷似する點、また『漢光類聚』とも共通する點の多々存することである。いまそれ等に就きて一々典據を擧ぐべきであるが繁に亘るを以つて割愛し他日全き研究の成果を期することとする。

上記の諸點と關聯して、より重大性を逸してならぬのは本書の撰者の忠尋師となつてゐる點である。從來忠尋師は惠心流中古の名匠として、また事實上の惠心流學派祖として認容され來つたことは是れ亦多言を要しない。而して惠心流とは、その學派的解釋に於いて、道邃師相承の思想体系に基底付けられ、出發してゐるとされてゐる。これに對して檀那流は、佛立和尚行滿師相承の法門に在りとされてゐるのであるが、此の學派的解釋の建前を假に肯定するとせば、茲に本書の如き行滿師相承の法門に對する著作に「忠尋記」とあるのは甚だ首肯され難いこととなるのである。然るに立據を轉換して考察するならば、斯る惠檀兩流學派の根據を遂滿二師別傳に出發するとする學説は、其處に何

等の歴史性を持たず、それは後世の學派對立期に於ける専ら惠心流の所産なりとして眺める場合、ひいては忠尋師の學派的存在に對してまでも自由なる觀察を下され、從つて斯る行滿相承法門の著書に對しても猶ほ撰名の如く忠尋記たるを肯定されて然るべきとなるであらう。將して此等兩說に於てその決定を如何にすべきかと本書に課せられたる實に重要な問題である。

尙ほ再度言及し注目を喚起すべきは、本書と『三章疏七面相承口決』とを一具姉妹篇と認められたる點、『修禪寺決』と相似たる點、並びに『漢光顯聚』と關係を持すると見らるゝ點、斯る諸點より考察して此等の書は或は同一系統の所産に屬するならんと推測される點にである。而して一は道邃師相承に假り、一は行滿師相承に、一は傳教大師に假托し、一は忠尋師撰とする。内容の上に於てまた一は傳法四箇決、七箇大事であり、一は四箇惣傳、七箇法門（七面口決）である。斯の如く兩者相對的部面の多々含有する點によつて、此等兩者には必ずや緊密なる關係の存するであらうことを想定せざるを得ないのである。されば該書等の間の關係交渉並びにそれ等の撰者、時代等に就きての究明は、總て日本天台傳法門研究の上に、將亦惠檀兩流學派發生史的研究の上に、根本的解決を齎らす一資料として最重要性を持つものと斷言して憚らない。今はたと本書の如さが存すると、また斯る重要性を内包する問題を提擧するに止めて他日の究明をまち詳論を期する次第である。（續）

正中山藏「正義抄」に就て

齋 藤 要 輪

1

正中山法華經寺所藏の法華問答正義抄は、等覺院の開基日全上人の著。全二十二卷であるが、そのうち一、四、七、十四、十九の五卷を闕いて、現存するのは残る十七卷である。但し、全師の直筆ではない。法華經寺が未だ本妙寺の稱呼にあつた時代、八世日院上人が明應七年に門下の手を以て傳寫したもので（第十三は文明三年）、應永年間の寫本の再傳である。即ち、

第一………缺 本

第二―方便品（臆疑致請下）

第三―譬喻品（卷末云、正慶二年癸酉五月七日註之了
………少納言律師日全）

第四………缺 本

第五―藥草喻品、授記品、化城喻品（下二品缺）

第六―五百弟子品、人記品、法師品、見寶塔品

第七………缺 本

第八―壽量品、分別功德品

（卷末云、建武二年乙亥六月十日註之了。予當四十二ノ
厄、偏爲後生ノ問法藏一七日參籠之第六日也。日全。）

第九―隨喜功德品、法師功德品、不輕品、神力品、囑

累品、藥王品、妙音品、觀音品

（卷末云、建武二乙亥八月二十三日書之了、日全註之。
六月廿三日スハノハウリ□□殿ヲ打落了。
七月廿二日足利殿日本國ノ政所ヲ賜テ關東發向了
八月十八日鎌倉入也）

第十一—陀羅尼品、嚴王品、勸發品

(卷末云、建武二乙亥九月二日當日正第三一部功)
畢……日全

第十一—無量義經

(卷末云、曆應二年乙卯三月十二日於下河邊莊大)
(和田郷高須賀村註之畢)

第十二—普賢經

卷末云、曆應三年庚辰正月八日記之、定悞有之
歟、清書時可取捨之而已、於下河邊大和田郷高
須賀村
右爲報釋尊及大聖人之御恩、於法花八卷開結二
經抄記之有十二帖、各可有悞、若下遼清書者後
見取捨之耳。日全

第十三—淨土宗

(卷初云、曆應四年辛巳十二月一日、於下總國八)
幡庄今嶋田坊始之
卷末云、曆應五年壬午正月二十五日記之了

第十四………缺 本

第十五—眞言宗

(卷初云、曆應五年壬午三月二十九日、日全)

等である。缺本を何處かで補ふことが出来れば有難いのであるが、未だ見當らない。私が立正大學から派遣されて法華經寺方丈の一室に淨居、此書に就いたのは昭和六年の夏。讀みにくかつたので、刻苦、翌年四月に漸く轉寫を完了した。その後私は身延山へ遣はされ、身延文庫目錄中にこの書名を見出して驚喜したが、抜いて見ると中山所藏のう

第十六—同

(卷初云、康永元年壬午八月二日始之、日全)

第十七—禪 宗

第十八—同

(卷初云、康永二年癸未十一月二十三日始之、日全)

第十九………缺 本

第二十—天台宗

卷初云、康永三年甲申閏二月十一日始之、日全
卷末云、千時康永三甲申三月十三日書之、病中
故愚鈍爲闇惑文義參差歟、庶後學取捨可屬有
緣偏爲群生利益也而已、日全在判

第廿一—同

(卷初云、康永三甲申三月三十日)

第廿二—法華與天台止觀勝劣當家觀心

(卷初云、康永三甲申卯月二十八日始之、日全)

ちの一冊を傳寫したものに過ぎず、喜んだゝけに落膽したことであつた。何處かに存してゐないものであらうか。或はこの邊に組織宗學の第一歩が言はるべきであるとすれば、腐蝕に任せるには餘りに惜しいことである。

2

等覺院(妙覺寺)の開祖日全上人の傳は未だ詳かではない。一之江に寺は嚴存して、田中智學師得度の處としても知られてゐるが、火難等に遭つて、今は全師の眞筆本尊以外には據るべきものも残つてゐないやうである。

前掲各卷の奥書に従へば、正義抄は祖滅五十年の頃、正慶二年に起稿されて、第十卷前後は建武二年。(中山法藏に參籠しての執筆は第八卷奥書に見られるところである)それから三年置いて第十一卷は曆應二年、下河邊莊大和田郷高須賀村に於て書かれた。第十二卷も同年同處であるが、こゝで前半の功を果し、法華經開結を併せて十卷の註記を了り、次の第十三卷からは筆硯を新たにして他宗教義の批判に移り、曆應四年歲暮、下總國八幡庄今嶋田坊に於て起稿されてゐる。續いて第二十二卷を稿了した康永三年まで同處での執筆と思はれるのであるが、第二十の奥書では、「病中」とある。建武二年に四十二の厄とあるから、この時は五十一歳か。これが致命の病とすれば、中山の過去帳に「等覺坊日全、正義抄作者、五月二十三日」と記されたのは、康永三年五月二十三日の遷化と想像される。この想像を是なりとすれば、その年四月二十八日に始められた第二十二の卷は辛うじて擱筆されたのであつた。斯くて正義抄は正慶二年、全師四十歳の頃に筆を起されて、康永三年五十一歳の時に及び、その間中断はあるが、約十二年に亘つての沈潜勞作であつた。

時代は、北條家滅亡して建武の中興となつたが、足利氏興つて朝廷は吉野に遷り、曆應・康永等北朝の年號が行は

れてゐた際である。されば、抄中にも具體的に時代色を反應して、例へば第十五卷眞言宗を破するの條には、

「一義云如_レ難_ノ者抑國主等捨_ニ眞言等宗_一敬_ニ當家_ヲ給_ニ賊_一如何 若不_レ崇_ニ敬_一當家_ヲ者由愛敬惡人_ニ 實_ニ不便也而_ニ尋_ニレバ國主_一御歸依_ヲ者禪律念佛眞言也就中大覺寺_ニ法皇當今更自行_ニ眞言_一給_レ何_ヲ崇_ニ敬_一法花宗_ニ給_ニ々_一耶 示云當今_ノ者今吉野_ノ先帝_ノ御事也此_ノ帝_ハ登位已前_ニ於_ニ東寺_一御灌頂_ニ灌頂_ニ時正踏_ニ給_ニ々_一大地_ヲ故_ニ京童等云眞_ニ土_一走_リト大王_ノ雲_ノ_ニ昇_ニ々_一正_ニ中_ニ關東_ヲ咒詛_シ給_ニ々_一自_ニ建_ニ壇行_ニ眞言_ノ都山門_ニ無_ニ其_一穩_ニ然終_ニ帝位_ニ子_ハ取_ニ々_一其餘_ノ諸國如何 或_ハ死或_ハ今修羅眼前事也 法皇_ノ御例_ニ少不贊_ニ也正中_ニ來京都山門諸國御歸依_ニ瞻_ニ々_一眞言_ヲ今曆應五年壬午 二十間年眞言_ノ力_ニ國中_ノ災難不_レ可_ニ稱計_一者也此間法花宗崇敬_ニ云事全_ニ無_ニ之何_一云由愛敬惡人耶 一義云弘法大師法花經_ニ無明_ノ邊域非明分位_一被_ニ書_ニ此_一何_ノ經文耶 一義云現證既_ニ顯然也何不足_ニ尋_ニ經耶隱岐法皇吉野御帝云々」

等と記してゐるのである。かゝる戰塵不安の世相を直視しつゝ、全師はよくこの大著を果したのであつた。

3

卷第六文中に「私云久遠寺_ノ學文_ノ時口傳云……」と記し、卷第十六文中には

「私云久遠寺_ノ學問時進師示云大聖人_ノ御意_ニ有_ニリト與奪_一見_ニ々_一與_ニ大日_一釋迦_ニ垂迹也奪_ニ釋迦_ノ所從也云々」

等とあるのを見れば、全師は嘗て身延に學び、三世進師に就かれたことが明瞭である。第十二卷末の

「正月九日夜寅時計夢_ニ久遠寺御橋_ニ此方_ニ過_ニ々_一半作_ニ堂_一雜室多_ニ之_一堂_ニ自_ニ至_ニ事_一由來_ヲ有僧_ニ問_ニ僧答_ニ云進師_ノ建_ニ立_ニ戒壇院也_一不_レ遂_ニ本望_一有_ニ遷化_一等云……」

等の文も亦、全師が身延に在山した日々を裏書するものであらう。然もこの夢想は、身延五世臺師が夢み、十一世朝師に實現せられた大伽藍建立の因縁に通じて、奇しきことである。

中山三世の祐師は千葉家の出を以て學德信望篤く、身延へは本寺の禮を執つたのであるが、全師は來たつて中山に投じた。抄第十五卷には

「元德二年二月十日於ニ本妙寺對ニ祐師此宗沙汰時難答之」

等、以下眞言宗の事を談じてゐられるから、正義抄起稿より三年前の此頃には、既に中山に在住されてゐたやうである。

「進師云大聖人故老僧日向相傳有之一切草木樹林瓦礫山河大地人畜等皆天ノ月ニ歸リ天ノ月大海ニ移リ互具圓滿融ノ萬法不闕滅ヲ海空ト云也 己上師傳也」(第十一卷)

等から推せば、全師が身延に學んだ頃は向師遷化の後であつた。抄中、殊に各宗批判に際して、進師云・祐師云とその義を引用、その後へ私云、と加へて、別に向師を擧げないのも師承の程を明かにするところである。

擬て又、全師の叡山留學は、身延のそれと先後いづれであつたか。

「予住山時此ニ義ヲ習シニ義中ニ尙ヲ應身ト云義ヲ尊高ニ習シ也」(第六)

「私云本迹ノ不同事ニ惠心且那異義也予住山ノ時ニ兩流俱ニ傳受之」(同)

「又私云予住山ニ本院西谷也彼谷ニ且那流ノ中ニ智海末弟共也」(第八)

「己上住山時經藏坊致口傳之通粗註之天台宗ノ最極秘藏也」(第十一)

「私云予住山時問ニ禪美律師」(同)

「私云予住山時覺林坊禪美示云密宗、東天共存三義也二、釋迦大日實各別也二、大日、本佛釋迦、垂迹三、本門顯本、佛、大日、一体也但於一體、尚有勝劣、法花、理、是、事理俱密佛也云々私云降三世會釋及略頌、釋、別佛、見、也但依經本證何處、有之耶若無本證、不可用之也」(第十六)

「予住山時經藏坊顯圓堅者云禪宗天台宗兩宗各有勝劣、一偏、不可破之云々予反問云抑禪宗天台宗勝ヲカサム處、何、耶教外別傳云配立歟若又教內、楞伽經等權經勝ニ法花經ニ處如何經藏坊示云達磨西來直指人心見性成佛云直指ニ心性不ニ遊教經ニ立處是也天台宗、以ニ八教ノ經ノ心性ノ月ヲ濟ト云故禪宗ハカサムト覺テリ云々予云此義大謗法也經論及宗釋、且置之先、予住當山、何、背山家御本意、耶山家、入唐、禪天台等眞言菩薩戒等ノ宗相傳、歸朝ノ後捨禪宗等耶法、但弘ニ通天台一宗、隨テ依馮佛說莫信口傳ト云テ尤モ非レ破ニ教外ノ邪義ヲ耶加之天台法花宗諸宗、勝事、所依經ニヨルナント自稱シ、事法花眞實、妙文、故也然、直指ニ心性、此ノ一段禪宗勝ヲ云事尤モ謗法也心性ト者妙法也妙法、釋尊及三世ノ諸佛ノ本意也天台、依ニ此妙法、立ニ一心三觀、一念三千、尤モ釋尊所立心性是也達磨所立ノ心性教外天魔ノ所爲ノ心性也佛說分明也教內ノ心性權教權門ノ廉心ノ心性也何、此等ノ顯着ノ文義、違背ニ禪宗勝ヲ處有レ之云耶ト云、無ニ反答ニ腹立シ予所ニ相傳門跡ノ重書等奪取ヲ以テ淨火ニ可レ燒レ之由高聲ニヨバハル及ニ夜中ニ入ニ火鉢ニ燒畢次ノ日經藏房他行之間、見レバ之段ノ聖教ノ破壞シタルヲ燒テ予相傳ノ書ヲ不レ燒也」(第十七)

「雖然予住山時林泉坊未流ヲ受習故、無ニ淺深相傳、勘諸文也下可レ註之……以上且那流約文義也本院西谷ノ文義之畢然、傳ニ一卷書ヲ號ニ本流四ヶ大事ノ本迹、初番章也今略ニ義勢ニ可レ任ニ文證ニ也……以上本院西谷文義等也本迹二門實相ノ理全、無ニ淺深不同ニ云也云々」(第二十一)

叡山では西谷居住のこと、惠檀兩流學文のこと、經藏坊顯圓堅者や覺林坊禪美律師に問義せられた事等は、以上に略示されてゐるのである。これらを以て

「私云久遠寺談義ノ時予對ニ進師ニ問云ニ義俱是實義也耶又有ニ是非耶 師云宗論ノ時、用否可レ依レ時也但以レ義約佛ノ化儀ニ一往ノ義也次ノ義ハ約ニ佛ノ本意唯一佛乘ニ再往ノ義也 予云有人ノ云有名無實ト云テ更無ニ權教ノ益ニ云事ハ全分非義也所以ニ三車ノ元ノ有名ノ無ニ實體ニサレドモ諸子各々出ニ火宅ニ也化城ニ有ニ化體ノ無ニ實體ニサレドモ至寶所ニ也三乘ノ權法雖ニ有名無實也ト現當分ノ益アル也依有名無實 更無ニ得道ニ云事ハ僻案ノ義也如何 師云此義ハ更ニ不知當家ノ淵底ノ義也若用ニ爾前得道ノ者他宗ト何ノ別ヲシ耶依有名無實無得道ノ經論釋等勘文成徒施耶」(第二十)

等に窺はれる態度に對する時は、初め叡山に學んで後に延山に歸入したかのやうにも感じられるのである。

「住山已前ニ予武藏國モロツカノ所化中ニ仙波修業者來至ニ大旨無ニ殘處ノ論ニ談之」(第二十二)

「私云此ニ文予之所持ノ本ニ全無ニ此文ニ予ノ本ニ亥年住山之時無動寺ノ十妙房ノ本ニ書之畢テ復三塔ノ諸本ニ校之畢」(第二十二)

後文の中の「亥年」が誤記でないとすれば、元亨三年は癸亥で全師三十一歳、中山祐師の對談した元徳二年に先立つこと六年である。武藏から叡山へ、そして身延へ又中山へ、と見るのが順序であらうか。この亥年を更に一周り若く取れば、慶長元年辛亥で全師十九歳のやうである。扱て又、何故、叡山から身延へ歸したのであらうか。

4

法華問答正義抄の名が示す如く、問答體の叙述を以て法華の正義を顯揚するところの斯書である。先づ各卷の要目

を掲げて内容の概観に備へよう。

第二 方便品 臆疑致請下

- 一、爾前今經共難解之法歟
- 二、經云佛說一解脫義我等亦得此法到於矣^々何云無得道耶
- 三、經云自說得如是等事何云禪天魔所爲耶
- 四、三請二止事 華嚴自法華勝耶
- 五、五千起去事法華簡機歟
- 六、經云諸佛隨宜說法意趣難解事
- 七、經云汝等當信佛之所說事
- 八、經云是法非思董事何分別之爲他說之信之耶
- 九、唯以一大事因緣故出現於世文集
- 十、諸佛如來但教化菩薩^々文意如何
- 十一、經云無有餘乘若二若三^々文意如何
- 十二、於一佛乘分別說三事
- 十三、問今經正決定性ノ二乘成佛文有之耶

正中山藏「正義抄」に就て

- 十四、經云若遇餘佛便得決了^々何限一佛耶
- 十五、問何限一經一佛謗他經他佛二耶
- 十六、問今時有三失之人耶若有之何不令發遣強說法華令謗耶
- 十七、經云諸佛所得法無量方便力而爲衆生說^々何設方便耶
- 十八、經云鈍根樂小法事
- 十九、經云說時未至故事
- 二十、經云十方佛土中事
- 廿一、經云十方佛土中說佛智惠故爾前法華佛惠是爲同爲異耶
- 廿二、經云終不以小乘等云々付之文意、爾前非小乘ニ見タリ如何
- 廿三、若人信歸佛^々何云無聞等二耶

廿四、問今經意說印眞言ヲ耶

廿五、經云我本立誓願事

廿六、經云若我遇衆生盡教以佛道文衆生成佛下種限法

花限歟

廿七、經云我爲設方便說諸盡苦道文何云方便無得道耶

廿八、經云唯一無二乘文會二破二ノ一乘說歟

廿九、經云更以異方便助顯第一義文異ノ方便ト者何物耶

三十、經云或持戒忍辱精進禪智等文何云國賊天魔所爲

等耶

卅一、經云入無餘涅槃文文意如何

卅二、經云一稱南無佛文何云無間業耶付種斷開會事

付已酬未酬事

各題下に台家の疏釋を以て明斷を與へてゐるのであるが、十一下に於ける爾前法華之圓同異に就いては最も力説を加へ、進師の抄文及び唱法華題目抄の文等も此處に引用した。卷末に

「建武四年丁丑十一月二十六日夜夢見故僧ヲ（大聖人）同夜夢或僧問予云天台宗ノ祖師ノ下何云ヲ聖人ト耶 予答云抑難意據天台聖人依經一經ナレドモ所立既各別也何ゾ天台宗ノ祖師ト云耶難歟條ヲ取然也ト云時サテハ以ニ所立各別ヲ一宗ノ師トスマジキナラバ不輕菩薩釋尊天台等ヲバ法花ノ本師ト不レ可爲歟所以不輕二十四字釋尊存略

卅三、經云若有聞法者無一不成佛事

卅四、經云知法常無性事

卅五、經云佛種從緣起事

卅六、經云雖示種々道事

卅七、經云於三七日中事

卅八、經云喜稱南無佛事

卅九、種云諸法寂滅相事

四十、經云讚示涅槃法事

四十一、經云鈍根小智人。不能信是法事

四十二、經云於諸菩薩中正直捨方便事

四十三、經云諸佛興出世事

定六萬九千三八四天台、一心三觀一念三千聖人、只五字、故也、答成了已上、夢了覺悟後思案之、雖云相承法門改轉惠門已來既依大論、釋、始、用與適時等、疏釋案之了」

等と記すところにも、天台より一步を出でむとする氣魄の思ふべきものが見られよう。

第三 經二初品之長行處

一、我昔從佛事

二、經云思惟取證事

三、將非魔作佛事

四、身子授記歷劫也何云疾成耶

五、花光如來何說三乘耶

六、門々不同也何唯有一門耶

七、七寶大車事

一ノ下にて身子の領解を論じ、

「經ノ深意ヲ勘テ判モテ上ニ何不可有ヲ耶但進師御抄ニ舍利弗不可ノ定ニ見タリ又祐師ノ御義モ其定也」
とする点興味ある叙述である。

第五 經 三 三 品

八、三車四車義

九、問三車方便無得道者何出分段耶

十、問三乘法無間業者何稱歎聖衆耶 又得無量樂耶

十一、問若實方便無得道者何出三界險道得涅槃樂耶

十二、經云悉與諸佛禪定解脫等娛樂之具 又何云天魔所

以耶

十三、問法花經、安穩ノ法也、云文義如何

藥 草 喻 品

題下三釋事粗注之畢

- 一、經云如來真實功德誠如所言事
 - 二、經云若有所說皆不虛也事
 - 三、問述成段、法說開權顯實相如何
 - 四、經云如來觀知一切衆生深心所行通達無礙事
 - 五、經云一雲所雨稱其種性而得生長花菓敷實、事
 - 六、經云隨其所堪而爲說法種々無量皆令歡喜事
 - 七、經云現世安穩後生善處事
 - 八、經云如來說法一相一味事
 - 九、經云種相體性事
 - 十、經云如來知是一相一味。終歸於空事
- 三の開權顯實下にては、

「尋云此開會、經文並釋意開爾前圓」耶 示云天台宗ニハ多分不開云也然ニ當家ニ尤可開理也云々此條抄第二ニ私勘文注之畢可思之」

として更に詳説を加へた。又、七の現世安穩の問題は最も力説するところ、

「二義云 代々相傳ノ義也 抑所依經、現世安穩等ノ法ナレドモ行者ガ謗ナル故ニ現世不安穩後生不善處ト難敷若爾也ト云ハサテハ當世ニハ下一同法花誹謗ノ大罪ニミロシ 現世ニハ亡國王臣不レ安萬民可相苦惱ニ云ニ普合シテ國ニ災難來リ疫病飢饉自界反逆等ノ種

- 十一、經云汝等迦葉甚爲希有事
- 十二、經云不務速說事
- 十三、經云惠雲含潤事
- 十四、經云皆令離苦得安穩樂事
- 十五、經云甘露淨法事
- 十六、經云無有彼此愛憎之心事
- 十七、問爾前今經相對論機不機之時何爲我等相應耶
- 十八、經云能得涅槃起六神通及得三明事
- 十九、經云復有住禪等
- 二十、經云汝等所行是菩薩道事

々ノ災難來リ現シ亡國勿論也耶 此段治定シテ後還ル當家ノ謗法ト云ヘ既依ニ佛説ニ豈自立ナラン耶 是法体
可勘出之 進師云若法体、安穩ノ法ナレドモ有ニ行者ノ失ニ故ニ不ニ安穩ナラ難セバ尤可レ用此義也云々」
方便段也 諸宗謗法證據一々ニ

等には進師の指南があり

「彼承伏シテ云法花安穩ノ法ヲ汝何ゾ不レ祈ニ國家ヲ耶不知恩也如何 示云汝難神妙也今當家ノ立義本意是也而ニ先師御代
作安國論ニ奉最明寺入道殿ニ依不レ用レ之今又然也而ニ祈國事師檀ノ相應シテ可レ成也已ニ不レ被用何ゾ可レ祈レ之耶 彼云サ
ラバ汝何分ニ祈レ之ヲ不ニ安穩ナラ耶 示云夫日月ノ光明、不レ行ニ淨穢ノ處ニ壞劫ノ火ニ三善ニ惡都ヲ無レ所殘而ニ天下一同ノ災
也何直ニ風雨ヲ耶不輕々毀ノ衆信伏ス云、共尙千劫墮獄ス而我等今生謹雖ニ信行一過去謗法大罪依難レ消今世ノ諸人ト俱ニ
受苦也」

等の問答からは、開目鈔、法蓮鈔、富木殿消息（治病事）祈禱鈔等の諸御書を引用し、轉重輕受の諸經疏を擧げて

「以上此等ノ文向師ノ御勘文ノ通也」

と結び、次いで

「祐師仰云當世祈ニ現世ヲ人設ヒ己意ニ如說修行ニ思フニ及文理ノ意趣ニハ也」

等と述ベ

「但大聖人ノ御書、既ニ強盛ニ申セト云々 則是如說修行也 祐師云水成レ湯ト豈非ニ火用ニ耶雖然薪少レ火不盛ナリ何ゾ水成ニ大

炎湯ニ人法如レ此行者ノ信薪不强盛者罪福不レ可レ得ニ感得ニ云々」

等、析伏立行を強調してゐる。九の下には相對種ノ開會を談じて

「示云爾前ノ圓ニ不レ可レ明云事、經釋定判也抄第二卷ノ爾前圓ノ開下ニ注之畢 但引ニ證文ニ釋ニ法花一時ハ他經他論ノ何ノ文

ヲモ引テ證シ之事一家ノ常習也謂ニ壽量品ノ無作三身ノ證據ニ成論乘如實道來成正覺ノ文ヲ引ケリ可思之」
等と云ひ、文中には開目鈔をも引いてゐる。又

「次御書ニ可レ明テ爾前ノ圓ニ二種ノ開會ト云事、予未此事不ニ師傳ニ但案ニ立當家廢立ニ物法花已前ヲ方便無得道ト立ル事殊更ニ爾前ノ圓ヲ專ニ云々但今ノ御書ハ一往與テ論シ之ヲ時ハ他經ニハ但記善不記惡ヲ善人ニ記ハ現文彼經々有ハ故付テ現文ニ且ク種類可ト有書ト也此事不レ限ニ聖人御一人ニ天台ノ釋義皆以テ然也」
との下には始聞佛乘義が引用されてゐる。

授 記 品

題下有四悉檀釋也

- 一、疏云他經但記菩薩不記二乘事
- 二、問法花速疾頓成ヲハ三周聲聞何送三千塵點劫數耶
- 三、大王膳事

化 城 喻 品

題下釋權數相事

- 一、經云十小劫跏趺坐身心不動事
- 二、經云深妙禪定六通三明事
- 三、問大通三轉十二行法輪時有三乘益耶
- 四、中間逢值三類事

- 五、西方二佛一名阿彌陀事
- 六、經云了達空法深入禪定事
- 七、經云便集諸菩薩及聲聞衆爲說是經文言如何
- 八、經云爾時導師。即滅化城事付五百十一導師險難ノ事

九、問爲誰人說化城權耶

十、經云分別眞實法菩薩所行道矣指何法耶

右二品は目次のみにて、遺憾ながら内容全紙を失つてゐる。

第六 經 四 四 品

五百弟子品

一、從佛聞是智惠方便事

二、隨順世間若干種性事

三、常以二食事

人 記 品

一、新發意菩薩等事

法 師 品

一、五種法師要文

二、品來意並流通事

三、告八萬大士事

十一、經云唯有一佛乘息處故說二事

四、內秘菩薩行事

五、自謂已得究竟滅度事

六、即得阿羅漢道事

四、一句一偈事

五、初隨喜品相貌事

六、滅後師相貌事

七、逆順罪福事

八、則爲如來肩所荷擔事

九、已今當事

十、秘要之藏事

十一、猶多怨嫉事

十二、即得究竟事

右の中、九・十・十一等は逸文。十二の下には

「就中今ノ時、教機時尅教法流布ノ次第相應ノ時尅也ト云事、既ニ御勘文也何無即得究竟人ニ耶」
「傳云在世、當機滅後、一向結緣衆也但取ニ結緣衆ニ有ニ利鈍、取ニ利根ニ可有ニ三品上根、一生得脱ニ可有ニ之歟其上上根ト者非ニ我等ニ是ニ相似ノ位ナルベシサル時、德薄垢重ノ我等ニ非ニ之也四信五品抄云々」

等述べられ、十八の下には

「難云汝ガ先師聖人、廣說法花經、弘經ノ師也其上結要付屬ノ地涌大士上行等ノ垂迹ト號ス何無ニ比德ニ耶 示云付ニ此事ニ可レ存ニニ義ニ也一義云本地上行菩薩垂迹ト云事、實然也但今垂迹ノ面、全非ニ觀行即位ニ故ニ不レ具ニ此德ヲ歟末法、一向德薄垢重貧窮孤露ノ下ナル故ニ應ニ同シテ之ニ本高迹下ノ弘經ナレバ不レ具ニ五事ヲナルベシ一義云本既等覺無垢ノ菩薩也設ヒ示同凡夫ノ時也トモ何ゾ事相ニモ少々此德無レ之耶是以爪ノ上ノ土ヨリモ可レ少々信者既ニ道俗莫大也豈非ニ其集聽此義ニ耶此外ニ龍口ノ光物大星ノ來下等委御書並傳、如也云々但受ニ三類ノ強敵ヲ頭ノ疵等ニ度流罪等ノ難、況滅度後ノ鉢ニ當ル弘經ナレバ尤相ニ叶今時ノ弘經ニ正像二千ノ法花行者惠門南岳天台等ニハカカル無ニ大難ニ却テ具ニ五事ニ也是攝受ヲ面トシテ弘經ニ故歟今、法花折伏破權門理

十三、手摩其頭事

十四、皆近阿耨。菩提事

十五、不須復安舍利事

十六、行菩薩道文事

十七、増上慢者ノ文付 一切菩薩三菩提事、開方便門事

十八、令得具足事 付 得見我身事

弘經^{アレバ}可^レ如^二不輕菩薩等^一恐^ハ其^{ヨリ}可^レ甚見^{エタリ}」
等と示してゐる。

見 寶 塔 品

一、題下釋文

二、皆是眞實事 付 多寶塔配當三世事 付 此品三身並塔
所表事

三、全身碎身舍利事 付 三變土田事 分身事

二の下には

「相傳云五百由旬者我等^ガ五躰五輪也二百五十由旬者我等^ガ二十五有也所詮我等^ガ依正二法^ヲ事^ニ顯^ヘセリ」
と傳へ、四の下には觀心本尊鈔の涌出品云已下の文を以て上行付屬を示し、

「示云先師大聖人^ハ是上行菩薩再誕也」

と斷じては、法華取要鈔を擧げ、又

「付之當世洛中^ニ聖人末流^ト名乘^ル人云聖人^ハ非^ズ上行菩薩ノ化身^ニ是宿王華菩薩ノ化身也樂王品云宿王華……建治元年ノ御書云亂非^ニ地涌^ニ一分兼知事故……本尊問答抄云」

等の難をも會通してゐる。次いで五の下には、今時の法華經の行者は六即中には名字即なりとして末法始行御書を引用。又

四、付屬事 付 六難九易 上行付屬事 大聖人上行菩

薩再誕事

五、是名持戒事 付 行者位事

「先師聖人正^ク於^ニ法花經ノ迹本二門ノ戒ニ可作法受得之様委細ニ定置^レ之^主」是以當家門流ノ中ニ於^ニ五戒八齋戒等ニ作法受得^{セサス}一流盛^ニ有^レ之是御書ヲ證據^ニ上正^{シク}大聖人ノ面受口決ノ御弟子也可芳菲^ニ耶 御書云普賢經ハ亘^テ……」等の難に對しては

「傳云大小二戒ノ御書ハ小乘戒權大乘戒迹門戒本門戒^ニ代ノ戒躰ノ勝劣乃至作法受得ノ様ヲ分別判釋^シモフ計^リ也雖^ニ今時ノ初心ノ行者ニ作法受得セサスベシトマデハ不^ニ書給^ニ也」 「秘傳云今時ノ本門戒ヲ作法受得^ス様^ハ塔中ノ二如來塔外ノ分身上行等ノ脇士ノ御前^ニ唱^ニ南無妙法蓮華經ト是即作法受得^ニ當^レ末法濁世ノ愚機ノ受戒是也此旨觀心本尊鈔治病鈔末法始行ノ御書等ノ心也可^レ秘々々」 「示云會^ニ之^ヲ遠^ク一代聖教ノ置乎^ニ正^ニ今時^ハ無戒也無戒ノ故^ニ破戒無^シ況^シ持戒^ヲ耶近^ク聖人御書全^ク誓^ニ止持戒等行^ニ但可^レ唱^ニ首題計^ニ見^テ此旨如常云々」

等と答へてゐる。惡知識に就いての唱法華題目抄の引用を以てこの卷は畢る。

第八 壽 量 品 分別功德品

壽 量 品

- 一、法華涅槃勝劣
- 二、題下釋 三身義釋也
- 三、如來秘密神通之力事
- 四、本迹勝劣事
- 五、又以種々方便說微妙法事
- 六、樂於小法事
- 七、釋尊顯本時大日等迹也
- 八、諸所言說皆實事
- 九、所成壽命釋
- 十、非滅現滅利益事

十一、譬說釋付好藥草事

十二、聞長壽者得幾功得乎

三の下、

「尋云於諸教中秘之不傳文爾レ釋尊與彌陀大日藥師乃至多寶等同位等形、佛歟又有勝劣二耶」

に對しては

「私云此事當家獨最大事也諸宗ハ大日如來ハ勝レ釋尊ハ劣ト謂フ當家ハ大日等ハ與テ云レ之釋尊ノ所從也奪ツ云レ之者權教權佛夢裏ノ無常佛也」

と示して法華取要抄を引用。四の下には且那惠心兩説を擧げ

「尋云當家ノ心二義ノ中ニ用レ何耶答當ニ惠心流ノ本門勝云義一也」

として觀心本尊鈔、富木殿御返事を引く。爾るに茲に迹門不讀の難となり、

「不レ可レ讀ニ迹門十四品一云經文釋聖人御書ニ正シ有レ之耶但天台宗勝劣ノ義ハ且ク置ク之ヲ至テ先師御書ニ者御書心並聖人御意只是本迹相對シテ判ニ勝劣ヲ計リ也若以此御書爲レ本劣ルノ不レ可レ讀云ハ本門二半一品ヲモ不可讀歟其故ハ此御書始終心ハ判ニ一代勝劣ヲ定ム修行ノ廣略要ヲ畢推廣略取要修行之見エタリ建治元年御書云大覺世尊……觀心本尊鈔云在世ノ本門……如ニ所立一者但可レ唱ニ題目五字計一也何ソ讀ニ一品二半ヲ耶加之法花取要鈔云疑云何捨……任ニ聖人御本意ニ者但限テ可レ行五字ノ何可レ讀ニ壽量品等一耶此由天目在生ノ時先師日向遂ニ問答一或ハ書札返書等有之」
等と論じてその書札を示し、

「私云誠本迹不同有レ之但不レ可レ讀ニ迹門一マデハ本經釋義無之上自他宗都テ不ニ沙汰一以ニ御自筆一書ニ寫シテ之一遺シテ其

十三、失心不失心事

文狀云此法花經ハ八萬法藏ノ肝心十二部經ノ眼目也一字ノ功德超ニ日月光ニ等云々但彼立義ニハ聖人讀ミテ方便品ニ事ハ佐渡已前也御書等モ然也等云々今云不然佐渡已後身延澤ニシテ九ヶ年讀ミテ之又彼云一機一縁爲讀ミ之也等云々今云證據何御書出耶云々」

等と宣明してゐる。七の下には四條妻女への消息、開目鈔等を引き、九の下にはまた開目鈔を引用。

分別功德品

題下釋

一、増道損生釋

二、本門得道數倍衆經事

三、迹門有菩薩得悟乎

四、本門流通並生起釋

五の下には末法始行事御書を出し、

「示云今御書委細也可見之又持經即持戒也」

等と述べてゐる。

第九

隨喜功德品

一、題下釋付末法行者事

五、四信五品事

付除般若波羅密事

一念信解行不退事 一念信解宿習事 末法行者四

信五品中何乎 戒禪事

二、何故必校量五十人耶又有所表耶

三、初隨喜校量事

四、判攝五品事

五、聽經事

三の下に唱法華題目抄を兩回引用して

「問當家ノ心正ク六即ノ中ニ何位耶 答正ノ名字即也」
と斷じてゐる。

法師功德品

一、題下釋

二 今時行者有六根淨德耶

不輕品

一、題下釋

二、不輕菩薩對輕毀衆本迹俱ノ說敷

四の下には五百比丘尼思佛等の經文を

「示云鏡水寺ノ栖複師ノ心ハ師子月等ノ五百比丘尼ト可_レ讀師子月等ハ雖ニ比丘也ト加ニ尼ノ字ヲ事ハ比丘ニ攝比丘尼ヲ心也道邈
師ノ心ハ師子月等五百比丘ト可_レ讀師子月等ハ比丘ナルガ故也尼思佛等ノ五百優婆塞ト者一經ノ中ニ尼思佛等ノ五百優婆夷ト列_ス

六、經云令得阿羅漢果事
七、初心行者文

三、經云菩薩志堅固座禪事

三、不輕菩薩立禮拜行時何位耶

四、不輕立禮拜行時知機敷

故也私云甫注云比丘^ニ示云大聖人御書^ニ正^ニ尼思佛等^ニ御自筆有中山^ニ云々災難根源事御書也^ニ等と釋してゐる。

神力品

- 一、題下釋
- 二、神力品已下八品來意事
- 三、十神力事

囑累品

- 一、題下釋
- 二、付屬事

藥王品

- 一、題下釋
- 二、問自^ニ此品^ニ已下說何事歟^付妙音等預結要付屬歟
- 三、經云若復有人以七寶滿事
- 四、十喻事

- 四、結要付屬事
- 五、於諸法之義事

- 五、今時女人行何教可生安養界耶
- 六、後五百歲付屬宿王華也耶
- 七、經云病即消滅不老不死事

四の下には鎌倉塔辻妙法寺圓大坊日肝の説を日妙聽聞して、との書入が多く見え、六の下には

「義勢、如三國佛法傳來次第下」進師御作也」
の一行があり、七の下には法蓮抄が引かれてゐる。

妙音品

- 一、題下釋
- 二、肉髻白毫事
- 三、佛身卑小誠事

觀音品

- 一、當途王經事
- 二、題下釋
- 三、當品七難事
- 四、妙音觀音幾身耶
- 五、何故現三惡身耶
- 六、觀音說三乘法歟

七の下には

「難云法花經流通ノ觀音ヲバ尤可_レ信_レ之而ニ何不_レ讀_ニ觀音品_ヲ耶又何不_レ安_ニ置觀音_ヲ耶又觀音堂參詣ヲ禁_ル耶但至六觀音ニ者一跡異名也經云以種々形遊諸國土云々取_{テモ}菩薩身ニ可有種々形也如何示云此事當家ノ大事也所詮妙音觀音普賢文

- 四、妙音文珠位高下事
- 五、妙音三十四身事
- 六、三昧陀羅尼不同事

- 七、何故不崇敬觀音耶
- 八、東西菩薩何故捨本土來娑婆耶
- 九、觀音現幾土弘通此經耶
- 十、此品偈誰人譯之耶
- 十一、聞品益事

珠等、皆是迹化衆也弘經既ニ時過畢末法今、地涌菩薩獨リ可レ弘ニ此經ヲ故ニ以ニ時節ヲ申サジトスルガ如ク時ノ導師ヲ先崇敬
ス故ニ別シテ不安ニ置形像也」
等と記す。十二の下、

「示云有人云地藏菩薩隨有、法花經中ニ云テ今ノ持地菩薩ヲ出也先德釋也」

第十 陀羅尼 嚴王品 勸發品

陀羅尼品

一、陀羅尼咒事

三、五番守護何時耶

二、五番守護事

嚴王品

一、題下釋

三、善知識事

二、菩提樹下法花事

勸發品

一、題下釋

三、勸發流通事

二、流通釋

四、見普賢身等事

五、妙樂讚天台釋事

六、聞品益事

四の下、これらの現益無きに就いては開目鈔が引文されてゐる。

第十一 開經註釋

無量義經德行品

一、題下釋

二、諸經如是與今經如是同異

三、王舍城事

四、轉輪王等事

五、戒定惠事

無量義經說法品

一、如來法中有所諮問事

二、有一法門事

三、無大無少無生無滅事

四、能問如來事

七、七喻三平等十無上、法數

六、其心禪寂事 付 三昧事

七、約五時歎菩薩事

八、菩薩戒定惠事 付 卅二相八十種好

九、四諦六度十二因緣事

十、晝夜構心常在禪事

五、大莊嚴菩薩於爾前成無上菩提歎

六、菩提樹下端坐六年事

七、性欲不同事

八、能洗垢穢事

九、徇隣等五人轉四諦法輪事

十、文辭是一而義別異事

十一、次說方等。花嚴海空事

十二、一切諸佛無有二言事

七の下には未顯眞實の文義に就いての廣說があり、

「口傳云進師宗論時戈覺無用也直可責謗法也」
とある。

無量義經十功德品

一、第一功德今時行者得之耶

二、第三第四爾然耶

三、第四功德爾耶

四、第五

第十二 普賢經

一、題下釋

二、說處事

十三、能以一身示百千等事

十四、此經說諸佛三密耶

十五、無量義經說權教耶 付 妙覺益有無事

五、第六

六、第七

七、八萬菩薩此經已前得受職耶

三、劫後三月事

四、三大士問事 付 無煩惱事

五、說法一部十卷在世滅後ニ爲何也事

六、不斷煩惱事 付 當家義勢

七、如來昔提耆闍崛山事

八、普賢經何部耶

九、半行半座三昧事

十、三大士問佛答事 付 雜花經事 東方淨妙國事

普賢經骨目事 三昧事

十一、不入三昧事 得見事

十二、闍浮提人事

十三、三障空事

十四、白象事 付 大乘一實之道事 晝夜六時事

十五、禮十方佛事

十六、十力士事 付 陀羅尼三昧事 夢事 六根事 諸

佛現前三昧事

十七、受識事 十八、六念法事

十九、稱諸佛名事

二十、大乘因者諸法實相事

廿一、善德佛、釋迦分身歟 一二二惡及六和敬事 付 答

問事

廿二、十惡業等事 付 慈悲喜捨六和敬五無間六根業十二

苦事等事 付 八邪八難事

廿三、懺悔事 懺悔處 懺悔法 懺悔位等也 付 罪福惡

主事 佛果懺悔事 末法ニ可用無生ノ懺悔乎事 雜

々經文事

廿四、普賢經攝折二門中何耶 付 阿練若事

廿五、供養持法者事

廿六、賢劫事

廿七、大乘真實義事

廿八、正觀邪觀事 付 第一義空事

廿九、眞是佛子事 付 和上及具足事 又不須羯磨事

三十、具足菩薩戒事

卅一、小乘戒事

卅二、普賢經說權教耶 阿鼻地獄事 六念法事 六齋日

事 法眼淨事

(以上解釋了)

一、六根ノ罪障ハ同時ニ淨之歟又異歟

二、依有想行見普賢也

二十一の下にて玄義の

「善德佛非釋尊分身」

說を破し

「東方善德佛南方栴檀德佛者釋尊ノ國土世間ニ於テ分別十方ノ中央ハ釋尊也本躰身也四方乃至十方ノ佛皆是釋迦分身也經云唯我一人^又」

等と述べてゐる。又、奥書には夢ニケ條を記して、その精根を學文に傾けた狀を想しめてゐる。

第十三 淨土宗祖師謗法證文

一、淨土宗之事

二、淨土宗師資事

三、無間證文如何 付 宗論方事

四、謗法無間口作事 付 山門申狀

五の下には守護國家論を引いて、先づ法然謗法に限て破したるを示し、又

「安國論ニ不破三師但破法然也」

三、實教意論戒業不同耶

四、懺悔文事

五、遍一切處事

五、法然已下謗文

六、山門申狀

七、辟難

とも言ふ。この論は卷尾に至つて

「有難云聖人不破善導等」守護國家論安國論分明也何背先師破善導等耶 示云聖人破法然ノ撰擇故且^レ不破^ニ善等^一也^一論此意也再往破^レ之^ヲ

の問答となり、開目鈔、要法抄、下山抄、報恩鈔等が引文されてゐる。尙、卷中には向師勘文や、久遠寺抄の度々の引用が目立つ。

第十五 眞言宗兩說謗證及教勝劣等

一、眞言亡國問答事

二、祖師謗法事 東天我昔事

三、謗法及惡知識文

一の下に

「大日經指歸云法花尙不^レ及況自餘教耶」

と

「授決集云若望^レ法花^ニ花嚴涅槃等經是攝引門」

とを挙げ、二書の相違を以て

「指歸若^シ圓珍ノ作^{ナラバ}授決集ヘ非^ニ智證ノ釋^ニ授決集若^シ實^{ナラバ}指歸ヘ非^ニ智證ノ釋^ニとなし、三の下には更に後唐院記の

四、眞言相承及流布

五、顯教密教事

六、二教勝劣問答 付即身成佛

「當レ知花嚴法花ノ所説ハ佛智惠戲輪也」

等をも併せて

「授決集實ニ智證ノ釋ヲ指歸等ハ疑作也而ニ授決集ハ公家ノ目錄ニ載レ之上智證自筆有レ之也又指歸ハ目錄ニ不レ載之上自筆無レ之也又同ジク智證作成レ共如ニ惠心ノ往生要集ト一乘要決トノ前權後實ノ書ニテ又取ニ授決集ヲ異本ノ有ケルヲ住山ノ時普ク見ニ山門ノ本共ニ微地學決五十二ノ章題計有テ今ノ委細ノ釋無レ之寺ノ本大旨如レ此也但ニ當世ノ眞言師授決集ガ不レ相レ心ニ故ニ削レ之今ノ文脫落ハ歟大日經指歸ノ文相ハ何様ニ天台宗ヲ捨テ一向ニ眞言ニ成リ定人ノ書ト覺テ授決集ハ天台宗ヲ存シ本意ニ眞言ヲ不受ニ存人ノ作ト見テ去レバ授ノ上卷ニ經ニ無レ本理ニ無レ偏圓ニ一切依レ人佛說無用。家々ノ尊勝國々ノ高貴大小尊卑有ニ分齊ニ以レ土爲レ金家々有レ之以レ金爲レ金有無異レ處久遠之本開權ノ妙法花獨リ勝云々能々可レ尋事也何方ニ一方ハ僞書ト覺レ也」

と判じてゐる。一の下では又

「所詮法花經ハ自ニ大日經ニ三重ノ劣リ戲論ノ法釋尊ハ無明ノ纏縛ノ佛也ト云事誹謗法花ノ大罪難レ遁者也若欲レバ遁ニ此難レ者可レ出ニ證據ヲ者也若無ニ證據ニ者墮獄無レ疑者也此由當家ノ肝要之習勿ニ妄失ニ故ニレバ誹謗正法ノ失ノ者宗論ノ時ハ只存ニ此ノ一條ニ」

と斷じてゐる。この卷に引用する御書は報恩鈔を主として、撰時鈔、妙一女返事、曾谷殿御返事、要法抄等。祐師の義も頻りに用ゐ、久遠寺抄をも引く。

第十六 眞言宗教相 教主同異等

七、顯密二教勝劣御書

八、眞言七重難

九、眞言未顯眞實

十、釋迦大日同異

十一、五佛

十二、四身五智

十三、雜々問答

十四、祈禱事

前卷を承けての項目である。先づ文永元年の御書全文を挙げ、又安國論、戒体即身成佛義にも破折眞言なき旨を以ての難に對して祐師の義を示し、

「御書云眞言宗法花經ヲ失フ宗ナリコレ大ナキ事ナリ先ヅ序分ニ禪宗ト念佛宗ノ僻見ヲセメテ云々」と言ひ、

「私云……佐渡ヨリ以來專ラ破ニ眞言ヲ其書繁多也開目鈔等也」

と言ふ。ハの條は

「依テ此御書ニ立ニ七重ノ難ヲ敷ト尋ムニ進師然也ト被レ仰依テ似ニ重寫ニ如テ師ノ御書ニ注之」

として始められてゐる。十の下には與奪の二義を立て、與へて大日、釋迦ノ垂迹也として中務消息を挙げ、奪つては釋迦ノ所從也として法華取要抄を出舉。又、報恩鈔を引く。十四の下には善無畏抄、眞言秘法由事御書（祈禱鈔）を具さに引用し、本尊問答鈔をも引き、久遠寺抄を以ては承久之變事を補ふ。十五の下には法華易行勘文として守護國家論

十五、眞言難行不叶機

十六、大日法花經中有之耶

十七、先師聖人眞言勝法花云御書事 大日八相之佛歟

十八、眞言法花說相同之一法異名之事

十九、顯密三身勝劣事

二十、教々主同異事

廿一、山家修行眞言事 付 佛法流布次第及宗論事

を引く。十六の下は八の條を詳説せるもの、安國論、國家論、戒鉢即身成佛義を以ての難に應じて、遣佐渡殿御書、三澤鈔等を示す。二十一の下には傳教大師に眞言の行法無し、慈覺に及んで講堂建立等言ひ、

「又示云傳教御修行也ト云トモ背金言ニ者不レ可用也於ニ佛説ニ有レ疑不レ可信況山家ヲ耶」と斷じてゐる。

第十七 禪 宗 教 外

一、禪宗廢立事

二、祖師事 付 六祖等威德及相承

三、禪天魔事 付 相

四、謗法證文事 教外別傳廢立達磨謗法正文人法過失

佛説有之山家依用法花何云天魔耶

一の下、

「私云當家宗論時、諸禪諸機無用也但約ニ教内教外ニ可ニ問答ニ也教内權實ノ可ニ分別ニ教外ハ天魔ノ所爲也」。

二の下、

「進師示云若師資相承シテ三國傳來ノ法ト云者付法藏第廿四師子比丘爲ニ檀彌羅王ニ被テ害付法即絶云證文アリ如何然ニ立廿八祖云條無ニ跡形モ奸謀也」

三の下に之を追うて

「祐師示云廿八祖ノ所出如何若付法藏傳有レ之云何用ニ此傳ニ耶否若用レ之云者付法藏廿三ノ師子尊者也此師子ヨリ付法絶

五、天台所破禪指達磨耶

六、禪宗法門大概事 付 見性成佛義

七、難問答

八、迦葉付屬事

九、不説一字事 付 邪見衆多事

見^{スト}タリ云々進師示云斷絶ノ後ハ不^レ依^ニ經論^一者何^ニヨテ傳^レ之耶^一

と言ふ。所々に祐師進師の義及び久遠寺抄を多く引き、御書の引用は尠い。

「御書云又云禪宗天魔波旬說云々此文非^ニ日蓮私言^一彼宗ノ人々云教外別傳云々佛遺言云我經之外有正法者天魔說云々教外別傳之言豈脫^ニ此科^一」

のみの如くである。此卷末に、應永十一年四月十五日より一夏を中山本妙寺に參籠して涅槃經等を見たるに、迦葉は佛涅槃の七日を過ぎて到り、御存命を見ず一言の教告をも承らず、佛破顔微笑等は虚言也、との日悅の書入がある。更に文中には

「私云康永二年六月四日傳教太師講ノ々師日全也」
と起筆しての禪天魔問答がある。

第十八 禪宗 教内外合

一、廢立事

二、一切諸法皆是禪法事

三、依經權實事

四、禪與法華勝劣事

五、禪與止觀勝劣事

六、禪無間業事 ^付墮獄證文一闡提人之文 邪道邪見

七の下、

文

七、法花經教内外中何攝耶 ^付山家三種法花釋事 ^付

法花經獨以心傳心事 ^付法花經者諸佛師範能生父

母事

八、法花經與禪難易二行事

九、達磨天台先祖也何可破之耶

「御書云妙樂云若誦教旨法花唯以開權顯遠爲教正主獨得妙名意在於此云々又云故知法花爲醍醐正主等云々」。
及び四信五品鈔を引用。八の下、法花易行の勘文に守護國家論、四信五品鈔等を引用。

第二十 天台宗

一、相承事

二、教時事

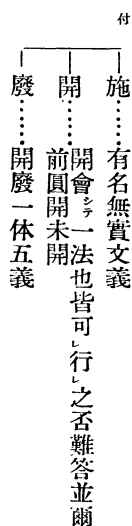
三、依經論事

四、靈山聽衆事 付 德行

五、釋事 付 三大部相貌口傳等

六の下、有名無實文義に就き、

六、一代教相事



「私云久遠寺談義時予對進師問云二義俱是實義也耶又有是非耶 師云宗論時用否可レ依レ時也但以義約レ佛、化儀二往ノ義也次ノ義、約佛ノ本意唯一佛乘ニ再往ノ義也 予云有人云有名無實云々更無權教ノ益云事、全分非義也 所以三車元有名無實體サレトモ諸子各々出火宅也化城有化體、無實體サレトモ至實所也三乘、權法雖有名無實也現當分ノ益也依有名無實ナバ更無得道云事僻案ノ義也如何 師云此義、更不知當家淵底ノ義也若用爾前得道者他宗何別耶ヲ依有名無實無得道ノ經論釋等勘文成徒施耶」
として多く經釋を引く。開會に就いては

「私云山門ノ慈覺門徒寺門ノ智證門徒也然慈覺ノ釋髓開爾前圓也恐山門ノ義慈覺ノ背也況山家及天台等耶寺門智證又殊勘經釋爾前圓開云也依慈覺智證共開レ之判於當世天台宗ノ寺門爲偏執故歟又實義ノ背經釋者也山

門ニモ殊西谷ノ義也予住山ノ谷ナレドモ於ニ此義一受學シテ而不レ信シ之也云々」
等といふ。

第二十一 天台宗觀心

本書には目次を缺いてゐるが、大凡そ次の如き綱目である。

一、非實非權事 此算次上第廿帖内也

二、蓮華事

三、五章生起次第事

五の下に當家の本迹を論じて、

「示云本勝迹劣、條勿論也但本勝へ久成ノ故也迹劣へ近成ノ故也又本へ實迹へ權ナル故也是約ニテ能證ニ論ニ本迹ニテ之日也若約ニ法性ノ理ニ者一理ノ故無ニ勝劣一也此等ノ趣不レ可レ過」

として、顯佛未來記、四條殿御書、月水御消息、法蓮鈔、單衣鈔、富木殿御返事、法花取要鈔、眞間釋迦佛供養御書、佐渡御書、觀心本尊鈔、下山鈔、祈禱鈔等を引く。尙、此章にも亦天目上人の勝劣論を委細にした。

第二十二 止觀法華勝劣事 當家觀心及行相事

一、法華與天台止觀勝劣事

二、當家觀心法躰及行相事

「示云當世山門東塔南谷之末葉無動寺有_二一海_一、云惠心流之學者、此人之弟子尊海、云者有_二關東武州_一、此尊海於_二此法門_一、極_二淵底_一、於_二東國_一者我一人秘_レ之云々、破_二此邪義_一、立_二正義之科_一、故此算也」
と冒頭して、

「然_レ予住山之時對_二西谷禪美_一、委細尋_二此事_一、禪美委細示云此事、古千乎堂、堅義時無動寺、政海精之止觀、大師已心中所行ノ法門、故_レ不_レ依_二經論_一、覺_テ堅者如何存_レ之釋迦如來出世ノ本懷、法花迹本二門是也、迹門開權顯實、爲大通結緣者也、本門開迹顯本々、師顯_二本因本果等_一、久遠之事理、於_二迹本二門_一、說以_テ釋尊本有ノ證得_レ示_レ他給_レ、大師如_レ佛以_レ我已心本法_ハ說_テ號_二止觀_一、示_二他靈山法華迹今ノ止觀_一、今說_レ本法也、彼法華_ハ下_二鹿苑_一、機_ヲ今止觀爲_二天機秀發_一、示_レ之是故、號_二止觀_一、云_二天真獨朗_一、於_レ此有_二深キ子細_一、堅者如何存_レ、若有_二覺悟_一、一端立_レ申_セト云々、堅者當谷學者也、_二止觀_一ハ法華行躰ナル故ニ能釋也、法花_ハ所釋本法也等云々、政海左右略之畢、當谷先師扶全法印、次日政海許_レ立_二使者_一、遣_レ狀聞_二精義_一、尤不審也、抑止觀_ハ法花_ハ勝_リ被_レ精之條、天台及山家大師等ノ釋義_ニ未_レ見隨_テ漢土ノ天台門流中_ニ更無_二此義_一、況本朝先德等代々相傳無_二此義_一、誰人_{ヨリ}相傳乎、其返札云千乎堂ノ法談事取時所浮精義也、非_二師資相承_一、雖_レ然深案_二此義_一、文理共_ニ分明ナル者歟、委細事期面々時了、扶全法印遺狀之文理共分明也云々、如仰遂_二面拜_一、雖_レ可_レ申談_二先ツ文理_一、且_レ可_レ示_レ給_レ之依_二文理_一、述_二愚意_一、決_二釋是非暗自他迷_一云々、此度無_二返札_一、又三度立_二使者_一、呵云三度札之所詮無馮眠闇義也云々、第四度狀_ニ呵云自今已後如_レ此謗法邪義於_二山上學侶_一者努々不_レ可_レ有_レ之云々、政海合點返狀在之云々、然_レ東國尊海隨分秘法師資相承ト云事近來少_シ其聞_ニ有_レ此條_一、一海_ハ存知_ハハラン、仍尋_二一海_一、時先師政海抄_ニ粗見_ニ子細_一有_リト云_ハ共_ニ共治定_一モ不_レ見故無_二示_レ他云々_一、所詮末弟中ニカカル邪義有_レ、故政海ノ書札等ヲ可_レ被_レ見者也、但尊海ガ文理能々聞_レ之山上_ハ可_レ注進_一也、若然者其時山門學侶_ニ披露_{シテ}可_レ決_二是非_一也云々、然_レ此法門_ハ予住山ノ已前_ニ論談_ニ之由風聞_一、住山已後_ニ聞_テハ之尊海禁_レ之於_二我付法ノ弟子_一

「深染心臓不可出ニ口外」是我已證也成佛至要也云々此故其門弟如日來不談歟」

等と續き、以下に又、扶全とその付弟禪英の説を示す。二の下には

「示云法体惣一部所詮別壽量品ノ肝心妙法蓮花ノ五字是也」

と冒頭して觀心本尊鈔を展開、行相には四信五品鈔を廣示。

「一義云止觀ノ法躰妙法五字ノ外別無之也此五字一念三千事相當體也然今時我等心持念之ヲ口又唱之内外ノ行共事相也天台觀心ハ々性ノ一理ニ所有觀ニ十界三千ヲ故ニ理也」

の文を以て完了された。

5

以上の如く、法華經の抄釋に加へて他宗を批判し、權實問題、本迹問題乃至攝拆論等、宗教の問題に往來して未だ必ずしも宗旨の問題に涉らないのであるが、聖祖以後門下の著述としては、かの金綱集と共に注目すべき本書であつた。延山進師、中山祐師の説も併乍ら、中山法藏に參籠して親しく聖祖の御書を引用した点も、本書の強みであつたらう。さればその傳寫も珍重されて、永亨本（權大僧都大法院日憲判）には

「限當寺付弟可次第相承之當寺門外不出堅禁之」

と奥書され、本妙寺本にも準據は應永十五年（第九）同十七年（第十三）——以上日從、と應永三十一年（第十一）——日序、との相異があるのである。紙數の制限もあるので、承前起後の使命に於ける斯書的位置等の検討は暫く割愛し、今はたゞ正義抄概要の紹介のみに止める。

（昭和一一・一〇・一五）

御遺文にあらわれたる下種思想

武 田 海 正

今日の社會くらい色々の宗教が行はれた時代はあるまい。何千何百種類という宗教らしいものが發生し流行してゐる。しかるにその宗教運動家たちをみると種を下ろす事などてんで問題にしてゐない。たゞわづかに熟益の一分たる勸善懲惡みたいな淺教をひろめるのにあくせくとしてゐる。それなら本當の宗教運動ではなくて一種の倫理運動にすぎないではないか。佛教の中でさへも下種を論じない熟益一点張りの宗旨が多いのだから、佛教以外の新舊幾多の宗教の教義中に下種教がないのはいふまでもないことであらう。春、種をまくことを忘れたばかな農夫は秋になつても米や麥をとることができないやうに、教の下種を忘れたばんくら宗教は本當に人の心を救ふことはできないのである。下種思想は法華經から生れ、台祖に育てられ、宗祖に教育されて完成したのである。

下種論は本宗教義の根本問題であるが古來の宗學者はこの問題をはつきり解決してゐないようである。たゞ富士八品兩派の學者は相當研究してゐるが、あれは宗派的色彩が濃厚すぎて公平なる見地から、これを正しい宗學としてその全部を肯定することはどうかと思ふ。

今はこれらの後世の諸説をしばらくおき、専ら遺文中心に研鑽の歩をすゝめたい。

一、下種のわけ

下種とは本覺者釋尊の人類救済を、農家が田畑に種をまくことに譬へたものである。下種論とは大救世者本佛尊と私共との關係、教法と修行との交渉を具体的に説くものである。だから本覺者の法体を論證しようとするものではない。専ら本覺者の力用を明らかにしようとするものである。覺が家の本覺を論ずるのではなく、覺が家の始覺を談ずるものである。本覺から始覺を照らし、本覺の上に立つて始覺をみようとするものである。法体論が始覺の門から入つて本覺の堂奥に至らんとするのに對し、今は本覺をふんで始覺をいかしてゆこうとするものである。本覺者が具象化して現實の世界へ出現し、働いてゐる眞實のすがたを諦觀しようとするものである。これは宗義上における從果向因の法門をより具体的に説明し、より宗教的にいかしたものである。

本覺者は全人類救済の大理想を實現するために、まづ限りのない大昔、久遠の元初すでに十界の心田へ妙覺の種子をおろされたのである。曾谷抄には、

法華經は種の如く、佛はうへての如く、衆生は田の如くなり。(二五一六)
と仰せられてゐる。

人の心には迷つてゐる識もあれば、覺つてゐる識もある。妙覺の種子をうへるところは迷つてゐる心でもなければ覺つてゐる心でもない。迷つてゐる心と覺つてゐる心とまだわけない前の染淨未分の意識にうへるのである。佛教ではこれを *Alaya* とつて、第八識と譯してゐる。この第八識の心田へ覺種をおろして、覺芽をいかし淨分を育て、九識心王眞如の都たる *Anala* 本淨識をあらはすのが下種の最後の目的である。この場合、當家の宗義としては八識下種が、九識下種かと疑う人もあるだらう。しかし下種は法体論でないから本迹通じて第八識へ下種するといふのが正義であらう。日向記には

法体にてはふる處もふらす處も眞如の一理なり。識分にては八識へふり下りたるなり。(四五)
と、判定されてゐる。

蔭かぬ種は生へぬ。ほんとうにマリヤが處女であつたならばキリストは生れなかつたであらう。下種教がないのに解脱だけがあるといふような道理はない筈である。もし初めから下種がないのなら未來永恆に覺りを開くといふことはできないのである。だから下種益を説かないものは嚴密にいへば熟益も脱益も論ずる資格がないのである。雨ふりきのこのような新興類似宗教や、法華經以外の經典を依經としてゐる他宗余教には全然下種教らしいものはない。それだのにあやしげな教義信條を振り廻して昇天・往生・佛果・得脱を我がもの顔に喧傳してゐる。活花には根がないけれどもその花だけをみれば根がある花のように見へる。しかし時がたつと自然に本性をあらはしてかれてしまふ。新興宗教等も一寸みれば信徒は何百萬あるといふし、その中にはインテリ階級、有名な人までが躍つてゐるので堂々たる宗教のように見へるがそのうちしがれてしまふであらう。

開目抄には、

眞言華嚴等の經々には種熟脱の三義名字すらなし。何に況んやその義をや。(七九二)

本尊抄には、

爾前と迹門の圓教すらなほ佛因にあらず。何に況んや大日經等の諸の小乘經をや。何に況んや花嚴眞言等七宗等の論師人師の宗をや。與へてこれを論すれば前三教を出す。奪つてこれを云へば藏通に同ず。設ひ法は甚深なりと雖も未だ種熟脱を論ぜざればかへつて灰斷に同ず。化の始終なしとはこれなり。(九四二)

と下種教のない經と宗を破折されてゐる。下種のない經教によつて下種をとかない者が昇天だの往生だの成佛だのと

いたづらにその結果だけを得やうとあせつてゐる連中は自分自ら因果の道理を破つてゐるのである。佛因のないところに佛果を求める者は因果を撥無するものである。因果を無視する者は佛教徒ではない。佛教信者でないばかりでなく、因がないのに果があると説くのなら無因有果の外道であり、反佛教的邪教徒であると云はれてもしかたがあるまい。かうしてみると如説修行抄に諸宗は無得道墮地獄の根源、法華經ひとり成佛の法なりと叫ばれた聖のことばは單なる自讃毀他ではなく實に深い——思索と冥想と信仰のどん底からぼびり出た清泉であつたのである。

二、下種の種類

法華經をきけば必ず下種の益をうけるといふ定義からみれば、法華經のいたるところに下種の因縁がとかれてゐるといへる。しかし今は論據を單純化するために特に化城喻品の大通結縁と壽量品の久遠下種とを以つて法華經中に説かれたる下種の因縁の出據と定める。

台祖はその中の化城喻品の大通結縁の下種を下種として迹門の三益をたて、宗祖は壽量品の久遠下種に立脚して本門三益を建立し、末法下種を宣揚されたのである。

迹門三益の化源は三千塵点劫のむかし、この世界の教主釋尊が大衆のために法華經を覆講したといふ過去譚にはじまる。法華經の化城喻品の説相によると、三千塵点劫の大古時代に大通智勝佛といふ覺者があつた。その佛には十六人の王子があつて、各々八方の佛國土で成道した。その第十六番目の王子が釋迦佛である。大通智勝佛が法華經と云き終つて禪定に入られると、十六人の王子は父に代つて法座にのぼり、大衆のために法華經をといた。その尊い因縁によつてこの世界の人々は世々番々釋尊とは父子・師弟の良縁につながれてきたのである。特に釋尊在世時代の人々

はこの時に法華經をきいたおかげで今世は覺者からぢかに法華經の三周說法をきゝ脱益をうる事ができたのである
本門三益の化源は本覺佛釋尊が五百塵点の無始久遠の元初、十界の衆生へあまねく妙覺の種子をまいたといふ事實
を信ずるものである。富木抄に、

日蓮が法門は第三の法門なり。(一六四八)

とあるが、その第三の法門とは久遠下種の法門をさしてゐるのである。なぜかといふと宗祖自ら三種教相にこれを説明して、

第三師弟遠近不遠近相。五百塵点以ニ久遠ニ爲ニ元始ニ論ニ種熟脱。(一五三)

といつてゐるからである。これによつても本化の教學や信仰は久遠下種を根柢としてゐるといふことが明かである。

さて種熟脱の三益については文句をみると四種の三益がとかれてゐる。文句の總じて今經の因縁釋を明す下に、
衆生久遠に佛の善巧を蒙り、佛道の因縁を種えしむ。中間に相値うて更に異の方便をもつて、第一義を助顯してこれを成熟し、今日雨華地動し如來の滅度をもつてこれを滅度す。

また次に久遠を種となし、過去を熟となし、近世を脱となす。地涌等これなり。

また次に中間を種となし、四味を熟となし、王城を脱となす。今の開示悟入の者これなり。

また次に今世を種となし、次世を熟となし、後世を脱となす。未來に得度する者これなり。

未だこれ本門ならずと雖も意をとつてとくのみ。その間節々に三世九世を作り、種となし、熟となし、脱となすもまた妨げなかるべし。何をもつての故に、如來自在神通の力、師子奮迅大勢威猛の力、自在にとけばなり。(文會

とある。この文によれば四種の三益とは

第一、久種現脱

第二、久種近脱

第三、近種現脱

第四、現種當脱

となる。この四種三益は天台が説いた法相であるから何れも迹門的傾向をおびてゐる。天台自身も文中に「いまだ本門ならずと雖も意をとつて」と、いつて自らの立場を明らかに認めてゐる。今はそれらの會通を越えて直ちに本化の宗義によつて活釋したいものである。

四種の三益を當家の宗義によつて解釋するまへに、一層その意味をわかり易くするためにまづ圖示して見やう。

第一種

久遠下種——久遠に佛から下種され
——中間熟益——中間然燈佛等の教化にあひ
——今日脱益——今日日本門で得脱する者

第二種

久遠下種——久遠に下種され
——過去熟益——本果の後熟益をえて
——近世脱益——近世に解脫する地涌等

第三種

中間下種——大通下種をこうむり
四味熟益——昔教を聞て熟し
靈山脱益——迹門で作佛する舍利弗等

第四種

今世下種——靈山で下種され
次世熟益——普賢經等を聞て熟し
後世脱益——正像時代に解脱する者

これらの四種の三益の下種を見ると第一、第二はともに久遠下種であり、第三が大通下種で、第四は靈山における今番の法華經が下種となつてゐる。

第一種 久種 現脱

無始久遠の大古時代に、本覺の如來が全法界の生きとし生ける者の心田へ妙覺の佛種を下種された。その本覺者が本果を成就してから、世々番々千種萬様の妙相を化現し、三世に十方に垂迹して妙法輪を轉じ、佛種を育てるために教化運動を續けて來たのである。その覺者の教化によくした人々は大通智勝佛の國に生れては釋迦佛から法華經をきき、二千五百年前には印度に生れて華嚴・阿含・方等・般若等の大小乘經をきき、さらに法華經の迹門三周說法を経て漸く調熟し、今經の本門に來てはじめて脱益を得たのである。御在世に釋尊から直接壽量品の說法をきいた彌勒菩薩や分別品の六百萬億の人々はこの機類であるといへよう。

日向記に、

妙樂大師云く、脱は現にありと雖も具に本種に騰ると云へり。本種とは南無妙法蓮華經これなり。(六三)

本尊抄に、

此_二久種_一爲_二下種_一 大通前四味迹門爲_レ熟_至本門_一令_レ登_二等妙_一爲_レ脱。(九四二)

壽量品云或失本心或不失者_{乃至}不_レ失心者見_二此良藥色香俱好_一即便服_レ之病盡除愈等_{云々}久遠下種大通結縁_{乃至}前四

味迹門等一切菩薩、二乘人天等於_二本門_一得道是也。(九四四)

と、とかれてゐる。

第二種 久種 近脱

久遠元初無作本覺の如來から、妙覺の種子をおろされ、すぐに父本佛を信仰し奉り、過去の世に熟益を得て今番當機衆以前に脱益を得たものである。地涌千界の大菩薩はこれにあたつてゐる。

第一種の久種現脱の人も、今の久種近脱の人も久種といふところは同じである。たゞその熟脱がちがつてゐるのである。久遠下種を蒙つた点は同じであるにもかゝわらず補處の彌勒は涌出品の中で、大地をわつて涌出した地涌千界の菩薩をしらない人々であるといつてゐる。これはもと／＼しらないのではなくて忘れたのであらう。同時同所に於て久遠下種を蒙つたのであるから初からしらないといふことはない筈である。もし忘れたとすればどういふわけで忘れたのであらう。成程その下種は同じように久遠下種である。しかるに地涌の菩薩は本因の覺種をうえられてすぐ信仰をさへげたから、その佛種がたちまち覺芽を出し成熟して本眷屬となつてしまつたのである。彌勒菩薩は久遠下種を信じないものだから、五百塵点劫の長い間、或は三千久遠の大通結縁にももれ、今日前四味迹門の會座でもほんとの覺りを開くことができないで、壽量品の説をきいて始めて脱益を得たのである。かように下種は同じ久遠の時でも脱益に遲速があつたから、彌勒菩薩は地涌千界をしらないといつたのであらう。

本尊抄に、

地涌千界教主釋尊初發心弟子也。(九四八)

滅罪抄に、

この四菩薩こそ五百塵点劫より已來教主釋尊の御弟子として初發心よりまた他佛につかずして二門をもふまざる人々なりと見えて候。(二〇一六)

太田抄に、

地涌千界大菩薩、一住_ニ於娑婆世界_ニ多塵劫。二隨_ニ於釋尊_ニ自_ニ久遠_ニ已來初發心弟子。三娑婆世界衆生最初下種菩薩也。如是等宿緣之方便、超_ニ過於諸大菩薩_ニ。(一一〇五)

と仰せられてゐる。法華經の如來壽量品の久遠の生命を信じないうちは、どんな人でもみんな迹化他方來の人としてとりあつかはれるか、または迷へる人としてあつかはれるけれども、一度久遠の本覺者を信じて題目を唱へるものはみんな地涌の菩薩として本眷屬の中へ攝せられるのである。

第三種 近種 現脫

三千久遠のむかし大通佛の會座で釋尊から法華經をきいて下種益をうけ、それから生々世々覺者の教化にあひ、阿含經等をきいて調熟し、今經迹門の三周の說法の時、靈鷲山上で受記された、舍利弗・迦葉等の在世の二乗、學無學の人々がそれである。

日向記に、

三千塵点の下種をすて、備輪諸道せり。之によつて貧人となる。今この珠を釋尊に値ひ奉りて、見つけえて本の如

くとりえたり。(五一)

兄弟抄に、

今三周の聲聞と申して舍利弗・迦葉・阿難・羅云など申す人々は過去遠々劫三千塵点劫のそのかみ、大通智勝佛と申せし佛の第十六の王子にてをはせし菩薩ましましき。かの菩薩より法華經を習ひけるが、惡縁にすかされて法華をすつる心つきにけり^{乃至}法華經をすて候ける罪によりて、三周の聲聞が三千塵点劫をへ、諸大菩薩の五百塵点劫をへ候けることをびたどしくをばへ候へ。(一一二九)

本尊抄に、

尋^ニ過去結縁^一 大通十六之時下^ニ佛果下種^一進者以^ニ花嚴等前四味^一爲^ニ助縁^一令覺^ニ知大通種子^一。(九四一)

第四種 現種 當脫

今番出世の生身の釋尊からしたしく法華經をきいて下種益を得、すぐに熟益と脫益をえたものもないことはないが、多くは普賢經や涅槃經に至つて調熟し、正法像法の未來にようやく解脫するものである。これは法華經の方便品の會座から退場した五千起去の増上慢の人々、それから寶塔品の三變土田のとき他土へうつされた人天などである。

本尊抄に、

於^ニ在世^一始聞^ニ八品^一人天等 或聞^ニ一句一偈等^一爲^ニ下種^一 或熟或脫 或^至普賢涅槃等^一 或正像末等 以^ニ小權等^一爲^レ縁入^ニ法華^一。(九四一)

分別抄に、

法華經に來て始めて佛種を心田に下して一生に初地初住等に登る者もありまた涅槃の座へさがり^{乃至}滅後未來までゆく人もあり。(一〇〇八)

と示されてゐる。

これらの四種の三益によつてみると下種には久遠下種、大通下種、靈山下種などの色々な下種がある。尙この四種の三益の中にあらはれて居らない下種は佛界下種、末法下種である。尤も天台も文句にその間節々三世九世を作り種となし、熟となし、脱となすもまた妨なかるべし。といつてゐるから久遠劫來無盡の下種があつた事を認めてゐたのであらう。

佛界下種といふとそんなのないよといふかもしれない。佛が佛へ下種するといふようなことはあるべきわけがないからである。しかし今こゝで佛界下種といふのはことば通り佛が佛へ下種するといふ事をいふとしてゐるのではないこゝでいふ佛界とは久遠元初下種のをりにはまだ佛位にのぼつてゐなかつた人が、今現に十方の佛土に成道し、そこにゐる人々を教化してゐる諸佛をさすのである。三千久遠以前は大通佛の王子として法華經をきいた人が今現に西方淨土の教主として崇拜されてゐる阿彌陀佛、十劫正覺以前は法藏菩薩であつた阿彌陀佛などをいふのである。この佛界下種を開顯することに依つて他宗余教の本尊たる神や佛が、すでに久遠本覺の如來の子であり、弟子であつたといふことを明示しようとするものであつて文字通り佛が佛に下種することを主張するものではないのである。だからこの佛界下種の法門によつて統一される神佛は單に阿彌陀佛に限つてゐるのではない。三世十方の諸佛がみんな久遠の本覺者の分身の佛であり、子であり弟子であるといふことになるのである。能化の佛が本覺者の子であるならば、その分身佛の所化たる菩薩や神々はみな本覺者の愛孫であるといはねばならぬ。過去・現在・未來の三世の佛もその弟

子も、東西南北左右上下の十方の佛もその弟子も、みんな一本覺者に統一され、生かされてゐるのである。それを下種論の立場からみて三世十方の諸佛はみな妙法の佛種を種として佛となつたのであるといふのである。

秋元抄には、

三世十方の佛は必ず妙法蓮華經の五字を種として佛になり給へり。(一九三〇)

とある。今現に佛位に住してゐる人々も外界の物それ自体といふようなものを認識して佛になつたのではない。わが内なる妙法の覺種を覺つて佛になつたのである。本覺者から無始久遠のはじめ下種された佛たちは地涌の菩薩より、もつとずつと遠いむかしに脱益をえたのであらう。体用本迹を正意とし、久近本迹を傍意とする當家の義としては年限の長短はあまり問題にしないのであるが、下種論としては一往考慮にいられておいてもいい。もし時間的にいふならば地涌千界の近脱に對して久種遠脱とでも名づくべきであらう。

それから末法下種であるが、これは本宗教學上に於ては最も根本的な問題であつて、しかも興味ある重要問題である。その本質論たる種体論から云へば久遠下種のそれと全同ともいへるのであるが、その人時處などの形式的方面では多少ちがふのである。詳しいことは後にゆづる。

三、本覺の種子

1、聞法下種

藝術の中でも音楽は最高の藝術といはれてゐる。音楽にはたと時間経過があるばかりで他の藝術品のようにはないからである。人間の最も進歩せる思想はことばによつて表現され傳へられる。思想はことばの波動によつて活

動する。思想はことばの動力によつて進んでゆくものである。むかしから娑婆世界には耳根得道の人々が住んでゐるといはれてゐる。釋尊が五十年間法輪を轉じられたのも、宗祖が三十年間忍難弘通せられたのも、みんなことばによつて自己の内心に涌出した思想信念を發表し、そのことばによつて迷へる大衆に悟りの法をきかせ種熟脱の教益を得させようとしたものである。

下種するといふことは覺りの法をきかせるといふことである。そうなら法をきゝさへすれば必ず下種益をうるかといふとそうときまつてはおらない。それは教法の中に眞實の法と方便の法があるからである。もし法をきいてもその法が方便の法であり、權教であつたならば下種にならないのである。迹化の台宗でさへ余經をもつて種となさずいつてゐる。なぜ權經は佛の種とならないのであるか。それは權經に久遠の生命がとかれてないからである。久遠の生命をとかなければ無始の無明を轉ずることができない。元品の無明を轉じなければ永恒に發菩提心の覺芽をみるることができない。

聞法のをり幸ひにして眞實の法たる圓乘をきくならば、初て第八識心田へ本覺の種子がまかれるのである。一度心田に下種された圓乘の覺種は永劫に死なゝい。時來つて勝緣にあふならば必ず發心の覺芽が生じ、良緣に順じて生長するのである。もし惡緣にあふならばどうなるかといふと生ずべき覺芽もかれてしまふであらう。良緣にも惡緣にもあはなかつたならば折角植へられた覺種も永久に心田の底で埋もれてゐなければならぬのである。だから久遠のむかし下種されたのだといつて放つておいてはならない。大いに法をきゝ進んで教を學び一日も早く覺種を生長させるために精進努力しなければならぬのである。しかし色々な教法をきいたり見たりして悟りを聞いても、その色々な教法が原因となつて悟つたものではないといふことを知らねばならない。今さとの心をおこしたといふことは久遠の

むかし覺種を心田に植へつけられてゐたといふことを證するものである。現にきいたり讀んだりした教法はたゞその覺種を發芽させたり育てたりした日光や雨の勝縁にすぎない。だから法花經の會座にくる前に花嚴・阿含・方等・般若等の諸經典をきいて六道輪廻を脱れた人々はそれらのお經をきいたおかげで悟つたと思つてはならない。すでにその人々は前世に法花經をきいて下種されてゐたのである。

その圓乘の覺種が爾前の諸經を勝縁として發芽したり、成熟したりしてさとりを開くことができたのである。小乘大乘分別抄に、

花嚴・阿含・方等・般若等の經々の間に六道を出づる人あり。是は彼の經々の力に非ず。過去に法花經の種を植へたりし人、現在に法花經を持たずして機すゝむ故に爾前の經々を縁として過去の法花經の種を發得して成佛往生をとぐるなり。

過去に法花經の種を植たる人々は結縁の厚薄に隨つて華嚴經を縁として初地初住に登る人もあり。阿含經を縁として見思を斷じて二乘となる者もあり。觀經等の九品の行業を縁として往生する者もあり。方等般若もこれを以て知んぬべし。此等は彼々の經々の力にあらず。偏に法花經の力なり。(一〇〇八)

と、とかれてゐる。華嚴經や觀經や大日經などをきいてさとつた人々は、そのお經の力でさとつたのであると思つてゐるかもしれないが、それはまちがひである。それらの經教をきくずつと前に法花經をきいて心田深く妙法の覺種を植てゐたから、花嚴經や阿含經や阿彌陀經などを勝縁としてさとることができたのである。いついかなる教をきいてさとつてもそれはみな法華經の力である。爾前經の得道が法花經の力によるばかりではない。舍利弗や迦葉や阿難らの説法をきいてさとる者も法花經の力によるのである。そればかりではない。佛教開創以前の印度の哲學者、宗教家

佛教傳來以前から以後にわたる支那の道士や儒者、或はキリスト等にあつて四吠陀や道教や四書や聖書などをきいてその奥義に達しさとる者もみな法華經の力によるのである。

本尊抄に、

値_レ佛不_レ覺者、阿難等邊得道者有_レ之。其機有_二一、一見_レ佛法花得道。二不_レ見_レ佛法花得道者也。其上佛前漢土道士月支外道、以_三儒教四韋陀等_一、爲_レ緣入_三正見_一者有_レ之。又利根菩薩凡夫等、聞_三花嚴方等般若等諸大乘經_一以_レ緣顯_三示大通久遠下種_一者多々也。(九三二)とある。

一体どういふわけで法花經の思想をかりなければ儒外内三教の眞意をさとることができないといふのであるか。それは儒外内の諸聖典には久遠の生命と下種教がとかれてないからである。

本尊抄に、

花嚴經大日經等一往見_レ之似_三別圓四藏等_一 再往勘_レ之同_三藏通二教_一 未_レ及_三別圓_一本有_三因無_一之以_レ何定_三佛種子_一 (九三八)

爾前迹門圓教尙非_三佛因_一。何況大日經等諸小乘經、何況花嚴眞言等七宗等論師人師宗、與論_レ之不_レ出_三前三教_一 奪云_レ之同_三藏通_一設法稱_三甚深_一未_レ論_三種熟脫_一、還同_三灰斷_一化無_三始終_一是也。(九四二)

と示されてゐる。法花迹門の圓教さへも成佛の眞因とならないのであるからそれ以下の昔圓儒外内の小教などはいくら聞いても下種の功は奏しない。下種にならないからといつて、法花經以外の教法は全々無價值であるといふのではない。佛種教でないからといつてむやみにするならば、それは法花經の眞精神にもどるのである。法花經は久遠の

生命をといてあらゆる教經を生かして用ゐようとしたものである。もし法花經さへあれば他の經典はいらぬといふなら、それは種子さへあれば日光も雨も肥料もいらぬといふばんくら百姓に等しい。妙法の覺種を立派に育てるにはあらゆる宗教道德の日光や雨水肥料などを適當にそゝがなければならぬ。妙覺の種子が大切なれば大切な程全世界の聖賢の教を尊重し、理解し實行しなければならぬのである。

2、妙法の覺種

聞法下種の中で圓乘下種と權乘下種と對判して佛果の眞因は圓乘に限るといふことにきまつた。その圓乘とは法華經をさしてゐる。しかし少くとも宗祖の思想から圓乘下種と名のる以上法花經一部といつても一部唯本の立場に立つてみてゐると思はなければならない。法花經を本迹二門にわけるのは台當の法花經觀の勝劣を判釋する場合に限るのであつて、法花經そのものゝ本迹に勝劣を附するものではない。事實法華經は本迹二門相應して完全なる生きた聖典となつてゐるのである。その迹門には全人類が成佛できるといふ成佛の原理たる佛性本具の思想がとかれてゐる。迹門の諸法實相、佛性本具論によつてあらゆる生物がみんな佛になると全宇宙には無數の佛が雜然と存在する事になる。どうしてもこれらの諸佛を統一しなければならない。こゝに本門の重大使命がある。自然の勢ひとして本門は開顯された。壽量顯本が行はれた。こゝで完全に諸佛は統一されたのである。本迹二門の間にはこゝにいふ有機的關係があつてどうしてもはなす事はできないのである。

この本迹二門の根本精神を打つて一丸としたのが妙法の覺種たる一大秘法である。一大秘法とは本覺の如來とどういふ關係があつて、どんな体と相と用を具有してゐるのであるか。一秘の妙法とは本覺の如來のさとの内容であるその覺りを人間のことにあらはしたのが南無妙法蓮華經である。だからその一秘の本質、妙法の法体は本覺の如來

のさとりであるといふより外にいひようがない。もう人間のことばや思慮の及ぶところではない。本覺であるから因果をこへてゐる。因果をこへてゐるのだから佛因でもあり、佛果でもあるといへるし、佛因でもない佛果でもないといへる。こういふ妙々不可思議の本覺界にすわつてゐて、始覺の因果俱時の妙法をとくのが下種教である。

當体義抄に曰く、

至理無_レ名、聖人觀_レ理、萬物付_レ名時因果俱時不思議一法有_レ之、名_レ之爲_三妙法蓮華_一。(九九二)

日向記に曰く、

この題目の五字は五百塵点劫より已來證得し玉へる法体なり。(六四)

本來本覺には名もなければ形もない。それに覺者が妙法と名づけたのである。一度妙法といふことばにあらわれると非因非果の本覺が本因本果の妙法となつて活動する。活動するからそれを修行する人はさとりを開いて覺者となれる。本覺者は自らこれをさとり三世にわたつて十方佛土に分身散体し妙法輪を轉じてゐる。その本覺佛御自身の因行果德全体が妙法の覺種に含藏されてゐるのである。

本尊抄に、

釋尊因行果德二法妙法蓮華經五字具足。(九三八)

御義下に、

萬行萬善諸波羅密を具足したる大良藥たる南無妙法蓮華經なり。(九五)

日向記に、

釋尊の因行果德の二法、三世十方諸佛の修因感果、法華經の文々句々の功德をとりあつめてこの南無妙法蓮華經と

なし玉へり。(七七)

と釋されてゐる。

壽量品にはこの一大秘法の佛種を是好良藥ととかれてゐる。本尊抄等には一念三千、聖愚問答抄等には佛性だと示されてゐる。この妙法の藥をのめば誰でも生老病死の苦縛から解放されるのであるから良藥にさういない。また本覺者のさとりであるから事一念三千觀ともいへよう。また下種された人からみれば佛種はそのまゝ本有の佛性であらう。本尊抄云、

是好良藥壽量品肝要妙体宗用教南無妙法蓮華經是也。(九四四)

不_レ識一念三千者一佛起_二大慈悲_一妙法五字内裏此珠_二令_レ懸_二末代幼稚頸_一。(九四九)

聖愚問答抄云

妙法蓮華經者一切衆生佛性也。佛性者法性也。法性者菩提也。(五七八)

それから一秘の覺種の妙相については本種の法体には名も形もないといった。本法の相は本來無相の妙相である。

無相や空相では人間にわからない。わからなければ悟りも救ひもあつたものでない。それでは人類救護を目的とする本佛の思召しにそはない。覺者はこゝで誰にもわかるように南無妙法蓮華經といふ人間の言葉であらしたのである。

日向記云、

本因の因といふは下種の題目なり。(四)

本種といふは南無妙法蓮華經是なり。(六三)

教行證御書云、本門の肝心壽量品の南無妙法蓮華經を以て下種となす。(一一一五)

これでは覺種の妙体と妙相がわかつた。つぎに本種の妙用に及ぼう。

妙覺の種子には種子それ自体に本因本果を具してゐるのだから、自然に發芽したり成長したりする本性がある。一度下種された妙法の覺種は永久に朽ちない。時を超越して生きてゐる。生きてゐるのだから、いつでも機縁が熟しさえすれば發芽し、成長し、花がさき、佛果がなるにきまつてゐる。しかし惡縁にあへばいつまでも發芽する事ができない。下種された種子は心田の中で良縁のくるのをまつてゐる。法花經には佛種は縁によつて起る。故に一乗をとくとある。こゝでもし一佛乘の聲をきくならば久遠下種以來心田の底に眠つてゐた妙法の種子がめをさます。さうして覺芽をだした種子はたちまち生長してその心田を聖化し覺りの花を開かせるのであらう。妙覺の種子の妙用とはあらゆる人を即身成佛させるはたきである。父母から生れたその身そのまゝ覺る時は心のうちに一大革命が起るのである。それが降魔と成道である。無始以來たちこめてゐた迷ひの雲は一陣の風にふきやられて眞如の月が煌々とさへわたるであらう。

覺種がいつのまにか自分の心の中で生長して本覺の如來となつてゐるのを信するならばそれは本門の本尊とあらはれるであらう。わが九識のうちに本覺佛を信するよろこびを言葉にあらはす妙法の唱へはそのまゝ本門の題目となつてゐる事に氣がつくであらう。その本尊と題目とを我色心二法の上に体现するならばそのまゝ金剛寶器戒を持ち本門の戒壇を實現しつゝある事になるのである。

最蓮房御返事「我等末法濁世に於て南閻浮提大日本國に生をうけ忝も諸佛出世の本懷たる南無妙法蓮華經を口に唱へ心に信じ、身に持ち手に翫ぶ事これ偏に過去の宿習なるか」(八三七)

(以下次號)

人生觀斷想

望 月 舜 勝

千紫萬紅多種多樣の人間生活は、それが意識的であると無意識的であるとに拘はらず、すべて或る價值(Values)を中心とし目的とし且つ價值体系といふ骨組み、組織に立脚して、熾烈なる生活行動を營んでゐるのである。上下貴賤老若男女を問はず、あらゆる人間生活の根底をなし目標となるものはこの價值であつて、又すべての人間の活動をも支配してゐるのである。従つて價值体系が混亂し錯雜し顛倒してゐれば、その人間生活も必然の歸結として錯亂し顛倒することを免れないのであるから、我々はこの混亂し誤り易く錯雜し勝ちな價值体系を組織立てることに依つて單に個人的のみならず社會的國家的國際的にも徹底せる嚴正なる價值觀念を各自その中心奥深くに確立し把握しなければならぬのである。

然らば價值ウエルトとは如何、といふ疑問を抱かざるを得ないのであるが、元來「價值」とは甚だ妥當な言葉ではない。何故となれば「價值」とは支那より傳來せる言葉であつて、やゝともするとこの價值といふ言葉は物質的評價を意味してゐるが故に現今に於ても商業的であり實利的であり極めて低級な意味に於いて通用されてゐる様に思はれる。「價值」の眞の意味は日本語の「尊い」「好ましい」「願はしい」「望ましい」等が第一義的に最もピッタリと表現して餘すところなしと斷言しても憚らないのであるが、就中最も普遍的なものは「望ましい」といふ言葉である。望ましいものの即ち吾人の欲望の對象が價值あるものである。望ましいとは即ち是れ尊いもの有難いものであつて吾人の欲望を

有難からしめるは吾人の奮闘努力如何に存するのであるから困難を排し堅を破りてあらしめるべく努力せねばならぬのである。換言すれば價值とは理想であるが、この理想は現在眼前に存在せるものにあらず、又斯くなりゆくものではなく只管吾人の努力奮闘如何に依つて實現せられ創造せられるものである。望ましいものが即ち有難いものであり、有難いものが即ち望ましいものである。かく兩者は相關するのであるが故に如何なるものが有難いといふことは如何なる希望あるかによりて決定され得るのであるが以上のことに對して上下本末の嚴正な區別をつけなければ即ち批判を行はなければ凡そ「價值」といふものに對して徹底明白な觀念を把握することは到底不可能なことではなからうか。

然るに我々人間の欲望は多種多様無限雜多であつて而も諸欲望は各々獨立せるものではない。千頭一體の大蛇の如く多數の欲望は各々或は右せんとし或は左せんとし又は矛盾し撞着していがみあつてゐるが、すべては結局「自我」に根ざしてゐるのである。千頭一體の大蛇の搖籃は即ち「自我の生命」である故に「自我の生命」の向ふところ一点ならば欲望も統一され、欲望が統一組織立てられればその生活は安住地を得るのではあるまいか。然らざれば右往左往裡に碌々たる人生五十年徒らに黃炊一炊の夢短きを嘆く盧生の徒となるであらう。たと白駒の隙を行く速きを呪ふより寧ろ天に唾する自己の愚を悔ゆべきである。が斯くなりては既に臍を嚙むの恨みとなり永劫に轉迷開悟の得權を消失する者となる。

然らば生命とは如何。古來數多の碩學が生物學的化學的に是を究明せんとしたが、醫學者の生命論の如く遂に唯物的機械的な自然科学に依つては説明し盡されないものである。我々はこゝに生命の姿について探究を深めなければならぬ。自然科学者の言葉を借りて言へば生命とは新陳代謝であると謂ふ。然らば新陳代謝とは如何。廣義に言へば流轉であり運動である。が新陳代謝のみをもつて生命の姿なりと斷定し得ようか。逝く者は水の如し矣と詩人を歌はしめ

た川の流は一秒をも休みなく流轉し運動して新陳代謝を行つてゐるが決して生きてゐるとは言はれないのである。

すべての有機体が流轉する如く川の流れも新陳代謝を行ふがそれは物體的であり機械的である。これに反して生命とは自らを創造するものである。自力に依つて行はれる新陳代謝——これ即ち不思議なる生命の姿ではあるまいか。自力に依る新陳代謝とは新興滅舊、生と滅とを共有して是に依つて生命を確保するのである。謂はゞ生命の辯證法とでも稱すべきものであらふ。従つて生命は無常である。がこゝに生命の妙味は存するのである。飽くまでも生きること即ち永遠無窮に生きること、不滅不朽は生命の終局の目的であり至高の希望であらふ。永生といひ常住といひ、限りなき生命を求め壽命無量に憧れるは東西宗教の規を一にするところである。流轉無常より解脱して常住を得ること即ち涅槃に入ることが人間最高の最後の願望であるとすれば、これより推論して總ての人間性の憧憬希望は不滅不朽永生常住に關係してゐると言つても決して過言ではない。而も我々人間は一面肉體的存在者としては時間と空間とに制限されてゐるが故に有限的なものであり死は何人も避けることの出来ない必然の運命である。が併し人間は他の一面精神的存在者としては哲人ソクラテスの如く精神に生きんが爲めに從容として毒盃を仰ぎし行爲、又は古聖孔子が殺身成仁矣と喝破せし言句。法華經の我不愛身命但惜無上道の聖句等は時間と空間とを超越せんとする聖賢傑士の精神的生命の飛躍である。こゝに肉體的生命と精神的生命との興味深き對立があり物質的價值と精神的價值の根本問題の存在するところである。

今こゝに肉體的生命と精神的生命との二元に分類して論旨を進めて見やう。肉體はその生長哺育の爲に衣食住等の經濟生活と、個別的肉體を以つて子々孫々に依つて意志の完成を期せんが爲に性生活とを要求する。是に於いて物質的經濟的價值は肉體的生命の根本的價值となるのである。然るに全人類の殆んど九割迄はこの衣食住性の四欲望に

のみ終始し日夜孜々汲々としてゐるのである。其の人生の殆んど全部をこの經濟生活と性生活のために行動しつゝあるものが大部分である。彼等はこの土に生を享けてより漸く勞働の能力を有する頃から、其の死に至るまで營々として他の高き文化生活に深く預ることなく可惜一生を終るのではあるまいか。殊に自然科學の異常なる發達により衣食住獲得欲換言せば經濟的欲望(物慾)を空前に膨脹せしめた十九世紀後半期に於ける、あらゆる思想家は唯物論唯物史觀に囚はれ、マルクス、エンゲルス等の如きは人間の歴史は生産組織の歴史であると稱するに至つた。次に人間社會は集團的なものであるから、物質的經濟的價值の上に更に集團的な社會的な價值として名譽權力等が生れて來るのである。人類の九割九分まではこの經濟的或は社會的名譽權力の獲得の爲め、是等の欲望を満足せしめるために終始してゐるのであつて殊に現代の政治家の如きは權力のためには節操をも道德をも蹂躪して何等恥づることなき狀態ではなからうか。

こゝに於いてか心即ち精神をもつてこれ等を支配しなければならぬとすれば、これより精神にも價值を生じてくるのである。肉體的生命を不滅不朽ならしむるためには精神的生命に依らなければならぬ。がしかし精神的生命を滅すものがある。即ち匹夫の勇宋讓の仁——惡である。是に反して精神的生命を生長せしめるものは善である。然らばこの精神的生命を支配するものは如何。佛教の語を以つて一言「悟」と言ふべきである。諸徳は精神の外邊に在るものであつて、中心に耀々と輝く光こそ實に「悟」である。「悟」は「認識」である。是總ての價值体系の母體であり源泉であり基礎である。

附記 以上私は人生を以て價值實現の過程として觀やうとした。即ち價值生活として觀られた「人生とは何んぞや」

といふ課題について考察したのであるが、かゝる問題は僅かの紙數によつては到底闡明しつくすことは出来ない。而してこゝではつとめて専門的研究をさけ只管通俗的に人生觀的思索の如何なるものであるかを斷片的に示したにすぎない。人生を以て價值生活と解せんとする者は、カントによつて示されカントによつて殘された問題の尋究に於て皆その志を同じうするのである。十九世紀二十世紀の思索家の問題は要するに價值實現の過程として觀られたる「人生とは何ぞや」といふ問題である。併しこの問題は結核は價值体系の問題となり、カント、フイフテ、シェリング、ヘーゲル、等によつて發展せられたる歴史哲學、文化價值の哲學の確立によつて人間文化生活に於ける多種多様の努力に對してその意義を闡明しその歸趣を指示すべきものである。たゞ我々に課せられた問題は各種文化價值相互の地位並びに關係如何といふ問題である。換言すればカント、フイフテの如く倫理的價值を以て、シェリングの如く藝術的價值を以て、ヘーゲルの如く概念的價值を以て、人生の意義を定め人間生活の歸趣を尋ねんとするが如きは是である。或はこれ等をすべて連續の關係に置かずして並列の關係に於て觀んとすればこれ等の凡てを統一に導くべきものは抑々如何なるものか。茲に歴史哲學の問題が横はる。この問題の解明あつて始めて吾々は宗教、哲學、藝術の意義を悟り、道德、法律、政治、經濟、技術、科學の歸趣に迷ふ事なきを得るのである。かくして始めて吾等はこれ等の價值實現に對する吾等の生活努力が如何なる意義を有し、社會國家に如何なる役割を演ずるかを認識するのである。詳論は他日を期す。

身延御入山と南部實長

三 木 淨 達

一、緒 言

古來身延御入山の理由として最も普遍的には「三諫不聽則去」の「禮記典禮」に據る古事が擧げられてゐる。然し深く聖意を拜する時、然か簡單には評し得ないものがある。

「四條金吾殿御返事」に

「情事ノ情ヲ案ズルニ今ハ我身ニ過アラジ、或ハ命ニ及バントシ弘長ニハ伊豆ノ國、文永ニハ佐渡ノ島、諫曉再三ニ及ベバ留難重疊セリ、佛法中怨ノ誠責ヲモ身ニハハヤ免レヌラン、然ルニ今山林ニ世ヲ遁シ道ヲ進マント思ヒシニ、人々ノ語様々ナリシカドモ旁存ズル旨アリシニ依リテ、當國富山ニ入リテ已ニ七年ノ春秋ヲ送ル」

と述べられて明に一切の爲すべきを爲し、試みるべきを試みて今は一向なる故に山に入つて法華經を畏こむ上行菩薩としての生活なすべくしての御入山とも拜せられるからである。

然しこの客觀的事情とも見られる所謂「旁存ズル旨」の内容については、何れの御書にも見當らない、行學朝師も「元祖化導記」に『人々ノ語様々』については

『或ハ籠居ノ在所ヲ伊豆ト望ム人モ有リ、武藏ト望ム人モ有リ或ハ下總ナンドト各々所帶ノ地ニ可^キレ有^ルニ入御一之由様々也シカドモト云フ事也』

と釋成してゐるが、「旁存ズル旨」については

『又方々存ズル旨^云云、御所存定シテ不^ズレ可^ラ輕、此ノ御文体ニ意ヲ入レテ可^キレ案^スレ之者ナリ』

と、頗る重視して輕々に論ずべからざる事を誡めてゐる。

故にこれが論究は、種々な角度から、種々な方法でなされねばならない、が然し今は限りある紙數であるから單にその一考察として、波木井殿、南部實長の社會的地位を論じ、身延御入山の御志が既に佐渡に於て決せられてゐたことを述べて見たいと思ふ。

二、波木井殿の社會的地位

當時、聖祖門下の有力者の多くは、直接鎌倉に仕へてゐたものか、或はこれと密接な關係を有してゐた。故に聖祖への幕府の迫害は直ちに門下に及び、所領沒收、減地、御内擯出等の事

件が頻々として起り、尠なからず聖意を傷ましめたものである。

彼の「八風抄」に

『スギニシ日蓮ガ御カンキノ時、日本一同ニikum事ナレバ弟子等モ、或ハ所領ヲヲ、カタヨリメサレシカバ、又方方ノ人モ或ハ御内内ヲイダシ、或ハ所領ヲオヒ（追）ナンドセシニ……日蓮ガユヘニメサレテ候ヘバイカデカ不便ニ候ハザルベキ』（一、五四五）

と、述べられてゐるのを見れば、凡そ其の間の消息が窺はれる。

かゝる時に當り特に波木井殿に倚り、身延に入られた事は實に深き御意によるものでなくてはならない。御入山後の「高橋入道御書」を拜すると

『便宜ニテ候シカバ設ヒ各各ハイトハセ給フトモ、今一度ハミタテマツラント千度ヲモヒシカドモ、心ニ心ヲタ、カ（煩悶）イテスギ候キ、ソノユヘハ、スルガ（駿河）ノ國ハ守殿ノ御領コトニフジ（富士）ナンドハ後家尼ゴゼンノ人々多シ、故最明寺殿、極樂寺殿ノカタキトイキドヲ（憤）ラセ給フナレバ、キ、ツケラレバ各各ノ御ナゲキナルベシトヲモヒシ心計リナリ』（二、八四）

と、述懐されてゐる。この『キ、ツケラレバ』の御文は語つて聖祖の深意、奈邊にあるかを肯かせるものがある。

こゝに於いて選ばれた山、身延の領主としての波木井殿南部實長の社會的地位が當然考へられねばならない。

南部氏が由緒正しい源氏將軍の連枝、甲斐源氏の一流である

身延御入山と南部實長

ことはあまりに明かな事實であるから今は考證を省く。

甲斐源氏は承久三年幕府西犯の時、東山軍の將として大いに戦功を立てた。この事は「祈禱抄」に

『五月二十一日武藏ノ守殿ガ海道ヨリ上洛シ、甲斐源氏ハ山道ヲ上ル、式部殿ハ北陸道ヲ上リ給フ、六月五日大津ヲカタムル手、甲斐源氏ニ被レ破ラ畢ンヌ』（九〇九）と記されてゐる。

實長の父光行は遠光（加賀美氏）の子、長清（小笠原氏）の弟で、治承四年石橋山の戦功によつて頼朝から甲斐の南部を拜領し、南部を氏としてこゝに住んでゐたが、後文治五年七月、奥州征伐に勳功を立て、奥州五郡をも拜領したので、建久二年十二月奥州に移つて奥州南部の基を開いた。

實長は光行の三男とも六男とも云はれてゐるが、父が奥州に移つた後も甲斐に残り、飯野、御牧、波木井の三郷を領して波木井に居し、波木井殿と稱せられたことは明かである。

實長の所領に就ては、岡敦遼師の「波木井公の信仰と子孫の勤王」によると、征夷大將軍源頼經から拜領したものととなつてゐる。即ち

『公ガ甲州南部、飯野、御牧等ノ領土ヲ戴イタノハ源家ノ直參デ、征夷大將軍源頼經ニ仕官サレタカラノコトデ、公ガ度々鎌倉ヘ出仕サレタ所以デアル。因ニ宗祖ノ門下ハ多ク源家取立ノ士デ當時鎌倉幕府ノ北條執權ニ敵對ノ心持ノアル人々ガ多カツタ』

と、云ふのがそれである。

然し「東北太平記」の甲斐南部家系の條には

『光行始メ封ニ甲斐南部一、後封ニ奥州三戸一甲斐岡地ハ光行ノ三男彦三郎實長ニ被封、實長其向鎌倉右大臣實朝公ノ御小姓ト被成、八才ニシテ甲州巨摩郡波木井、飯野、御牧三ヶ郷ノ地頭ヲ給リ父ノ治領相合シテ領レ之^{云々}』
と述べてをり、又「御家傳系圖」にも

『實朝公十八才、實長公八才ニシテ小姓トナリ、甲斐飯野、御牧、波木井三郷ヲ拜領ス』

と説いて共に三代將軍源實朝から拜領したと主張してゐる。

今これを検討するに、前者の所謂、源賴經とは恐らく藤原賴經の混同であらう。何故ならば承久元年、三代將軍實朝は殺害せられ、下手人公曉も亦殺されて、源氏將軍は北條執權の政治的策謀に亡び、その後公武の間に曲折があつて藤原道家の子當時二歳の三寅が鎌倉の主として迎へられたそれが賴經將軍である。然し賴經將軍の名はあつても、その實が執權北條氏の手に移つてゐた事は言を俟たない。故に實長が北條氏に敵對の志を持ちつゝ、賴經から甲斐三郷を拜領したと云ふのはナト受取り難い。それに賴經仕官の理由をもつて鎌倉出仕の度々なりし證據とし、且つ屢々聖祖の垂教に浴したものと考へば、あまりにも無理が多い。何故なれば聖祖が鎌倉に開教された建長五年は將軍宗尊親王の時であり、賴經は十年已前の寛元二年廿七歳で幼弱の子賴嗣に職を譲つて入道してゐるからである。

そこで後者の實朝拜領の説を考へると、實長が源氏の一門であり、父光行が奥州に移つた後に、幼弱の實長が甲州に残つた事實等から推して、實朝の小姓として仕へる事は、當然あり得べきことに思はれる。だが若し實朝に仕へたとすれば、こゝに問題になるのは實長の年齢である。

實長の年齢には異説が多い。然し史書多くは聖祖と同年としてゐる。即ち「身延山史」には

『波木井實長永仁五年丁酉九月二十五日偶徴悉ヲ感じ俺然トシテ終焉、壽七十八六』

と云ふのがそれである。永仁五年から逆算すると聖祖と同じく貞應元年の誕生となるのである。然しこの説には大きな矛盾がある、それは父光行の歿した建保三年より七年後の誕生になるからである。何れにしても實朝に仕へるには聖祖より相當年長でなくてはならない。

故に「東北太平記」の桐太角の條に見える九十六歳卒去の説を検して見ると、建仁二年の誕生となつて聖祖より二十歳の年長である。而してこの説は父光行の推定年齢四十二歳の子となつて前者の矛盾は解消し、而も「御家傳系圖」の説にも符合してゐる。尙御書の上にも實長年長説の資料は往々にして見受けられ、且つ『法門ハ御信用アルヤウニ候ヘドモ』世間の事には、あまり聖祖の御指南によらなかつた實長の態度からも肯定せられる。若し然らば實長の甲斐三郷の拜領は賴經仕官によるものでなく、確かに三代將軍實朝より拜領したものと云ふ事が

出来る。

然し實長が頼經に仕官しなかつた意味ではない「東北太平記」を見ると、實長は暦仁元年頼經將軍上洛の時、選ばれて隨兵騎馬の列に入り、颯爽たる武者振りを見せてゐる。而して寛元二年頼經が辭職した後は、實長も亦幕府に仕ふるを屑とせず竟に致仕して波木井に隠れ、その後、鎌倉に出仕する事は極めて稀であつた。時に實長四十三歳である。

惟ふに實長は性剛直、正義の念強く壯齡の時は鎌倉武士を代表する霸氣勃々の人であつたやうである。況んや實長が源家の連枝であり、承久幕府西犯の時、東山軍の將として戦功のあつた甲斐源氏の一流であるから、當時の幕府にとつては甲斐の南部實長の存在こそ敬遠に値するものがあつた。

三、實長入門の因縁

次は身延御入山の決意が果して第三國諫不聽の後にあつたか否かについて考證して見たいと思ふ。

これには先づ實長入門の因縁を知らねばならない。實長の入門は「統紀」によると

『正嘉中實長直ニ鎌倉ニ、憑三在原義宗ニ初見ニ高祖ニ、高祖莞爾トメ合レ笑如ニ故相識ニ云々』

となつて、如何にも物語り的である。が然し現存の御書に徴して然か古い入門とは考へられない。

即ち實長への最初の御書と思はれる文永元年九月の「南部六

身延御入山と南部實長

郎恒長御消息」を見ると單に念佛に關する質疑に答へられたものであるから、當時尙實長が正式の門下でなかつた事が察せられる。且又それより十年後の文永十年八月の御書には

『貴邊ハ之ヲ聞キタマフコト一兩度一時二時歟』(九八四)と述べ、而もその袖書には

『鎌倉ニ筑後房、辨阿闍梨、大進阿闍梨ト申ス小僧等之アリ之ヲ召シテ御尊ビアルベシ、御談義アルベシ』

と述べられてゐる所から見ても、實長が聖祖に直接垂教に浴した事の極少であつた事は解る。

惟ふに文永元年の當時、誰かに憑つて誘化され、從來の信仰に動搖を來し書を以つて聖祖に質疑したものであらう。然らばその誘化の師は誰かと云ふと、六老僧富士興師の「御弟子分帳」及び「原殿御返事」によつて明かに興師である事が證明される。

即ち「原殿御返事」には

『御信用候ハヌ上、輕シメタリトヤ思食候ツラン、我ハ民部阿闍梨ヲ師匠ニシタル也ト仰ノ由承候シ間、サテハ法華經ノ御信心逆ニ成候ヌ』

と、向師を師として迎えた實長の信行を責め、更に

『日興ガ波木井ノ上下ノ御爲ニハ初發心ノ御師ニテ候事ハ二代三代ノ末ハ不レ知未ダ上ニモ誰カ可ニ御忘候トコソ存候へと、明かに興師が自ら誘化の師たる事を述べてゐる。又興師の直弟子三位順師は「從開山傳日順法門」に

『波木井富士上人ニ不レ可ニ背キ申ス云父子ノ起請數通有レ之、

波木井ニシテ法華法門ヲ弘初メサセ玉ヒ申シ富士上人根本ニテ御座ス、其後大聖人鎌倉ニテ後大聖人ノ御說法ヲ聽聞シテ法華宗ニ成玉フ、サル間日興上人波木井ノ初發心ノ師ニテ御座ス事無レ疑云々

と記述してゐる。所が先日室住師が身延文庫から發見された「日進聖人仰之趣」の中には

『實ニ白蓮阿(興師)ヲ日圓モ師ノ契約ハ無之起請文ヲ以テ、古老僧(向師?)トノ師弟ノ契約ハ二通有ルナリ、師ノ禮儀狀モ有之也云々』

と述べて興師の關係を否定し、向師を師とした事を主張してゐる。然しこれはその年代からモ師資の關係からも全く順師の「從開山傳日順法門」と相應するもので、却つて興師の關係を證するものである。

既に實長の入門が興師に依存するとすれば、實長は興師の入門した文應元年より已前の正嘉元年に入門するべき道理がない「日興上人略傳」には

『弘長三年宗祖御赦免ノ後、岩本ニアリテ法鼓ヲ駿甲二國ノ間ニ鳴シ、改宗セシムルコト日ニ盛シナリ……甲斐ニハ波木井ノ長男清長先ヲテ得道シ、後其父母及ビ一家ヲ勸導シテ受法セシム』

とある。これによつて推察するに弘長三年伊豆御赦免の後、聖祖は門下を策勵して有縁の地に傳道されたものであらう。而して甲斐の産である興師は故山岩本に據つて甲駿兩國に大いに法

鼓を鳴し、遂に波木井一門を化するに至つた。然し當年の興師は尙弱冠、故に實長は興師を通じて書を聖祖に奉り、御返事を得たのが所謂、文永元年九月の御書であらう。

さすれば實長入門の因縁は富士興師の誘化によつて弘長文永の交、聖祖の門下となつたものである。

已上で大体實長入門の因縁が諒解出來たと思ふから、次は少しく佐渡の御生活を述べて見やう。

四、赦免の確信

聖祖は決して奇蹟を行ふ人ではない、然し法華經の行者としての信念は凝つて幾多の奇蹟となつて現はれてゐる。佐渡に於ける御赦免の確信も亦その一例であらう。

即ち文永八年十一月佐渡御流罪後一ヶ月目に富木入道に

『流罪ノ事痛歎セ給フベカラズ』(七〇三)

と書き送られた聖祖は、翌九年四月最速坊へ

『餘リニウレシク候ヘバ契約一ツ申シ候ハン、貴邊ノ御勘氣疾疾許サセ給テ都ヘ御上リ候ハバ、日連モ鎌倉殿ハユルサジトノ給ヒ候トモ諸天等ニ申シテ鎌倉ニ歸リ、京都ヘ音信可ヘ申ス候、又日連先立テユリ(許)候テ鎌倉ヘ歸リ候ハバ、貴邊モ天ニ申シテ古京ヘ可ク奉ル歸候』(八四一)

と語られてゐる。以つて如何に聖祖が法華行者としての流罪生活を明朗に過されてゐたかを察するに足る、

然るに此時、鎌倉の門下等が赦免運動を起さうとしたので、聖

祖は早速

『早々ニ不^レ蒙^ニ御免^ヲ事ハ不^レ可^レ嘆^ク之^ヲ、定^テ天抑^{フル}カ之^ヲ歟、
乃至日連ノ欲^{スル}蒙^ニラント御免^ヲ之事^ヲ出^ス色^ニ弟子ハ不^レ孝ノ者也、
聊^モ不^レ可^レ扶^ニ後生^ヲ各各知^ル此旨^ヲ』(八五五)
と嚴誡されてゐる。

蓋し『一闇浮提第一ノ聖人』たるを顯すべき御身には、自ら
聖人としての出處進退があるべきである。

果せる哉、翌十年二月、先づ「法華宗内證佛法血脈」を著し
續いて四月「觀心本尊鈔」を著し、最後に七月八日「未曾有大
曼荼羅」を圖顯せられた。これ佐渡に於ける使命の達成である。
こゝに於て同月の「富木殿御返事」に

『御勘氣ユリヌ事御歎キ候ベカラズ候當世日本國子細可^レ有^レ
之由存^ス之^ヲ定^テ如^ク勸文ノ候ベキカ』(九七九)

と「勸文」安國論の豫言の的中を直觀洞見せられつゝ只だ赦免
の日を待つてゐられた。

斯の如く聖祖は流罪の當初から赦免を確信せられてゐたので
ある。故に、文永十年の正月既に最速房の籠居につけて

『一御山籠ノ御志ノ事、凡^ソ雖^レ背^キ末法折伏ノ行ニ病者ニテ
御座候上、天下ノ災國土ノ難強盛ニ候ハン時、我身ニツミ知
リ候ハザランヨリ外ハイカニ申シ候トモ國主信ゼラレマジク
候ヘバ、日連尙籠居ノ志シ候』

と述べられて、第三國諫の不聽を達見せられ御自身の山籠の志
をも洩らされてゐるのである。

身延御入山と南部實長

誠に聖祖は謙倭明を蔽ひ、忠誠用ひられざるを知つて、今は
「勸文」にまかせて身につみ知らしむべく、山籠の決意をされた
のである。

五、籠居の地

聖祖は自ら『御勘氣ヲ蒙リシコト二度』と述べられてゐる如
く、伊豆に佐渡に共に重大な意義はあつたが、何れも幕府の勘
氣による余儀なき流罪であつた。然し山籠の事はそれに殊なり
その場所の撰擇も自由であつた、故に、恐らく佐渡隨從の門弟
七八人(阿責謗法滅罪抄「〇三」と共に、門下の有力者の領地
を研究された事であらう。しかし鎌倉との關係上、然か自由には
行かなかつた。

此時、聖意を深く体した興師が、自らの教化の因縁の地であ
る甲斐の波木井郷を紹介した。波木井は甲斐と云つても駿河に
近く、而も『深山ナレバ晝モ日ヲ見奉ラズ』との幽遠境であり
尙日本第一の名山富士を繞つて右駿河路に出づるも、左甲州路
を取るも殆んど數日程で教線の中心地鎌倉に達し得る利便の地
でもあるので聖祖の山籠の地としては最適の場所であつた。

然し聖祖の度々の御勘氣により、多少の動搖を來たしてゐた
當時門下の狀態は、誘化の師たる興師とも遠く離れた領主實長
の信仰の上に一抹の暗雲なきを得ない。そこで興師は密かに聖
意を傳えて信心の程を探られたものか、實長からの返事に對し
御喜悅の狀を現はして御認めになつたのが文永十年八月の「波

木井三郎殿御返事」である。即ち

『鳥跡飛來^{デガミ}レリ、晴^ニ不^ニ霽^ニ疾風^ニ、卷^テ重雲^ヲ如^シ向^ニフガ明月^ニ』
との御起筆に、法華行者の多難と妙法五字の流布を説き、殊に
圓頓戒壇にまで筆を進めて後

『但^シ日蓮法師^ニ度々聞^{ケル}之^ヲ人^人猶^テ値^ニ此大難^ニ之後捨^ル之^ヲ
歟、貴邊^ヘ者聞^レ之^ヲ一兩度<sup>一時二時歟、雖^リ然^リト未^ダ捨^テ玉^ハ御
信心^ニ之山聞^ク之^ヲ、偏^ニ非^シ今^ニ生^ノ事^ニ』(九八四)</sup>

と、實長の水の如き信心をば今生の事に非ずと賞讃されてゐる。
殊にその宛名には『甲斐國南部六郎三郎殿』と具さに國名を冠
せられてゐる。これは聖祖の慣例として稀に見る所であるから
身延御入山に關しては注意に價するものと思ふ。

斯の如く籠居の場所としての身延は既に興師の進言によつて
佐渡に豫定されてゐた事が推察せられる。故に興師の「富士門
徒存知事」には

『彼御廟ノ地頭南部六郎入道^{法名}日興最初發心ノ弟子也、依^ニ此
因緣^ニ聖人御在所九ヶ年間奉^ニ歸依^シ』

と述べてゐるのである。

又「三諫不聽則去」の御書として擧げられる「下山御消息」
の

『上下共ニ先ノ如ク用ヒサリゲニ有シ上、本ヨリ存知セリ、國
恩ヲ報ゼンガタメ三度マデハ諫曉スベシ、用ヒズバ山林ニ身
ヲ隱サントヲモヒシナリ』(一五七九)

の御文や、「光日房御書」の

『本ヨリゴセシ事ナレバ、日本國ノホロビンヲ助ケンガタメニ
三度イサメンニ御用ヒナクバ、山林ニマジワルベキヨシ存ゼ
シユヘニ、同五月十二日ニ鎌倉ヲイデヌ』(一四一七)
と述べられた御意、更に「種々御振舞御書」の

『本ヨリゴ(期)セシ事ナレバ三度國ヲイサメンニモチヒズバ
國ヲサルベシト、サレバ五月十二日ニカマクラヲイデテ此山
ニ入り』(一四一〇)

とある聖意は、畢竟『三度國ヲイサメンニモチヒズバ』とは、
聖祖大慈の規模であり、『本ヨリゴ(期)セシ事ナレバ……山林
ニマジワル』とは、正しく佐渡已來の所期でなければならぬ。
彼の「高橋入道御返事」に

『此程アダマル、事ナレバユリ(赦免)テ候シ時、サド(佐渡)
ノ國ヨリイカナル山中海邊ニモマギレ入ルベカリシカドモ、
此事イマ一度平ノ左衛門ニ申シキカセテ、日本國ニセメノコ
サレン衆生ヲタスケンガ爲ニノボリテ候キ、又申シキカセテ
後ハカマクラ(鎌倉)ニ有ルベキナレバ 足ニマカセテイデ
シホドニ』

と述べられてゐるのがそれである。

然し人往々にして此の『イカナル山中海邊』及び『足ニマカ
セテ』の御文を以つて、鎌倉御發足當時尙何の御目的もなか
つたかの如く解するものがあるが、凡そ聖意を得ないものであ
る。何故ならば、此御書を頂いた高橋入道は加島に住み北條時
頼に仕へたが、上意を憚り聖祖に遠ざかつてゐた人である。故

に聖祖は入道の心事と消極的信仰を知つて、殊更御立寄にもならず、寧ろ勞はる御意にて認められたものである。況んや興師を案内として十二日鎌倉を御出發、途中一日の淀みもなく十七日波木井に御着、直ちに富木殿へ御報ありて

『十七日コノトコロ、イマダサダマラズトイエドモタイシハコノ山中心中ニ叶ヒテ候ヘバ、シバラクハ候ハンズラン』(續二ノ一四六)

と述べられてゐるのを見ても、斷じて行き當りの御入山ではあり得ない。

蓋し聖祖の御行動には多くの門下の従ふ事であるから壯る復

獨居不三昧

提言

私の云はんとする所は學究的に生れ出でたものでもない。又と云つて未だ日淺き自己の生活を愚癡らんと思ふのでもない。たゞ急に學窓より出で、實生活に入つた時、如何に理想に遠い自己の生活を營み、其處に異つた理想を抱えて行かなければならないかを云はんとするのである。これも亦諸君通途の印象であり感想であるとも信じない。只私と云ふ小さな人間と其の環

雜な事情を有つてゐる。故に聖祖の言外の言を拜すべきである

六、結言

已上、要するに南部實長の社會的地位から、聖祖の身延御入山の事實を論じ、『旁存ズル旨』の一考察を試みた心算である。即ち佐渡に於ける幾曲折の幕を閉じて歸倉せられた聖祖が三諫を終つて身延に御入山された事は、彼の了義達師が云ふが如き、遠かになされた厭世的逃避や、世間的隱遁ではなく、實に諸多の客觀的情勢によつて佐渡御在島中、既に豫定された御行動であつたのである。

中澤要實

境におかれた時かく感じかく思つた事を提言するのである。

農村寺院生活

祖山の學窓を巢立つて此處に二度目の秋を迎へた。そして今春一年ぶりで祖廟に詣で此處に過去五ヶ年間、殆んど満足の留守居もない空寺に假入山と云ふ哀れな状態で住職したのであるが大きな伽藍のみの貧寺、外面は、いばる譯ではないが堂々と云ひたい。中味はガランで何もない。檀家數は二十軒あるなし

さればと云つて田畑宅地が澤山ある譯でもない。どうして生活して行くか。所謂「自力」にある。農村寺院に於ける自力生活とは如何なる方法か、養蠶か、養鶏か、果樹栽培か、悪口に云ふ「百姓坊主」の姿になり切つて行くのが農村寺院僧侶の生くべき道である。寺院の家族制は經濟の個有性を願ふやうになつてくるのは必然である。百姓坊主と笑ひ給ふな。生きんとする農村寺院僧侶の涙ぐましくも哀れな生活戦線なのである。信仰的に生きよ！宗教家は讀誦唱題の信仰による所に經濟的にも眞の安定が生れると云ふかも知れない。かく云はれると信仰がないものゝやうに聞ゆるが決してそうでない。農村寺院僧侶と農民の中にはなか／＼信仰の厚いものが数多い。なれどもそれにて生活するには餘程方便的な眞の神通力を有するか、或は巧みなインチキが、つた事か兩極端による外はない。

普通人が眞面目に而も安定せる生活を営むには正直に所謂百姓坊主の葬式係りと云つた生活が間違ひない。がこれで一体宗教家の本分であらうかとは思ふものゝ現在の社會制度下に於ける農村人心と經濟とは宗教家をして眞の完教的生活に生かす事をゆるさない。それは農村に生活するものゝみの知る苦惱であり悲哀である。

農村寺院と人心

農村人心は純朴であると云ふ。成程純朴である。されども昔時の如く無智より出ずる純朴なるものは少い。それは天保時代

の遺物とでも云ふべき老者のみで、それ等は「カタクナ」と云ふ性格に生きてゐる。若いものは純朴の姿は少く思想も都會化してゐる。とは云ふものゝ都會人程浮ついた明朗性を有してゐない。堅實な而も反面にはヒガンダ思想を持つてゐる。宗教をこれ等の人心に如何に植えつけて行くか。それには寺院の年中行事を或は諸式を寺院中心に復興し改造して盛り立て、行く事である。常に寺院は農村民の慰安所であり、悩みの解消の場所であるやうにしたい。生活に慰安と娛樂の機關の少い農村に於いて農村人心をして宗教的に歡喜を有する生活をなさしめる事が大切である。なれども經濟的微弱な農村寺院のその機關を機關化する事が出来ない所に行つまりがある。かゝる思想的立場より私はこの間、宗祖日蓮上人の御會式を執行した。宗祖への御報恩！檀信徒舉つて異体同心の姿を表示して行くのが、あの萬燈煉行列である。全村火の海と化した賑ひ、當寺開闢以來と村民は喜びあふれてゐた。寺門發展の爲、宗門弘通の爲、土地開發の爲、最も意義深く大切な事である。なれども、そのあとたゞちに迫る恐慌がある。經濟的破綻であり、所謂赤字である。これをどうするか、満足な檀信徒が少く、當時の法務も少い寺院、つくのひ切れぬ悩みがある。仍て大きく賑かにするより靜かにしてゐて利を取れ主義に流れざるを得ない。其處に宗門の發展と弘通が阻止されるのである。これでは何處に宗祖の恩恵によつて生活する宗教家の意義がある。宗祖が「聖僧の恩は凡僧に報ずべし」と云はれたからと云つて、かゝる生活者に

安定を與へんとの意味では勿論ない。がと云つて、この經濟的破綻をつぐのふ餘力者は殆んど少い。かゝる結果を生み出す寺院經濟の苦しみは何處に源泉があるかと云ふに、それは徳川時代の支配下にあつた餘力ある寺院の姿を常に農村人民は執着しかゝるものであると思つてゐる。然るに反して録付知米もない而も税の負擔の多い寺院の現在であるだけに苦しみである。これで何處に人心の木鐸となり指導者となり行くであらうか。もつと自覺せよ、爲政者よと呼びかけて見たい。この聲決して宗教を政治的道具たらしめたいと云ふ意味で云ふのではない。

學窓への言葉

哀れな農村寺院の姿と人心、これを救ふのは吾等の生命であるとか大きく理想を持ち行かれるのは誠に結構であるが、實際は常に理想家を入れない。農村人心を救済して行くには寺院人も農村人心に同化して行く所に眞の救済の道があると云ふかも知れない。それは机上の論であり、この實行者の大体は百姓坊主の姿になつて行くのである。農村寺院にあるものは高く低く所謂中道を歩む精神が生活が完全に行ひ得るものにして始めてなし得るのである。徒らに農村人心化と云ふ事は結局前述の如く生活の爲に生活する百姓坊主になる故、要は農村人心をよく知りぬく事だけに大切である。學窓にあつて農村の寺院とその現狀を眺むる時、誰しも思ふ。「吾人はかゝる象牙の塔たる宗學なぞに没頭してゐる時ではない」とされど心せよ、諸氏よ、學問

は學問の爲にするのみと思ふかも知れないが、それは大なる誤謬である。「用の爲にはしばらく用を忘れざるべからず」とある哲人の言葉、休し味ふべきである。吾等が一度社會に出ずる時學問の爲の學問と思つてゐた宗學等が如何に力強い源動力であるかを痛感する。その時如何に自己の無學なるかを慨かれるのである。生活の爲の百姓坊主になり切つて行くならいざ知らず宗教家として理想に生き、意義ある生活を送らんと思ふものは心してクラシツクな本化教學を徹底的に味讀せられたい。現代社會に對する宗教の活用化は必然と内出するであらう。

殊に當縣下は他宗權門が多い。それに對して我宗が誇り得るのは本化教學が宇宙の大眞理性を實際に有して居るからである此處に於て自づと宗祖の有名な四箇格言も高聲に唱へ得るのである。

故に學窓の諸氏よ、あくまでも眞摯に本化教學に没頭し、其の眞理性を學究的に味つて頂きたい。一度社會の實踐に立つ時本化の教相門が如何に學問的な觀念的なものであるばかりでなく實踐的に生活の上にすぐれておるかを體驗し得る。本化の實踐門が唱題行にある事は一般人心の生活の力である事を知り得ると思ふ。

其處に「宗教は生活の力なり」の標語の下に「力の宗教」とは日連大上人の宗教である。と教觀不二の教學の有難さを思ひつゝ獨居不三昧の中に三昧を求めてゐる。

日蓮聖人御系譜の研究（續）

鈴木智好

◎井伊氏赤佐氏貫名氏の關係

井伊盛直の第三子赤佐三郎俊直が井伊氏から分れて横尾に住したのは一八〇九年である事は前項に既に述べた。而して貫名政直が又盛直から分れて貫名に下つた事もやゝ明となつた。共資、共保當時遠江に十二郡を領してゐた井伊氏は此處に赤佐、貫名の分家を出したのである。貫名氏の祖政直に二子があり、長子を行直、是は貫名の二代を繼ぎ、次子の直友は石野に下つて石野の祖となつてゐる。此の石野の事蹟に就ては何等知る由がない。

横尾に下つた俊直は、其の子共俊、共俊の子共明と三代横尾に住してゐた事は奥山舊記によつて明である。共明の子朝清が井伊谷を去る一里の奥山に城を築き此處に住した。朝清以來代々奥山氏と名乗り奥山城に居住し、横尾には田力文右衛門を先祖の墓守として置いた。此の奥山城は後南北朝時代、井伊の本家と共に官軍に味方して大いに忠勤を勵んだのである。今遠江風土記によるに

奥山古城

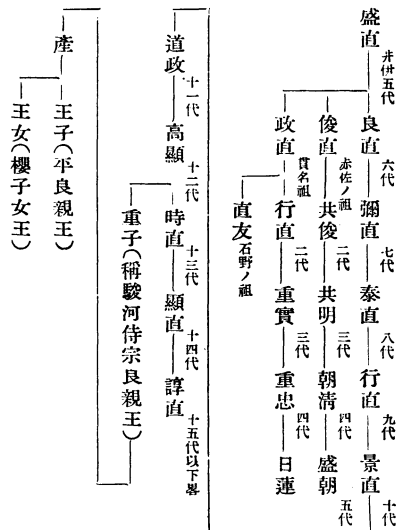
奥山六郎曰昔遠江介、井伊介族人奥山次郎藤原朝藤之城也。子孫世々住。而延元元年京師兵亂之時、後醍醐天皇御子宗良親王入御此城也。慶安四年無文禪師入御之時、朝藤建立方廣寺喜慶元年二月十五日朝藤卒去、子孫相續領知奥山也。足利將軍十三代之時、城主奥山因幡守不應台命而落城、其子奥山源太郎住居于城下。○城跡在村中高平、郭外三方溝、郭中正南礎石存焉。乃諸人曰奥山城去井伊谷古城一里。

南方傳記曰、元弘建武の亂の時は、井伊介道政官軍に屬て戦功あり。延元元年十月後醍醐天皇叡山より吉野へ遷幸の時新田義貞は一宮尊良親王の供奉て北國へ赴き井伊介道政は第二宗良親王の供奉て叡山より遠江國井伊谷へ歸り同郷奥山に楯籠り、近隣を隨て宮を守護し奉る。

太平記卷十七（延元元年十月十日）曰、東宮一宮中務卿（尊良）親王北國へ行啓、妙法院宮は御船に被召て遠江國へ落させ玉ひ、阿曾宮は山臥姿に成て吉野の奥へ忍ばせ給ふ、同記

第十九(延元元年) 遠江介、井伊介は妙法院を取立て奥山に
 栢籠 ○兵家茶話云、延元元年冬、主上忍で都を出させ玉ひ
 楠正成が一族等召具して、吉野山に入せ給ひ、宗良親王は井
 伊介道政供奉て遠江國打出濱より御舟に召され、美濃地を歴
 て尾張國犬山と云所へ渡らせ給ふ。かゝりける程に同國中島
 の堀田修理亮之盛、海部大橋三河守定高等参りて、遠江國へ
 送り参らす、井伊介道政甲斐甲斐しく供奉りて己が領内奥山
 城に入り奉りて、新助高顯をして國中の親族に觸れて招きけ
 る程に、秋葉の天野一黨を始め奥山、二俣、入野等の兵我も
 我もと集りけり云とあり。

井伊介とは十一代道政の事で、遠江介とは十二代高顯の事
 ある。遠江介、井伊介之族人奥山次郎藤原朝藤とあれば井伊家
 より分れたる赤佐氏の子孫なる事明である。此の朝藤の時、道
 政が宗良親王を奉じて此の奥山城に立籠り武勇を現したのであ
 る。明治四十五年滋賀縣大演習の折、明治大帝より井伊光正公
 に從三位を追贈あらせられたのである。然し光正は井伊家の系
 圖中には無く、此の時代宗良親王を奉じて義軍を擧げたる井伊
 家の一族なる事疑ひない、然し今は系圖中より落ちてゐる。
 現在井伊谷龍潭寺後に宗良親王を祭る官幣中社井伊谷宮がある
 高顯の女に重子と呼ぶ者があつて宗良親王の妃となられ、平良
 親王、及び櫻子女王を御産み遊ばしてゐる。
 如斯井伊氏、奥山氏からは南朝の大忠臣を出してゐる歴史
 上明である。南北朝時代其の系圖を出せば次の通りである。



井伊家の舊き系圖によると十一代道政より十六代成直に至る
 間載つてゐないのである。十一代忠直となつてゐて舊い系圖で
 は南北朝時代の事は全々載らず之は如何なる理由によつて落し
 たのであるか不可解でならない。

此處で一言しなくてはならないのは、井伊家の菩提寺たる井
 伊谷龍潭寺の事である。龍潭寺は共保以來代々井伊家の菩提寺
 になつてゐて、共資公以來の御位牌を安置して特に其の寺の本
 堂裏には同家の御魂屋がある。而して共保以來代々此の龍潭寺
 に葬り現在も當時のまゝの共保の石牌が残つてゐる。然し共資
 公の石牌のみ龍潭寺にないのである。此の事は後に詳しく述べ
 る事にして今は同寺の縁起だけ述べて置く。

龍潭寺は萬松山と號し聖武天皇の御宇天平聖歷五年（一四一三年）に行基菩薩の開創に係り當時は八幡山地藏寺と號した。即ち寺後に八幡社あり本尊は行基菩薩自作の地藏尊を安置せしを以て斯く號したのである。後寛弘七年正月元且共資八幡社の井中より一子共保を得、是に井桁に橘の紋所を與へ井伊を姓とせしめた。共資は村櫛に逝去し、共保以來代々此寺に葬り菩提寺となる、是れ井伊家の源をなすのである。共保逝去して自淨院殿行輝寂明大居士と號するより地藏寺を改めて自淨院と稱した。越へて延元元年井伊道政、高顯、後醍醐天皇皇子宗良親王を奉じて義軍を舉げ井伊城に立籠りしが武運利なく、元中二年八月十日親王は空しく井伊城に薨じ給ひ其の御法號を冷湛寺殿と申し奉りし故に此の時又自淨院を冷湛寺と改めた。後又龍泰寺と改め、永祿三年九月十九日井伊直盛桶狭間に於て戦死し龍潭寺殿と號するより又改めて龍潭寺と稱するに至つた。東山天皇御菩提の爲として、東山天皇御宸翰にて張方の地藏尊其他御調度品等御寄贈あり、明治維新に際しては百石の朱印は大半上地となつた。又舊境内を裂きて宮を建て宗良親王を祭る之れ官幣中社井伊谷宮である。如斯龍潭寺は由緒深き古刹である、特に今言はんとする井伊家とは深き關係を有し、井伊家が彦根に國替へになるに及んでも當主の逝去せし時は龍潭寺より寺主がわざ／＼彦根に赴き法華經一部を讀誦回向した。如斯井伊家と法華經とは舊より深く結ばれて居る。然るに今回我が門下によりて發見されたる共資公墳墓が九百五十年已來初めて法華經

の供養を受けたるは其の悦びや果して如何ばかり、更に此の供養を待つ事の切なりしを拜祭する。如斯法華經と因縁淺からざる井伊家の末より我が宗祖を出したる事蓋し偶然とは思はれない。龍潭寺は初め三論宗より天台に更に禪宗に改り現在京都妙心寺派に屬し、開創以來數回の火災に遭ひ古書物の大半及び寶物の殆んど烏有に歸してしまつた。因に共資、共保時代は三論宗であつた様である。行基菩薩開創當時は三論宗で、宗良親王の頃に至つて天台宗に改宗し、今より四百年程前更に禪宗に變り今日に至つたのである。其の間世々井伊家の菩提寺として井伊家加護の下に今日に及んだのである。而して井伊氏は共保以來井伊谷に居城し、二十三代直政の時三十五萬石彦根に國替へととなつた。即ち慶長九年皇紀二二六四年に彦根の城主となつたのである。

井伊家と法華經とは前述の如く深い因縁關係に置かれ、徳川末期に至り一身を犠牲にして幕府の爲に己が信念に邁進し、最後櫻田門外に於て水戸浪士の爲に一命を捨てた井伊掃部頭直弼も正しく共保より三十八代の正裔である。あの信念を獲得したる掃部頭は熱烈なる法華經の信者であつた。是と彼とを思ひ合せる時、むしろ當然の様な氣がする。現主伯爵井伊直忠伯は四十代である。以上大体井伊家と龍潭寺の關係は述べ終つた。

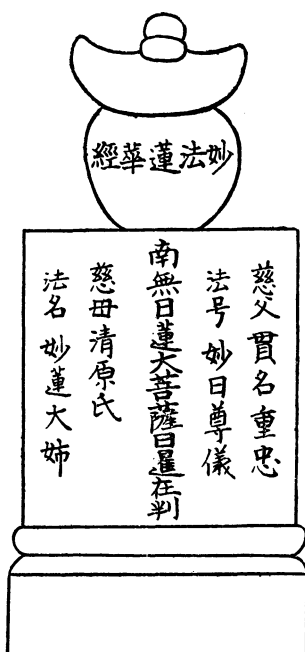
次に井伊氏より貫名氏の分れたるは何年頃かと言ふに、井伊の五代盛直の四男政直が貫名に下つた事は明であるが、其の事蹟に關しては一として知る由がない。遠州貫名山妙日寺は政直

が城を築き住せし跡なりと言ふ。身延山第四世日善聖人の開創せられたる寺であると言はれる。其の緣起に

共保より四代を井伊左衛盛直と稱す。盛直に三男あり、一を井伊次郎良直と稱し(是れ井伊家の嫡流なり)二を赤佐三郎俊直と稱し、三を四郎政直と稱す。政直所領を分ちて山名郡を知行し、貫名の里に館を築き住す。故に貫名を以て氏とし、貫名四郎政直と號す。是れ貫名の始祖たり、其貫名次郎行直其の子貫名五郎重實に相續し其の子貫名次郎重忠高祖大菩薩の伯父なり。

と言ふのみで其の分れたる年代等には何等觸れてゐない。現在妙日寺には貫名氏先祖の古墳と稱するもの三基ある。是れ先に石野にありしものにして、明治四十年頃妙日寺に移せるものである。貫名四郎政直、貫名次郎行直、貫名五郎重實と標札が立

つてゐる。然し是れが果して先祖の古墳なるや明でない。是れは大凡七八百年前のものである事は間違ひない。政直が初め井伊より分家して石野に住したと言ふ記録はない、傳説によれば其の古墳に觸るゝものは必ず病を得ると、人恐れて近寄らなかつた。後には貫名といふ字のかすかにあつたのを見て貫名の先祖なりとして現在地に移したといふ、今は何が書かれたか不明である。政直以來貫名に住し逝去の後石野に葬りたる記録あれば、之を以て先祖の古墳と見る事が出来るが、かゝる記録は更にない。政直に二子があり、長子は行直、次子は直友と言ひて直友は貫名から更に分家して石野の先祖となつてゐる。然るに其の石野氏に就いては知る由がない。惟ふに石野の畑中にありし此の古墳は或は直友以來の石野家のものに非るか、若し石野家のものとすれば貫名山に於ては全々別物をお祭りしてゐる事となる。更に研究を要する事である。故に此の貫名氏の先祖に對しては知る古事が一もないといふ事になる。次に同寺に於ける御兩親に就ては圖の如き御石碑及び碑文がある



向 左

正保三年龍集 丙戌
正月十三日於延峯誌之

向 右

奉加緇素責
謹造

本願沙門 ○○○○

知見院日蓮聖人の事で貫名山
中興ノ開山である。入寂は慶
安元年九月廿九日皇紀二三〇

八年で、正保三年は皇紀二三〇六年で聖人入寂の前三年に當つてゐる。故に此の碑は聖人入寂前三年に建立せられたもので、今より二百九十年前のものである。貫名山の開創は延山四世日善聖人であり今より六百四十年前である。此の間妙日寺に於ては石碑等無かつたものか、御先祖に對する研究は如何、然も明治四十年頃迄御先祖の石碑も建てなかつたのであらうか。而して若し日善聖人が眞に同寺の開山とせば宗祖滅後直ちに俗姓に關する研究が行はれ御先祖の御舊蹟の保存が議せられたとせば宗祖御俗姓の研究も今日の如く至難なものではなかつたらうと思ふ。再考するに日善聖人の開創は後人の憶測によるものならん日善聖人開創が事實とせば吾人の研究に多大なる力となるものである。

如斯貫名氏先祖に關する研究は至難中の難事である。然し此處に其の分家せし年代を俊直の分家より推して、貫名に初めて分家したのは皇紀一八一〇年となるのは既に前述の如くである而して其の居住の地及び墳墓地は未だ確證を得ざる故何んとも言へぬ。諸賢の研究に俟ち其の何れの地なるやを明にし以て宗祖への御報恩の一端とせられん事を。

◎御兩親に關する研究

上來井伊、貫名の關係は大体述べ終つたから本項に於ては、然らば盛直から分れたる貫名氏は如何なる系統をたどりて重忠に至り、重忠は如何なる理由によりて小湊に流罪になつたかを

確めよう。

前既に文獻の全部を出したから本項に於ては特に必要な部分のみ抄出して研究を進めて行く。

一、系圖御書

重實 — 貫名仲太

仲三 — 日蓮

仲四

二、長祿寛正記

盛直 — 良直

俊直

政直

三、宗旨名目

重實 — 貫名仲太

仲三 — 日蓮

仲四

四、元祖化導記

重實 — 長男不知

重忠

藤太

天死

仲三郎

日蓮

藤平

五、註書讃

重忠 — 四男日蓮

言葉を御使ひになつたのみである。故に御書を通じて御父が眞名重忠であり、御母が清原氏であつたと知る事が出来ない。然らば何故に御兩親の御名を出さなかつたかと言へば次の如く考へられる。

宗祖開宗以來迫害は御自身のみならず門下檀越に迄及んでゐる。若し父母の御名を出して父母に迄迫害の及ぶ事を恐れて特に父母父母と仰せられてゐたと思はれる。又御兩親は領家の尼御前とは特に親しく交際してゐた程由緒ある名門の末であるから宗祖折伏の反響で御兩親の御赦免が後れてはならないと考へたから、此の御兩親と領家の尼御前と親交のあつた事は、領家の尼御前は、女人愚痴なれば人々の云と怖せば、さこそとましまし候らめ。されども恩を知らぬ人となりて、後生に惡道に墮させ給はん事こそ不便に候へ共、又一には日蓮が父母等に恩をかばらせた人なればいかにもして後生を扶け奉らんこそ祈り候へ。(清澄寺大衆中御書)

と領家と御兩親とは相當親しい間柄であつた事が知れる。一面是を以ても宗祖が一般賤民の子でない事も知れる。

又宗祖が門下又は主なる檀方に御書を御興へになるに際し大体御兩親の姓名は御承知であらうと御察しになつて特に御名を出さなかつたとも考へられる。又前述の如く本地の開顯法華經の行者としての日蓮たる事を闡明せんが爲であり、又四姓平等を説き階級打破を基調とせる佛教なる故特に賤民の子と仰せられて御兩親の御名を出さなかつたのである。

さて然らば重忠は如何なる理由によつて房州に流罪になつたかを檢して見よう。

「系圖御書」「宗旨名目」には一家所領の争といひ、其の他では平家に與力した結果との二説がある。山川博士は「何かの罪で安房に流され給ふた」と言つてゐる。「化導記」には重實の代に流罪になつたと言つてゐるが、其の他では重忠の代といふ事になつてゐる。重忠の代が正しいのである。

重忠公御歳三十二建仁三年五月七日安房國へ流罪になつたのである。建仁三年は一八六三年に當り、共資公下向から二百十三年後である。此の時重忠公三十二歳であつたから其の誕生は承安二年皇記一八三二年である。而して正嘉二年二月十四日御逝去遊ばされてゐるから、八十七歳で御逝去遊ばされたのである。

日蓮聖人御誕生は重忠公御流罪になつてから二十年目即ち皇紀一八八二年共資公下向から二百三十二年後で今より七百十四年前であり、重忠公五十一歳の御時である。又宗祖開宗の建長五年四月廿八日は重忠公の八十二歳の時に當つてゐる。

悲母梅菊御前は、重忠公より九年後の文永四年八月十五日御逝去遊ばされてゐる。皇紀一九二五年で宗祖御年四十六歳の御時である。此處に一言しなくてはならない事は、御母の事である。御母は清原氏で、下總八幡郷大野吉清の女で、道野邊右京亮の孫だと言ふのと、山崎左近兼良の女だと言ふのとの兩説があり、御名を梅菊、又は菊千代と名けたと言はれてゐる。山崎

兼良は、舍人親王五十五世の孫北面の武士であつたと言はれてゐる。今一般には清原氏で大野吉清の女であつたと言ふ事になつてゐる。惟ふに重忠公が安房に移された當時は未だ獨身で小湊に来てから梅菊女が嫁せられたと見るべきである。宗祖御遊學中の費用一般は富木氏によつて得られてゐた様である。傳説によれば、富木、曾谷の人々はやはり遠州の武士で、貫名氏の同族であつたと言はれてゐる。又大野氏の一族だとも言はれてゐる。何れにしても御兩親の何れかの御一族であつた事は間違ひない。又光日房は宗祖の叔母、向師の母と御遺文にある。故に向師は宗祖と從兄弟となる、更に研究を要する事である。

古來梅菊女の御年齢に關しては何人も觸れてゐない、文永四年御逝去とあるのみである。星野氏は、

文永元年歸省の時に急病で昏睡狀態に陥つた事がある、其の

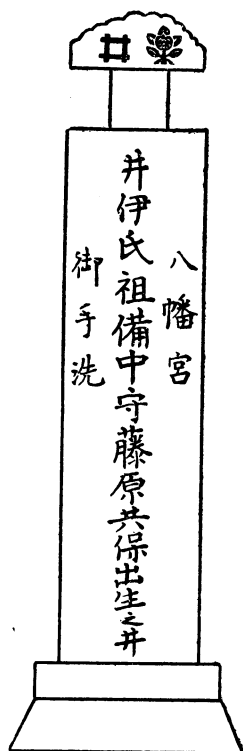
時八十に近かつたのです。

と言ふ。小生も種々研究の結果此の星野氏の説を採用したい。故に御逝去の文永四年は御歳八十三であり、建仁三年重忠公御流罪當時は十九歳となるのである。重忠公三十二歳、梅菊女は十九歳頃小湊に流罪になり、此の頃重忠公に嫁せられたとすれば少しの無理もない。されば文治元年皇紀一八四五年御誕生で宗祖を御誕生せられたのは三十八歳の御時となるのである。而して重忠公御逝去の時は、御歳七十四歳であつた。御兩親が無くなられて初めて碑の建てられたのが元徳元年であるから母君御逝去より僅かに六十三年目、宗祖滅後四十七年にして既に妙蓮寺が建立されたのである。

上來述べ來りたる家譜に關する年代を略圖に示さば左の通である。

名	姓	逝去年月日	住所	墳墓地	皇記	逝去ノ年	共資下向	現在ヨリ	宗祖誕生ヨリ
鎌足	賜藤原	白鳳八年十月十六日	京都	談山神社	一三二九	五六	三二一前	一二六七	五五三
共良	三國ノ祖		京都						
共資	藤原	下向正歷元年六月	村櫛	村櫛	一六五〇	大凡七十五六		九四六	二三二
共保	井伊祖	誕生寛弘七年正月元旦	井伊谷	井伊谷	一六七〇	八四	二〇	九二六	二一二
共家	井伊二代	逝去寛治七年三月廿日	龍潭寺	龍潭寺	一七五三		一〇三	八四三	一二九
共直	井伊三代	永長九年出陳	村井伊櫛		一七五六		一〇六	八四〇	一二六
惟直	井伊四代	十月十五日	村井伊櫛						

養育し、天性明敏なりし爲め共資公之を養育せんが爲に城内に連れ我が子として文武の道を教へ、二十歳になるに及び其の女を嫁せしめて後繼とし、共保と名け出世の因縁に因んで井桁に橘の紋所を與へたのである、共保より代々井桁を以つて外紋とし、橘を以て内紋とした。當時は井桁と橘とは別々の紋所であつた。然るに現在日蓮門下の代表たる井桁に橘の紋所は如何にして變化せられたるものか不明であるが、重忠公が房州に流された時は已に井桁と橘の紋であつたと言へば其れ以前に既に二個の紋所を合せて現在の如きものとしたものと思ふ。此處に一言すべき事は、此の紋所は共保が養父の共資より與へられたる事は何人も疑ふ事の出来ぬ事實である。現在其の井戸は井伊谷龍潭寺の門前約一町の畑中に現存し其の傍に橘の木があるよりして事實である。其の井戸は高さ三尺、縦横五尺に組み、其の傍に橘の木が植り共資公當時が思ひ出される様である。其の横に碑があり、正面には



正面左には

遠江引佐郡井伊谷八幡社中有御手洗之井上有橘傳稱余祖共保生於井中因以井伊爲氏以橘爲家紋以井爲幕之紋神異之事傳爲家瑞貞享五戊辰四月依守僧龍潭寺請新修造之歲又加再修仰冀泉源無窮家運興久遠波餘流施萬代焉。

正徳二年壬辰八月十五日

共保二十代後胤江州彦根太守正四位上行左近衛權中將兼掃部頭藤原朝臣直該

正面右側には

父直該貞享五年戊辰歲初修神井經十三年夷辰直惟出誕又經十三年正徳二千辰歲直該再修造今歲又再修焉伏冀馮神井冥應家運興隆傳井徳。

享保九甲辰歲八月十五日

共保二十一代後胤江州彦根太守四位行左近衛中將兼掃部頭藤原朝臣直惟

とあり、共保より二十代直該の時初めて此の井を修復したもので其れ以前は現在の如きものでなく、當時のまゝ荒廢して殘つてゐたものと考へられる。元徳二年は皇紀一九九〇年で共保出生より三百二十一年目に當り現在より六百七十年前に當るのである。

然らば此の井桁に橘の紋所を宗祖が果して御使用遊ばされたかと言ふ事である。御書を拜し

又古文獻を見ても宗祖當時宗祖が此の紋所を御使用になつたと
言ふ事はない、恐らく其の御俗姓と共に御使用遊ばされなかつ
た事と思ふ。傳説によれば土の牢に於て日朗上人が橋の果を抱
いて泣いたとあるが、是れは宗祖が橋の實が御好であつたので
はなく其の紋所が橋であつた事を證する爲に後人が作つた傳説
に過ぎないと思ふ。此處に注意しなければならぬ事は果して
宗祖は此の紋所を御使用にならなかつたにせよ、紋所は井桁に
橋であり後我が門下の紋所となつた事である、御縁祖共資公よ
り出たる紋所が代々井伊家の家紋となり、又貫名家の家紋とな
つて御父重忠公に至つても以然として此の紋所を御使用になつ
た事である。此の紋所より見ても其の御系圖に間違のない事が
知れやう。重忠公遠州より房州に流されたる時幕府の役人によ
り持ち來りたる唐櫃に井桁に橋の紋所が付いてゐた事である。
故に重忠公は此の紋所を御使用になつた事は事實に違ひない。
然るに宗祖は此の紋所を御使用にならなかつたのは、その必要
がなかつたからである、何故ならば東奔西走、五尺に足らざる
身一つ置き所なき「大聖人故に御自身その紋所は一切御使用
遊ばされなかつたと見るべきである。若し然らば、此の紋を我
が門下として使用したのは何時頃かと言ふに、未だ研究中で何
んとも言へぬ。

共資公共保に其の女を嫁せしめ、井桁に橋の紋所を與へ、新
に井伊谷に新城を築き一切の國政を共保に譲ね、自身は村櫛に
隠棲して靜かに余生を送つたのである。此の時共資公は七十歳

頃であつたらしく思はれる。是より村櫛を古城と呼び、井伊谷
を新城と呼んだ。かくて共資公は、共保の廿五六歳の時七十五
歳位で逝去し、其の遺言により裏山に葬つたのである、是より
此の裏山を御山塚と呼んで村人達が尊崇してゐたのである。か
くて共保は八十四歳逝去に至る迄共資の遺志を繼ぎ人民を愛撫
し、諸國に其の威を示し年八十四歳寛治七年三月廿日井伊谷で
逝去された。共資公の御逝去の年代は一切不明で只七月一日寂
とのみしてある。共保公は井伊谷に葬られ龍潭寺に石碑が存し
て居り、一般に寛治七年八月十五日逝去となつてゐる。事實は
三月廿日である、八月十五日としたのは此の日は八幡社の御祭
典で、共保公は八幡社の申し子だから八月十五日が命日だと一
般に考へられる様になり何時とはなしに八月十五日寂となつた
のである。故に事實は三月廿日が命日で、祭典は八月十五日に
行はれてゐた。何れにしても共保と八幡社とは或る關係ありと
して結び付けられて來たのである。如斯共保は代々井伊家及び
井伊谷村民によつて祭られ、又井伊の元祖となつた事も決して
偶然ではない。

共保公が京都に歸洛せず村櫛で余生を送つたから其の墳墓地
は必ず村櫛村か或は其の附近にあるのが當然である。共資公が
城を築き志津城と名け其の城趾が村の東南にあり、其の裏山に
小高き丘があり、此の丘を古から御山塚と呼び其の附近一帯を
淺間山と呼んでゐた。城趾は明治維新迄は背のまゝであつたの
が養魚が盛んとなり養魚池を造る爲め取り壊され今は古の城の

面影も残つてゐない。城は南殿と北殿とに別れ、其の御殿の間は平地であり、城の敷地は非常に廣大であつた。現に共資公の矢研石なる石が残つてゐる、其れは養魚池を造るに付き埋め堤の下になつてゐたのを最近堀り返して墳墓の前に出した。廣さ四尺に二尺位で厚さ一尺位の大石で、之が昔城内にあつたのを見て廣大なる城廓であつた事が知れる。又お山塚の下に井戸がある、此の井戸は昔城内での飲用水に使用したものと思はれる。明治の初め頃迄此の地を城山とも呼び要塞堅固の城下であつたと土地の古老の言である。矢研石は昔から庄内櫻松の氏子が春日神社の祭典に此の石で矢を研ぎ村内をねり歩いたとの事で、共資公當時の遺物として貴重な參考資料である。又維新前當時の大老井伊掃部頭直弼は其の臣を遣して村柳のお山塚を調べさせたが當時の村人は後の係り合を恐れ事實を否定して何等語らなかつたので井伊家に於てもやむを得ず塚にありし藤を一枝持ち歸つたと、田中長藏と言へる村人が語つて居る。城趾は現在にあつては、只田畑或は養魚池で城廓としての何物をも存してゐない。昔より此のお山塚に手を觸れたる者は必ず病み、村人達は此の地を千古の不思議として明治迄來たつたのである。然も村人達は此の由緒ある城趾並にお山塚一帯を崩して養魚池とする計畫が進み、附近一帯は堀返へされて養魚池となり、やがて此のお山塚も同様の運命に陥る計畫であつた。多年此の地こそ共資公墳墓の地なりと考へたる鈴木智精師の驚き一方ならず、先ず其のお塚の周圍なりとも土地を買収し此の聖

跡を保存せんと遂に大正七年に此の地を師の手に歸せしめ、以來數回今日に至る迄附近の地を買収し、遂に多年の宿望たり、一生の大事業たる共資公報恩供養塔建立の運びに至り昭和七年十二月十一日此の大事を大成するに至つた。惟ふに龍潭寺に於ける井伊家代々の當主逝去に際しての法華經讀誦と言ひ、今亦共資公が宗門の師により發見供養せられる事と言ひよく法華經に因縁深き事にて、古來お山塚に手を觸れたる者は必ず病みたるに、師によりてなされたる時は何等の異變もなきは、惟ふに共資公は法華經に縁あり、法華經の供養を受けん事を願つてゐたのであらう。由來村柳村は明治迄は佛教徒であつたが維新の廢佛毀釋の際全部神徒となり、現在五百五十戸の同村は其の九割を神徒にして僅か一割が佛徒で、然も其の佛教徒も禪宗である。又井伊谷龍潭寺も共に禪宗である。宗祖日蓮大聖人の御縁祖たる共資公が若しも他宗の人の手により發見せられ、更に供養を受けたとせば吾々日蓮門下として如何に宗祖に面ゆる事が出來やう。此處に着眼し孤軍獨立遂に三十余年苦心慘憺の結果此の聖跡を我が門下のものとせる師の苦心努力、其の功績は蓋し不朽なるものと言ふべきである。

師が初めて發見せし當時は荒廢したる畑で只僅かに大石の頭が地上に現はれてゐたのみであつた。發見されたる墳墓は二個のカロウトウより成り中には劍、花器、土器、玉等があり、何れも千年以上の物にして、明治四十一年村民によりて發掘せられたる事あり、其の時是を堀りたる者は病に罹り更に家が滅ぶ

故に皆恐れて元のまゝにして置いたとの事で、此の時堀り出されたる土器の一個が村櫛の某所に保存せられ、又其の時の鋳を静岡の葵文庫に史料として保管されてある。カロウトウは長さ五尺、巾四尺、高さ三尺位で石と石とを組み合せ中を空に洞としたもので其の上には天然石が蓋とせられてゐる。其の天然石の頭が僅かに一寸位地上に現れてゐたのを頼りに堀り下げて行つて此の地こそ墳墓なりとしたのである。其の二個の塔は一個は共資公のものであり、他の一個は恐らく奥方のものと考へられる。

現在その上に縦三間半、横二間のコンクリートの櫓を廻らし中に土満中に丸く土を盛り其の前に大供養塔が建てられてあるお塚は前方は濱名湖を一目に見下ろし、遠く太平洋を望み、後には千古白雪を頂く靈峰富士が巍然として聳へ立つてゐる極めて風光佳麗の地にして、偉人日蓮大聖人御縁祖の墳墓としては眞に適したる地である。

九百年已來地下にあつて何等供養を受けられなかつた共資公は、今や我が日蓮大聖人の御縁祖として鈴木師により世に公にせられ、日蓮聖人の流を汲む宗門人としての吾々もかゝる喜びはない。此の慶事はやがて宗門として、宗門の一大事業として此の共資公を宗祖の御縁祖たる證明を與へ、宗門の村櫛として是を宇内に宣揚しなくてはならない。之れ門下としての目下の急務である。

只單なる梅陀羅の子として七百年已來考へられたる宗祖も藤

原氏の末裔たる由緒ある名門の出たる事が證明せられた。恐らく宗祖としても此の御俗姓に關する事は上行再誕としての日蓮たと共に、藤原氏の末貫名重忠を父として御誕生遊ばされたる御自身を御考へ遊ばされた事と思ふ。然も御書中に御系圖に關する事の無いのは前説の理由によるものである。宗祖が藤原氏の末裔たる事が明となり、縁祖共資公の墳墓が発見され、此處に不明なのは貫名氏の祖政直以來の事蹟である。

◎村櫛村の現状とはが保存

縁祖共資公墳墓地たる村櫛は静岡縣引佐郡にあり、濱松より西約五里の濱名湖の突出せる所にあり、辨天島より巡航船の便あり、又濱松より乗合自動車の便がある。戸數五百五十を有し職業が盛で、半農半漁で近年養魚が非常に盛となつた。村民は大體裕福なる生活をなし、宗教は全村の九割迄が神徒で他は禪宗である。寺院は禪寺が一ヶ寺あるのみである。明治維新迄は村の全部が禪宗に歸依してゐたが、時の代官が先頭に是等の寺院を全部焼拂ひ住職を追ひ、暫く無宗教の状態にあつた。此の寺院を焼拂つた代官は熱病に罹り其の他の暴徒も悉く或は發狂し、或は熱病に、或は死亡し子孫に至るも猶其の影響を受けてゐる。維新後村民の全部は神徒となり、近年に至り村民の一部が暴逆の報を恐れ禪寺を建立し、村の一割が之に歸依するに至つた。然れ共其の大部は依然として神徒である。村人の殆んどは無宗教の如き状態で報恩觀念乏しく、他村との往復少く、か

ゝる村民を對手に此の聖跡を保存せんとした師の苦心の程は察するに余りある、初め此の遺跡の譲渡を交渉せる時村人達は取り取りの噂をなし、皆冷笑をあびせた。然れ共師はかゝる事に頓着せず、自己の信念に向つて邁進し遂に此の地を譲與せられた。此の頃村民の中に郷土愛護會なるものが組織され、此の地の由緒あるを知り共に保存せんとする議が興り、漸く此の事業が是等の村民により解せられ、現在に於ては村の大部が宗祖の信者として題目を唱へ信行する様になつた。然れ共此處に一寺を建立し村人をして我が門下に改宗せしむるにはまだまだ遠いのである。一村改宗の氣運がないが未だ其の時機でない。此の村櫛一村を改宗せしめ宗祖の膝下に跪かしむる事こそ吾々門下に與へられたる任務である。村櫛一村改宗せる曉こそ共資公も眞に日蓮大聖人の御縁祖として村人に尊敬せらるゝ時であり、かくしてこそ此の地に一寺を建立し眞に教線擴張し宗祖に對する報恩の意義も存するのである。

曾て昭和八年復興祭を修したる時村民一同太鼓を手に唱題し乍らお山塚に至る間囃々と行列したのである。又越へて昭和九年身延山法主現管長望月日謙祝下靜岡縣下御親教の際には、わざ／＼村櫛に御参拜なされた、此の時全村の小學生、青年團、處女會、消防組等老も若きも男女を論せず總出で法主祝下を御迎へ申し上げ、異教の空に時ならぬ題目の華が咲いたのである。望月祝下には非常に御感激の事の様に拜して居る。昭和の半迄題目の聲さへ聞えなかつた此の海邊に今や除々に題目の華が開

かんとしてゐる。是れ九百五十年の昔縁祖共資公が初めて此處に卜し、後日蓮聖人を出し、今又鈴木師の懸命なる努力の結果此の成果を得るに至つたのである。今や此の聖跡を有する村民が擧つて郷土愛護會なるものを組織し、此の由緒ある遺蹟を長く保存すべく計畫してゐる。誠に喜しき極である。二十年前此の地を譲りて養魚池とせんとした村民が、鈴木氏と共に此の地を長く後世に傳へ、廣く世間に紹介せんとしてゐる。是を闇浮提に歸依せしめんとする第一歩は即ち村民の歸依であり、村民の歸依はやがて一郡の歸依となり遂に闇浮に歸依せしむる事が出来るのである。今僅かに其の發生地たる村櫛すらも歸せず、只發端を爲すのみである。吾門下の使命として近き將來に於ては必ずや此の村櫛をして宗門の村櫛として世に紹介すべきである。是れ吾等に課せられたる重大なる使命である。

◎余

論

共資公下向して初めて村櫛に居城した事は明なるも其の墳墓地に至つては何人も知る事が出来なかつた。只村櫛に住せし故或は村櫛に其の遺蹟が存せしかとの疑問は抱いてゐた。然も此の疑問の解決は九百年已來何等具体的方法が講ぜられず、只傳説として村の東北の小高き丘をお山塚と尊稱してゐたのみであつた。然るに明治四十年頃村人によつて此のお山塚が發掘され種々なる遺品現れ、其の一部は東京、靜岡及び同村に、殘餘は其のまゝ其の地に埋め、堀り出されたる品は何れも千年以上の

物にて共資公の使用せる事歴然としてゐる。鈴木師は既に其れ以前に同村の何れにか必ず墳墓があるを考へ、其の地を尋ねる事切なるものがあつた。大正七年村の長老田中長藏氏より此の發掘せし事と、明治の前井伊家よりお山塚を尋ねし古事を聞き此の地こそ正しく縁祖の墳墓なる事を確信し、是を自身の一事業として世に公にし以て宗祖への御報恩に擬せんと企たのである。發見された古墳が果して共資公の墓地なるや否やを吟味して見やう。現今のお山塚のある岬を志津崎と言ふ、昔志津三郎が初めて此の地に城を築きたる故其の附近を總稱して志津岬と言つてゐた。此の志津三郎とは共資の別名である。古書により共資公が此の地に卜し最後又此の地に永眠したのであるから村櫛か或は其の附近に墳墓があるに決つてゐる。龍潭寺並に井伊家に於ても是を尋ねてゐた事も無理はない。發見された遺品が一千年前後の物であり、此の時代共資公を除いて此の地に住した有名なる人の無かつた事、村人が尊崇してお山塚と呼んでゐた事、明治初年迄城趾があり、南北兩殿に分れ其の中間に平地があり、要塞堅固なる城廓であつた事等種々綜合するに正しく共資公の墳墓なる事明である。此に着眼し三十余年遂に此の地に供養塔を建立し、一寺院建立の計畫中なのが鈴木師である師が今後如何にして聖蹟を保存し、世に公に紹介し宗祖の御縁祖として發表するか其の完成の一日も早からん事を祈ると共に宗門として此の大事業を援助し共に此の大業の完成を期すべきである。

上來述べ來つた宗祖の御系圖並に新に發見されたる御縁祖共資公に就ては宗祖滅後六百五十五年を歴たる今日何人も發見されない事實である。故に古來の説とは非常なる間隔がある。即ち藤原氏と三國氏との關係、共資、共保間の消息、井伊神社と八幡社、貫名氏等であり就中縁祖共資公墳墓に就ては何人も一言も觸れてゐない。殊に宗祖として一般に認めざる御俗姓を主張し、旃陀羅の子を由緒ある名門の流なりと斷定したる事に就ては、諸師諸先輩の謗を免れないかも知れぬ、然し以上述べたる事由により旃陀羅が子としての宗祖を藤原、三國の末流なりと證明を加へたのである。生の淺學にしてかゝる研究は潜越なるかも知れぬ、が然し宗祖に對する報恩の一分として此の難事を敢てしたのである。願くば諸師先輩、生の及ばざる所は責める事なく不足せる部分は補ひ以て本研究の完成へと御指導下されん事を。

生此の稿を起すに當り、井伊谷龍潭寺、村櫛村、貫名山、横尾及び小湊等是に關係を有する地を尋ね、或は書し、或は聽き又は寫し、事實と傳説と對照し以て不完全乍ら此の稿を脱する事が出來た。然れ共未だ不完全極まり不足せる部分多く研究中なる部分多々ある。此の研究は生の一生の事業として進むべく未だ着手して日尙淺く充分研究する暇なく今後の研究を俟ち大成せんとする念願である。以上を以て本稿を終る。

南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經

昭和十一年六月十五日

讚佛乘詩閒居餘艸

(宗門詩藻)

祖山學院緣故の同人を中心に、汎く諸家習作の清高なるものを試みに編輯したのである。動の宗門の半面に、這靜的艸山風の隱逸あるも復不可ならず。是れ此篇の存する所以である。(八朵生)

次東溟華甲自壽韻寄

古梅 清水 龍山

來參還曆宴。六十七沙彌。滿酌延年酒。高吟賀壽詩。講經深且妙。運筆險猶夷。風骨老來健。雲鵬勝有爲。

次天民王子歲晚偶感韻
似看雲疊韻十五首節十

全

讀書精入骨。任運不勞才。龍樹南天去。馬鳴東土來。清耀如老鶴。高潔似寒梅。朝暮歌相屬。一樽俱醉哉。詩本待於學。誰言有別才。試看霞谷偈。盡自道心來。高朗如明月。清虛似素梅。悠々三百載。衣鉢屬誰哉。學德兼文藻。是之謂大才。斯人今也逝。不識幾時來。君筆欲翻海。吾詩堪比梅。清高如此者。世上果誰哉。我輩期何事。僧伽不要才。一心純信至。三學自然來。清節含煙竹。高標抱石梅。性情果如此。千古道全哉。彼輩多輕薄。寧憐弄小才。雷同阿世去。附和傲人來。

將水徒加乳。以泥漫污梅。宗風靡亂甚。正舉果誰哉。我本山中客。久希三隱才。面朋時厭過。心友日思來。陶令偏親菊。逋仙只愛梅。性情皆有適。吁我托何哉。學問嫌穿鑿。天真獨見才。閒雲隨去。野鶴任來來。君愛先生柳。吾思處士梅。春風塵外境。何日卜隣哉。既有韓蘇學。豈無李杜才。醉餘裁句去。月下叩門來。題壁雪中竹。入詩溪上梅。高風如是者。何愧古人哉。嗟吁奈斯道。廻瀾要大才。敦相推先哲。觀心俟後來。乘光明似月。戒德馥於梅。信念烈欺火。宗風方起哉。嘗論先哲學。各見特殊才。導正排台去。輝能發旨來。彼言溫似玉。此語潔如梅。二子德難測。後人何及哉。

同疊韻十三首

看雲 向井教遠

人皆言我鷲。天豈舍其才。哦句忘貧逼。值杯覺興來。樽盈新買酒。瓶插未花梅。清世耽閒散。功名何有哉。在世須行樂。勞神易損才。引觴思閑去。識字怕憂來。地下應無酒。人間賴有梅。梅乎吾友也。對酌興悠哉。車書隨手讀。生理愧無才。窮鬼何須送。飲朋不拒來。醅顏猶綠酒。白屋已寒梅。一醉陶然臥。夢魂亦樂哉。笑他趨利士。畢竟豈真才。雲雨多翻覆。酒杯幾往來。道情禪悅食。詩味好鹽梅。知足貧如富。胸裏自悠哉。萬卷讀書力。發揮磊落才。妙思縱橫至。警句咄嗟來。氣節凌蒼竹。文章壓老梅。異撰風流好。徵逐亦奇哉。

知已誠難得。長吁嘆不才。出門時獨往。携酒遇君來。
道誼淡如水。詩思清似梅。談論忘主客。相對意悠悠。
三杯澆磊塊。一氣發機才。無敵詩俄至。驚人語忽來。
寒光茅屋月。疎影紙窗梅。靜夜吟君句。擊壺呼快哉。
莫以凡流視。別觴兼別才。樽傾時醉倒。興到處詩來。
夢囑芙蓉雪。魂飛月潮梅。塵間有斯樂。借問幾人哉。
狂直間違世。忼侗愧弄才。漫許君句去。自囑我詩來。
一兩聲黃鳥。二三點白梅。南窓時寄傲。興趣可言哉。
吾元塵外客。遊世弄仙才。文讀草山集。賦繙歸去來。
乞隣因貰酒。由徑爲看梅。得々從心適。人間亦樂哉。
未究吾家學。依然奈劣才。無常身漸老。不惑歲將來。
机上堆陳本。佛前供早梅。梅花應笑我。一世何爲哉。
稽首導公德。和南輝老才。斯言悲欲墜。吾道奈將來。
信固風霜竹。觀明水月梅。寥々一百歲。紹緒有誰哉。
瞻彼輝和上。終生學竭才。法門鉤隱發。玄理洞微來。
愧我耽詩句。消閑賦柳梅。至今方解意。君子多乎哉。

原唱身外居偶成三首

故木內天民

愁雲歲云暮。清世一疎才。夢寐青年遊。泥塵白髮來。
不登松上鶴。無撰雪中梅。諒閣斯時意。感傷吁切哉。
飊車千里駛。製作是誰才。北狄休離到。南蠻獻舌來。
雜居苦應對。交際拙鹽梅。遠邇懷仁義。人情豈異哉。
廟廊人不乏。山郭寄疎才。白霧峰頭起。碧烟洞裏來。

高聲讀周易。獨坐看寒梅。清世多閒日。韋編三絕哉。
拜境雲日遙。和上眞影謹賦。故芝水 富木堯廣
溫乎其德貌。薈葡氣氤氳。道念堅如石。塵情淡似雲。
三衣無長物。一鉢有餘熏。稽首人中尊。高風夙絕群。
清水高田兩師寄詩見 賀宗務辭任次韻書懷 霞庵 影山佳雄
獨往成何事。翛然返舊林。浮名恐徒播。寡識愧虛欽。
靜觀眞如相。能持禪定心。水邊時弄月。松下儘張琴。
自今安分足。沉復有知音。

悼冷泉上人

全

嚴格家風世所欽。一生唯抱報恩心。俄然遷化秋如夢。
獨有歸雲度碧岑。灑然標格道相同。澆季艱辛太有功。
遙教白雁弔長逝。魂斷蕭々暮雨中。

本門古刹中秋夜坐偶賦

松潭 大場耀孝

碧空如水月光流。魚默鐘沈境更幽。妙相深探眞丈室。
吟魂豁上最高樓。天無寸翳三更夜。風有餘涼萬里秋。
墜露飄來清欲絕。病軀頓覺散閒愁。

本門古刹偶作

憶曾示寂祖師蹤。長在懸厓千仞峰。慈雨霑來十方土。

天風吹下數聲鐘。縱然說法安群衆。未必參禪制毒龍。
解脫炎蒸如坐甑。鈞天廣樂爽心胸。

和松潭師本門寺秋夜偶賦

東溟 龜口龍謙

境靈寺古本高流。尋入重關萬象幽。星斗森羅冷空帳。
山川縹緲寂層樓。燈光透木諸天夜。鐘韻度雲千嶂秋。
若欠禪心清徹底。月中遊子更多愁。

和全師本門寺偶作

傳持衣鉢護靈蹤。寺靠東關碧玉峰。堪慕忍難慈勝德。
欲聞臨滅度時鐘。壁間霞舉舞天女。梁上雲飛躍老龍。
草木山川渾遺澤。子來賽者淚沾胸。

次星潭八朶唱和韻却寄

古梅

與君詩酒癖。同出利名關。塵事付雲碧。老懷娛夕閒。
狂吟時撼屋。醉墨漫題山。空却存餘樂。悠々筆硯閒。

秋日星潭來有詩次韻

八朶 高田惠忍

客來宜直入。門戶復無關。茶味兼禪澹。詩懷與道閒。
芙蓉紅映牖。松嵐翠如山。對坐敲詩處。影變斜照閒。

次古溪詩宗水晶泉詩韻

東溟

襟懷灑灑自無塵。涼泥燈前閒話人。靜夜淵泉清徹底。
詩仙浴去蘸星辰。

次古梅上人富士山中湖詩韻

全

勝概山中名久彌。湖偏幽邃嶽靈奇。我曾曳杖秋晴日。
漾々波涵不二姿。

八朶玲瓏千仞容。湖光掩映現雲龍。名區著得君詩句。
一躍直爲山水宗。

走牽飛風清滿胸。神仙安在奈難蹤。名山倒影晴湖水。
匹似巨人淵默容。

次龜口東溟華甲白
壽詩韻以呈表賀意

星潭 小澤日精

榮辱何其管。居然德望彌。澹懷雲與水。眞趣酒兼詩。
深啜人情薄。偏希世道夷。欽君遇周晔。離俗百無爲。
歡湧春風賀壽筵。呈祥修竹色妍々。翻思梅骨冰魂潔。
擊鉢朗吟欺謫仙。
澹如生活力能支。莫似芙蓉出水時。眞韻偏存詩與酒。
一吟一酌嘗中脍。

訪朶公禪居

東溟

門題清淨觀。庭戶白雲飛。滿室藏書富。空山過客稀。
論詩因盡醉。問道自忘歸。蕭寺童將掩。夕陽黃葉扉。

丙子晚秋東溟師見訪于吾山
房歸后有寄詩乃次韻却呈

八朶

嘉客惠然至。舉杯興欲飛。詩中知已在。世上賞音稀。
不害玉山倒。恰看林鳥歸。秋懷天杳杳。斜日逗柴扉。

文 藝

栖神居詠草

福 島 義 孝

旅 の 歌

あかね雲うつろひゆけどほのぼのと印旛の沼は夕明りせり
秋の田のゆたかにそよぐ野を遠み雲のおりゐる筑波嶺は見ゆ
老い母をいたはる人の側にして舞臺を見つつ吾が樂します

秋 日 家 居

うち續く日和に老いも幼きも田毎ゆきつつ落穂拾へる
てのひらにむしりて見れば粃粒の圓く堅きは乏しかりけり
稲架の間をかひくぐりつつ聲あげてたにしを採ると子らはきほふも
田に畑に葡萄のみ植ゑし村人のたつきはまさにきはまらむとす

歲 暮 吟

張りかへし障子明るき部屋ぬちに妻は南天を活け上げにけり
新刊の歌書は欲しけれおしせまる暮を思ひて書架にかへしぬ
子どもにはせめてと妻のなげかふをうべなひつつも黙しゐにけり
食卓の狭きを妻のいふほどに四人の兒らは伸び育ちたり
なみよろふ一萬尺の高山のみ雪を染めて日は生れにけり
穂すすきのあら野の果に駒ヶ嶽のとがりつめたく夕かがやけり

古き遠保榮我記

山 田 友 篤

吾人の魂は不滅であるとブリストは教へて呉れる。然し現象界に於ける吾人の生命は、決して時間を超えてはゐない。誰人であつたか

『人生はげに朝露の如く又流水の如きで百花は散りて亦開き冬來ると雖も春の音信亦蘇り來るを、運命の夜叉は導きて人は逝きて其の跡沓として空しく、今將た何れの國にか當年の面影を偲ばんや！ 時の矛盾！ 自然の矛盾！ 人生の矛盾！ 流水一度び去つて復た還らざるか！ 慷慨して竭きず。浮世の夢にも儚き人の運命、人生の不定を唯々何者かなる、自然の絶對者へ訴へるのである、この戦きは、我が愛の父に對する心理である。

忽焉として天涯の一角に茶毘一片の烟となりて葬り去れし人々を、回顧する時、愁雲胸にみち、憂霧心を閉し宵味も通らず、歎歎慟哭言を發する能はずして唯斷絃の思ひに浸り、浮世夢の如きに轉た人界の無常

山中籠居

裏山に湧きづる水は青竹の樋をつたひ來てここに鳴りつつ
裡山の朽葉のもとをくぐり來し寒の清水は齒に泌みにけり
午後三時はやこの谷に冬の日は暮れむとすなり底冷えて來ぬ
讀みつぎし書物は閉ぢぬさらさらと笹むら鳴りて鳴りひそみたり
はるかなる麓の町のものの音かはける空氣にひびきてきこゆ
小鳥らは此處にわれありと知らざらむ枝うつりしつ々轉りやます

哀唱

勤務先より友が寄越せし返信の文字のみだれは心もとなし
落ちつかぬ心靜めてありし時つひに術なし訃報至りぬ
幼などち母を戀ふる夜は氣丈なる君も泣くべしその枕べに
たらちねの母が逝きしは知らざらむ枕ならべて病み臥す兒らは
ありふれの言葉つらねし悔狀認めをへて何か寂しき

四月雜詠

かはるがはるゑさを興ふる兒らの後をしたひつつゆく庭鳥のこゑ
こころよき春の朝を床ぬちに幼きとりのこゑききてをり
久々に剃刀あつる吾が母の額の皺は深くなりたり
再びを踏むことなしと思ひけむ故郷の春野に君は佇ちつ々（日召父子）
奥利根のさびしき村に世を狭く老翁はひとりながらへて來し

亡兄七週忌

人の世の義理にせかれて唯ひと目會ふ術もなく逝かしめにけり
もろともにとしの三十路を生きあひてつひに語らふ日ぞなかりける

を嘆ずるのである』と言つた。

そこに熾烈なる生への執着があれば、無常に寄す綿々たる哀切の聲がある。

且つて恩師は我に語られた。

この有限の生命の主である人間が、そして無窮を戀ふる人間が、原始時代この方、永生を冀つて努力して來た登進の足跡は實に顧みるだに驚異である。然も如何なる方法も、努力も、生理的意味に於ける人間の永生……に就いては何等教ゆるところがない『七丘の都』と誇つた羅馬の廢墟も果敢ない人の生命を歎く自然の挽歌に過ぎない。神と誇つたバビロンの文明も、怒り易き人間の弱点を傳へる争鬭の舞台であつたのだ。茲に思ひを走すれば、我々の創作の所産たる藝術は、其の宇宙の無邊在に比すれば尙有限たるを免れ得ないも、人の生命に比較すれば話にならぬ程永生である。彼のホームは今に尙光輝ある詩篇を傳へ、ミケランゼロは尙『最後の晚餐』に依つて吾人に語りかけてゐる。

されば生き度いと希求する人間にとつて一ツの永生であり、眞に生き甲斐を感じし

亡き兄の友とし聞けば聲かけて在りし日のこと吾が知らむとす
これの世に骨肉ありと知りつつもただに忍びて生きつづけむ
垂乳根の母の乳房を求めつつ夜毎泣きしを父は言ひにき
人知れぬ思ひをかけてゐましけむ亡父のなげきは今も眼に見ゆ

山の湯にて

おのづから河鹿のこゑは澄みつつに岩たぎつ瀬の音にまぎれず
朝霧のおもむろにして離れゆく杉の木立に蟬鳴き出でぬ
しらじらと霧の流るる青葉山身は爽かに朝明けむとす
うすぐらき崖の底ひの湯の壺に身を浮かべつつ時を忘れぬ
足腰のいまだに立たぬ吾が母をお連れまをすは何時の日ならむ

七月十二日

皇國に捧げまつりしもろもの命はあだに散りにけるはや
つつしみてみ霊をまつるこのタペ刑執行のニュース至りぬ
あめつちに容れざる罪もさりながらただひとすぢの赤心は思ふ
今からでも遅くはないと廣告に會話に聞くはにがにがしけれ

教へ子を悼む

繼母の手に育ちつつ陰影多き十八年を終りけるはや
うからさへその枕べに在らざりし屋根裏にして息絶えしとふ
腕白の生徒の中に青白く沈みぬ顔まざまざと見ゆ
白き棺はふりびとらにかつがれて夕づく野邊を往くに從ふ
生母とおなじ肺結核にて斃れたる若きいのちはかけて偲ばむ

夏日抄

むるもの、それは創作ではなからうか、而して茲に云ふ創作とは單に所謂小説のみを云ふのではない。廣い意味に於ける創作——繪畫、彫刻、音樂、文藝等を總括して——云ふのである。

且つて友人が、吾人等の手によりて成る小説に投稿して

生れる時既に

孤獨と悲哀と空虚とを

背負はされてゐる

人間じやないか

それを人生は愉快だなんて

人生は灰色の旅じやないか

と云つた。然しそれは置き、今も昔も人の歩み行く人生行路の、丁度涯しなき熱砂の中に、一掬の水、オアシスを求めて得ふ旅人の如く、坦々として且つ淋しきものなるを考へる時、佛のミレー。ダンテ 英のミルトン、シエクスピア 獨のゲーテ、カント 或は古代埃及のスフィンクス、ピラミット 或はカラカラ帝の大浴場 コロシユーム、萬里の長城、更に堪慶の佛像に、近松の戯曲に、ふくよかな薰りを放ち、百

照りつづきやうやくやくる畑つものなすびの皮はこはくなり來つ
びしよぬれのシャツの乾る間を眞夏日に背を曝しつつ草拔きにけり
土手下の叢中にひやしおく藥罐の水はおしみつつ飲む
わが顚頂うすくなりしをわけつけと言ふこの友よ久しぶりなる
末の子が背に廻りつつやはらかき掌をもて顚頂撫づるも
たはむれに父のかうべを撫でにける幼きわれを今此處に見つ

初冬

庭前の蘇鐵の大葉いち早く新葉をもてかこはれにけり
炬燵開けし宵は早寢の子どもらが起きぬて雜誌讀めとせがむも
庭隅の銀杏黄葉は散り過ぎぬ夕べの縁に見つともしも
樹々の葉の落ちつくしたる静けさや眞晝の庭に猫這入り來ぬ
縁にゐる吾れを見すゑて動かざる黒猫の瞳の妖しき光
西空の信濃境になみよろふ高山の穂に今朝雪を見つ

曩に皇太后宮より全國癩療養所へ賜はりし御歌の碑、身延深敬
病院に建立せらる。十月二十五日その除幕式に列す。

かしこみて御歌をうたふ患者らの合掌の姿は見るに堪へぬも
眼を閉ぢて静かにひびく合唱のこゑ聴きをれば胸せまり來ぬ
ふるさとの母が縫ひけむ晴衣をば病める乙女ら着かざりてをり
うつし身のしむら日々に腐りゆく若きいのちは思ふに堪へず
はらからもかへり見ぬ世を怨みつつ死にたる人の墓に詣でぬ
八千草の花咲き盛る墓どころ秋の日さしは檜葉を洩れつつ
すいすいと蜻蛉飛び交ふ花畑に歩み來しとき心展けぬ

花咲き競ふ藝術の園のあつた事を有難くも
不思議な位に思ふ。誠に彼等が歩みし精進
の跡は、雲よりも高く遙かに天にをも達し
實に永生を欣求する人間の素晴らしい登攀
の足跡である。

半夜人なき机邊に古今の名作を繙く時、
そこには苦もなく、貧困もなく、我もなく
又闘争の現實の種々相も忽然と消えて、只
藝術のみが育くむ無限の恍惚境に我は没入
し、名狀し難き昂奮の坩堝の中に吾人はあ
やふく息づいてゐる。

斯く創作より受くる精神的の濕ほひは實
に大きい。然し創作は萬人には許されない
けれ共人間は藝術を通して始めて時間を超
越する事が出来るのだ。

彼のバイブルのある所キリストは今に尙
愛を叫び、トルストイは常に我等の机上に
あつて語りかけてゐるではないか、古くけ
た樂器の調べにもベートフヴェンの姿は躍
如として踊つてゐる。

おう!! 愛情、善惡、強弱、生死の種々相
に圍繞さるる人生、それを藝術的創作に還
元して次の時代に傳ふる尊い一つの仕事。

これの世の呪ひはしまし忘れつつ培ひにけむ白菊の花
膿汁にまみれながらに三十年を闘ひ來ませる師は仰ぐべし(院長綱脇師)
遠き世の不輕菩薩を仰ぐごと師を圍みつつ人皆讃ふ

うみやまのほとり

岡村正雄

春さらむぬくさと思ふ庭さきの牡丹の若芽雨にぬれつつ
土の香の匂ひいとしき露の蓑帽子に摘みて歸り來たれり
鷹取の峰の端わたる雲白く陽はうらうらと照りなごむなる
月讀の光静けき夜となりて鷹取山にあをはづく鳴く

何くれと思ふこと多しあをはづくしきりに鳴きて日の昏るるなり

あへぎつつ登る山路はきはまりぬここにひっそり藤の花房

桑の葉に白き風吹く峽の道夏蠶の匂ひこもらへてをり

渚邊の白砂に咲く紫の小花は遂に知る人なしに (三保にて二首)

夕風で落日遙かにうつろへる駿河の海を吾が船歸る

みはるかす伊豆半島のおぼろみてこの夕暮を歸る船あり (田子ノ浦にて)

寝つかれぬ儘に歩めり蟲しぐれ聞きつつ吾れは月の下びを

みなぎらふ川面にさゆらぐほの明り唯だ一筋が月の下びに

ちきれ雲わたらふ丘の月夜みち蕎麥の花畑うちつけにしろし

かすかすの思ひ出こもる學報の出來榮見をれば涙こぼれ來(棲神發刊二首)

漸くに重任果し手にしたる本は仄かに匂ひたちくも

出家

さむざむと夕づく野みち行きつつに家督のことは話したりけり

(吾は長男
なれば弟に)

よし！吾人は死ぬまで學ぼう、闘はう、
叩きに叩き、苦しみに苦しみ抜いて先づ自
らの魂を育てよう、そして死ぬ迄に、たつ
た一つの汚点『人』てふ一字を白き永遠な
る線上に印して行かう。

これが吾人の唯一の希望である。只希く
は、人生に悔を遺さずに死んでゆける道が
歩み度い。『予は予の任務を了せり』と微笑
みつゝ逝ける様に。

蟬

上田玄忠

窓越に見る樹々の若葉は、降り注ぐ様な
眞夏の強い日光にきら／＼と輝いてゐる。

私は仰向になつてうと／＼として居たが、

林の中の蟬の鳴き聲がやかましくて眠れな

い、其の中に直ぐ前の木に蟬が飛んで來た

とみえて大きい聲で盛んに鳴き出した。ま

るで壊れた鈴でも振り立てるやうでやかま

しいと言つたらありはしない。

あの蟬は二十年間といふ長い／＼年月を
土の中で暮すのださうである。その長い修

出家する吾子を送ると老いらくの母は涙を拭きたまひけり
老いの母の涙見まじとひたすらに門^{かど}へを吾^{われ}れは離^{はな}り來^きにけり

なにひとつ辛抱出來ぬと吾^{われ}が性^{さが}を責めたまふなり老いらくの父は
家を出てすでに七年みちのくの故山會津は思ほゆるかも

春雪はなほつもるらし竹折れの音時時に更くる靜か夜
若草にいねて懷へば幼な頃別れし友の臉に浮び來

身に餘る桑を背負ひし乙女子を穗麥の中に避けて通しぬ
麥熟れしだんだん畑の夕暮れをさやえんどうは紫に咲く

かねてより名のみ聞きぬし古文書を今はまさしく手に取り讀む（文庫蟲干）
この奥に瀧はありとふ溪小徑ひんやりと風は朽木の匂す

むづかしき佛書の講義きく窓に木犀の香の漂ひ來るも
時雨する野邊には人の影もなし畑におりて鴉は鳴くも

朝勤を終りて歸る廻廊ゆ遠き嶺には雪降れる見ゆ
いつしかによろこびおぼゆ朝朝のつめたき中を勤めはげみて

七面山行

熊谷利道

はじめとしめりかわかぬ松林に無縁の墓は古りてありけり
登りつきて暗闇のなかに鐘つけり鐘はさびしく谷にひびかふ

大土間のすすけしランブの灯の下に吾れは疲れて草鞋ぬぎたり（本社着）
山の夜のぬるき湯ぶねにひたりけり眼を閉ぢにつつひそけかりけり

溪底はさ霧にたちこめて見わかぬど深きに響く山川の鳴り

業をつんで此の世の中に出て來ると先づ殻を脱ぐ。それから柔な青みを帯びた羽を廣げて飛び出す。丁度よい木をみつめてそれにとまつて鳴き立てるのである。

暫くするとバーン／＼／＼と板木の音がした。私は釋迦堂の講習會に出席した久留島先生の話があつた。その内容は私は是れまで考へ及ばなかつた子供心理狀態に對する意味の話であつた。先生の話の中には次のやうなものもあつた。蟬が餘りにもよい聲で鳴くものだから子供達が、大きな袋を造つて可愛い蟬を捕り、糸で首をし

ばり、散々にいぢめたあげくには、羽をもぎ取り、頭をむしり無慘な殺し方をする。此れ等は皆原始時代の人がやつた事である。今でもさういふ性質が子供の心の中に残つてゐる。そのまゝにしておくならば、大人になつてからどんな人間になるか判らない。そこで宗教家が、子供達を教導して、この惡風を一時も早くなをさなければならぬといふ話であつた。

私は先生の話が終ると廊下に出て欄干に凭れ乍ら前とは違つた氣持で蟬の聲にちつと耳を傾けた。

必要にして且つ充分なるもの

田 邊 正 知

『祖訓』「夫れ佛法を學ばん法は必ず先づ時を習ふべし」

不安と苦悶の濁つた渦巻が世界至る所の個人と家庭と社會と國家と國際との間に氾濫してゐる。

凡そ今日ほど人間が人間としての自負を喪失した時は稀れであらう。殆んど凡ての人が物質的苦しみに喘いでをり、精神的希望と創造性とを失つてゐる。人間は最早獨立的な人格を持つ人間のものではなく、寧ろ事物化された品物に過ぎないかの觀がある。不具化された人間性、破壊された性格、これが現代人の赤裸々な姿ではないか。

最近に於ける「ひとのみち」「大本教」「生長の家」等々、ありとあらゆる宗教的愚昧さや、愚劣な神秘的復古思想の流行、非人間的テロルの跋扈は正に人間性崩壞の徴候に非ずして何であらうか、人間は今や自ら死せる形骸や野蠻人になりさがつてゐるのである。

このやうな苦悶、中世紀的神秘性、無智な野蠻性、無生氣なデカダンスが未曾有の勢を以て支配してゐる時には人間性の擁護、人間性の再建といふ極めて自然な言葉さへ、却つて大膽な

革命的な響をすら與へるのである。

今日多くの人々によつて、ヒューマニズムの問題が喧しく論議されてゐるが、全く當然のことでもあり、又甚だ殊勝なことでもある。而して千種萬様の内容を持つこの言葉の概念は、之をジャーナリズムに委すも、畢竟ヒューマニテイの擁護と發展とが強調される点に於て異論はなからう。曰く青年論、曰く個人と全體、國民と人類の對立の新しき議題等々、即ち、溺死者を救ふべく多くの救助船は堂々軸を並べて出てゐる。しかるに眞先に挺身事に當らねばならぬ筈の宗教家(特に佛教家)の姿は徒らに濁流の中に没せられてその片影だに見出すことは出来ない。

遮莫、多くの賢人達の主張が所謂濟世到彼岸といふ宗教の責任(佛の意志)をまで果すに必要にして且充分なる渡船であるかどうか、言ひ換へれば、ヒューマニテイの擁護發展の爲めには單なるヒューマニズムでは駄目ではないか、宗教にはそのための根本的有力なる立場がなければならぬ筈だ。この問題の反省こそ宗教の死活を握る要点であらねばならぬ。

則ち、之を言ふならば、科學の尊重、客觀的な形式の尊重を不可欠の要素とするヒューマニズムは、眞宗教の檢出、別言すれば事實批判の方法に於てこそ絶對的の必要である、然し乍らたとへヒューマニズムの具体的方法をコムミニズムにあるとしても、眞宗教の眞面目、即ち價值批判の究極に於ては不十分なること言ふ迄もないのである。

私は今この立場に立脚して、且つ一箇のニチレニストとしてこの必要にして且つ充分なるものについての證明を試みんとするものである。それはとりもなほさず眞宗教の宣揚であり、偽宗教への折伏である。約言すればニチレニズムの現代的檢討であり光顯である。以下、ヒューマニテイの公正なる自覺的眞相として自我を捉へ來り、こゝに推論の基礎を置いて吾がニチレニズムの嚴正なる反省としやう。

□

凡そ現在に在つては、自我に目醒めるといふ根據のないものは思想として、就中、宗教としては全く存在の意義を持たないと斷言して憚らない。幸ひにも吾人は古今東西を通じ最も自我觀念に徹底した宗教家として、吾祖日蓮聖人を戴くものである。聖人の自我觀念中には、自我の確認、自我の事實批判、自我の價值批判、自我の實現、その全部が具備してゐるものと信ずる。聖人の研究範圍は所謂梵漢和の三國に行はれた儒外内の三教に過ぎぬのであるが、しかるに聖人の識見は、正に宇宙を吞吐する概がある。

必要にして且つ充分なるもの

「日蓮は、日本第一の法華經の行者なること、あゝ疑ひなしこれを以て推せよ、漢土月支には、一閻浮提の内に、肩をならぶる者はあるべからず」(撰時抄) 二三六

蓋し、この一語は千金の重みを以て聖人の自我觀念を裏書するものである。乃ち聖人夫れ自身には他の之を奪はんとして奪ひ得ざる強い――自我觀念の上に自己の教宗を建設し、そしてその實現に努力せられた偉業であることが窺へるのである。

□

しかし聖人は固より佛教の宣傳者である。自己の理想に佛陀といふ最高人格者を確認して居つた。しかも幼兒が慈父悲母を戀ひ慕ふその如く、憧憬の熱火は天をも焦さんばかりであつたのも事實である。それは誰れなるか、言ふ迄もなく、全佛教の教主であり久遠の生命者であり、一切人類の先覺者であつた。即ちその御名を釋迦牟尼佛と唱へ奉る。

「我等が本師教主釋尊は、五百塵点劫より已來、妙覺果滿の佛なり(即ち先覺者としての釋迦牟尼佛を舉ぐ)。此土の我等衆生は五百塵点劫より已來、教主釋尊の愛子なり(即ち釋迦牟尼佛を慈父悲母として戀慕する眞情を語る)」(法華取要抄)

一〇三八

とも、

「ひとり、三德を兼て恩ふかきは、釋迦一佛にかぎりたり」(即ち釋迦牟尼佛を絶對の恩德者として仰ぐ)(南條御書)五一七とも、

必要にして且つ充分なるもの

一日蓮が頭には、大覺世尊かはらせ給ひぬ（即ち釋迦牟尼佛の加護の威神力を仰いで立つ）（乙御前御書） 一三九

とも云はれたるに徴しても、聖人の仰がれた客觀的理想の最高人格者は、釋迦牟尼佛であつたことが知れやう。また、これによつて何人もこのことを疑ふ餘地はなからう。

しかし乍ら、人若しこれを見てたやすく我聖人を客觀宗であるかの如く、連斷するものありとせば、そは全く聖人を理解しないものである。何んとなれば、客觀の實在として釋迦本佛を撞破するものは、元々、自己の自我確認の上に、事實批判の結果に得たので、全く合理的自我觀念の賜であるからである。また、合理的事實批判の結果とすれば、そは認識的價值批判の前提であるのは言ふ迄もない。見よ、既に「我等が本師」又は、「日蓮が頭に」と云はれてあるではないか。「本師教主」の上に「我等が」と云ひ「大覺世尊」の上に「日蓮が頭に」と云はれた語に着眼したならば、そこに、理想の本佛を自己の主觀に價値付けてあり、自己自身が理想の人格者の所有主であることを物語つてゐるではないか、即ち、理想の本佛釋尊を「日蓮のもの」として見る所に、聖人の自我觀念が躍動する。さうして、自己の自我觀念の通りに、體驗の世界を造り上げやうとして、懸命の努力を惜しまなかつた所に、聖人の自我實現の境地は展開する。

□

先づ順序として事實批判の教義から述べれば、我聖人が釋尊

二二六

の説かれた教法論や佛陀論につき、その教法の高下淺深を判じその佛陀の勝劣微妙を釋し、そして、その低きを捨て、高きに就き、劣を簡んで勝を取り、淺より深きに進むべく仕向け、遂に全佛教の歸一する所は、釋迦本佛の自我と、その本法とに外ならないとしてあるが、もしも、これを嚴格に甄別するならばこれ等の論述は、事實批判の教義であつて、その實、價值批判の領域には這入らない。

即ち、

「天台宗より外の諸宗は、本尊にまどえり。俱舍、成實、律宗は、三十四心斷結成道の釋尊を本尊とせり。天尊の太子、迷惑して我身は民の子と思ふが如し、華嚴宗、眞言宗、三論宗は勝應身に似たる佛を本尊とす。天王の太子、我父は侍と思ふが如し。華嚴宗、言眞宗、釋尊を下て種姓もなき者の法皇の如くなるにつけり。淨土宗は、釋迦の分身の阿彌陀佛を有缘の佛と思ふて、教主（釋尊）を捨てたり。禪宗は、下賤の者一分の徳ありて、父母を下ぐるが如し。佛をさげ經を下す、これ皆、本尊に迷へり。例せば、三皇已前に父を知らず、人皆、禽獸に同ぜしが如し。壽量品を知らざる諸宗の者は、畜に同じ不知恩の者なり」（開目鈔） 七九一

これは我聖人が、約宗から見た全佛教の佛陀觀で、即ち事實批判の教義である。例令、久遠の釋迦本佛に歸一すべく論明してあつても、此等の教義を以て、直ちに、聖人の佛陀觀に於ける價值批判と見るのは早計である。何となれば、佛典の客觀にあ

らはれてゐる佛陀を、そのまゝ諸宗のものが、移して以て佛陀觀としてゐるのであり、壽量の本佛であつても、客觀の經典にあらはれてゐるのである。歸一する佛陀も、歸一される佛陀も共に客觀の事實であつて、何にも、聖人の自我觀念に價值付けるまでの段取りになつてゐないからである。此等の批判詮考は畢竟、自我觀念を徹底させる前提としての事實批判に過ぎない。事實批判の教義と價值批判の教義とを混じてはならぬのである。「次第と淺深とに迷惑せば、其人は我身に五逆を作らずして、無間地獄に入り。これに歸依せん檀那も阿鼻大城に墮つべし」

（神國王鈔） 一三五八

と、移して以て今の訓とすべきである。則ち、客觀的事實批判の教義は、遂に主觀的價值批判に攝取されて、そこに始めて、價值付けられるものであることを銘記せねばならない。

□ 然らば、我聖人の價值批判の教義とは如何。

「壽量品に云く、然るに我實に成佛してより已來、無量無邊、百千萬億、那由陀劫等と云云。我等が己心の釋尊、五百摩点、乃至所顯の三身にして、無始の古佛なり」（本章鈔） 九三九

これで始めて、憧憬された客觀的理想の釋迦本佛が、聖人の自我の主觀に價值付けられたと云へるのである。即ち、客觀の事實批判に於て、詮考された釋迦本佛が、そのまゝ、聖人の自我に取入れられて「我等が己心の釋尊」となるのである。「乃至所顯の三身、無始の古佛」がそのまゝ、「能顯の五百摩点久成の本

佛」に價值付けられ、そのまた、久成の釋尊が、そのまゝ「日蓮等の己心」に價值付けられるのである。かゝる生佛觀、即ち神人觀が、我聖人の自我觀の基本的確認となつて、そこに始めて、

「妙覺の釋尊は、我等の血肉なり。因果の功德、骨髓にあらずや」（本章鈔） 九三九

と云へるやうになるのである。哲學でも宗教でも價值批判に根底をおかないものとすれば、それは盲目的感情の支配下にあるもので、何等の價值も權威もない。

□

哲學でも宗教でも價值批判が事實批判よりは一步進んだ研究である。しかし、それは事實批判の過程を踐んだ價值批判に於てのみそれが云へるのである。過去現在を問はず、所謂一般の宗教は概して事實批判の過程を無視して、獨斷と神秘の蔭に隠れ、強いて、價值批判に類する教義を立てやうとしてゐる。如何にその名を價值批判に借りても、その實、自我觀念の眼から見れば、一顧に値しない。基督教の神人觀や佛教諸宗の佛陀觀は、如何に強辯と舞文の勞を費しても、到底價值批判の仲間入は出来ない。何となれば既に業に、合理的事實批判の途上に於て神の存在も阿彌陀佛や大日如來の實在も、そゞろに否定さるゝ運命に支配されてゐるからである。乃ち、人格的神が全智能で、宇宙の創造者であるならば、造られた宇宙萬有は、總てが全的であらねばならぬ筈であるのに、それを宇宙は不完全で

あり、人は罪の子であると斷定するのであるから、事實批判の裁判に出ては、到底、矛盾と扞格とを脱れない。理性を缺いた神佛の實在は、獨斷と神秘の外に、肯定さるゝものではない。それに、人格的に神や佛の實在を證明しやうと云ふには、事實批判の要件として、人間の歴史的事實がなくてはならない。即ち、自我の合理に基いた事實でなくては、人格的實在は成立しない。基督教の神や佛教諸宗の阿彌陀佛や大日如來には、人間としての歴史を持たない。このことは、何人の手でも増減の能きない歴史其物が立派に證明してゐる。随つて、人格者としては根本的に事實批判の合理性を有してゐない。かくの如き無批判の神や佛陀を擁して、愛や慈悲を附會しても、またこれを信じて價值付けやうとしても、事實批判の前提に於て、否定されてゐるのであるから、その名は愛と言ひ慈悲と稱へても、その實、美名を僭してゐるに過ぎない。また、かゝる神や佛陀を信じて、これを價值付けやうとしても、元々、没我の觀念から割出した盲目的感情に過ぎないから、自我の合理に由て築きあげられた價值批判と、固より同日に論ずべきではない。

動もすると、比較宗教學や歸納的研究では、言現しの言葉が同一なる点より、その間に共通性を見出し、さうして同一の結論に到着しやうとする傾向がある。しかし、事實批判の前には何等の權威を有するものでもなく、價值批判の範圍には容易に入り得るものではない。されば明滅常なき類似宗教は言ふに及ばず、これが温床ともいふべき既成宗教の多くは、全く美名に

隠れたゴマカシであり、一個の悲喜劇であり、反文化的毒素であると宣告して過言ではなく、これが徹底的折伏と殲滅こそ人類の急務であり、吾人の責任である。

□

然るに、我聖人の宗教は所謂、東漸佛教の發達その極に達した我國鎌倉時代に於て、大乘佛教最後の結論として、生れ出でたるものなるが故に、その基礎を自我觀念の確認の上に置いて總ての教義が組織されてゐる。たとへば教相論の事實批判でもその根底は必ず觀心論の價值批判の見地より出でゐる。聖人の中心著書たる「觀心本章鈔」の始終を見れば、明らかに看取し得るが如く、即ち「觀心本章鈔」は、支那天台の「摩訶止觀」にあらはれた、一念三千の自我觀念に筆を起し從淺至深の序を逐ふて、初めに、自我の確認を得るために「我等己心」の自我に十界の客觀界を具する所以を反覆し、次に、事實批判に移りて諸經諸宗の差別觀を纏めて、これを「諸佛」としてあげ、法華經の一體經を纏めて、これを「釋迦本佛」として示し、三に價值批判に及んで、本佛釋尊の依正と一切衆生の依正とを一體ならしむ、所謂法體の四十五字で、一體觀を悉く自我の主觀に價值付け、最後に、自我實現の象徴として、價值批判の一念三千を経體の五字に卷き收め、それを所信の本尊として光顯されてゐる。

かくの如く、我聖人の宗教には、一念三千の觀心に、自我の確認と、事實批判の理性と、價值批判の認識とを以て教義の内

容となし、この自我觀念の哲學を、宗教の信仰的象徴に具體化したものを本章とするのであるから、本章は聖人の自我實現の象徴である。これで我聖人が過去の宗教を葬り去つた權威と新に完成された宗教の面目とが、髣髴するであらう。

哲學は本章の自我實現を内にして、觀心の自我を表として立ち、宗教は觀心の自我を内にして本章の實現を表として立つべきものである。我聖人は元より宗教家であるから、哲學の自我を内にして、本章の自我を表として、世に見えたもので、自我實現の象徴として本章を光顯し、そこに、あらゆる所信の正境を統一し、これに由て自己の自我實現の通り、眞的體驗、善的體驗、美的體驗の世界を造り出さうとして努力され、而して努力を拂つて到達すべき體驗世界の目標、即ち、理想主義の程度は自己の自我實現の象徴たる本章と、同量同質のものでなければならぬ。随つて宇宙を擧げて、本章に歸命せしめ、そこに正義的眞理體驗の世界を造り上げ、世界各國の民衆を本章に拜跪せしめ、更に人道的善の體驗世界を築きあげ、近くは、日本國の上下を、皆この本章に統一して、そこに人格的美的體驗世界を見出し、そして世界を理想化しやうとするに至るのである。

この自我實現を望むで向上する主義を「廣宣流布」とも「一天四海皆歸妙法」とも云ふ。言ひ換へれば、世界統一を理想とするのである。この理想主義の信條を「三大秘法」といふ。これ「本章鈔」に

「一閻浮提第一の本章を此國に立つべし。月氏震旦、いまだ此本章あらず」 九四八

といはれ、同鈔「副狀」に

「佛滅後二千二百二十餘年、いまだ、此の書の心あらず」と述べられ、圖顯の「曼荼羅」に

「此法華經の大曼荼羅は佛滅後二千二百二十餘年の間、一閻浮提の内、いまだ、これ有らず」

と稱へられ、「報恩鈔」には、實現の順序と内容の範圍とを兼ねて、

「日本乃至一閻浮提一同に本章とすべし」 一五〇九

と告げられ「日女御前御返事」には、宣傳の旌印として、

「爰に日連いかなる不思議にてや候らん。龍樹天親等、天台妙樂等だにも顯はし給はざる大曼荼羅を、末法二百餘年の比、は

じめて、法華弘通の旌記として顯はし奉るなり」 一六二五

と語られたる所以である。これに由て、自我實現の宗教としても、將又、理想主義の宗教としても、眞實と光明とに満ち、洋々たる希望に輝いてゐることが察しられるであらう。

以上我日蓮聖人の宗教は、自我の確認に出發し、自我の實現にその終りを告げ、そして理想主義の努力を以て、世界人類を淨化して、そこに體驗の世界を見出さんとするのである。かゝる教義と信仰とを有する宗教は、現代の世界中他に之を見出し得ざるは無論にして「未曾有」と云ひ「始弘」と云ひ「始顯」と

云はれた我聖人の唱へが、果して誇稱であらうか。これを智に訴へても、情に訴へても、將又、意に訴へても、吾人は聖人に如同するの外はない。

しかば、聖人の門下として吾人は、果して荷ふた任務を遂行してゐるであらうか。回顧するに、我聖人去つて六百數十年を経るも、世界の人類中、幾人あつてか、我聖人の自我實現の境地に成つた閭浮統一の本尊の御前に拜跪するものがあるであらうか。我形式的教團の現狀を眞面目に反省したならば實に思半に過ぐるものがあらう。即ち量を以て之を云はゞ、苟も教徒と呼び得る者の全部を舉げて、僅々我國人口の三十分の一に過ぎず、若し世界の大口に比すれば、正に大瀑布に於ける小飛沫、殆んど數の内にも這入れぬと云つて差支へはあゝまい。小在屬無の論法を應用すれば、現在の日蓮宗は宗教としての存在を否認されても、敢て苦情を申立つる資格ありや否や。又質を以て之を云はゞ、僧俗共に、祖師が「當身の大事」を以て己が「當身の大事」と爲さず、或るは徒らに神秘的復古思想に提はれて「時を習ふ」ことを怠るあり、或るは只々唾棄すべき淺薄な流行性の神經を露出して、麻酔的狂惑に彷徨し、「日蓮が魂」を冒瀆して敢て省みざるあり、殊に後者に至つては之を一般教徒に於ては見ざる所であるが、宗門最高の教育機關に學ぶ青年法子の中に於ける蔽ふべからざる濁流として之を看取せねばならぬことを吾人は痛恨せざるを得ない。祖師への絶對的讃仰の精神を築き上げないうちに、祖師の精神の現代的實現を云々する

のは哀れにも餘りにッ、ツカしい醜體だ。「腐敗墮落その極に達した宗門を正視しつゝ眞實、眞理の使徒たる面目を發揮して貫ひ度い」との吾人宗門の青年に對する識者の激勵と要求とは飽くまで日蓮の若き弟子達への尊い言葉であり、眞實の警告ではないか、宗門革新の根本的態度は、眞面目な祖師讃仰者に依つてのみ成されるのである。昔から「革新」は決して暗型兒に依つてなされてはゐない。日蓮の弟子への充實した若き健康な誇りに燃えてこそ、佛國土建設の現代的 방법이具体化されるのである。(立大主催全國大學高専連合大會三川閣シテ見聞)

兎まれ、此慘めな宗門の現狀を省察するだけの宗教的良心があるならば、形式的な布教や儀禮や教育では、聖人の靈に對して恐らく申譯がなからう。

四圍の事情は殆んど事志と違ひ、我等の理想たる世界的淨化運動の目的成就も全く過去の夢物語りとなり果てたやうではあるが、我徒にして眞個、聖人の自我實現の本尊を遵奉する限り斷じてこの聖業を放棄すべきではない。否否、我聖人の遺された慈教に由つて修養し得た自我實現の信仰其物が、自覺の上の衝動として、この聖業を放棄するを許さない。これが先づ、自我實現の宗教を奉ずる我徒の死守する信條であらねばならぬからである。

人間性の支持と發展の思潮をこゝまで堀り下げ、生氣付けてこそ「必ず時を習ふべし」の祖訓を服膺するものであり、祖師の魂を現代に活かす幾分かの方法なりと信ずる。

即ち、吾人は、こゝに混迷せる思想航海の旗艦として、克く
濟生到彼岸の重責を果たすに、必要にして且つ充分なるもの、名

付けて「ニチレニズム」を提供し、高揚するものである。

以上

三ツ子の魂に與ふべきは？

加 藤 智 學

近代科學文明の發達せる結果生じた經濟生活、精神生活の兩
面に於ける不安と焦慮は民衆の恐怖である。その弱点を窺ひ、
忍び寄る類似宗教の毒著しき今日、我等のなすべき急務！そ
は聖祖が末法萬年への垂教、絶對的根本原理たる一大秘法の深
奥を究明し、それが根本原理の絶對性をして實際化し聖祖の一大
理想たる立正安國を實現すべく、布教線の擴張を計り、社會民
衆の指導に當るべきである。而して社會民衆、それが組織する
各階級の老若男女の中、私は特に兒童をして學校教育と相俟つ

の存するは餘りにも當然すぎるかも知れないが、それは本山當
局の社會事業の一として大正十年聖誕七百年を記念するために
産聲を擧げ、先輩諸氏の努力に依り十六年を経た今日は身延小
學校八百の全生徒を會員として、毎週土曜日に開會せられ、内
みに創立以來講師は祖山學院生是を擔當す。尙此の外二三の支
部を有してゐる。

て施さるべく、必要な宗教情操教育のそれに聖祖が精神を打込
むべき必要性を述べんとするものである。先づその例として、

私は此の會に關係を有し講師の末席を汚して得た、極く淺薄
ではあるが、些かの經驗よりその必要を感じその一端を述べる
ものである。

身延立正子供會の沿革を一言すれば、宗祖が天竺の靈山、日域
の比叡山にも跡れたる地として九ヶ年の御生活があり、永へに
魂を止むべき處なりとせられて經る事七百年、その不滅の靈光
の輝きを仰ぎ、絶へざる法流を掬する身延に斯の如き事業施設

純情無垢の童心は天真爛漫、そのものにしてその鋭敏に且つ
豊富な感受性は未だ善惡を識別する能力を有しないのみか、
それは環境に支配せられて、社會有爲の士たる素地を、時には
社會を呪ふ反逆者ともなつて生長して行くのである。その大切
な出發点、所謂三ツ子の魂へ投じてやるべきは、正しき智慧で

ありそれと共に潤ひのある宗教心であらねばならない。智慧は正邪分別と自己の進むべき正道を指示し、宗教心は力強い信念となり、生活の潤ひを與へる。此の智慧と宗教心の一は學校教育であり、他は子供會等の施設により宗教教育に依つて彼等の情操は高められて行くのである。彼等の純眞なる童心に植え付けられた宗教心はやがて堅固な信念となり力強く萌芽してゆくのである。三ツ子の魂は百までと云ふが如きはそれであり、此の宗教情操教育は時代の要望せらるゝ第二の國民を養成する上に其の必要を認めるのである。此の必要性よりして論ぜられる方法とその内容は如何と云ふに、その最も完全に學校教育と提携された身延立正子供會の如きが良き例であるが、此は特殊なものでその他に於ては子供會、日曜學校等の施設を企畫し、寺院等に催して、それがなさるべきである。が、我宗門に於ては

觀の究竟

一切有相のものは瞬時と雖も靜止しておらず時々刻々遷流してゆく。この遷流の法を觀照して現象の背後にある本體を掴まんとして古代の哲人をして疑惑せしめ冥想せしめた。哲人達が

現在餘りにもその方面の事業を看過してゐはしないだらうか、眞の宗教であり、絶對的指導原理を有して最高のものである一大秘法の妙法五字をして實際化して衆生を救済せんとするに先づ彼等をして彼等の魂の中に此を打ち込んでやるべきである。又彼等の人格陶冶に資するには、偉にして大なる宗祖の御人格をして折にふれ時にふれて彼等の腦裡に刻ましめる事に依つて成長してゆく彼等の人格はよりよく完全なものである。

私達は此れに携るよき指導者として、彼等の微妙不可思議の心理を理解しその心理狀態を利用して、その目的を達する事が出来る。聖祖門下の布教線を承る私達は幼き者への布教を、次代を形成する者への魂をして、日連が魂を彼等の魂たらしめて聖祖の理想實現を期したいものである。

田 中 泰 勵

思索の道深く智慧の燈をかゝげて神秘なる世界の扉を叩き、靈の覺醒と生活との調和を求めたのも現象界の奥にある自然の偉大なる力が心絃に觸れたのに依るのである。佛陀は人生問題の

生きた解決として邪見を去りて人生を正視せよと教へたのである。哲學に於ても佛教に於ても自我を出発点として人生觀、宇宙觀を建立した處はよく似てゐるのである。然し乍ら佛教に於ては眞理への思慕のみに止まらず、人生の究竟地を見出し苦樂善惡等の境を心的生活に止揚し不苦不樂の解脫地に到らん爲めに實踐修行が中心となつたのである。我等の生活なるものは必然の法則によつて支配され、生老病死總て苦を感じざるを得ない。然し乍ら佛教の教へによれば、苦樂善惡等の束縛は客觀的存在ではない、我等の心に映る苦樂善惡等である。我執迷見による我慾を以て計する時、生活は思ひのまゝにならない。我慾を打破して三世を流れる法と云ふものは無性なるものである。

この無性空なる立場より觀る時、苦と云ひ樂と云ふのも畢竟心の持ち様により、この心觀を以て人生を觀る時、平等無礙自由なる境地が開けてくると教へるのである。これ佛教で云ふ空觀である。この空を悟るには緣起の法を觀照し打破しなければならぬ。緣起とは相互依存の關係であり佛教で云ふ諸行無常とか一切空なる思想はこの緣起觀を根據として生れたものと云ひ得るのである。この三界の苦惱も、法華經方便品に『我知ンヌ此ノ衆生ハ末ダ曾テ善本ヲ修セズ堅ク五慾ニ著シテ、癡愛ノ故ニ惱ヲ生ズ、諸慾ノ因緣ヲ以テ、三惡道ニ墜墮シ、六趣ノ中ニ輪廻シテ、備サニ諸ノ苦毒ヲ受ク』と説かれておる如く前世の業を自受して今世に果報を受ける緣起の法そのものである。緣起法を悟る事は諸法空、無我を體驗する事であるが、この新な

體驗の世界にも緣起の法が繰返されてゐるのである。たい不自由なる束縛を受けない自受用の自由なる世界觀である。即ち大乘思想であり、法華經の諸法實相觀、中道思想はこれであるこの何等の束縛の無い平安なる境地は佛教の目的とする解脫の心地であり、この見地より人生萬般を觀る時、佛教こそ眞の肯定的人生觀の極地である事を知り得るであらう。人生の苦樂こそ心の所産であり、是等の現象を精神生活に迄止揚して現實肯定の強く正しい生活を高調せしめたものが、佛教の眞體そのものである。この目的を實踐し高調したものは僧伽の存在となり全人類をして皆一様にこの僧伽に参加せしめて修養せしめ、社會を統一せんとした熱望を見る事が出来るのである。かくして人生觀は必然的に宇宙觀に迄進展しなければならぬが、佛教はどちらも諸法緣起のもので説明し、主觀界、客觀界の二つは自我と實在との融合一致した思想を以て説明してゐるのであるかのデカルトの『我思フ故ニ我在リ』の實在觀に對し、私が思ひ浮べるのは草山政公の述懐である『世界アリテ自り來タ即チ已デニ此ノ竹有リ、此ノ竹有リテ自り來タ、此ノ葉已デニ禿セズ』と云ふ常住觀である。自我と實在と云ふも、小我(小宇宙)大我(大宇宙)との關係の如きではなからうか。妄我を離れて中道實相の大我に歸し悠々天地間を遊樂する解脫の心地は、政公の『竹葉扁舟ニ似タリ、汎ク彼ノ太虛ノ理、風ニ隨ツテ自由ニ浮ブ』との心懷では無からうか。緣起觀、人生觀、宇宙觀、解脫觀と云ふものは、皆心絃より構成されたものであり、前に佛

教も哲學も同じく自我を出發點と云つた所以である。たゞ歸着點が異なるのである。佛法に於て道に徹する境地は心を統一し正見すると云ふ修養の道に盡きるのである。政公の歌に、妙の字を説明して

『心にもおよばぬものはなにかあると』

心にとへば心なりけり』

とある。誠に心觀を透して法も緣起も解脱も、密接なる關係を持つてゐる事は佛教の根本義であると共に、苦樂善惡等の觀念を精神生活の上に迄止揚せしめ、人生的價值を高調せしめた佛陀の究竟者としての心觀の内容である。我等の讃仰する佛陀は久遠劫來、非生現生、非滅現滅、慈悲の眼より、赫々たる智慧の光明を放ち給ひ、宗祖聖人も『法華經ヲ信ゼザル人ノ前ニハ釋迦牟尼佛入滅ヲトリ、コノ經ヲ信ズル者ノ前ニハ滅後タリト雖モ佛、在世ナリ』と勸信されたる所以のものは『一乘の道』即ち一切諸法の實理はこの世界の絕對的理法であり、心佛衆生是三無差別の教への如く凡夫己心在迷の靈光を覺醒せしめん爲めの慈悲である。この信仰は理論でなく體驗した實感でなければならぬ。この三界の苦境に呻吟し苦を體驗した時、此處に始めて人は解脱の道の意義を悟るのである。法華經に『我が昔ノ所願ノ如キ今者已ニ滿足シヌ、一切衆生ヲ化シテ皆佛道ニ入ラシム』と我等は靈山會上に於て化導され乍ら、本體を忘れて三界の浪界に沈み果て功德の林を燒き、菩提の樹枝を増長せしめる事も出来ぬ有様であり、凡天即佛と云つても宛然、垢衣を着

けて五侯の金殿玉樓に參殿するが如き恥かしさを感じるのである。解脱とは所詮、本性に安住する事であり、自覺は解脱の因無自覺にして妄我慾情に虜はれるのは三世輪廻の因であると教へるのである。この業觀の中にあつて罪障懺悔、消滅の信仰として法華經の結經として普賢觀の提唱がある。

我等凡夫が、一度び菩提心を發し道を達せん方法として佛に對する十種供養とか懺悔持戒とか、又普賢菩薩の誓願に依存し懺悔滅罪を以て道を達せんとするに至つたのである。普賢觀は懺悔の高調であり、見普賢の信仰は經文に『無罪相懺悔、破壞心懺悔ヲ行ゼシモノ身心清淨ヲ持チ法中ニ住セズ猶流水ノ如ク念々ノ中普賢及ビ十方佛ヲ見ル』と説かれてある。我等自己を省みてその汚深に恥しさを感ずると共に過去の宿罪たる黑惡の業理を發露し懺悔せねばならない。靜思默禱、佛を念ずる大乘懺の境地は即ち普賢觀である。優陀那日輝和尚は普賢の意義を釋して『六根清淨ナルモノ六牙ノ白象ニ乗ル也。行者ノ三身一切處ノ依正ニ徧シテ普ネク顯現スルヲ普ト云ヒ、五慾ヲ離レズシテ六根清淨ナル事ヲ得、生死ヲ出デズシテ生死ニ怖レ無キ、コレヲ賢ト名付クト』所詮、普賢觀は不變眞如の理と隨緣眞如の智を明にしたものであり、無常遷流の苦樂の法を破して、世間常住の相を心觀に映し、一相無相の境地を顯揚されたるものである。

以上述べたる如く佛教の人生觀、世界觀、緣起觀、解脱觀を開顯統一したのが法華經の生命であり、佛陀の血肉心髓たる題

目を末法暗鈍の衆生に與へ無限の慈悲を以て、凡夫即是佛身の意義を顯揚し、凡夫の心王を悟らしめ給ひしは宗祖日蓮聖人の觀心本尊の大曼荼羅觀そのものである。十界盡く凡夫の己心に具足し、本佛釋尊眞極の智である妙法蓮華經こそは生死解脱の本法である。一心唱題、不自惜身命、但惜無上道の信こそ事理懺悔を具含し自然に、色心清淨を持たしめる本門の戒である。末法無戒と雖も、無戒を着てはならない。一心唱題不自惜身命こそ無戒の佛戒である。十界羅列の大曼荼羅は凡夫の本體たる妙法蓮華經の体用の顯現であり、四聖六道の法界己心に具し、妙法蓮華經の光明に照されて本有の尊形となるのである。我等が九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に具はり眞の十界互具一念三千は壽量品の顯本、引いて凡夫の法体の顯本である。かくの如く本佛の家が子である我等は本佛と共に臥せ、本佛と共に起き、父は三世常恒に慈眼を以て衆生を視たまひ、每自作是念の每自悲願を以て常に迷へる子供を導く事を忘れ給ひし事はない。大慈の心は日々に新に湧き出で我等を守り給ふ。佛、菩薩の慈悲は常に盡き給はぬであらう。我等は一心欲見佛の信を以て自然に戒の本然に歸入する時我執、煩惱の雲、自然に晴れ、菩提清涼の月が現はれ、無價の寶珠たる心性の靈光が現はれる。この遠塵離垢の心を以て萬象を觀する時、一念法界に滿ち亘りて、青巖白石のほとり無心に去來する白雲もわが心にあり、大空に燦たる光芒を放つ明月の平等無礙の光は我が心中の靈光である。娑婆即寂光と云ふも本化の心觀を離れて存在し

得ないと共に、南無妙法蓮華經と唱へ奉る心地即ち煩惱即菩提生死即涅槃であり、佛教の眞髓を顯發されたる本門の觀心そのものである。宗祖聖人の觀られた十界森羅萬象と云ふものはこの大宇宙を以て、無始本有の本佛の家とし、本有常住の九界すでに本佛果海に攝取され、恩寵を恣しまゝにしてゐる法悅觀であり、こゝに至つて觀の究竟地を見出す事が出来るのである。佛陀の不滅を信ずる事は、そのまゝ自己の不滅を信ずる事である。人生は嚴肅なる因果の理法の上に立ちて、而かも永遠不滅である。我等は汚濁、我執を離れて肺肝を淨化し、八面玲瓏たる心田の妙法の五字を以て、本佛の慈悲を仰ぎ自己の生命をして、その貴い本性を發揮し一路向上の道を辿らねばならないのである。

山麓居詠

帶金 一義

たちまちにわれを包めりい對へる山々既に
深き霧の中
狭小村ひとと灯りぬ一面の芒穂白き波立ち
はるけく
瀧しぶき吹きあぐる淵にゆれやまぬ山菊の
花の寂けく明るき
丘腹の風にふかれて村人ら働ける見ゆやや
白々し
窓障子とほしてさむき寒曇り裏山近く鳩鳴
くこゑす

宗祖靈跡伊豆と船守彌三郎

田 中 靜 光

伊豆の靈跡は宗祖御一代の御化導中四ケの大難の一つである弘長元年五月十二日の伊豆御流罪に端を發してゐる事は私が申すまでもない事であるが、その御靈跡なるものが、他の諸大靈跡に比して餘りにも荒廢し、異説紛々たる状態にあるを以つて一度靈跡に參詣する人には何等得る處なくむしろ日頃の信仰が退歩するかの如き憾あるを以て（私も其一人である）此の稿を發表せんとするものである。

本稿は私が昭和九年の夏、伊豆鎌倉房州方面の靈跡參拜を兼ねて、行脚修行に出掛けし折に伊東に於て篤信家たる杉山廣作氏に奇遇し、はしなくも多年研究の蘊蓄を私に披瀝されし上に本稿を惠送されたる熱誠に感憤して生れ出でたものである。

棲神掲載の紙數にも限りがあるから、其の要を摘出し枝葉に涉つては、他日熱誠なる諸師の質問に應ぜんとするものである。以下杉山氏の説を骨とし私の愚見を皮及び肉とし項を追ふて述べることとする。

元來聖祖の靈跡に就いては、種々異説のある事は七百年の長歲月を経た關係もあるが、其他に特に重大な理由がある。其れは聖祖の御生涯六十有一年は實に世界有史以來かつて見ざる一

大迫害史であつて、即ち時の爲政者及び他宗徒の惡口罵詈の的であつた。靈蹟等も從つて對外的には公然と發表されなかつたものと思ふ。（宗門變遷史に明なり）日蓮聖人を現實社會より葬り去り、他宗折伏の聲を斷たんとした事實が「大難四ケ度、小難數知れず」と述懐遊ばされた事によつても窺ひ得る。弘法、法然等の傳記の餘りにも非現實的なるに反し、聖祖の傳記は血あり肉あり感極まれば涙溜の如く流れ出づる、現實的一大歴史の繪巻物であつたのである。

杉山氏の説は、（一）人間として成す事の出来る事蹟のある事（二）正確なる聖祖の史蹟は信仰の如何を問はず萬人等しく信じ得らるゝ事（三）聖祖が船守彌三郎に授與せられたる御遺文と靈蹟とは不離不即の關係にある事（四）祖岩が二ヶ所あることは道理に反する事。以上の四項目に悉く合致しなくてはならない筈である。

弘長元年伊豆流罪の途中、荒波高き海邊に宗祖を置き去り自滅にし奉らんとせし處は、日蓮崎附近の祖岩である。（現在の日蓮寺のある附近か）

時に大聖人の御命もあはや風前の燈の如くであつたのを、薄

暗せまる海邊の御經の聲に不思議を懷いて近寄り御救ひ申しあげたのが、船守彌三郎夫婦なのである。

彌三郎は咽喉の渴はきしこの不思議なる僧に、供養する爲め丘に登り水を汲み、笹の葉を以てすゝめ參らせた此の處を後世笹水ヶ浦と稱してゐるのである。暫くして大聖人の御言葉により「流罪僧日蓮」なることを知つた彌三郎夫婦は非常に驚いたが、高大なる御人格に接し其の徳にうたれ始めて身を以つて供養し奉る事を御誓ひ申し上げ、日頃より知つてゐた川奈の岩穴（祖岩より二里程北方にあり）に匿まふ事として御案内申し上げたのである。御遺文を拜讀すると女房は家付の娘であり彌三郎は養子であつたかのやうに察せられる。

現在笹水ヶ浦の題目岩と言ふのが残つてゐるから、此の岩について聽けば當時の真相も稍明ならんも、十數年以前——から或一部の人々に依つて傳へられてゐる川奈の祖岩なるものは、史蹟學、地理學及び當時の情勢等より察するに甚だ首肯する事は出来ないものである。

然るに當時の伊東の有様は船守彌三郎許御書に「かゝる地頭萬民日蓮を憎み嫉む事鎌倉よりも過ぎたり」と示されてゐる如く甚だ危険千萬なものである。然るにはしなくも佛天の加護か地頭伊東朝高公は大病にかゝり、明日をも知れぬ重態となつてゐた。斯様な譯で人々は、流罪僧日蓮の事は忘れてしまひ、ひたすら領主の病氣平癒のことのみを祈つてゐたのであつた。一方大聖人は前述の如く他人の知らざる處に捨てられ、他人の知

らざるうちに彌三郎夫婦に助けられ、他人の知らざる岩穴に匿まれたのであつて誰一人知る者もなかつた。

先年私が靈跡巡拜の砌、川奈にて大聖人が曾つて匿まれて居られた岩穴だと言ふ御堂の建つた處に參拜したが、其處は現在道路端であり、且又當時に於ても人家には程近き場所であつたものと思はれ、假に其れが岩穴であり、斯様な狭き處に三十餘日も寝起されてゐたとしても、如何して部落の人々に氣付かれずにゐられよう。若し其の附近とするならば、其の御堂の後方に稍大きい岩穴がある（現在は物置場になつてゐて、所有者の家には代々不具者が出來るといふ話がある）。此も地理學上猶ほ研究の餘地があると思ふ。猶當時京都南禪寺の行者普門禪師なる人法華經の教義上より感ずる處ありて、はる／＼鎌倉へ來りしが大聖人は伊豆の伊東へ御流罪と聽き直ちに伊東へ尋ね來り漸く前記の岩穴を訪ね當てて、「一輪二尊」の開眼を願ひ、歸途伊東朝高公の屋敷を訪れ、家來の綾部正清なる者に面會し、日蓮大聖人の高德を讃へて、主君の病氣は法罪である事を懇々と説き、愚僧の言葉を信ぜずして他日後悔する勿れと言ひ殘して立去つた。そこで人々評議の結果大聖人に御託をし御祈禱をして戴くべく使を差出した處「一切衆生の異の苦を受くるは日蓮一人の苦なり」との大慈悲心より早速御承諾に成り、家來の案内に依つて朝高公の屋敷に赴き、御祈禱なされた所、靈驗速かに顯れ、朝高公の病氣は輕快に赴き遂に全快せられたので、前非を悔ひ大聖人に歸依し其の御禮として海中出現の立像の釋尊

を奉った。

其後三ヶ年の間屋敷の裏にある毘沙門堂へ招待申し上げ、領地内の御巡錫等にも便宜を計り、御供養申し上げたとの事である。此が本山佛現寺の濫觴であると傳へられてゐる。

猶昔から彌三郎を川奈の漁夫と言ひ傳へて居るが、御遺文には船守と名記してあるに關らず、漁夫と言ひ傳へてゐるのは御遺文の川奈云々との文意より推定したものではないかと思はれる。即ち船守といふ事は船頭といふ事であつて漁師といふ事ではない。

元來彌三郎夫婦なる人は伊豆より數里下田に近く、八幡野といふ處の人にて伊東への通ひ船の船頭（航商人）であつたから伊東に往復する折天候悪しき日には、しばしば此の岩穴の前で船宿りをした事があつたと思はれる。

若し漁師であつたとしても小舟に乗つて波の荒い海邊で漁をしてゐたと思はれぬ。斯様な譯で岩穴の様子もよく知つてゐたし、又川奈の人里よりは數百間も離れて居り穴の側よりは水も湧き出で、猶且つ穴の大きさは三十餘坪もあり此處に匿まへば他人に知れる恐れもなく、船乗家業にも差支なきところから此の岩穴を選んだものと思はれる。因に此の岩穴を昔から乳母御の穴と云ひ傳へてゐるが、これは彌三郎夫婦が大聖人を此の穴に匿まつた時に、大聖人がその妻に親しみと尊敬の意より乳母御、乳母御と呼び給ひしに起因すると考へられる。以上の如く船守彌三郎と云ふ人は實は川奈の漁師ではなく日蓮崎より猶

二十數町南西の方なる八幡野といふ處の人に於て、只今でも其の子孫が連綿と八幡野第一の舊家として残つて居り、蓮着寺の客席大檀那と成つて數百年以前に二回も日蓮崎の祖師堂を建立した事が記録されてゐるのである。

次に蓮着寺の沿革であるが、天正八年伊東の代官中村若狹守吉勝公がこれを再建し、萬治二年蓮着寺の開山上台院日靈上人が重ねて再建し現今に及んでゐるのである。

是等の消息は寛文九年五月四日に韭山の代官江川太郎左衛門殿より時の寺社奉行久世大和守廣之朝臣に宛てた書翰を一見すれば明となるであらう。斯様なわけで八幡野と云ふ處は土地の産物は陸路か水路の何れかに依つて伊東まで運搬しなければならなかつたが、彌三郎夫婦は共に薪炭魚類の如きものを伊東へ運搬し、歸りには米、其他の日用品を買入れ商をするところの航商人であつた。

かう考へる時大聖人の御書にも船守とあるのは當然ではあるまいか。猶ほ従つて日蓮崎の祖岩の前はどうしても通らなければならぬ處であつたから、弘長元年五月十二日に斯くも大聖人を御救ひ申し上げる事となつたのであると推察する。

要するに伊東にをける日蓮大聖人の御靈蹟と船守彌三郎許御書弘長元年六月二十七日とは全く符合してゐると思はれる。

彌三郎夫婦が晩年庵を結び唱題受持を怠らなかつたといふ處に天文年間、甲州上の原より川奈に移住せる上原某が携へ來つた祖師の御像を祀つた處を大聖人三十餘日お浸ぎになつた岩穴

となし、又上原某が彌三郎夫婦菩提の爲に建立せし蓮慶寺を以つて、彌三郎より五代目に當る五郎兵衛自ら船守家先祖供養の爲に建立せる寺となし其の開基たる上原某の功績は全く隠してしまつた故に現在に於ても猶伊東が繁榮しないのではあるまいかと思はれる。

況や最近廻岩は川奈に在りとして、立島と云ふ處の側の小さな岩の上に「南無妙法蓮華經」と大書せる木標を建て、之が實際の廻岩なりと宣傳してゐるが、心あるものは一見しその正邪を決することが出来るのである。

又妙隆寺（伊東町）には立派な鬼子母神が安置されてゐるが、其は大聖人が流罪赦免となり鎌倉に御歸りに成る砌、朝高公が深く袂別を惜みて、開眼供養を願つたもので、將來國寶に成る可き價值充分ありと、石田齋伯が鑑定されてゐる。猶ほ八幡野の船守家には今より約三百年前に、同家の主人船守勝五郎と云ふ人が房州小湊の誕生寺の什寶たる、大聖人の御生家眞名家の

闘 争

闘争は社會生活の火花であつて、人の生息する所必ず闘争を生ず。小にしては個人間に於いて、大にしては國家間に於いて

系圖と、大聖人薙髮前の御姿を當時の畫家に描かせた軸物を所藏してゐる。

此の軸物の右側に豆州加茂郡八幡野村として、其の横へ小さく船守勝五郎、横に少し大きく勝五郎應需玉定齋素流寫之、と記してあり、亦同家には大聖人が御岩穴に潜在中樑木材の船の櫓枕にて彫刻され、彌三郎夫婦に授與されしと言ひ傳へられる高さ七寸餘の眞黒な八幡大菩薩像が傳承されてゐる。然るに伊豆の靈蹟は却つて地元民たる伊東の人々に依り傷けられ、唯徒らに靈蹟の争奪にのみ没頭して史蹟の研究をも省みざる悲しむべき状態である。願くば當事者たるもの心して大いに聖跡顯揚の爲に努力して頂きたいと願つて止まない。

以上をもつて伊豆靈跡の大要を書き終つた、併し組織的に發表する事が出来なかつた事は私の研究未熟と紙數制限とに依る故に、他日機會を得て改めて發表する事に致しませう。合掌

田 村 啓 孝

らう。して見れば人生は闘争の連結であり、歴史は闘争の累積であると云つてもよい。

世人は闘争と云へば、肉塊相撃つ血みどろな野蠻的喧嘩を思ひ起し、若しくは兩國干戈を交へて屍を山野に曝す非人道的戦争を聯想して退避する。何が故に世人は斯くの如く闘争そのものを憎むか、是は闘争と云ふ語の持つ意義の一部分のみを知つて、全意義を解しないからである。自分は此處に世人に對し、闘争の眞意義の再認識を切望するのである。

闘争には正しきものと邪なるものがあり、又外面的のものと内面的のものとがある。然して戦時のみが闘争にはあらず、寧ろ闘争の大部分は常時に於いて行はれ、國家衰亡の因も常時に於いて根ざされる。戦争は唯闘争がクライマックスに達した時、何かの動機によつて爆發したるに過ぎない。

先づ邪なる闘争が如何に社會を害するかを述べて見よう。幼兒は母が膝に抱いて乳を與へる時、他方の乳房を奪はれまじと小さき手に押さへる。此の無邪氣なる慾は人間本來の根源慾であつて、成長と共に次第に伸大し、複雑となつてゆく。即ち慾は人間の本能であつて生存上の一切の行動を支配する。生と慾とは絶對不可分の關係にあつて切り離すことは出来ない。一を得れば二を望み、二を握れば三を欲し、かくて止るところがない。この慾と慾とが衝突した時、其處に争ひの起るは當然である。衝突に衝突を重ね、闘争に闘争を加へ、争亂は擴大して各階級の相闘ぐところとなり、遂に思想國難を招來するに至る。

是れ我が國に於ける現代の社會相ではあるまいか。是れを更に擴大したものが世界の情勢である。強國が弱國を併呑せんとして毒手を延ばせば、弱國は爪牙を磨いて必死に對抗する。然し結局は弱きものが強きものに呑まるゝ所となり、世界の地圖は次々に變化されてゆくのである。國際條約等は唯一片の反古に過ぎない。一強國の横車によつて何時でも破られる。假令小國が亡ばされても、自國に利害關係の無い限り、他強國は手を拱いて傍觀して居る。其處には國際道德の片影すら認めることが出来ない。唯弱肉強食の獸的修羅場が展開されるのみである。故に一國家として地球上に存在するためには、自國の經濟が許す最大限度の軍備を必要とする。その結果極度の經濟困難に陥つた各國は、表面には偽つて平和主義を唱へ、軍備縮小を説くも裏面には密に他國に凌駕する軍備を成すべく懸命となつて居る。今や各國は虎視眈々、隙あらば他國に乘じ、あくなき自國の貪慾を満たさんとして居る。其處には唯、平和の假面を冠する不氣味さがあるばかりである。

邪なる闘争が世界を危殆に陥らしめるに反し、正しき闘争程人類を益するものはあるまい。正しき闘争は人生をより以上意義あらしめ、社會は正しき闘争のみに由り進歩發展する。輝しい希望への一路を進む時、之れを遮る幾多の障害の現るゝは必定である。殊に希望が遠大なれば、それだけ障害も強大であり且つ多くなる。此の時徒に之を恐れて失望落膽し、自暴自棄となつて身を誤る様では到底成功は出来ない。満身に湧き起る力

を奮つて障害に打向ひ、之と闘ひ闘つて、闘ひぬいてこそ初めて希望は達せられる。然し希望を達したからとて障害は無くなりはない。障害の無くなるのは人生終焉の帳が閉じられる時で、生涯之と闘ふべく天が定めて居る。されば運命の手に弄弄せられ、或は囚となつてはならぬ。如何なる困難や障害に出會しても敢然として闘ひ、之を打ち挫いで自己の運命を開拓すべきである。人口の増加と共に生存競争の極烈になつた現今に於いては、一度障害に敗れるや忽にして落伍者となり、容易に擡頭出来ない。されば百難到來するとも少しも屈せず、勇猛心を起して闘はねばならぬ。天は自ら助くる者を助くるが、運命の屈從に甘じ、或は自暴自棄に陥る者は助けない。正しき闘争に由つて路は開かれ、路開くことに由つて希望に到達せられる。其處には進歩があり、歡喜があり、光明がある。退歩落膽暗影等見ること出来ない。社會の平和、國家發展の鍵はこゝにある。濁流渦巻く近時の世界に、燦として輝く文明の一面を有するは、正しき闘争の賜と云はねばなるまい。

正しき闘争！ 邪惡に對する正義の戦ひ！

何と雄々しいことぞ。正義の前には何ものも屈伏する。惡は如何に多大なるも遂に一善には及ばない。彼の日清戦役に於いても、日露戦役に於いても、勝利は正義を主張する我が軍にあり、東海の一島國たりし弱小日本は、一躍世界の列強に伍した歐洲大戦後の日本は更に進んで第一等國の班に列した。又近くは彼のジュネーヴに於いて我が國は、正義の旗幟を高らかに掲

げ、遂に迷妄四十二ヶ國をして屈伏せしめた。これこそ正義國日本が咲かせた國際壇上の花であり、古今未曾有の大快事である。今や日本は正義の覇者として全世界をリードして居る。此のめざましき國運の隆昌こそ、正しき闘争の何たるかを立證せるものである。

上來述べたる正、邪の二闘争は、何れも外面的闘争であつて直に耳目に認め得るものである。内面的闘争は、自己の精神内に於ける良心と惡心との闘争である。然し外面的闘争と内面的闘争とは表裏關係にあつて、元來一体である。外面的と云つてもその裏には内面を持ち、内面的と云つてもその表たる外面に對しての内面である。唯便宜上斯く分けたるに過ぎない。内面的闘争即ち良心と惡心との勝敗如何により、外部に形となつて現れる闘争の善惡が決せられる。良心をしてよく惡心に勝たしむれば德器を成就し、然らざれば常人たることすら出来得ない宗教が修行を説くのも、儒學が人道を教へるのも、畢竟良心をして惡心に勝たしめ、人格を完成せしめんとするにある。勝れたる宗教家には重疊たる迫害も甘んじて受け、正しき教を説いて命をも失ふ者がある。世のため人のため、正しき教を説いて死をも辭せない。この強さ。この正しさ。この心の前には何人と雖も跪かずには居られない。正しき心は保ち難く、之を保つには絶大なる努力を要する。されば人の心は常に轉變として定まらず、やゝもすれば惡へ惡へと誘はれる。その果は何うにもならない惡の増殖に顛落し、悶へ苦しみ、且つ自暴自棄となつ

て人を呪詛し、世を怨嗟して暗い人生を送る者も可成多い。之も元を質せば最初の第一步を誤つたに過ぎない。微菌が血液の中に入ると、忽ち白血球が之を包んで殺す様に、絶えず反省して悪心を殺さねばならぬ。少しでも反省を怠ると、心の何處かに生じた惡の芽萌えは知らぬ間に成長し、遂に身を滅ぼすに至る。然して惡の蔓延は頗る早く、殊に情熱多き青年を急速度に蝕んでゆく。華かなる時代文明の半面に、深刻なる思想惡化の叫ばれるのは、惡の芽萌えの繁殖した證據である。惡の蔓延、即ち思想の惡化は國家組織を根本から破壊するもので、容易に根絶する事が出来ない。骨肉相戦ふ内亂も、血で血を洗ふ如き

想ひ出す函館

港開けて、喜の字の祝ひ、月もほゝえむ臥牛山。かほる夏草風さへ白く、今も名に立つ五稜廓。雪も氷も、嬉しくとけて、港自慢の鰯いか。出船入船北洋漁業。海の寶の大港……。然し私は此の明るい、人口廿有余萬、北海の孤島を輝かす一点の星の如き都、函館市のその影を物語る尊ひ歌があるのを知る。

昭和九年春半ば、因縁余りて人を食む、彼岸中日大火災、南無妙法蓮華經、題目悟らぬ其の爲ぞ。たちまち、ほのほなめつ

革命も、多くは行詰つた思想の爆發として起る。之を利用したものが常時に於ける思想戦であつて、強大を誇る隆盛國が敵國の攪亂策に陥り、遂に倒壊のやむなきに至ることもある。小さき惡の芽萌え、これこそ身を滅ぼし、國を亡ぼす根源ではないか。人は須く良心を奮ひ起して惡心を滅ぼし、向上への一路を邁進せねばならぬ。是れ人として進むべき大道である。

正しき闘争はすべての惡を潰滅し、すべての善を招來する。社會を發展せしめ、人類に幸福を與へるものも、之を措いて他にはない。自分は眞の平和建設のため、正しき闘争を謳歌して止まない。

村田力男

くし、かしこの巷や此處の町、親は子を呼び子は親を、南無妙法蓮華經、唱へて助かる御題目。呼びつ呼ばれつ東西、地獄極樂別れめの、大門閻魔の立叫び、南無妙法蓮華經、唱へよ地獄の道防ぐ。逃場は大森砂山と、地獄の橋の新川で、もだえて死せしは幾千か、南無妙法蓮華經、唱へて浮べよ血脈。砂山ほのほにかこまれて、親子抱き合ひ焼死せり、水と火で死ぬ哀れさよ南無妙法蓮華經、早く悟れよ御題目。思ひやるだに胸せまる

時めき榮えし函館市、今日は昨日の影もなく、南無妙法蓮華經唱へてせい出せ復興に。幾千人の精靈を、なげき泣きたる悲しみは、何時の時に消えうせん、南無妙法蓮華經、題目功德で身延山……。

私は此の人身の尊命と、千辛萬苦も一時に消煙と化した現在の有様を見るに付け、「過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ。未來の果報の善惡を知らんと欲せば現在の因を見よ」と云ふ因果の理法を思ひ出すのである。十五萬人の罹災者、二萬七千以上の焼失戸數、一千六百以上の死者、そして二百卅七名の根崎海岸漂着死体。約一億三千萬圓と云ふ物質的な暴大極る損失高を見る時に、過去の因を自然に知らんと欲するのである。

懷古する事今より約七十年前、即ち慶應三年の事である。將軍徳川慶喜は大政を奉還して恭順の意を表したのであつたが、舊幕府の臣、榎本武揚、大島圭介等之に服せず、同志と相謀り、蝦夷地一帯を所領として、永く徳川氏に賜はらん事を朝廷に請ひ、其の遂に允許を被る可からざるを知るに及んで、蝦夷地の開拓に任じ、皇國北門の警備に擢ると稱して、翌明治元年、總勢大凡三千余人、軍艦六隻に分乘して品川及び石の巻を脱走したのであつた。五稜廓に在つて、此の警報に接したる清水谷函館府知事は、僅に三百余人の官兵を以て、敵の大軍に抗るの決心を固め、警急配備を定めたのである。然るに、衆寡の數亦懸隔し、尺餘の積雪と颯々たる北海の寒風とは、漸く士氣の困憊を來し、迫り來る敵に對しては遂に五稜廓に敗退するの已むな

きに至つたのである。此の夜、官軍の軍議は飽く迄函館を死守する事に一致したのであつたが、恰も此の時函館駐在の外國領事館より、開港場に於ける交戦は國際問題を惹起するの虞あるべき趣の抗議に接したので、官軍は戦を止め、涙を嚥んで青森に退却する事になつたのであるが、後日聞く處に據れば、該抗議は、兵力を損せずして函館を占領せんとする、敵軍の謀略に出たとの事であつた。越えて二年二月、脱走軍追討の大命が降つたので、官軍の陸海軍大凡七千餘人は威風堂々海を壓して進軍し、渡島國乙部に上陸してより五月十日に至る間絶えず激烈なる戦鬪を交へ、互に多大の損害を生じたが、一進一退、大勢は未だ遽に勝敗を測り知る事が出来ぬ状態にあつたのである。

此の間、官軍の増援隊は續々輸送せられ、五月十一日、總勢大凡一萬餘人を以て、決勝的總攻撃を行ふ事を決し、午前三時海陸相呼應して、一齊に攻撃を開始したが、二千餘人の敵亦之に應戰して、激戦數時間に亘つたのである。此の時、官軍の奇襲隊は遽に函館山上より市街に突撃し、敵の不意を衝いたので敵は潰走して五稜廓及び辨天砲台に退いた。之が爲辨天砲台は陸上の連絡を遮斷せられ、全く孤立無援の状態に陥つたのであるが、毫も屈せず、實に目覺ましき戦鬪を續けた、然し、夕刻迄には殆ど致命的損害を與へられ、概ね、龜田、神山及び千代ヶ堡の壘に近く包圍せられるに至つたのである。此の日の戦鬪に依り大勢既に定るに至つたから、翌十二日、官軍は榎本等に説きて恭順を勧めたが、一同と共に城砦を死守して、潔く天戮に

就くの覺悟を定めた榎本は之を拒絶すると同時に彙に和蘭國に於て學んだ海律全書二卷を、兵燹に罹りて烏有に歸する事を深く惜しみ、皇國海軍の爲に之を官軍に送り届けたいのであつた。官軍も又、當時我國に於て唯一の珍籍を贈られたる好意に謝し酒五樽を贈つて敵の將士を慰めたのである。斯様にして兩軍は更に死力を盡して相戦つたのであるが、十五日に至り辨天砲台は砲彈食糧共に盡きて遂に降り、十六日千代ヶ壑の壘も亦陥つたのである。茲に五稜廓は、獨り孤壘に據るの悲境に立到つたから、榎本等は憤死を決したが果さず、遂に自ら刑に就き、一同の許されむ事を請ひて十八日、出でて軍門に降つたのである。私が今茲に永々と物語つたところは函館戦争の概要であるが然らば何故に斯く迄詳しく述べねばならなかつたか、これ等の總てが即ち今回の大火災の果に對して所謂因とも見るべきであるからなのだ。あの大火災の火元を見るに、函館山麓綠影濃かなるの地、碧血碑在存の麓より發火点となつて居るのである。その碧血碑とは何ぞや「柳川應吉同志と謀り、明治辰己の役に陣歿せる徳川脱走の士の遺骨を蒐め、之を實行寺に葬る。偶々官憲の知る處となり、墓標を毀たれ、身亦斬に處せられんとし僅に軍監田島圭藏に依つて救はる。明治四年、地を此處に相し改葬したるも又々官憲の忌む處となり、屢々果せらる。後漸く許可を得、明治六年、大島圭介、實地を踏査し、七年伊豆産の石材を以て靈岸島に刻み、八年竣成する事を得たり、碧血碑は實に其銘なり」と旨示する立札に寂しく刻まれてゐる。これに

依つて「同じ日に生れて籠の内と外」と云ふ諺の如く、互に同じ主人の爲に奮戦を續けながら、一方は官軍となり、一方は賊軍と稱せられ、白骨に化した賊軍の靈位は、彼の碧血碑の如き結果を見、現在に至るも、大なる粗狀を呈して居る等、地下に居る彼等は當に憤血を吐き、暗夜に青白い怒りを浮かべて居る事であらう、そして更にその呪ひは脩羅の巷化を祈り、その燃ゆる祈りが此の地よりの發火となつて北方に向ひ秒速三十余米の風に乘つて走つたのである、その猛火は彼の官軍死者之靈位を祀つる、招魂社を燒失し、それより急に風向を變へ東に向つて進んで行つた。その間市民は東岸たる大森濱方面へ素早く避難したのであるが、すでに風向が變つてゐた爲、魔火に迫られ此の濱にて燒死する者數知れず、漂着死体となるもの二百卅七名と云ふ、止まるを知らぬ猛火はぐんぐん進んで舊千代ヶ壑陣地附近迄燒失してしまつたのである。この悲惨な火災の後を見る時、前述せし函館戦争の有様と結ばれて或る因果關係を痛切に感ずるのである。あの多く燒死と溺死せし大森濱海岸は賊軍の將士の多くが斬首されし處であつたと云ふが、その靈位を慰さめる御堂も市の長足なる發展の犠牲と成り自然不明となつて居たと云ふ事である。又千代ヶ壑の壘附近まで燒失し、彼の辨天砲台附近の七十余戸はその大火災より免がれて居たのであるが、數日後思ひ出した様に再度魔ノ手は延びてこれを焼盡したのである。然し五稜廓附近と現存の重砲兵大隊附近の殘屋は、あの日本魂なればこそその美談、賊と仇名されつゝも國家の

爲に海律全書二巻を贈つた功績と、これに對する酒五樽の善根ある和境の地なる爲かとも想はれる。

私は何故これ程迄にこんな事を言ふのであるか。それは云ふまでもなく「過去の因を知らんと欲せば現在の果を見よ」と云

正しく強き信仰をもつて

梅 津 榮 希

ふ因果の理法に依つて、目の前にまぎ／＼見せつけられた歴史的因縁因果の恐ろしさに戰慄したからである。私はそれを想ふ時、常に函館戦争と現在市民と云ふ事をもつと深く考へさせられるのである。

最近宗教復興の聲と共に、諸種の宗教運動が叫ばれて來た事は、我々にとつて特に注目すべき項目の一つである。宗教復興

の叫びと新興擬似宗教の續生、それは如何なる原因で發生し、更に何を物語つて居るのであらうか、現在の社會が政治的にも經濟的にも思想方面にも、我々の日常生活に對して何一つ満足と興へて居ない、その精神的不安が宗教復興の叫びとなり、新興宗教の發生と成つて、その弱い本能が刹那的の安息所を轉々之等に求めさせて居るのではなからうか。

最近の統計によると、佛教、神道、キリスト教以外に四百廿余の新興擬似宗教が成立されて居り、その大なるものは、數百萬人の信徒を持つて居るのであるが、それ等が國民としての義務を完ふし、世の中の安寧秩序を亂さない限り宗教の自由を認めらるゝ今日之を排斥し彈壓する事は不可能だとは言ひながら

正しく強き信仰をもつて

之等を冷靜な態度で批判し、内容を具さに検討するならば、容易にその弊害のあることを認めらるゝのである。

例へば「人の道」「生長の家」等にあつては、總べての禍難がお振替によつて逃れる事が出來るとか、教書を讀む事によつて病氣が全快するとかと説いて、之を唯一の金看板として居る、然もその信者の多くが、中商工業者、サラリーマン、退職官吏等所謂半ブル又はインテリ級に多いと云ふ事實は何を物語るのであらうか、それは物質的貧困者ではない彼等の老病死に對する精神的不安を除かうとする人間本能の相なのである。

然し此の時我等は冷靜に嚴正なる批判と判斷とに訴へ正しき宗教を求め、その宗教に依つて強く正しい信仰生活に生きねばならない。

正しき宗教正しき信仰と、肉体的な病氣を治す、それがその

本分全体ではなく心の病、即ち精神的の迷盲、不安を完全に除く、それが眞實の正しい宗教としての價值ある宗教なのではなからうか。

我々が若し肉体的な病氣にかゝつたとしたなら、早速醫者へ走るであらうが、その反面、宗教に對する強き信仰によつて己が精神の強化を計らねばならないのである。生者必滅が宇宙の眞理である以上、若しも死に至る様な時があつても、その死に對して平然として死んで行ける安心立命、その心を養つて呉れるのが即ち宗教の偉大なる功績であり、必要の所以でもあるのだ。

宗教の榮る時、その國家も榮え、宗教の亡びる時、その國家も亡びると言ふのは古今を通じて東西史上に明かなる事實である此の我々の生活と國家に大なる影響を持つ宗教について、如何なる宗教を選ぶべきかと云ふ事は、我々にとつて最も重要な事である。

其處で如何なる宗教を選ぶべきか、之こそ我國体に合致し、更に我々の社會、精神的兩方面の不安に對しても常に光明と解決とを與へて呉れる宗教でなくてはならぬ。それでは果してそんな宗教があるであらう？それは「日蓮ニヨリテ日本國ノ有無ハアルベシ」と叫び、更に「一切衆生ノ異ノ苦ヲ受クルハ日蓮一人ノ苦ナリ」と絶叫せられた日蓮上人の教こそ正しく夫れである、正しき教即正法華經を國民に傳へ、國家を救ひ王佛冥合の眞の國家建設のため、肉體精神の兩方面に平常人としては到底堪へ忍び難き壓迫と迫害とを堪へ忍び、然も平然、妙法の傳

道に精進せられた強き信念こそ、日蓮上人の正しき教に對する強き信仰の發露である、此の絶大な信仰の發露は權力金力あらゆるものを超越して猶余りあるものである。之に反し我々の信賴する宗教が若しも淫祠邪教に類するものならば、その及ぼす惡影響は大なるものであり、日本國民として此れ程恥ずべき事はないのである。我國體は皇室中心主義であり、其の昔聖德太子は佛教を基礎として第十七條憲法を制定せられ、之によつて現在に至る迄の國家の威嚴と光輝ある國史とが立派に維持されて來たのである。

日蓮上人は「受ケガタキ人身ヲ受ケ値ヒガタキ佛法ニアヒテ爭カ虚クテ候ベキゾ同ジク信ヲ取ルナラバ又大小權實ノアル中ニ諸佛出世ノ本意衆生成佛ノ直道ノ一乘コソ信ズベケレ」と教へられ更に「夫レ法華ト申スハ八萬法藏ノ肝心十二部經ノ骨髓ナリ」と示されて居るのを見ても法華經が如何に我々に適當せる教であるか判るであらう。

現在の佛教は高尚な教義と、正しき人生への創造力を持つて居り乍ら宗教家の墮落と無力とに禍ひせられて、大衆の迷へる心に大良藥を投込む事が出來ないのである、此に於てか社會の人には、己が不安と焦慮の捨場所を淫祠邪教の類に求めて、憂ふるべき類似宗教の擡頭と成つたのでは無からうか。之等一切を「日蓮一人ノ苦ナリ」と絶叫せられた大上人の流を汲む諸兄よ、「二陣三陣打續ケカシ」の號令に強き正しき信念と破邪顯正の劍を握つて、立正の法幟空高く、國民覺醒と樂土建設とを目指して突進しやうではないか、之こそ宗教家としての大なる使命であり、國民としての根本的覺醒である。

校友會報

祖山教學の歴史は遠く聖祖御在山の昔に遡るべきであらうが學校としての起源は善學鏡師の西谷檀林の開創に在るといふべきであらう。爾來幾變遷、本信院日慈院下の時代に祖山學院と銘打つて更生したのは大正の始めであつた、當時僅々卅名程度で一級少いの三名或は二名で、唯一人の卒業生を寂しく送り出した事もあつたのに近年少くとも廿名以上の卒業生を出すに至つた現状を思ふと實に隔世の感がある。

全校生徒三十名の昔と二百名を算する現在とでは組織の上にも當然相違があるべきである、それにも關はず實際には昔も今も變つて居らぬ、只増えるが儘に増えたといふ丈で制度は三十名か四十名當時の昔と同じだ、此に祖山學院の惱みがある、何んとか改革せなければとは誰しもが考へて居た事である。此度の祖山學院改革案は此の要求に應じて生れたものである。

何は兎もあれ現在宗門私立學校中に於いては尤も出色ある學校として我人共に許して居る祖山學院である。特に國家の非常時局は所有方面に復古思想の擡頭を見、是に影響せられて各宗共僧風教育の喧傳せらるゝ折柄、宗内に在つて祖廟中心の聲喧すしく、其の上に身延山としては唯一つの將來性に富む積極的事業たる祖山學院の經營、といふ様な種々な意味合から祖山學

院が問題視せらるゝ様になつて來たのである。

學校の經營といふ重大事、殊に連綿三百年の歴史を持つ學院の改革は、時流に投ずるとか、或は其の時々の當局者の御都合や物好みに依つてなさるべきでない事は勿論である。眞に達識の士が過去を考へ將來を卜して少くとも今日以後五十年百年の後を惟ふて畫策すべきものである。祖山學院と改稱せられてより已に廿五年、漸く今日にして其の卒業生が何ふやら仕事を始める様になつたのであつて學院の生める果實が眞に甘いか諱いかの結評を得るは恐らく今後廿年の後ではあるまいか。

我等校友は今學院の名譽を双肩に擔ふて營々努力して居る。そして我等を生める母胎の益々健全ならん事を念願して止まないものである。八年間無爲にして過し、本を讀まして、話しをさしても、あれもこれも出来ない様な事でなく免に角在山中に何か一つは自分の物にして歸る様、歸らせる様な學院にして欲しいと、自分等の過去及び現在に徴して念願して止まないのである。昨年關本恩師の古稀の賀を祝した我等は本年龜田恩師の還暦の賀を迎へ十二月六日清水師に於いて些細ながら賀宴を張り恩師を慰め、且つ全國の教へ子に檄して會費を集め記念品を贈呈した。

先年來、兵庫縣下、岡山縣下、東京、大阪府下と順次校友會支部が設置せられた上に今秋は十一月五日廣島縣及び山口縣を網羅した中國學友會が野崎學穩、渡邊泰源、長谷川泰鑑、金川龍洗君等の努力に依つて成立した事を報告して闡筆する(靜堂)

同窓會報

昭和十一年度同窓會役員左の如し。

會長	院長	望月日謙	副會長	教頭	遠藤是妙
庶務部	部長	鹽田義遜	會計部	部長	田中惠殿
辯論部	部長	中條是明	文學部	部長	今村是龍
運動部	部長	林是幹	運動部	部長	香川是光
幹事	部長	林是幹	幹事	部長	香川是光
助手	部長	牛居行信	助手	部長	牛居行信
幹事	部長	穗坂顯淳	幹事	部長	穗坂顯淳
幹事	部長	宇佐美銀昌	幹事	部長	宇佐美銀昌
幹事	部長	松木本興	幹事	部長	松木本興
幹事	部長	下邨顯淨	幹事	部長	下邨顯淨
幹事	部長	中條是明	幹事	部長	中條是明
幹事	部長	田中惠殿	幹事	部長	田中惠殿
幹事	部長	鹽田義遜	幹事	部長	鹽田義遜
幹事	部長	望月日謙	幹事	部長	望月日謙
幹事	部長	遠藤是妙	幹事	部長	遠藤是妙

購買部

部長	望月德英
幹事	米村泰信
助手	清水文要

……幹事の挨拶……

本年度同窓會の陣容を如上の通り整え、各部長先生に多大の御指導を仰いだ事は暫くとして、此の重責を擔つた私達は若輩未熟でありましたが、各幹事は夫々の任務を承り「日蓮が弟子は臆病にては叶ふべからず」との聖語を拜して、此に力強き結成の誓をなしました。且又私達には昨年度に於いて、本會が一段の飛躍目醒しく、それによつてガツチリと組立てられた基礎工作によつて、次になすべくして與へられたものは、その堅固な骨組と土臺の上に相應しい立派な工作を施す事が望まれてゐた。私達の責務の重大性は此にあつた。而して又祖廟中心の聲高まる此の時、母校の誇を高揚して、教學の根本道場祖山を築き上げる使命を本會は帶び、本會が不斷の活動は我等が祖山の躍動する姿である。負はされた責務と本會が持つ使命を果すべく、期待され若輩にしてその衝に當つた私達八人は期待にそむいてその仕事の結果は不完全極る事を懺愧せなければならぬが、愛校の念と一身を會に捧げ、熱と意氣に燃ゆる若人がたゞ

懸命の努力を以て進んで來ました此の些々たる大樹にそゞ小
雨の一滴に等しい私達の努力が、何時の日か？一葉一枝を育み
得れば幸甚、私達の余りの微力さを補ひ將來益々堅陣を築き本
會が發展し祖山が榮昌する事を望んで止まない者であります。

最後に筆を新にして、會長現下を初め奉り、役員諸先生、其
他各先生、本山當局等の懇切な御庇護と御指導に深甚謹謝し、
併せて先輩諸賢、有縁各位及び會員諸兄の好意を盡しての御後
援に對して満腔の謝意を表すものであります。

— 一二、一、田中生欄筆 —

各部記事

◆庶務部

幹事 田中惠嚴

棲神第廿一號記載以後(昭和十一年一月以降)の主要事項を記
す。

一月廿六日 劍道部寒稽古納會、多數の劍士出場盛大裡に終る。

二月一日 棲神第廿一號印刷製本完了す。

二月二日 運動部主催山梨靜岡縣下卓球個人選手權大會舉行。

同日 支院武井坊全燒す、學生活躍目醒しかりき。

二月三日 武井坊火災見舞を呈す。

二月七日 棲神第廿一號の頒布を終る。

二月十六日 聖祖降誕の佳日を迎へて、本會主催第一回書道展
覽會並びに降誕及び學院創立記念茶話會、辯論部第三學期校
内辯論大會等々開催、本年度掉尾を飾るに相應しく且つ盛大
なりき。尙庶務部田邊幹事は降誕會及び學院創立記念日に關
して次の如き聲明書を發表す。

年々歳々廻り去り廻り來ル此二月十六日デハアルガ、苟モ
題目ヲ唱ヘル者ノ總テガ……別シテハ大聖止魂ノ靈山ニ行學
スル吾等祖山學徒トシテ假初メニモ迂濶ニ過スベカラザル一
月ナル事ハ言ヲ俟タザルトコロデアル。

△我々ノ良心、否吾人ノ信仰的情熱ハ使ヒ古サレタバレノ
双デハナイ。

△宗祖降誕ト學院ノ創立!!

吾等ニハ已ムニ已マレヌ嚴肅ナ反省ト抑ヘ難イ悦ビノ沸騰
トガアル。即チ諸君ノ内ノ幾人カ今マデ最モ忠實ニ且ツ
懸命ニ、ソレ等ニ就テ述ベタ。

△既ニ理窟ハ要ラナイ。タゞ先ヅ想ヒヲ貞應元年ノ昔ニ馳セ
ヨ。無限ノ大洋ト無限ノ碧空、水平線上ニ上ル日輪、綺麗
ナ入海ニ点々タル海人ノ家々、見事ナ常盤木ノ丘、ソシテ
數々ノ奇瑞。

△世界ノ光ガ東方カラサシ初メタ、月ハ明淨ノ二字ニ盡キテ
キタロウ。

△我々ノ濁ツタ魂ハ淨メラレ、汚レタ身体ガ甦ル日ダ。

△コ、ニコよなき聖日ト曰フ同ウシテ、學院創立ノ記念日ヲ持ツ我等ノ幸福コソ正ニ天下一品デアラネバナラヌ。

△學院ノ創立……。歴史的ニ之ヲ云ハバ三八〇年前、弘治二年ノ西谷善學院開創ニ始マルガ、再往達意的ニ之ヲ約言スレバ、實ニ宗祖降誕ト共ニ創ルト言フベキデアロウ。ソシテ未來永劫宗祖ノ魂魄ト共ニ在ルベキ祖山學院ナノダ。

△現今、宗門ノ教育機構ハ、恰モ武門政治下ニアツタ嘗テノ日本ノ如ク、時ノ然ラシムルトコロトハ云へ、明ラカニ大本ヲ忘レタ畸型的變態期ニ蠢メイテイル。明治維新ガ日本ノ國体ヲ取り戻シタヤウニ、淺間シクモ哀レナ我が祖山學院ヲシテ名實共ニ本化教學ノ根本道場タラシムベキ宗門ノ維新ノ必ズヤ來ルベキコトヲ待望シ、熱禱スルモノデアアル。

△コ、ニ吾人ノ希望ガアリ、精進ガアルノダ。

△即チ吾等コソ今日ノ佳キ日ヲ迎へ送ルニ當リ、先ヅ祖師ノ降誕ヲ思ツテ、反省ト悦ビトニ色ノ明淨ヲ得、更ニ學院ノ創立ヲ思ツテ明澄ヲ希望ト灼熱ノ精神トヲ得タノダ。ソシテ最後ニ、信仰ト開顯ト誓願ノ題目ヲ感謝ト自覺ト慈悲ヲ知ツタ魂ノ眞底カラ唱へテ合掌シヤウ。

昭和十一年二月十六日

祖山學院同窓會

幹事 田邊生

二月十七日 書道展第二日、書道座談會を開催、斯道精進の上得る所甚大の効果を收めて會を閉づ。

二月廿七日 校舍新築問題に關する學生大會の決議に依り本會基金の據出を決定す。

三月十六日 昭和十年度第廿五回卒業式舉行、式後送別茶話會を催す。有爲の士を社會戰線に送る喜びの裡に袂別の悲しみを包みて感慨無量、閉會後記念撮影を行ふ。本年度卒業左の如し。

高等部廿九名

渡邊信覺

今井是觀

佐藤學善

鈴木智好

中村邦八

則武靈秀

横山是明

福田泰穰

高尾龍教

藤原是祥

森本正迪

端是信

麻生是聞

赤城義仁

大澤鍊勇

櫻榮鍊靜

長谷川寬慶

淺野詮勇

前花鍊章

小川龍聰

久住龍騰

紀本孝美

五水井榮誠

高野玄康

中里麗耀

青本孝勝

田中慈誠

望月義純

野出學惠

中等部十八名

宮本龍次

宇佐美鍊昌

香川是光

齊藤威遼

岡村正雄

齋藤順義

横山敦持

長谷川泰溫

吉田伊三

牛居行信

増田本精

芦田智幸

信田逕運

吉川海音

松岡堯雄

林賢要

望月半

窪田靜鑑

三月廿三日 立正大學、學部及び専門部本年度卒業生三十五名登詣同夜歡迎會開催、草ヶ谷、四辻、岡村、各幹事幹旋す。

尙一行は廿五日迄在山、其の間可及的接待に努む。

四月十五日 昭和十一年度本會幹事候補者決定。

四月十六日 幹事選舉執行し結果左記の如く當選者決定す。

四月廿一日 昭和十年度同窓會決算報告書發表さる。

四月廿四日 昭和十一年度豫算案發表。

四月廿七日 第廿五回同窓會定期大會開催、午前九時半、田邊

幹事開會を宣言し、田中惠春教授副會長代理の訓辭ありて、議長望月徳英教授、副議長林是幹教授着席され、直ちに各部經過報告をなして後昨年度末に於ける購買部問題に關する臨時動議あり、平岡幹事の該問題説明をなして「盜難物品は該部利益金より支辨する事」を提議、會員の賛意を求め、之を可決せり。

次に各部に對する質疑應答に入る。之も無風裡に終り、田邊幹事以下舊幹事辭任の挨拶ありて、全會員感謝と絶讃の叫びと拍手に送られ、更りて新たる者への希望と激勵に迎へられて田中新幹事の就任挨拶に次ぎ、昭和十一年度豫算案説明ありて討議に入るも風起らず安靜狀態を續けて進行し、建議案に來り監査員廢止可否（林君提出）の案出でたれど存置と可決。次いで緊急動議に入りて左の事項を議決す。

一、文學部細則（第一出版部第四條）に左の二項を附加する事。（田邊君提出）

第一項 本部ハ事務遂行上助手一名ヲ置ク

第二項 該部助手ハ新年度中等部五年級中ヨリ二名―四名

ヲ候補者ニ舉ゲ之ヲ選舉ス

一、本會々則第七條下第四項條文變更の件。

本會監査員ハ高等部二年生中ヨリ五名ヲ舉ゲ、但シ第一期ニ於テ高等部二、三年之ヲ選舉ス、庶務幹事ハ該職ヲ兼任スルモノトス

以上

續いて種々多様有益なる希望案あり、此に於て議事全く終了議長解任田中幹事閉會を宣して解散す、時に零時三十分。徒らに喧噪時間を空費せし往年の弊見るべきもなく、僅か三時間余たゞ慎重なる態度を以て終始せる本年度大會に於て、望月名議長快刀亂麻の決裁それは少く措きて、舊幹事諸兄が眞摯なる會への努力は充分に認識する事を得、今後に於て全會員及び會員の名の下に會を代表する者は本會が持つ使命を熟考してそれを充分發揮せしむべきを痛感して止まない。此に舊幹事の芳名を掲げ、兄等が過去一ケ年間自己の一切を會に捧げて粉骨碎身の御奮闘によりてなされた多且つ大なる努力とその功績に讃辭を呈し深く感謝の意を示すものである。

庶務部 田邊正知君、辯論部 古川宣悅君、運動部 草ヶ谷宜慶君、會計部 四辻宜有君、文學部 岡村正雄君、購買部 平岡正學君

四月廿七日 午後幹事會開催、各部事務引繼ぎ完了。

四月廿八日 建宗の聖日を迎へ、今年度同窓會のトップを飾る新入生歡迎會開催、櫻花爛漫、時まさに春の最高潮に達し新舊生並に前途希望に輝く若人同志の固き握手は交はされた。

四月三十日 文學部、購買部助手候補發表。

五月一日 助手選舉を行ひ左の二君に決定す。

文學部助手 穗坂韻淳君

購買部助手 清水文要君

同日 本會監査員を發表す。

五月四日 各部長決定發表す。

幹事會開催、旅行候補地選定、他各部の活動開始を宣言す。

五月六、七、八日 釋尊降誕會に際し、道路布教を行ふ。(辯論部記事参照)

五月十三日 幹事會開催、春季旅行を東京、日光、鎌倉方面に決定し、參拜部詰依田貞雄氏に實際の指導を受けて計畫書作成す。

五月十五日 旅行許可願を學院當局に提出。

五月十六日 同許可願下る。

五月十七日 旅行計畫書發表と同時に各資緣家へ參加依頼狀發送し極力募集に努む。

五月廿四日 關係各方面へ依頼狀發送。

五月廿六日 先輩山田本秀師入山せらるゝに際し、祝電を以て賀詞を呈す。

五月廿七日 春季旅行中の中等部一、二年を主としての小旅行コース計畫作成し發表す。

六月二日 春季修學旅行隊約四十名松木、武田兩教授引卒の下に出發す。

六月三日 中等部一、二年小旅行を豫定の如く下部、毛無山に向つて徒歩ハイキングをなす。引卒者、松田、林、岩田の三

先生並びに牛居、清水兩君附添ひをなす。

一日の清遊愉快なりしと聞く。引卒の諸先生並びに草ヶ谷君の參加を得て特別の御配慮に預り、その勞を深謝す。

六月四日 立正中學生約八十名登詣す。牛居、清水兩幹事驛まで出迎へ、奥之院等案内をなす。同夕歡迎茶話會開催、中學生らしく活潑且つ愉快の一夕を送る。

六月五日 立正中學生歸京。牛居、清水兩君見送りをなす。

六月六日 午後九時見聞を博め有益な土産を携へて前後五日間の旅を終り旅行隊無事歸山。(旅行記事参照)

六月七日 本妙庵に於て、島智良師廿三回忌法要あり、庶務幹事、墓前に香華を獻る、夜辯士派遣説教あり。

同日 旅行中特別の御配慮を受けし各方面へ御禮狀發送終る。

六月八日 修學旅行決算報告發表。

六月十三日 春季校內雄辯大會開催(辯論部記事参照)

六月十四日 庭球大會開催(運動部記事参照)

六月二十日 身延山學會發會式舉行さる、高田惠忍師の御講演あり學生聽講す。

六月廿九日 法苑學院、荒木師引卒の下に約廿名來山、田中、香川幹事出迎へ、同夕武井坊に於て歡迎茶話會開催。

六月三十日 奥之院登山、香川英頂君案内す。同午刻歸途につ

く。

七月廿七日 布教院開催中、清水龍山師、本會に金一封御惠與下さる。

八月廿四日 我等が院長親下には今回全宗門の輿望を御一身に收められて管長の要職に御當選遊ばさる、謹んで御祝詞を申し上げます。

八月廿六日 校友櫻井宏仙師御入山、祝電に托して慶祝す。

八月廿九日 岩田堯親先生新發田聯隊に豫備應召御入隊遊ばさる、田中、香川幹事驛までお送りす。

九月一日 午前九時より開校式舉行せらる。

九月七日 法主親下管長御就任式のため御上京、學院師徒一同總門まで御見送り申し上げ。

九月八日 秋季雄辯大會準備の爲、辯論部幹事と同道甲府出張
同日 購買部は同部創立十周年を迎へて景品附大賣出を催す。

九月十五日 法主親下管長御就任第一回御歸山、學院師徒總門までお出迎へ申し上げ。

同日 新宗務役員殿より金一封本會へ御寄附下さる。

九月廿三日 幹事會開催、第二學期各部諸事業の大綱を審議して活躍を期す。

九月廿四日 十月中各部行事の豫告を堂々發表す。

十月一日 勅額拜戴五週年記念法要全學生出仕、同日池上本門寺酒井大僧正本會へ金一封御惠與下さる。

尙同日法主親下御親修の下に辯論部々旗樹立入魂式舉行、夜街頭に部旗を懸して獅子吼せり。(辯論部記事參照)

十月二日 名古屋圓頓寺住職平賀僧正御來山法要を營まる、學生一同出仕法味を献る、同僧正より金一封頂戴す。

十月十二日 宗祖御會式通夜説教奉仕(辯論部記事參照)

十月十三日 通夜説教奉仕者を招きて慰勞會を催す。

十月十六日 秋季聯合雄辯大會(於身延町公會堂)開催、部長並びに諸賢の御援助を仰ぎ、盛會裡に終了。(辯論部記事參照) 同夜參加校各辯士諸君を招き、歡迎慰勞の宴を開く、當日審査の諸先生及び特に御配慮を煩せし梅屋殿に甚深の感謝を捧ぐ。

十月十七日 甲府市制祭に際して市内各所に布教線を張りて益する所甚大なり。(辯論部記事參照)

十月十九日 先輩山田義順師御入山遊ばさる。謹んで御祝詞を電文に托す。

十一月一日 身中主催峡南競技大會開催せらる、本會運動部は身延町と合流目醒ましき活躍をなす。同日秋季庭球大會開催(運動部記事參照)

同日 立正商業五年生約六十名は小林、布施、兩先生に引卒されて卒業記念旅行に身延山登詣をなす、宇佐美、下邨兩幹事驛迄出迎へ、直に奥之院登山、下邨米村兩幹事案内す 同夜歡迎茶話會開催、大いに茶目氣分を發揮し盛大裡に終る 因みに同校は之が最初の身延登詣と承る。

十一月二日 本山に一泊、朝の勤經に參堂、午前九時歸京の途につく。田中、牛居兩幹事驛まで見送りをなす。

十一月四日 校友五水井榮誠兄御入山の日電報によせて祝意を表す。

十一月五日 先輩灘上惠教師今春渡滿活躍中の處、今回滿蒙僧を引卒されて御登山せらるゝに當り、午後一時より大客殿に於て、滿蒙僧身延登詣の感想、灘上師始め諸氏の滿蒙に於ける宗教情勢に付き御講演あり得る所多大なりき、後本會主催歡迎茶話會開催。

同日 教頭遠藤是妙先生御母堂御逝去遊ばさる、哀悼の意を表して田中、下邨、米村諸幹事、並びに學生代表數名と共に御通夜の法味を捧ぐ。

十一月六日 全幹事及び學生代表御葬儀に參列す。

十一月八日 校友望月義純兄御入山の日祝電を以つて賀意を述べ。

同日 幹事會開催、本年度入營の諸君に記念品贈呈の件と松田壽孝教授勳績十週年謝恩記念品贈呈の件を決定。

十一月十五日 縣下野球界の巨豪甲府商業俱樂部野球團本山參拜のため登延、我が野球部は好機會を逸せず古豪と相見えて一戦を交す、終始善戦して惜敗す。(運動部記事參照)

十一月十三日 遠藤教頭先生より御菓子料頂戴せり。

十一月十八日 榮えある入營勇士歡送の辭を發表す。

△歡送之辭▽

今年祖山は國家の干城として四君を皇軍に送る。

「立正安國」そはニチレニズムのスローガンであり、その達成は全生命を抛つて邁進すべきである。此使命を双肩に擔ふ聖日蓮が弟子我等が代表者を、

陛下の股肱とする誇と感激の裡に送る。西に波瀾を起し、東に不吉の烽火を見、内外共に風雲急なる時、正法樹立、護國の爲に正義の刀杖鉾槩も又可なり。同窓會は全學生の名を以て君等が重且大なる使命を全うすべく御奮闘を祈る、その誠意を表して左記の記念品を贈呈す。

一、銀 盃

高一 林 賢 要君(歩兵第七聯隊)

中二 安 田 泰 導君(歩兵第三聯隊)

一、置時計(特に本人の希望に依る)

中五 平 岡 正 學君(滿洲獨立守備隊)

一、軍 服(特に本人の希望に依る)

中三 佐々木 榮壽郎君(野重第三聯隊) 以上

十一月廿二、廿三日 峽南軟式野球大會開催。我が野球部は輝く優勝旗を掲げて入場。善戦して堂々再制覇の榮を擔へり。

(運動部記事參照)

十一月廿五日 本學院青年學校教練查閱案内狀を本會の名を以て各支院へ配付す。

十二月一日 入營者諸君へ記念品を贈呈す。

十二月十九日 第二學期終業式舉行せらる。式上本會副會長遠

藤教頭の手より滿十年御勤續せられたる松田壽孝先生へ記念品を贈呈。

一、大理石置時計 一個

松田先生感激措く能はず謝辭を述べられて、此の式を閉づ。

◇會計部

幹事 下邨顯淨

同窓會内に於ける會計部の存在は「縁の下の力持」に該當すると云つても敢て過言ではあるまい。

なぜならば本部は表面的に活動する性を有せず、専ら各部の華々しき活躍の原動力たる資財の蓄積融通機關であるからである。

而して本部の使命は嚴正、明確をモットーとして三部の會計を處理し、且つ各部の要求に對しては迅速に之に應じ、以て各部の性能を完全に發揮せしめる所に存在するのである。

斯様に重大使命を有する當該幹事なる故、吳下阿蒙の私の如きは到底其の器に非ずと固辭したが、四圍の趨勢上止むを得ず敢へて非才を顧ずに就任受諾したのであつたが、本年度は幸にも各部長諸先生並幹事諸兄の御後援に預り、且つ會員諸兄が克く本部の會則を遵守して下されたので、今や悉く部業の大半を遂行する事を得て感激に堪えず、茲に衷心より感謝の意を表して止まないものである。

同窓會への寄附者芳名

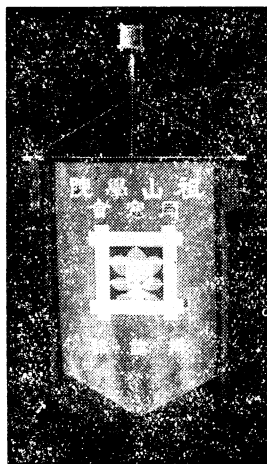
一金壹封

池上眞主 酒井大僧正猥下

一金拾圓也 立正大學長清水龍山先生
 一金貳拾圓也 常務幹内 總監並三部長殿
 一金拾圓也 名古屋 圓頓寺平賀僧正殿
 「各部への寄附は各部に於て發表す」

◇辯論部

幹事 宇佐美鍊昌



人の世に尊きものは歴史であり、その追憶は感慨を生み今後への力となる。

我が祖山辯論部もその歴史を緋き、懷古する事は意義深き事と思ふ。其のかみ、學林創草以來の事は暫く置き、現存せる記事録のみに付て概示して見やう。今、當部に存する一番古い記事録は明治廿五年度のもので名稱して祖山鍊磨演說會となつてゐる。これに依ると、當時は盛んに討論會を行ひ壯氣を養ひ思想を鍊磨された。活潑な明治時代の青年學徒の貌、躍如たるも

のがある。例を抜記すれば

「吾邦現時之布教上、拆伏ト攝受ト何レカ利ナリヤ」

其の結果は、拆伏賛成者八名、攝受賛成者六名、中立三名で、拆伏主張の方が勝つてゐる。こんな風に盛んに討論會が催された様である。又「元且ハ祝スベキヤ否ヤ」なんて朗かなものもある。

感慨深い事は現柴田學監の名と演題が處々に載つてゐる事だ曰く「開化文明ノ説」等々。梅檀は双葉より薫しか。此の會の姉妹會として燈壇會が生まれ當時の最新文明器、幻燈寫眞で布教線上に躍つたのだ。時代は遷る。然し今は此の寵兒も破損したり磨滅して筐底に部寶となつて當時の雄飛を物語つてゐる。年頃になると現教頭遠藤先生や、下里執事殿、別院小松主任の三十名が各會に見え往時が偲ばれる。然し榮枯盛衰は世の習ひ當會も漸次沈滞に傾いたらしい。記事に曰く「本會一時不幸ノ境界ニ相遇シ殆ド中絶セムトス。於茲、吾人全感ノ士大ニ斯會ノ不振ヲ慨シ即チ往時ノ經歷ヲ想ヒ將來ノ時運ニ鑑ミ……乃至今般鍊磨會ヲ再興ス」とあり感慨見るべしだ。

四十一年では、今宗門布教の花と謳はれ、聖傳映畫説明に、レコードにその名を恣にした伊藤海開師が登壇してゐる。以下大正四年迄殆ど各鍊磨會毎に其の雄姿を見せてゐる。「繼續ハ力ナリ」の言葉が思はれる。大正年代に入つて、三四年頃になると講演部と改稱してゐる。部長は藤田文哲師である。現我が部長松木先生が颯爽と登場する。それから森亮遠師、藤田光肇師

等が。この所、祖山辯論の名トリオだ。耕辯會に、山門説教に道路布教に華々しい活躍が見られる。耕辯會の演題の如きも清新な氣を加へて曰く「理想ト主義」曰く「建設カ破壊カ」等々。七八年頃になると荒木師、結城師が盛に働かれ、十三年頃以下は武田、三木、矢谷、依田各先輩の奮闘がうなづける。最近は棲神誌上に詳報濟みだから省略する。大休殘存の記事を瞥見して得た過程が以上の如くである。御覽の通りほんの筋道を綴つたに過ぎぬ。こんな漫筆でなく的確な細密に亘つた祖山辯論部史が今後發表されむ事を切望する次第である。

次は今年の仕事を簡単に御報告する。

四月廿八日 前幹事古川兄より事務引繼完了。

五月六日 釋尊御降誕會道路布教開演。

所、身延町各要所

辯士、高野、田中、諸君

五月七日 所、同。

辯士、松木部長、丸山布教師、安藤、葛原、丹羽、小崎、諸君。

君。

五月八日 所、同。

辯士、丸山布教師、武田先生、片岡、丹羽、安藤、小崎、三好諸君。

好諸君。

五月十六日 東京實顯會二千名參詣の爲特別道路布教開演。

辯士、三木先輩、安藤、片岡、丹羽、小崎、諸君。

五月三十日 耕辯會開催。所、於釋迦堂

各辯士終了後松木部長の訓辭あり。曰く

(一)自己獨自の辯説を確立すべし。

(二)デェスチュアーは自然であれ。禁亂用。

(三)歴史的記事は正確に研究せよ。

(四)數字は間違なく檢せよ。等々

六月十三日 學内各級選拔春季雄辯大會開催す。當日プログラ
ス左記の如し。

一、開會之辭

幹 事

一、佛教教育の必要性に就て

中一 小林是淳君

一、自ら燃えて聖火を點せん

中二 望月本修君

一、若人よ立て

中三 伊藤慈昭君

一、奮起せよ、日蓮主義者

中四 大森郁夫君

一、躍進日本へ

中五 武智實靜君

一、弱き者よ、汝の名は

高一 齋藤威遼君

一、自己を再認識せよ

高二 山田友篤君

一、所 感

高三 安藤海長君

一、所 感

高三 古川宣悅君

一、批評、訓辭

部長 松木先生

一、閉會の辭

田中幹事

六月十五、六、七日 開闢會道路布教

所、身延町各要所

十五日 辯士、葛原、片岡、加藤、諸君。

十六日 丸山本山執事殿、安藤、片岡、加藤、高野諸君。

十七日 丸山本山布教師、田邊、小崎、高野、田中諸君。

八月七日 仁王門説教出張。

八月十日 清正公祭禮出張。

八月十五日 深敬病院出張。

八月十七日 大善坊出張。

因みに覺林坊、山門、蓮乗坊、大善坊、本妙庵、深敬病院等
は中五以上當直割になし毎月出張す。

特に小崎、難波、大住、高野、田中諸兄の奮闘を謝す。

九月十二日 龍口法難會道路布教開演。

所、身延町各要所。

辯士、丸山本山執事殿特別出張、高野、田中、諸兄。

十月一日 勅額拜戴五週年記念道路布教開演。

所、身延町各要所。

演題、辯士左の如し。

童 話

齋藤威遼君

正しい信の歩み

田中靜光君

信仰生活の法悦

加藤智學君

眞の常寂光土

小崎靜雄君

日蓮上人と日本國

難波智龍君

勅額拜戴五周年を迎へて

松岡堯雄君

人間の目的

片岡光乘君

信の分野

高野教誓君

心の啓發

葛原榮靜君

十月一日 辯論部旗樹立式

柴田學監より特別の御芳志を得て、多年の宿望なりし辯論部旗を作製する事が出來た。我が部の前途燦たり矣。且法主親下御親修の光榮を得、堂々部旗入魂式舉行。全學生熱禱感激裡に式は完了。(前示寫眞參照)

十月十二日 宗祖鶴林會通夜説教(本山布教部合同) 丸山執事

松木先生、結城布教師、丸山布教師、小松師、片岡君、小崎君、難波君、宇佐美君。

十月十六日 秋季聯合雄辯大會開催。

參加校 立正大學、池上學林、光山學院(京都)、立正學院(大阪)、法苑學院(東京)

因みに本年は特に本山布教部及び山梨日日新聞社の後援を得た。詳細は身延教報誌上(十一月號)發表に付御覽を乞ふ。

審査員諸先生を左の如く御願ひ申し上げた。

審査長 柴田顯秀學監

松木本興先生

今村是龍先生

林 是幹先生

松田壽孝先生

プログラムは左の如し。

プログラム

一、開會の辭

◆優勝カップ返還式

幹 事

- | | |
|------------------|-------------|
| 一、審査員挨拶 | 本學教授 中條是明先生 |
| 一、宗教と罪惡 | 本學院 永田 壽昶君 |
| 一、日蓮上人を憶ふ | 本學院 梅津 榮希君 |
| 一、我等の行く所 | 本學院 佐々木順正君 |
| 一、青年修養の目標 | 身延青年 田中 萬造君 |
| 一、清流に植る者 | 女子青年 伊藤たき子嬢 |
| 一、人生の曙をめざして | 本學院 佐野 嚴君 |
| 一、農村青年の使命 | 豊岡青年 千頭和大二君 |
| 一、身延町の女性として | 女子青年 志村八重子嬢 |
| 一、今正に是其時なり | 本學院 高野 教誓君 |
| 一、未 定 | 立正學院 井上 龍溫君 |
| 一、使命の矢を放つ者 | 池上學院 川井 厚道君 |
| 一、昭和維新途上にある吾等の使命 | 光山學院 丹羽 惠觀君 |
| 一、延嶽に歛を振ふ我等の喜び | 身延青年 小笠原清保君 |
| 一、地に吼ゆる法華色讀の行者 | 法苑學院 増村 海良君 |
| 一、佛教の精神的文化價值 | 池上學院 大倉 玄雄君 |
| 一、太陽の如く | 本學院 齋藤 順義君 |
| 一、光りは祖廟より | 光山學院 田口 學泉君 |
| 一、能動主義の提唱 | 本學院 小崎 龍雄君 |
| 一、宗教ジャーナリズムの將來性 | 立大專宗 釋 徳成君 |

- 一、牀座を捨て、何處へ行く 本學院 丹羽好文君
- 一、佛説の如き行者世に出現を望む 立大學部 田代貫徹君
- 一、使命と世相を考慮せば 本學院 片岡光乘君
- 一、絶對的指導原理への反省 番 外 田邊正知君

◆優勝カップ授與式

- 一、挨拶 辯論部長 松本本興先生
- 一、閉會の辭 幹 事 田中惠嚴君

審査の結果校内優勝者高一齋藤順義君、校外優勝者立大專宗楠山恒康君と決定、やがて満堂の聴衆の拍手に送られて肅々と兩君出場、部長殿から嚴肅裡に優勝カップは授與された。尙ほ番外辯士として高三田邊正知兄最後に登壇、我等の言はむとする絶對的指導原理を大衆の眞只中に投げ與えて遺憾なし。

因みに當大會に際し御盡力下された本山市教部、山日新聞社審査員諸先生並に各參加辯士諸君に滿腔の謝意を呈します。尙ほ當大會のデコレーション其他終始犧牲的奉仕を下さつた梅屋旅館主人に厚く御禮申し上げます。

十月十七日 甲府市制祭に付、特別出張道路布教開演。

所 A、太田町公園内

B、常盤町五番地

統卒者 松本辯論部長

辯士 小崎龍雄、難波智龍諸君

高野教誓、宇佐美鍊昌諸君
十一月六日 立正大學主催全國各大學高專聯合雄辯大會に高三田邊正知君を派遣す。

演題 必要にして且充分なるもの

十一月廿八日 池上學院主催秋季聯合雄辯大會に左記の四君を派遣す。

演題

- 一、可能の世界 中一 永田壽昶君
- 一、笛は鳴る、いざ踊らん 中四 米村智淨君
- 一、暗雲を打はらつて 中五 下邨顯淨君
- 一、今正に之れ其の時なり 中五 高野教誓君
- 一、三つの廣告 宇佐美鍊昌君

第三學期分

一月廿三日 耕辯會開催

二月十六日 宗祖降誕會記念雄辯大會開催 以上

本年度當部寄附芳名左の如し。

- 一金一封 本山執事長 柴田 顯秀殿
- 一金十圓也 本山布教部殿 本山布教部會殿
- 一金十圓也 山梨布教師會殿 山梨布教師會殿
- 一金一圓也 大阪妙像寺殿 大阪妙像寺殿
- 一金三圓也 惠 善 坊殿 惠 善 坊殿
- 一金一圓也 矢谷 惠 隆殿 矢谷 惠 隆殿
- 一金一圓也 蓮 乘 坊殿 蓮 乘 坊殿

一金二圓也
松 司 軒殿
一金二圓也
玉 屋 旅館殿
一金一圓也
十 全 堂醫院殿
右各位に對し厚く御禮申上げます。

◆運動部

幹事 香 川 是 光

本年度に於ける運動部各部記事次の如し。

◆劍道部

十月四日 秋期大會を三木、松永、兩先輩並に部員約二十名出場のもとに開催す。

此の日松永氏より劍道獎勵として金一封を下さる。

戦蹟左の如し。

紅白戦 白軍勝

リーグ戦 一等出島、二等日野、三等中谷、四等安藤、五

等鈴木

優勝戦 一等出島、二等日野、三等林

十月卅一日 身中講堂に於て身中劍道部員と練習仕合をなす、我が劍士よく奮戦し引分となる。

十一月二日 我が部員は身中講堂に於て身中部員と共に猛練習をなす。

本年度本部は小川、麻生等の劍士を送りしも中谷、出島、藤井、福井、望月、林、鈴木、前田等以下多數の強豪を有し春四月に加藤、日野、中村等數名の新鋭を加へ堂々たる陣容を整へ

り、正月廿二日より小野五段を迎へて寒稽古をなし三十一日納會を開催し猛練習の後二月に身中部員に挑戦せんとしたるなり。

◆庭球部

六月十四日春季大會を林部長先生、松木先生出席のもとに開催す、成績次の如し。

紅白戦 白軍勝

クラス戦 一等 中二、二等 中三、三等 高一

原徳寮對本山軍の對抗戦は本山軍の大勝となる。

優勝戦

一等 松木先生、加藤組

二等 天ヶ瀬、青柳組

三等 草ヶ谷、香川組

十一月一日 秋季大會を開催す。

紅白戦 紅軍勝

クラス戦 一等 高三、二等 高二、三等 中一

優勝戦

一等 中村、望月組

二等 葛原、竹谷組

三等 林、太田組

遂に優勝旗は新進中村望月組に授與せらる。

庭球部は超特急小野兄の卒業によりて痛手をうけしも、葛原、加藤、竹谷、望月等の精鋭によりて堅く守られ、特に松木、

望月(德)、林雨先生が熱心に部員を勵まされたことは眞に感謝致します。

◆卓球部

十月四日 下部青年團主催卓球大會に本部より小友、藤、兩選手出場し奮戦をなし準々決勝にて山梨水晶B組を軽く破りしも、準決勝戦にてをしくも勝を逸せり。

十月十八日 校内大會を開催す。

紅白戦 白軍勝

優勝戦 一等 藤、二等 鈴木、三等 小友、増田、

十一月十五日身延中學校講堂に於て開催の山靜選手權大會に小友、鈴木、大森、藤、望月の五君出場し藤君よく戦ひ入賞す卓球部は豫算少なきにもかゝらず部員諸兄の熱心なる努力によりて能く對外的に進出出来たことを感謝す。

◆野球部

昨年度に於て宿望の峽南野球界制覇を達成した我野球部は本年度に入り益々その整備を進めて、内容外觀共に堂々たる威風を具ふるに至つた。選手の人格的陶冶と技術の科學的訓練、用具の充分なる供給等、精神的に肉體的に、將又、經濟的に多くの苦衷と犠牲とを克服してチームの補強工作に専念した主腦部の努力は文字通り獻身的の熱意そのものと云はねばならぬ。即ち、監督として田邊正知君を、テクニカルマネジャーに草ヶ谷宣慶君を、ビジネスマネジャーとして永瀧幾順君を煩はし、主將山田友篤君、副將宮本龍次君等、錚々たるハリキリボーイズ

を擁して、その發展強化に邁進し得た學院野球部こそ、洵に幸運の波に乗つた我運動部のエースである。

以下、具體的成果の主なるものを記すれば、

第一學期 新入部員として吳港商業出身の藤井、濱田中學より轉校した笹部兩君を始め數名の有力な選手を迎へ、草ヶ谷、山田、宮本、河南、竹谷等の舊選手を主体として早くも昨年度に優る強力陣を編成、一路、秋の峽南再制覇を目指して遺漏なき準備を進めた。

第二學期 愈々待望の秋のシーズン来る！ 部員の張切り方も一通りでない。期待された藤井君の病氣退學は遺憾ではあつたが、チームの戰鬪力は日に日に強化されて行くばかりだ。テニスコートとしてさへ充分とはいへない狹隘な校庭でも、適宜の練習方法と熱心とさへあれば超理論的成果を得られることを實證しつゝ、白熱的猛練習が繰り返された。土曜、日曜日には努めて相手求めて小學校々庭、又は身中球場に於て練習試合を行ひ、實戦上の訓練とした。此等の成績については一々記載するの煩を去けるが、何れも鎧袖一觸、王者の威を示して餘す所がなかつた。

◎甲府實業軍の來征

十一月十五日 本學院野球部は身延中學野球部と共同主催の下に、縣下隨一の強豪甲實軍を招待して堂々之と戦ふの機會を得た。同チームは人も知る如く、本年春職業野球の中堅、名古屋金鯱軍が甲府來征の折、稀有の好闘を爲したことにより大体

その實力の那邊にあるかは覗ひ得るものであつて、正に我軍にとつては絶好の試金石であり、玉碎して悔なき對手である。田邊監督以下未曾有の緊張を以て此の強敵に當る。

午前十一時甲實先攻にて試合開始……於身中球場
兩軍メンバー次の如し

山		祖		實		甲	
谷部	ケ草	(遊)	林	岡	甲	(捕)	甲
南本	笹河	(二)	澤上	深井	祖	(遊)	山
谷本	宮竹	(一)	賀川	志田	實	(一)	山
木原	鈴梅	(投)	乾	田	四	(左)	三
田田	増山	(捕)	宗田	西桂	球	(二)	五
		(左)			盜	(三)	壘
		(中)			數	(右)	二
		(三)			零	(中)	六
						(投)	
安打數	甲實三	三振數	甲實四	祖山四	祖山三	甲實五	祖山六
得点數	甲實六	失策數	祖山三	甲實零	祖山二	甲實六	祖山二

期的事實として永久に記念さるべきである。試合終了後、甲實軍一行十五名を招いて梅屋旅館に於て晝飯を呈し、終つて本山を案内、禮を厚ふして同軍の勞を謝した。

◎第七回阪南軟式野球大會

前年度優勝チームの名の下に威風堂々出場。

十一月廿二日午前九時半より身中球場に於て舉行、參加十チーム、開會式劈頭、山田主將より優勝旗を返還して我ナインは第一次戦の先鋒を承つて、先づ東電チームと對戦、快打快走、五回を終つて遂に廿二点を入れ、コールドゲームで大勝、祖山廿二A對東電零、バッテリは投手竹谷、捕手河南、午後一時より第二次戦を大河内クラブとの間に行ふ、以後の試合への餘力を殘して輕く敵をあしらひ、三A對零にて樂勝、準優勝戦出場の資格を得る。バッテリは前試合と同じく投手竹谷、捕手河南の兩君、本日の連續二試合を通じて敵に得点を許さなかつた竹谷投手の奮投と、バックの好守は目覺ましきものがあつた。翌二十三日 正午より準優勝戦、吾軍は俊敏を以て鳴る遠來の青柳A、K、Cと對戦、ベストメンバーを以て之れを迎へた。前日休養した正投手宮本君の快腕は自在に敵を奔弄して我軍を泰山の安きに置き、五A對一にて悠々と勝を制し、優勝戦へ進む。

午後三時より優勝戦、祖山學院對身延クラブ。球審甲實の深澤投手、壘審身中小野野球部長、兩軍メンバー

監督兼一壘手	田邊
遊撃手	草ヶ谷
三壘手	山田
投手	宮本
左翼手	鈴木
右翼手	増田
捕手	河野
捕手	竹谷
二壘手	笹部
中堅手	梅原
外野手	西内村田
スコアラー兼マネジャー	永瀬

吾軍は打撃に走壘に所謂攻撃の精華を存分に發揮して身延クラブの守備陣を擾亂し、守つては宮本投手の好調と全野手の堅壘は磐石の強みを顯して、一度も敵を足下に寄せ付けず、一舉に敵を屠つて完勝した。茲に本年當初の目的を達して選手一同長の辛苦を忘れて再制覇の歡喜に咽びつゝ、眞紅のヴェクトリアス・バルマエを擁して、應援團に守られつゝ凱旋した。昨年始めての優勝に狂喜した場景を想へば、そこには抑へ得ぬ勝利の感激の裡にも、床しい王者の風格を具へた、完成されたアル餘裕の自然に認められることを一入の悦びとしたい。

尙本大會に於て活躍せし本學院選手名を列記すれば

身 俱		祖 山	
(三)	佐野	(遊)	草ヶ谷
(中)	坂上	(一)	田邊
(右)	佐野	(捕)	竹谷
(投)	井手	(中)	河本
(捕)	池上	(投)	宮部
(左)	小泉	(二)	笹部
(遊)	柿島	(左)	鈴木
(一)	葉山	(右)	増田
(二)	太田	(三)	山田
身祖	三	身祖	安
俱山	振	俱山	打
五四	一七	一五	得
身祖	盜	身祖	失
俱山	壘	俱山	策
二四	五一	二二	球

◎野球部後援映畫會 野球部の強化は當然可成りの資金を要するは言ふまでもない。割當てられた僅かな部費では一ヶ月の練習に要するボール代にも足りない。運動部は自部の節約による尊い餘剰と庶務部の應援を以て辛じて必須の消耗費を捻出したがその他の用具費雜費の支出は野球部當局の蛇意により支辨することにして貰つた。野球部は非常なる努力を以て、本映畫會開催を計畫し、豫期以上の好成績を以て實行した。即ち、十月二十四日午後六時より身延公會堂に於て、同部主催、同窓會後援の下に映畫會開催、觀衆約六百、盛會を極めた。そして經濟的にも餘裕を得て、前記の成果を収める資力とすることが出来た吾運動部は茲に野球部當局の熱誠と努力に甚深の敬意を表するものである。

本年度全試合を通じての打撃率ベストファイブ	
テツタ	本
リヒ	0.54
リク	河
ク	0.47
谷	竹
0.23	0.23
山	山
0.29	0.29
笹部	笹部
0.17	0.17

攻守最秀者(田邊監督寄贈の野球靴受領)	
竹	谷
0.46	0.46
宮	本
0.45	0.45
河	南
0.38	0.38
山	田
0.25	0.25
増	田
0.33	0.33

本大會打撃率ベストファイブ

◎以上本年度野球部記事の概要であるが、如斯の快報を齎し得るは總じて部員諸君の忍苦精神に依るは勿論であるが、殊に繁忙なる卒業期を控へて母校愛の一念から多大の困難を排して野球部發展強化の爲めに盡瘁された監督田邊、マネージャー草ヶ谷永瀧、三氏の勞を多とし、本學野球部建設の功勞者として特記し度い。

凡そ、萬事に於て建設は難く、破壊は易い。若い選手諸君よ建設の苦辛を忘れず、先輩の恩誼に叛かず、一意戒心、存榮の方途に萬善を期せよ。

「勝つて兎の緒を締めよ」とは此等先輩の諸君へ贈る唯一の錢だ。そして一般學生諸君よ、殘る彼等を一層理解し、慰り、勵まして下さい。徒らに不健康な批判や、白眼的無關心は、日連の若き弟子（現代を呼吸する）や、明朗なるべき祖山スピリットには絶対に排撃せらるべきものではないか。生きた弘宣流布は、無反省な遊戲雜談に青春を徒費する者や、唯我獨尊的神懸り人種には縁なきものではないか。改造された新しい色心で永久の青年の宗教を護り輝すことに吾人の努力が強ち無用ではなからう。（以上）

競技部は末に獨立せざるも十一月一日峽南陸上競技大會身中グラウンドに開催せらるや松岡、香川、四條、橋本の四君出場し香川は百米五着、二百米三着に入賞す、同月三日身延小學校運動會に於て身中學生學院生四百メートルあり、學院は香川一着、大森二着にて入賞す。來年度は是非競技部たるものを新設した

く痛切に思ふ。

最後に院長現下にをかせられては運動部の春季旅行には種々と御面倒見て下され尙金一封を下され、又各部大會に際しては多大の奨勵金を下されしことを爰に厚く御禮申し上げます。

尙林部長先生並に前年度幹事田邊、草ヶ谷兩大兄の心からなる御指導を感謝致します。（香川記）

祖山學院春季修學旅行記

穂坂 類淳 記

一、日時 昭和十一年六月二日より六日まで五日間

一、視學旅行地 日光、東京、鎌倉、江ノ島方面

一、引卒者 松木本興先生、武田海正先生

一、參加人員 三十四名（外引卒者二名）

【六月二日】一行は午後六時祖師堂前に集合、宗祖の御前に道中無事の祈念を捧げ、引卒者松木先生からの旅行に對する訓示があつた。そして吾人の視學旅行は唯だ單なる旅行として名勝各地を歴訪するのみのものに非ずして、その一つ／＼がすべて教室に於ける授業の延長であり、且つ現實の生きた學問であることを各自の念頭に置いて……午後八時四十五分柿沼、林兩先生並に三木學兄に見送られ楽しい修學旅行への第一歩の踏み出しとして身延驛を後に甲府盆地の螢火を賞しつゝ、甲府驛着、十一時二十五分發中央線にて新宿に向ふ。

【六月三日】午前三時四十八分八王子驛に着するや全市了法寺

住職、故岩崎龍雄君の法兄鳥崎龍明師が出迎へ下さつた。五時新宿驛着、柳井、勝部、櫻庭、中川の諸兄出迎へられて直ちに明治神宮參拜、曉の冷氣に神域愈々森嚴なる中に大帝の御仁慈を追憶し國家の隆盛を祈り、立正大學に向ふ、此處にて森、牛居の兩兄出迎、六時半立正大學着。松木先生導師の下に全大學寄宿舎香風寮禮拜堂に於て讀經、やがて寮監片山師より寮生の日常に就いての説明あり、尙同師の案内に依り寮内各室の見學後食堂（甘露室）にて朝食の御馳走に預る。此の時古谷智研氏の學生會代表としての歡迎の辭及び立正大學としての挨拶があつた。喫茶後禮拜堂前に於て記念撮影す、更に立正大學各研究室、及圖書館等を參觀後同大學を辭し二重橋畔に聖壽無窮國運隆昌を祈りて後小傳馬町身延山別院にて晝食をとり午後十時半まで自由解散、別院にて一泊す。

【六月四日】午前四時起床、五時別院出發、淺草雷門より東武線日光電鐵に身を托し午前八時四十五分東武日光驛着、日光町最勝院横山玄秀師、小西旅館等の出迎を受け、小西旅館にて休憩後、電車にて大谷川の清流を左に見て馬返しまで、此處よりケーブルカーにて約八分間、菩提梯より以上に急速な峻嶺を上りつめると明智平、それより更にバスにゆられながらやがて中禪寺湖に到つた。心配してゐた華嚴の瀧も幸に霧が晴れあの雄大な姿をはつきりとあらはしてゐた、それより更に中禪寺湖畔に沿うて中宮祠へと詣でた。中宮祠は日光全山の鎮守と稱せられ二荒神をお祀りしてある。松木先生より記念撮影をして頂き

同湖畔鳶屋旅館にて中食をとり、約二時間或は湖畔を傳ふて立木觀音に行く者あり、或は湖上にボートを浮ぶものあり、一千三百米の山上に初夏の綠風を滿喫。

午後二時中禪寺湖出發、徒歩にて途中阿含、方等般若等の瀧を見て小西別館へ歸館、疲れきつた五体を熱い風呂に憩ひ、佛間に於て松木先生導師の下に讀經、館主小西謙造氏の當病平癒を祈り、夕食後三々五々土産品を求めに町へ出る。今日の日光は山も町も行く處通る處悉く學生……また學生で埋れて居る。

【六月五日】午前六時起床、七時半旅館を後に東照宮並に輪王寺參拜、輪王寺は間口十八間、奥行十四間と云ふ相當に古い建物だつた。勝道上人の開祖に依り慈覺大師が中興の祖となり千二百有余年の古き歴史を有し本尊は中央に藥師如來、左右に千手、馬頭の兩觀世音菩薩を安置してゐて俗に三佛堂とも稱せられてゐるとか。本堂の横に鶴龜の池と云ふのがあり其處でも松木先生に記念撮影をして頂いた。それより更に相輪塔の前に到つた、これは叡山の相輪塔に倣つて慈眼大師（天海僧正）の建立に依り塔柱の高さは四丈八尺、副柱一丈七尺、周九尺五寸、塔の上部には傳教大師の願文を鑿してあると云ふ素晴らしく高大なもので國寶となつてゐる。此れより東照宮へ參拜、東照宮入口にて一行記念撮影す。一代の名彫刻師左甚五郎が其の粹をつくした彫刻として有名な陽明門の前にたゞづんだ時、吾人は先づ其の洗練された技巧の妙なるに驚異の眼を見はつた。實に日暮の門の別名あるも所以ある哉である。更にねむり猫、これ

はまた有名な割合に何と可愛い彫刻だつたらう、口の悪い先生の曰く「此の猫は一名嗜眠病猫と云ふのだ」と呵へ。東照宮奥社、鈴鳴龍の堂、更に徳川三代將軍家光公を祀つた大猷廟等參觀、二天門前に於て一行記念撮影す。最後に寶物館を拜觀して館に歸り、十時半日光を辭して東京へ。

東照宮輪王寺の建築物は何れも國寶となつて其の技巧の優、莊嚴の美に至つては全く悉く驚かざるはないが、今日の日光は美術の都であり、景勝の地と云ふ丈で、生きた信仰は少しも見られない。午後二時四十八分雷門着上野公園を経て谷中瑞輪寺參拜、更に深川淨心寺參拜後小傳馬町の別院に歸り七時半より別院に於て東京校友會主催の歡迎茶話會に先輩諸賢の心を盡したる歡迎の辭を賜り山の小法師等は只々感激に一時を過した。別院にて一泊。

【六月六日】午前六時別院出發、七時半池上學林師徒一同に迎へられて池上本門寺着、祖師堂、大坊、御眞骨堂等參拜後大廣間に於て休息す。池上學林代表の挨拶があつて、名物くず餅の接待を受く、その説明に曰く「此の餅は映畫撮影監督として有名な池田義信氏の實母が池田屋の屋號の許に營業せるもの」と、記念品を賜り學林生一同に見送られ池上出發、鎌倉へ向ふ。十時二十分鎌倉着、本覺寺參拜後妙本寺に詣づ、比企判官夫妻並に大學三郎夫妻の古墳あり、尙文壇の寵兒として一世にその名を知られた故牧逸馬（長谷川海太郎）氏の新しい墓標が雨中にしよんぼりと立つてゐるのもまたもの寂しく感じた。

續いてばたもち寺として有名な長榮寺、松葉ヶ谷安國論寺、建長五年（皇紀一九一三）日蓮上人安房小湊より來りて小庵を營み筆て法華經の首題を唱へ、後立正安國論を草せし處にして尙宗祖鎌倉に入り給ひしより終身給仕奉公の熊王丸の御堂あり。鶴ヶ岡八幡宮參拜後鍋冠日親上人舊跡、並に宗祖辻説法の御靈跡へ參拜す。折節の雨をかこちつゝ、本覺寺にて晝食の馳走になり、これより電車にて長谷觀音へ。

本尊は十一面觀世音菩薩、本願は德道上人（開山）、御長三丈三寸（九米十八厘）時代は元正天皇の養老五年、作者は春日佛工稽文會、稽旨勳、開眼は行基菩薩に依るものなりといふ。次に宿屋左工門光則公の靈跡光則寺へ、文永八年九月十二日師の日蓮上人は立正安國の正義を叫ばれたる大忠の故に捕へられて龍口の刑場に曳かれ、弟子の日朗上人も又捕へられ邸後の土牢へつながら給ふ。牢内の弟子を偲ぶ日蓮上人佐渡ヶ島へ流罪の旅に上り給ふ可き前夜相模の依智より特に一書を賜ふ。即ち「日蓮は明日佐渡の國へまかるなり、今宵の寒さにつけても牢の中のありさま思ひやられていたはしくこそ候へ」云々、弟子は師の上を案じ、師は弟子の身を憐む温情慈愍々として人にせまり、讀んで泣かざるものなし、宜やかな光則同情の念大いにうごき密に日朗上人をして佐渡に上人を省觀せしめしと云ふ、寔にこれ萬年師孝の精魂を留め給ひし法難の史蹟であり今詣で、牢前に立つも自ら襟を正さざるを得ない。更に大佛尊へは篠つく豪雨を冒して參拜した、これより電車にて龍口寺へ

參拜す。宗祖の御開扉を願ひ、親しく御法難の靈跡を拜す。時間の余裕がなかつた爲江ノ島は約三十分自由見物、藤澤驛發午後四時三十五分東海道線にて菊延の途につく、六時四十五分富士着、同驛七時八分發、身延驛着午後八時四十分バスにて山門まで、一行直ちに祖師堂前に到りて讀經、宗祖の御前に視學旅行無事終了せるを奉告し奉つた。引卒者解散の挨拶、視學旅行隊萬歲三唱、九時十五分解散。

最後に立正大、中學よりの深甚なる御厚志、身延別院主任小松海淨尊師及望月日雄、田中海珠兩師、日光最勝院横山玄秀師小西謙造氏、谷中瑞輪寺主深見僧正、在京校友諸賢等の御芳情を感謝し、各諸聖賢の色心御健在を祈念しつゝ、欄筆する。

◇文學部

幹事 牛 居 行 信

萬里の山の中に源を發した清水は滔々曠野を流れて、衆人の渴を止め、舟を浮べ、稻を養ひ、而して渺々果しなき大海に入る。

斯の如く、釋尊靈山八ヶ年の修多羅は、正像末の三時と印度支那、日本の三國を通貫し、更に萬代全宇宙法界皆歸妙法への大海へ注入せんとして間斷なし。

あゝ、現今我等が時代と處を異にし、然も猶且つ同法一味の聖教に心行くまで沿し無限の法悅境を自由に遊行し得るは本佛の慈悲廣大なるは勿論、更に之を傳ふる宗教文學の功績の偉大さに、滿腔の敬意を表して宜からう。

凡そ聖賢の大教を垂るゝや、その方法に二種あり、即ち口演

と文筆となり、今一往之を分けるに前者は横に廣く當世の四衆への動的弘通にして、後者は豎に長く未來永劫への靜的流通傳導である、今この二者を釋尊一代化導の上に參照するに、五十年の説法化益は前者にして、八萬法藏の經卷は後者なり、更に宗祖の生涯にこれを求めば、信誘四衆の道俗相手に超然火を吐く鎌倉街頭の折伏逆化は前者に擬らへ、四百余篇の遺墨垂教はまさに後者と言ふべきであらう。

然るに近年、前者の華々しきに對し後者は地味なる故にか、祖山の文學方面は余りにも振はず、遙かに置き忘れられたるかの感あるは如何？

「根深ケレバ枝茂シ、源遠ケレバ流長シ」とは宗祖の聖訓、偉大なる獅子吼は、何時も完全なる宗教文學に根を發し、完全なる宗教文學は永遠に而も偉大なる雄辯を生む。

願くば學院諸兄よ、二者不勝不劣而同體の理を知り、共に專念鍊磨し鬼に金棒、以て益々大法宣布の爲に邁進、宗教家としての本懷を達成し、更に燃ゆるが如きその熱と意氣との魂の叫びをこの文學部を経て永遠に止め置かれん事を。

同窓會文學部へ寄贈書籍

大崎學報	立正大學内宗學研究會殿
智山學報	智山學會殿
信道人	松楓居殿
求道	求道園殿

山 柿
や ま
國 防
其他新聞雜誌諸種

山 柿
谷 山 吟
池 田 壽
各 位 殿
良 殿
社 殿
會 殿

同窓會文學部寄附者芳名

金 壹 封	法 主 猊 下
金 五 圓 也	柴 田 執 事 長 殿
金 貳 拾 圓 也	本 院 教 師 山 殿
金 拾 五 圓 也	學 院 教 師 課 殿
金 五 圓 也	鈴 木 智 精 殿
金 拾 圓 也	大 阪 校 友 會 殿
金 五 圓 也	田 中 惠 春 殿
金 貳 圓 也	大 澤 惠 宏 殿
金 貳 圓 也	新 岡 義 宏 殿
金 參 圓 也	鈴 木 智 好 殿

「棲神」第廿三號

原稿募集！

切 昭和十二年九月十日迄

◆ 告 ！

棲神第廿一號（殘本廿余部）及び第廿二號共に僅少残つて居りますから、御希望の方がありましたら左記へ御申込み下されば實費にて御送り致します。

（因に第廿一號は、本號、岡先生の「身延古抄雜々集に就いての考察」で問題の珍書、身延文庫新發見の聖傳資料「日進聖人仰之趣」を初め清水、遠藤、高田、鹽田等一流諸先生の論文を掲載せるものなり）

「棲神」第廿一號、第廿二號

七十九錢

（共に實費送料共）

祖山學院内 同窓會文學部

編輯後記

◆新米の乗組員たる棲神丸も、茲に一ヶ年、種々の難航路を續け乍ら、それでもヤット今村先生、岡村兄等の羅針盤や燈台に由つて目的地へ到着しました。

其間小生不慮の病の爲、思はぬ御迷惑を幹事諸兄にお懸けした事を、深く御詫び申し上げます。

◆編輯の都合上とは言へ、教頭先生の稿が特定頁に成つた事を深く御詫び申し上げます。

◆先輩のは勿論、學院諸兄中立派なのは全部九が組にしたかつたのですが、何と言つても財政上紙數に制限があり、決極内輪の先輩諸兄に、六號組で我慢して貰ひました、悪しからず。

◆尙先輩、學生諸君中可成り傑作がありました、紙數其他の都合上掲載出来なかつた事をお許るし下さい。

◆幹事病氣の爲、齋藤(順)、大橋、武智諸君の手を煩はした事を深く詫び厚く御禮申し上げます。(牛居、穗坂)

二七〇

昭和十二年二月十日印刷
昭和十二年二月十三日發行

編輯人

山梨縣南巨摩郡身延町

今村是龍

發行人

山梨縣南巨摩郡身延町

牛居行信

印刷人

甲府市柳町七十四番地

青柳幸雄

印刷所

甲府市柳町七十四番地

芳文堂印刷所

山梨縣南巨摩郡身延町

發行所

祖山學院同窓會文學部